西合志町文化財調査報告　第３集

八反田（はったんだ）A・B遺跡

八反畑（はったんばた）遺跡

生坪第３地区農業基盤整備事業に伴う文化財調査（Ⅰ）

1993

熊本県西合志町教育委員会

西合志町文化財調査報告　第３集

八反田（はったんだ）A・B遺跡
八反畑（はったんばた）遺跡

生坪第３地区農業基盤整備事業に伴う文化財調査（Ⅰ）

1993

熊本県西合志町教育委員会

序

本町では、生坪・弘生地区を中心に地域改善対策農業基盤整備事業を実施する計画がなされました。しかし、この地区一帯は生坪塚山古墳や八反原遺跡など多くの遺跡が「周知の埋蔵文化財包蔵地」として登録されており、事業の前に記録保存のための発掘調査を平成元年度から平成3年度にかけて行いました。

この報告書は、平成元年度に行った八反田遺跡と八反畑遺跡の調査記録であります。調査では弥生時代から中世にかけての竪穴住居跡や墓と共に多くの遺物が出土し、特に弥生時代から平安時代には大規模な集落がこの地に営まれていたことが実証されました。

このことは、当時の文化交流や郷土の歴史を究明する上で貴重な資料であり、大きな成果をあげることができました。この報告書が、町民の郷土や文化財に対する理解の一助となることを期待しています。

最後に、調査にあたり多くの方々のご協力やご努力を賜りましたことに対して、厚くお礼を申し上げます。

平成5年3月

西合志町教育長　本田　孝

例　言

1．本書は、熊本県菊池郡西合志町大字合生（生坪・弥生台地）に所在する遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は、生坪第三地区地域改善対策農業基盤整備事業に伴う事前の発掘調査で、平成元年度～３年度まで継続して実施した。

3．調査は、西合志町役場産業振興課の委託により、熊本県教育庁文化課の協力のもと町教育委員会が行い、浦田信智が担当した。

4．本書は、平成元年度分（８月１日～12月15日まで調査）八反田遺跡Ａ地区・八反田遺跡Ｂ地区・八反畑遺跡の調査報告を収録しており、残りの遺跡（平成２年度・３年度発掘調査分）については年度ごとに今後報告書を刊行していく予定である。

5．発掘調査での遺構の実測および遺物の取り上げは各調査員が分担して行い、写真撮影は浦田が行った。

6．本書で使用した遺物の実測は、浦田・丸山武水・奈須和貴・本山千絵が、トレースは六田育子・平田千勢・前川真由美・源丸伸子・丹生英里が分担して行った。

7．本書で使用した写真の焼き付けは浦田が行った。

8．本書で使用した遺構配置図及び全体測量図は熊本県土地改良事業団体連合会に委託し作成した。

9．調査で出土した遺物は、西合志町教育委員会で保管している。

10．本書の執筆は、主に浦田が行い、第Ｉ章２節は入住清昭（前社会教育課長）が行った。

11．本書の編集は、西合志町教育委員会で行い浦田が担当した。

凡　例

1．グリッドは、工事が広範囲にわたり実施され、調査対象地区が年度によってはかなり離れることから、各調査区のグリッドの統一と、各調査区を正確に地図に落とし込む目的のために、台地全体に国土座標（X＝－9.00Y＝－22.00）を基準に100m四方の大グリッドを設定し、更に100m四方の大グリッドの中に10m四方の小グリッドを設定した。大グリッドは、北から南に向かってアルファベットのＡ・Ｂ・Ｃ・・・を付け、西から東に向かって数字の１・２・３・・・を付けた。

2．小グリッドは、北西隅を基準に東側へ１・２・３・・・と付け、10まで来たら１段下がって西側にまた戻るというように、１番より100番まで千鳥式で設定している。

（例）　2－B－45グリッド

大グリッドの2－B地点で、その大グリッドの中の45番の小グリッドを表している。

3．本文中に使用した遺構の略記号は、以下の通りである。

ＳＤ－溝遺構

ＳＫ－土壙

本 文 目 次

第Ⅰ章　序説 …… 1
　第1節　調査組織 …… 1
　第2節　調査に至る経緯 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境 …… 3
第Ⅲ章　遺跡の層位及び経過 …… 7
　第1節　遺跡の層位 …… 7
　第2節　調査日誌抄 …… 8
第Ⅳ章　八反田遺跡A・B地区の成果 …… 11
　第1節　遺跡の概要 …… 11
　第2節　八反田遺跡A地区の遺構と遺物 …… 14
　　1．弥生時代 …… 14
　　(1) 竪穴住居跡と出土遺物 …… 14
　　2．古墳時代 …… 18
　　(1) 方形周溝墓と出土遺物 …… 18
　　3．奈良・平安時代 …… 21
　　(1) 竪穴住居跡と出土遺物 …… 21
　　4．奈良・平安時代以降 …… 25
　　(1) 土壙と出土遺物 …… 25
　第3節　八反田遺跡B地区の遺構と遺物 …… 31
　　1．弥生時代 …… 31
　　(1) 竪穴住居跡と出土遺物 …… 31
　　2．奈良・平安時代 …… 54
　　(1) 竪穴住居跡と出土遺物 …… 54
第Ⅴ章　八反畑遺跡の成果 …… 124
　第1節　遺跡の概要 …… 124
　第2節　遺構と遺物 …… 125
　　1．弥生時代 …… 125
　　(1) 竪穴住居跡と出土遺物 …… 125
　　(2) 溝遺構と出土遺物 …… 130
　　2．奈良・平安時代 …… 147
　　(1) 竪穴住居跡と出土遺物 …… 147
　　(2) 土壙と出土遺物 …… 182
　　3．奈良・平安時代以降 …… 195
　　(1) 溝遺構と出土遺物 …… 195
第Ⅵ章　まとめ …… 200

挿図目次

第1図　周辺遺跡図 …… 4
第2図　遺跡基本土層図 …… 7
第3図　調査遺跡位置図 …… 9
第4図　八反田遺跡A・B地区グリッド図 …… 11
第5図　八反田遺跡A地区遺構配置図 …… 12
第6図　八反田遺跡B地区遺構配置図 …… 13
第7図　1号・2号住居跡実測図 …… 14
第8図　1号住居跡内出土土器実測図 …… 15
第9図　2号住居跡内出土土器実測図 …… 17
第10図　6号・7号住居跡実測図 …… 18
第11図　1号方形周溝墓測量図 …… 19
第12図　1号方形周溝墓周溝断面実測図 …… 19
第13図　1号方形周溝墓主体部実測図 …… 20
第14図　1号方形周溝墓土器出土状態実測図 …… 20
第15図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図 …… 21
第16図　3号住居跡実測図 …… 22
第17図　4号住居跡実測図 …… 23
第18図　4号住居跡内出土土器実測図 …… 23
第19図　5号住居跡実測図 …… 24
第20図　7号住居跡内出土土器実測図 …… 25
第21図　1号・2号土壙実測図 …… 26
第22図　土壙内出土土器実測図 …… 27
第23図　3号・4号土壙実測図 …… 29
第24図　1号住居跡実測図 …… 31
第25図　1号住居跡内出土土器実測図（1） …… 32
第26図　1号住居跡内出土土器実測図（2） …… 34
第27図　2号住居跡実測図 …… 35
第28図　2号住居跡内出土土器実測図 …… 36
第29図　3号住居跡実測図 …… 38
第30図　3号住居跡内出土土器実測図 …… 39
第31図　4号住居跡実測図 …… 40
第32図　4号住居跡内出土土器実測図 …… 41
第33図　5号住居跡実測図 …… 42
第34図　5号住居跡内出土土器実測図 …… 43
第35図　6号住居跡実測図 …… 44
第36図　6号住居跡内出土土器実測図 …… 45
第37図　12号住居跡実測図 …… 45
第38図　29号住居跡実測図 …… 46
第39図　30号住居跡実測図 …… 47
第40図　59号住居跡実測図 …… 48
第41図　59号住居跡内出土土器実測図 …… 49
第42図　79号住居跡実測図 …… 50
第43図　79号住居跡内出土土器実測図 …… 51
第44図　81号住居跡実測図 …… 53

第45図　81号住居跡内出土土器実測図 …… 53
第46図　8号住居跡実測図 …… 55
第47図　9号・10号住居跡実測図 …… 56
第48図　11号住居跡実測図 …… 57
第49図　11号住居跡内出土土器実測図 …… 58
第50図　13号住居跡実測図 …… 59
第51図　13号住居跡内出土土器実測図 …… 60
第52図　14号住居跡実測図 …… 61
第53図　15号・16号住居跡実測図 …… 62
第54図　15号住居跡内出土土器実測図 …… 63
第55図　17号住居跡実測図 …… 63
第56図　18号・19号住居跡実測図 …… 64
第57図　18号住居跡内出土土器実測図 …… 65
第58図　19号住居跡内出土土器実測図 …… 66
第59図　20号・21号住居跡実測図 …… 67
第60図　20号住居跡内出土土器実測図 …… 68
第61図　21号住居跡内出土土器実測図 …… 69
第62図　22号・56号・57号・58号・62号住居跡実測図 …… 70
第63図　22号住居跡内出土土器実測図 …… 71
第64図　23号・24号・25号住居跡実測図 …… 72
第65図　24号住居跡内出土土器実測図 …… 73
第66図　26号・27号・28号住居跡実測図 …… 74
第67図　27号住居跡内出土土器実測図 …… 75
第68図　31号・32号住居跡実測図 …… 76
第69図　33号・34号住居跡実測図 …… 78
第70図　33号住居跡内出土土器実測図 …… 79
第71図　35号・38号住居跡実測図 …… 80
第72図　36号住居跡実測図 …… 81
第73図　37号・41号・42号住居跡実測図 …… 82
第74図　38号住居跡内出土土器実測図 …… 83
第75図　39号住居跡実測図 …… 85
第76図　39号住居跡内出土土器実測図 …… 86
第77図　40号住居跡実測図 …… 87
第78図　43号・44号・45号住居跡実測図 …… 89
第79図　43号住居跡内出土土器実測図 …… 90
第80図　44号住居跡内出土土器実測図 …… 90
第81図　46号住居跡内出土土器実測図 …… 91
第82図　46号・47号・50号・51号住居跡実測図 …… 92
第83図　48号・49号・55号住居跡実測図 …… 94
第84図　49号住居跡内出土土器実測図 …… 95
第85図　52号・53号・54号住居跡実測図 …… 96
第86図　58号住居跡内出土土器実測図 …… 98
第87図　60号・61号・74号・75号・76号・77号・78号住居跡実測図 …… 100
第88図　63号・64号・66号住居跡実測図 …… 102
第89図　63号住居跡内出土土器実測図 …… 103

第90図　64号住居跡内出土土器実測図 …… 105
第91図　66号住居跡内出土土器実測図 …… 107
第92図　65号・67号住居跡実測図 …… 109
第93図　68号・69号・70号住居跡実測図 …… 110
第94図　68号住居跡内出土土器実測図 …… 111
第95図　69号住居跡内出土土器実測図 …… 112
第96図　71号・72号・73号住居跡実測図 …… 113
第97図　71号住居跡内出土土器実測図 …… 114
第98図　75号住居跡内出土土器実測図 …… 116
第99図　77号住居跡内出土土器実測図 …… 117
第100図　80号住居跡実測図 …… 118
第101図　80号住居跡内出土土器実測図 …… 118
第102図　八反田遺跡A・B地区出土墨書・ヘラ書き土器実測図 …… 120
第103図　八反田遺跡B地区出土鉄器実測図 …… 121
第104図　八反畑遺跡グリッド図 …… 124
第105図　八反畑遺跡遺構配置図 …… 125
第106図　1号住居跡実測図 …… 126
第107図　1号住居跡内出土土器実測図 …… 127
第108図　2号住居跡実測図 …… 128
第109図　3号住居跡実測図 …… 129
第110図　15号住居跡実測図 …… 129
第111図　1号・2号溝実測図（1） …… 130
第112図　1号・2号溝実測図（2） …… 131
第113図　1号・2号溝実測図（3） …… 132
第114図　1号溝実測図（4） …… 133
第115図　2号溝実測図（4） …… 134
第116図　2号溝実測図（5） …… 135
第117図　2号溝実測図（6） …… 136
第118図　2号溝実測図（7） …… 137
第119図　2号溝（SD－02）内出土土器実測図（1） …… 138
第120図　2号溝（SD－02）内出土土器実測図（2） …… 139
第121図　2号溝（SD－02）内出土土器実測図（3） …… 140
第122図　2号溝（SD－02）内出土土器実測図（4） …… 141
第123図　2号溝（SD－02）内出土土器実測図（5） …… 142
第124図　2号溝（SD－02）内出土土器実測図（6） …… 143
第125図　4号・5号・6号住居跡実測図 …… 147
第126図　4号住居跡内出土土器実測図（1） …… 148
第127図　4号住居跡内出土土器実測図（2） …… 149
第128図　5号住居跡内出土土器実測図 …… 150
第129図　7号住居跡実測図 …… 151
第130図　7号住居跡内出土土器実測図 …… 151
第131図　8号住居跡実測図 …… 153
第132図　8号住居跡内出土土器実測図 …… 154
第133図　9号・10号住居跡実測図 …… 156
第134図　11号・12号・13号・14号住居跡実測図 …… 157

第135図　12号住居跡内出土土器実測図 …… 158
第136図　13号住居跡内出土土器実測図 …… 159
第137図　16号・17号・18号・19号住居跡実測図 …… 160
第138図　16号住居跡内出土土器実測図 …… 161
第139図　17号住居跡内出土土器実測図 …… 162
第140図　18号住居跡内出土土器実測図 …… 164
第141図　21号住居跡実測図 …… 166
第142図　21号住居跡内出土土器実測図 …… 167
第143図　22号・23号住居跡実測図 …… 168
第144図　22号住居跡内出土土器実測図（1）…… 169
第145図　22号住居跡内出土土器実測図（2）…… 170
第146図　22号住居跡内出土土器実測図（3）…… 171
第147図　24号・25号・26号・27号・28号住居跡実測図 …… 176
第148図　24号住居跡内出土土器実測図 …… 177
第149図　25号住居跡内出土土器実測図 …… 180
第150図　1号・2号土壙実測図 …… 183
第151図　1号土壙（SK－01）内出土土器実測図（1）…… 184
第152図　1号土壙（SK－01）内出土土器実測図（2）…… 185
第153図　2号土壙（SK－02）内出土土器実測図 …… 187
第154図　3号・4号土壙実測図 …… 189
第155図　4号土壙（SK－04）内出土土器実測図 …… 190
第156図　5号・6号・7号土壙実測図 …… 191
第157図　5号土壙（SK－05）内出土土器実測図 …… 192
第158図　6号土壙（SK－06）内出土土器実測図 …… 192
第159図　7号土壙（SK－07）内出土土器実測図 …… 193
第160図　8号・9号土壙実測図 …… 194
第161図　八反田遺跡出土墨書・ヘラ書き土器実測図 …… 196
第162図　八反畑遺跡出土鉄器実測図 …… 198

表目次

第1表　周辺遺跡一覧表 …… 5
第2表　1号住居跡内出土土器観察表 …… 16
第3表　2号住居跡内出土土器観察表 …… 17
第4表　1号方形周溝墓周溝内出土土器観察表 …… 21
第5表　4号住居跡内出土土器観察表 …… 24
第6表　7号住居跡内出土土器観察表 …… 25
第7表　土壙内出土土器観察表 …… 28
第8表　1号住居跡内出土土器観察表 …… 33
第9表　2号住居跡内出土土器観察表 …… 37
第10表　3号住居跡内出土土器観察表 …… 38
第11表　4号住居跡内出土土器観察表 …… 39
第12表　5号住居跡内出土土器観察表 …… 42
第13表　6号住居跡内出土土器観察表 …… 44
第14表　59号住居跡内出土土器観察表 …… 49

第15表　79号住居跡内出土土器観察表 …… 52
第16表　81号住居跡内出土土器観察表 …… 54
第17表　11号住居跡内出土土器観察表 …… 57
第18表　13号住居跡内出土土器観察表 …… 60
第19表　15号住居跡内出土土器観察表 …… 63
第20表　18号住居跡内出土土器観察表 …… 65
第21表　19号住居跡内出土土器観察表 …… 66
第22表　20号住居跡内出土土器観察表 …… 68
第23表　21号住居跡内出土土器観察表 …… 69
第24表　22号住居跡内出土土器観察表 …… 71
第25表　24号住居跡内出土土器観察表 …… 73
第26表　27号住居跡内出土土器観察表 …… 75
第27表　33号住居跡内出土土器観察表 …… 79
第28表　38号住居跡内出土土器観察表 …… 84
第29表　39号住居跡内出土土器観察表 …… 86
第30表　43号住居跡内出土土器観察表 …… 90
第31表　44号住居跡内出土土器観察表 …… 91
第32表　46号住居跡内出土土器観察表 …… 91
第33表　49号住居跡内出土土器観察表 …… 95
第34表　58号住居跡内出土土器観察表 …… 99
第35表　63号住居跡内出土土器観察表 …… 104
第36表　64号住居跡内出土土器観察表 …… 106
第37表　66号住居跡内出土土器観察表 …… 108
第38表　68号住居跡内出土土器観察表 …… 111
第39表　69号住居跡内出土土器観察表 …… 112
第40表　71号住居跡内出土土器観察表 …… 114
第41表　75号住居跡内出土土器観察表 …… 116
第42表　77号住居跡内出土土器観察表 …… 117
第43表　80号住居跡内出土土器観察表 …… 119
第44表　八反田遺跡A・B地区出土墨書・ヘラ書き土器観察表 …… 119
第45表　八反田遺跡B地区出土鉄器観察表 …… 122
第46表　1号住居跡内出土土器観察表 …… 127
第47表　2号溝（SD－02）内出土土器観察表 …… 143
第48表　4号住居跡内出土土器観察表 …… 149
第49表　5号住居跡内出土土器観察表 …… 150
第50表　7号住居跡内出土土器観察表 …… 152
第51表　8号住居跡内出土土器観察表 …… 154
第52表　12号住居跡内出土土器観察表 …… 158
第53表　13号住居跡内出土土器観察表 …… 159
第54表　16号住居跡内出土土器観察表 …… 162
第55表　17号住居跡内出土土器観察表 …… 163
第56表　18号住居跡内出土土器観察表 …… 164
第57表　21号住居跡内出土土器観察表 …… 167
第58表　22号住居跡内出土土器観察表 …… 172
第59表　24号住居跡内出土土器観察表 …… 178

第60表　25号住居跡内出土土器観察表 …… 181
第61表　1号土壙（SK－01）内出土土器観察表 …… 185
第62表　2号土壙（SK－02）内出土土器観察表 …… 188
第63表　4号土壙（SK－04）内出土土器観察表 …… 190
第64表　5号土壙（SK－05）内出土土器観察表 …… 192
第65表　6号土壙（SK－06）内出土土器観察表 …… 192
第66表　7号土壙（SK－07）内出土土器観察表 …… 193
第67表　八反畑遺跡出土墨書・ヘラ書き土器観察表 …… 195
第68表　八反畑遺跡出土鉄器観察表 …… 197

図版目次

図版1　八反田遺跡A地区全体（東より）　1号・2号住居跡（A地区）
3号・4号住居跡（A地区）　6号・7号住居跡（A地区）
1号方形周溝墓全体（A地区）　1号方形周溝墓主体部（西より）
周溝内土器出土状況　周溝内土壙
図版2　1号土壙内土器出土状況（A地区）　2号土壙内土器出土状況（A地区）
4号土壙（A地区）　八反田遺跡B地区遠景（東より）
1号住居跡（B地区）　2号住居跡（B地区）
3号住居跡（B地区）　4号住居跡（B地区）
図版3　5号住居跡遺物出土状況（B地区）　5号住居跡（B地区）
8号住居跡（B地区）　9号住居跡（B地区）
11号住居跡（B地区）　12号住居跡（B地区）
13号住居跡（B地区）　14号住居跡（B地区）
図版4　18号住居跡（B地区）　19号住居跡（B地区）
20号住居跡（B地区）　21号住居跡（B地区）
22号住居跡（B地区）　23号・24号・25号住居跡（B地区）
27号・28号住居跡（B地区）　29号住居跡（B地区）
図版5　33号住居跡（B地区）　35号住居跡（B地区）
38号住居跡（B地区）　39号住居跡（B地区）
43号住居跡（B地区）　59号住居跡遺物出土状況（B地区）
59号住居跡（B地区）　60号～64号・71号～78号住居跡（B地区）
図版6　63号住居跡（B地区）　64号住居跡（B地区）
65号住居跡（B地区）　68号住居跡（B地区）
75号住居跡（B地区）　79号住居跡遺物出土状況（B地区）
79号住居跡（B地区）　80号住居跡（B地区）
図版7　81号住居跡（B地区）　49号住居跡カマド内甕出土状況（B地区）
20号住居跡周辺検出状況（B地区）　56号～78号住居跡（B地区）
町内小学校遺跡見学　八反畑遺跡遠景（東より）
1号住居跡（八反畑）　2号住居跡（八反畑）
図版8　4号住居跡カマド内甕出土状況（八反畑）　7号住居跡（八反畑）
15号住居跡（八反畑）　16号住居跡（八反畑）
18号住居跡（八反畑）　21号住居跡（八反畑）
22号住居跡遺物出土状況（八反畑）　2号溝（SD）土層断面（八反畑）
図版9　1号・2号溝遺物出土状況（八反畑）　2号溝遺物出土状況（八反畑）
2号溝及び周辺竪穴住居跡（南より）　2号溝（北より）
1～3号土壙（八反畑）　1号土壙遺物出土状況（八反畑）
6号土壙（八反畑）　8号土壙（八反畑）

第Ⅰ章　序　　説

第1節　調査の組織

発掘調査（平成元年度）

調査主体　　西合志町教育委員会

調査総括　　高村　元三（教育長）

調査責任者　　大住　清昭（社会教育課長）

調査事務　　辻　　末義（社会教育課係長）・西川　正則（社会教育課主事）・松並　逸郎（社会教育課主事）

調査主査　　浦田　信智（社会教育課嘱託）

調査担当者　　丸山　武永（町発掘調査員）・木崎　康弘（県文化課文化財保護主事）・吉内　素子（県文化課嘱託）・安達　武敏（県文化課臨時職員）・寺本　優（町発掘調査補助員）・田中　義和（菊池市教育委員会社会教育課）

調査指導　　田辺　哲夫（日本考古学協会員・町史編纂委員長）・三島　格（肥後考古学会々長）・白木原和美（熊本大学文学部教授）・江崎　正（県文化課技）・鍋　昭志（県文化課課長補佐）・松本　健郎（県文化課文化財調査第1係長）・高木　正文（県文化課参事）・江本　直（県文化課主任学芸員）・坂田　和弘（県文化課文化財保護主事）・高木　恭二（宇土市教育委員会生涯学習課文化振興係）

調査協力

町文化財専門委員　　後藤　文明（委員長）・藤本　堅・加茂　茂生・平田　建一

町役場産業振興課・熊本県耕地二課・熊本県菊池土木事務所耕地課

発掘作業

松岡　政次・松岡　繁喜・本田　哲郎・池田　章・池田　記郎

本田　照代・池田　洋子・松岡　景隆・松川カナエ・宮本シオリ

松崎カズヨ・松崎みつみ・池田トメ子・宮本ツナグ・松川　斉

宮村チドリ・谷田アサ子・西井ヤエコ・池田　賢哲・野口キン子

池田　光江・松永八千代・宮田アヤメ・松岡美智子・池田　明子

宮本　真理・前田志磨江

報告書作成（平成4年度）

主　　体　　西合志町教育委員会

総　括　　本田　孝（教育長）・高村　元三（前教育長）

責任者　　松下　広美（社会教育課長）・伊藤　幸剛（前社会教育課長）

事　務　　安武　俊朗（社会教育課文化係長）・三宮　洋子（社会教育課参事）

主　査　　浦田　信智（社会教育課文化係技師）

　　奈須　和貴・瀬丸　伸子・前川真由美・六田　育子・本山　千絵・丹生　英里

整理作業

池田　明子・宮田　京子・緒方　敦子・正泉寺由美・上原　和子

宮本　繁子・平田　千勢・緒方　美穂・大山　英子・池田　益光

前田志磨江・村上　照美・宮本美寿恵・川原ヒロ子

他に、地元区長さんを始め地権者の方々、役場の関係各位には調査の上で多大な協力を得ました。最後に、本報告書を刊行するにあたり、ここに記して深く感謝いたします。

第2節　調査に至る経緯

西合志町では、農業の土地生産性向上のため土地基盤整備を積極的に推進してきたが、この地区は未整備で地区内道路も狭く、大型機械の利用も遅れていた。町では、この地に地域改善対策農業基盤整備事業を実施することにより、区画整理や道路及び用排水路を完備し、大型機械の導入を図り、労力の節減や土地生産性の向上に努め、農業所得の安定と近代的農業経営の確立を計画した。

この計画地域（約48.2ha）内、及びその周辺には「周知の埋蔵文化財包蔵地」として生坪塚山古墳、生坪古墳、生坪石立遺跡、八反田遺跡、弘生原遺跡、八反畑遺跡、迫原ハヤマ古墳が登録されていた。町は、この事業が「地域改善対策特定事業に係る国の財政上の特別措置に関する法律」に基づくものであり、平成3年3月31日までの期限付き事業ということで、大規模な埋蔵文化財の散在には苦悩の極みをみた。しかし、事業の趣旨を深く想うとき、事業の着手と文化財の発掘調査は至上命題ということで、地元はもとより、県の文化課、農地管理課、県菊池事務所等関係者の協力体制が必要となった。具体的には、地区内の踏査を行い、必要な部分の試掘調査を実施して、調査対象面積を把握し、地元の協力を求め、工事での工法の工夫、発掘調査員の確保、県の文化課の支援等々により、平成元年8月より3ヶ年の予定で発掘調査を開始した。

（大住）

第II章　遺跡の位置及び環境

西合志町は、阿蘇外輪山に発する白川などの河川より発達した沖積平野である熊本平野のほぼ中心部に位置する熊本市のすぐ北部に所在している。行政区では、菊池郡に属し、北側を泗水町、東側を合志町と菊陽町、南側と西側を熊本市と植木町にそれぞれ隣接している。当町は、海抜標高70m前後の平坦な台地上にあり、東西約4km、南北約8kmで北側が広がる逆三角形を呈し、面積は24.28㎢、人口約24,000人である。

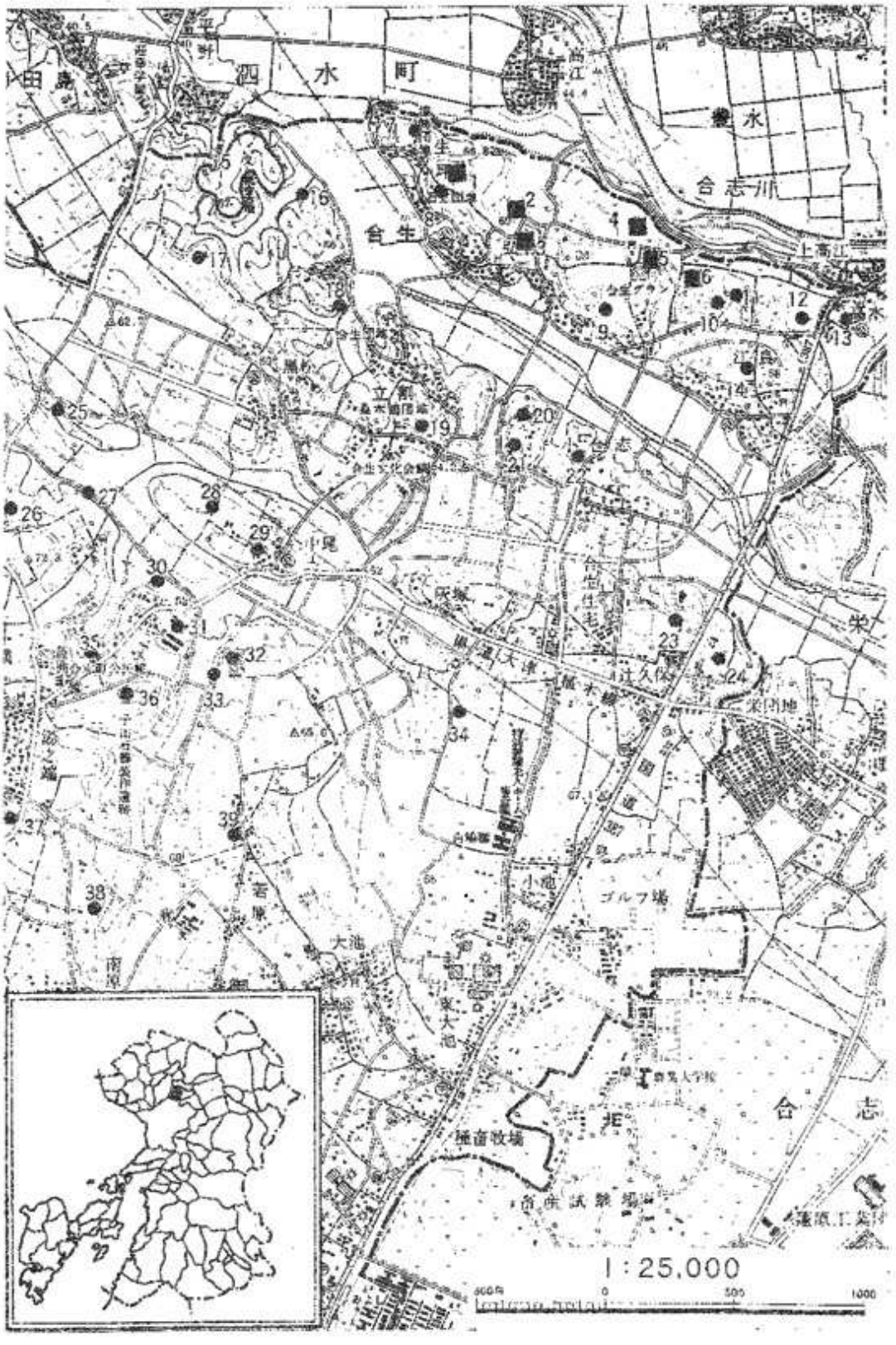
町の北部地域には、菊池川の支流である合志川と塩浸川・中尾川があり、この三本の川を中心に水田地帯が広がり、米・たばこ・すいか等を中心とした農業が盛んに営まれ産業の中心をなしている。町の南部地域は、熊本市と隣接しているため熊本市のベッドタウンとして住宅が密集し人口増加が著しいのが特徴である。

今回調査した遺跡は、町北部で泗水町との町境に流れる合志川の左岸台地上にあり西合志町大字合生字八反原、字石立に位置する。この台地は、海抜70m前後で水田面及び河川との比高差は約20～25mを測り、ほぼ平坦な台地が隣の泗水町まで続く。台地上には、縄文時代から中世にかけての古代の遺跡が多く点在しており、ほぼ台地全体が遺跡であると言っても過言ではない。

西合志町には、多くの遺跡があり現在約80カ所確認されている。遺跡の中で、最古の時期は縄文時代早期の遺跡でそれより古い旧石器時代に属する遺跡・遺物は、現在のところ確認されていない。

縄文時代の遺跡は、古い時期では早期に属し遺跡の西側の上生地区に位置する上生上の原遺跡がある。上生上の原遺跡は、県文化課により昭和63年から平成2年にかけて継続的に調査が行われ、押型文土器を伴う集石群が多数検出されている。さらに、遺跡の南で野々島地区に位置し、後期末の御領期に属し国指定史跡に指定されている二子山打製石器製作遺跡がある。二子山打製石器製作遺跡は、昭和40年から42年にかけて3回の調査が行われ、金峰山系の玄武岩質安山岩の母岩露頭の確認と、その周辺から安山岩製打製石斧の製品と未製品が多数出土し、また、菊池地方を中心に二子山製の石斧が広範囲に渡り分布していることも判明し、縄文時代の交易範囲を知ることのできる全国でも希な打製石斧の製作跡として、昭和47年に国指定史跡として指定を受けている。他にも、辻久保遺跡や中尾遺跡、枇榧田遺跡などの包含地がある。

弥生時代の遺跡は、著名な遺跡として高木原遺跡が上げられる。高木原遺跡は、同台地上で当遺跡の東側に位置しており、故坂本経堯氏により発見され弥生時代後期から平安時代にかけての遺物が採集されている。また、同時期の竪穴住居跡も調査されている。他には、昭和55年



第1図　周辺遺跡図

第1表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	概要
1	石立遺跡	弥生～古墳	H2年調査　集落跡　方形周溝墓　円墳
2	八反田C遺跡	弥生～古墳	H2年調査　集落跡　方形周溝墓　円墳
3	八反田A・B遺跡	弥生～平安	H元年調査　集落跡　方形周溝墓
4	八反原遺跡	弥生～平安	H2～3年調査　集落跡　方形周溝墓　円墳
5	八反畑遺跡	弥生～平安	H元年調査　集落跡
6	追原遺跡	古墳～平安	H3年調査　集落跡　方形周溝墓　円墳
7	生坪塚田古墳	古墳	円墳
8	石立家形石棺	古墳	S22年発見調査　蓋に立列三角文の線刻　人骨及び須恵器が出土
9	弘生城跡	中世	
10	追原石棺	古墳	S58年調査　勾玉・ガラス玉・鉄刀等出土
11	追原ハヤマ古墳	古墳	消滅　円墳　主体部は箱式石棺
12	追原長塚古墳	古墳	消滅　箱式石棺
13	高木原遺跡	弥生～古墳	集落跡
14	江良遺跡	弥生～古墳	包含地
15	熊鹿古墳群	古墳	スレ観音古墳など円墳6基
16	塚口横穴群	古墳	S46年調査　横穴墓3基　金環・鉄製品・土器等副葬品多数出土
17	黒松萩の迫遺跡	弥生	包含地　甕棺など
18	萩の迫横穴群	古墳	横穴墓
19	立迫横穴群	古墳	横穴墓
20	下蓮寺跡		寺院跡
21	合志郡家跡推定地	奈良～平安	
22	小合志古墳	古墳	消滅　円墳　横穴式石室　鉄刀・金環等副葬品出土
23	小合志原遺跡	縄文～弥生	S55年調査　集落跡
24	社久保遺跡	縄文	包含地
25	笹塚古墳	古墳	円墳
26	永田石棺	古墳	箱式石棺
27	神出遺跡	古墳	H2年調査　集落跡
28	黒松岡原遺跡	縄文	包含地
29	中尾遺跡	縄文～古墳	包含地
30	永田原遺跡		包含地
31	八反田遺跡	縄文～弥生	包含地
32	枇杷田遺跡	縄文	包含地　押型文土器
33	中原支石墓	弥生	
34	笹山遺跡	縄文	包含地
35	永田支石墓	弥生	1基
36	二子山石器製作遺跡	縄文	国指定　打製石器製作跡　円墳2基
37	花園遺跡		包含地
38	野出原遺跡		包含地
39	若原石棺遺跡	縄文～古墳	箱式石棺　縄文包含地

文献一覧
1．「全国遺跡地図　熊本県」　文化庁文化財保護部　1981年
2．「小合志原遺跡」　日本電信電話公社九州電気通信局　1981年
3．「追原箱式石棺」　西合志町教育委員会　1983年
4．「菊池の文化財」　田中一義　菊池の文化財保存会　1965年

に田添夏喜氏により調査され、弥生時代後期の竪穴住居跡が検出された小合志原遺跡や包含地である江良遺跡、それに二子山石器製作跡の近くには永田支石墓や中原支石墓等がある。

古墳時代は、集落跡として古墳時代前期から後期にかけての竪穴住居跡が検出された沖田遺跡と、同じく古墳時代の竪穴住居跡が検出された上生上の原遺跡が上げられる。沖田遺跡は、県文化課により平成2年に調査が行われ、弥生時代後期の住居跡の特徴であるベッド状の遺構が残る古墳時代前期の住居跡が3軒検出されている。古墳は、町北部地域に集中しており、南部地域には現在のところ全く確認されていない。当町の代表的な古墳として、当遺跡の西側で合志川の左岸台地上にある黒松古墳群がある。黒松古墳群は、6基の大小円墳により構成されるが、道路を挟んだ西側にも泗水町に属するオッテサン古墳など3基の円墳があり、同じ台地上に作られていることから黒松古墳群に属する古墳と考えられる。この古墳群中でも、ヌレ観音古墳（1号）は主墳と考えられ、直径約40m、高さ約7mと熊本県内でも最大級の円墳としてしられている。この古墳は、未調査のため内部主体などは不明であるが、規模から推定して横穴式石室であることは間違いない。また、ヌレ観音古墳の東約30mに所在する2号・3号墳は直径が10m前後、高さが1mの小円墳で、これも未調査であるが内部主体が木棺または箱式石棺と考えられる。このような古墳が、墳丘を築造当時に近い形で残しているのは珍しく貴重な古墳である。尚、黒松古墳群が所在する台地の北側崖面には平野横穴群や塚口横穴群、荻迫横穴群等の横穴墓が多数作られている。この中で、塚口横穴群は昭和46年に調査され、金環や鉄剣などの鉄製品、須恵器が多量に出土している。当遺跡が位置する台地上にも多くの古墳や石棺がある。まず、台地の西側先端部には直径約30m、高さ約4mの円墳（前方後円墳との説もある）である生坪塚山古墳があり、内部主体は不明だが墳頂部に立ててある石材が、この古墳の石棺の蓋石と言われている。当遺跡付近からは、少女の人骨と裸麻櫛が出土し、擬灰岩製の家形石棺蓋石に連続三角文を線刻した装飾石棺である石立家形石棺（鹿塚とも呼ばれている）が調査されている。さらに、当遺跡の東側には、昭和56年に調査が行われ、箱式石棺の中から勾玉や丸玉などの装飾品、刀や鉾それに鹿角装刀子・鉄鏃などの鉄器類が豊富に出土した迫原石棺、さらに東にはハヤマ塚古墳などが多く点在している。

奈良・平安時代は、当遺跡の周辺台地上に点在する遺跡からはだいだい土器が混在して採集されていることから、周辺台地上にも大規模な集落が営まれていたと考えて良い。

中世の遺跡は、同台地上で南側に、記録がないことから詳細は不明があるが、堀りが残る弘生城跡がある。さらに、町の南部地域で須屋地区には須屋市城の居館跡とされ、土塁や堀りが一部残る須屋城跡がある。須屋城跡は、全国的に珍しい平城である。

第Ⅲ章　遺跡の層位及び調査経過

第１節　　遺跡の層位

本遺跡の基本層序は、以下の通りである。

第Ⅰ層　耕作土　　深さは20～30ｍである。

第Ⅱ層　明黒色粘質土　深さは30～40ｍを測り、粘性を帯びる。（遺構検出面）

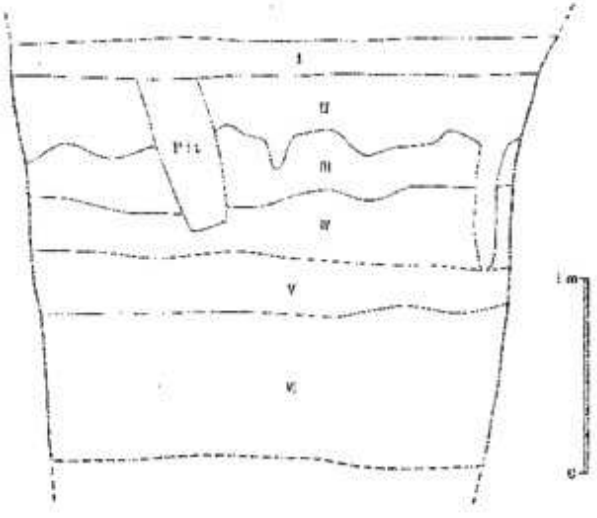
第Ⅲ層　褐色粘質土　深さはⅡ層と同じく30～40ｍを測り、粘性を帯びる。また、中には同色のブロック状の塊が少量包まれる。

第Ⅳ層　明黒色土　深さは20～40ｍを測り、中には同色のブロック状の塊が多量に含まれる。

第Ⅴ層　黄色粘質土　深さは20～35ｍを測り、粘性を帯びる。中には、同色のブロック状の塊が多量に含まれる。

第Ⅵ層　赤黄色粘質土　ローム層である。粘性が強く、本来なら旧石器時代の遺物を含む層であるが、当遺跡では認められなかった。

以上が、今回調査した生坪・弘生台地における遺跡の基本層序である。近年、発掘調査の増加に伴い県内の各遺跡において火山灰堆積土の研究が進み、編層の特定もなされている。今回調査した台地の層序は、熊本市周辺の台地から阿蘇にかけて普遍的に認められるものであり、遺跡の遺構検出面である第Ⅱ層はその特徴から広域火山灰の「ＡＨ（アカホヤ）」の下の層である「クロニガ」と、第Ⅲ～Ⅴ層は更に下層で広域火山灰の火山ガラス「ＡＴ」を含む「ニガシロ」と対比できる。



第２図　遺跡基本土層図

本遺跡では、広域火山灰の火山ガラス「ＡＨ（アカホヤ）」を含む黄色土層と、弥生時代以降の遺物が含まれる「クロボク」と呼ばれる黒色土層が、台地上の水田化に伴い削平されなくなっている。

第2節　調査日誌抄

平成元年8月1日付けで、町教育委員会の嘱託として、筆者が生坪第三地区地域改善対策農業基盤整備事業に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査を担当する事になり、まず、元年度分の工事施工区について試掘調査を行い遺跡の範囲を確定させ、調査期間の制限があることから工事設計書と比較検討して調査面積を絞り込む作業を行った。その結果、今年度調査区を八反田遺跡A・B地区と八反畑遺跡の三カ所と決定し、調査を開始した。以下調査日誌に従い調査経過を説明する。

8月2日　ユンボ1台を使い試掘調査開始。午後、町教育委員会・町産業振興課・県菊池土木事務所三者による調査打ち合わせ。

8月3日　試掘調査と併せて、さらにユンボ1台・ブルトーザー1台を使い八反畑遺跡の表土剝ぎを開始する。

8月5日　調査期間の問題から、新しくユンボとブルトーザー各1台づつ投入し表土剝ぎを行う。

8月10日　県耕地2課より課長ほか来跡。本日より、八反田遺跡の表土剝ぎに入る。

8月12日　表土剝ぎ作業終了。引き続き八反田遺跡の遺構検出作業を行う。

8月19日　県文化課より課長ほか来跡。八反田B地区の調査区西側に、弥生時代後期末の竪穴住居跡が確認され始める。東側部分には、黒い部分が2ケ所広がっており奈良・平安時代の竪穴住居跡が多くありそうである。

8月25日　面積が少ない八反田A地区より調査開始。遺構確認により方形周溝墓1基と竪穴住居跡7軒、土壙4基を検出。調査を開始する。方形周溝墓は、一辺が約13mで南側部分が削平されており無い、また中央には主体部の痕跡が残っている。

8月26日　方形周溝墓は、北側に陸橋部があり周溝は浅く残存状態が悪い。陸橋の東側より土師器壺が出土。

8月31日　八反田A地区の調査と平行してB地区の遺構掘り下げを開始する。

9月4日　県文化課より木崎・吉内2名の調査員を派遣してもらい調査体制が整う。

9月5日　部落解放同盟熊本県連合会委員長他視察。

9月13日　町史編集委員視察

9月16日　写真撮影を行い、A地区の調査を終了する。

9月21日　町議会議員視察。B地区東側の遺構集中区は、竪穴住居跡が100軒近く切りあっているようである。

9月29日　町教育委員視察。B地区の西側で調査した竪穴住居跡は弥生時代後期であるが、東側の集中部分は大半が奈良・平安時代と考えられる。

第3図　調査遺跡位置図

10月　　B地区の竪穴住居跡の調査を進める。最終的には80軒の竪穴住居跡を確認する。その大半が奈良・平安時代のものである。25日には中央小学校6年生の生徒が見学に訪れる。

10月30日　B地区の調査を全て終了し、工事業者に引き渡しを完了する。

10月31日　今年度最後の調査区である、八反畑遺跡の遺構確認作業を開始する。

11月2日　調査区を西から北へ孤状に巡る溝遺構を確認。埋土から判断して弥生時代後期の環濠である可能性が高い。他に、弥生時代後期と奈良・平安時代の竪穴住居跡と土壙を確認。調査した他の遺跡同様竪穴住居跡の残存状態は悪いようである。

11月～12月　まず時期が新しい奈良・平安時代の竪穴住居跡と土壙の調査を行う。竪穴住居跡は、27軒あり内弥生時代後期の住居跡は5軒である。土壙は9基ですべて奈良・平安時代のものである。

12月12日　田辺哲夫氏・白木原和美教授（熊本大学）現場視察。

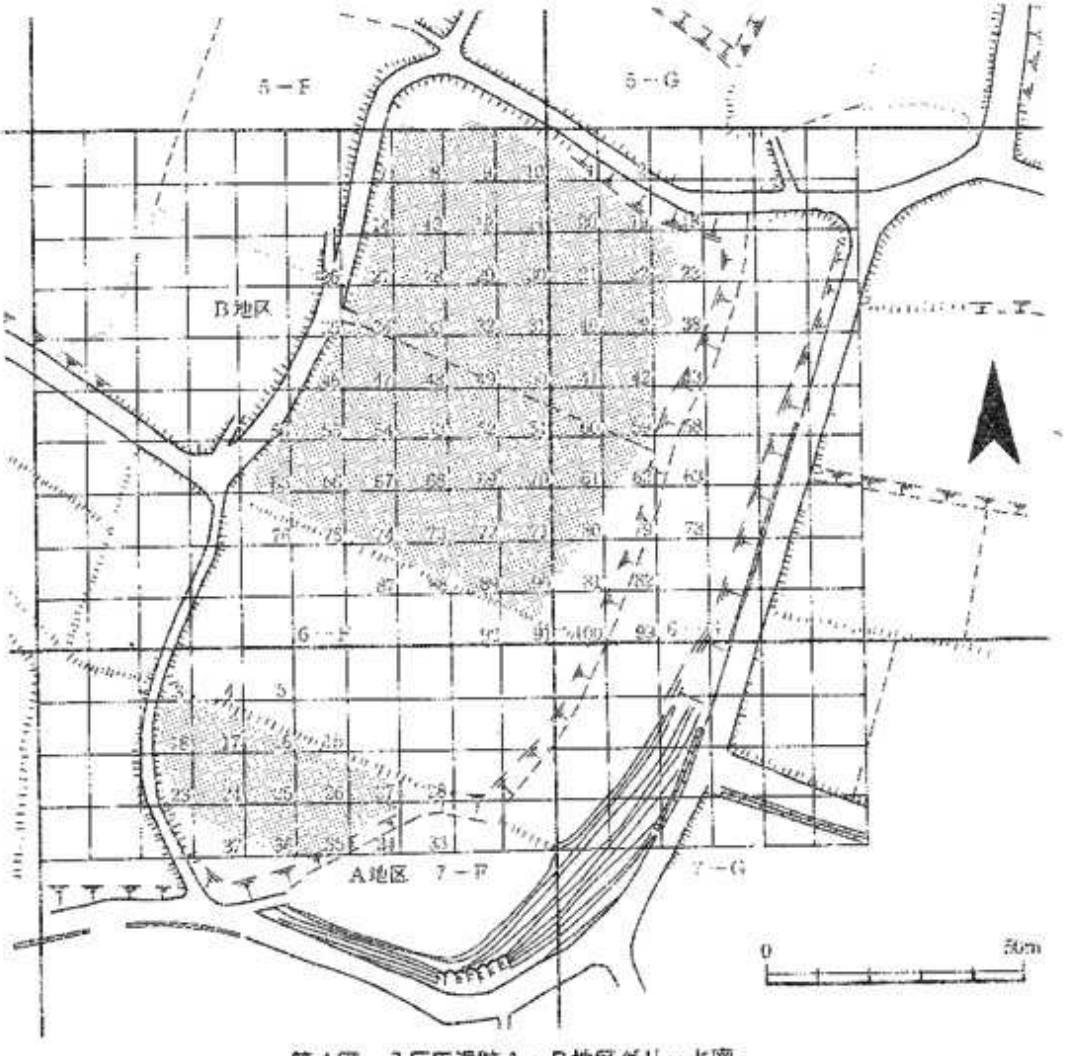
12月14日　三島　格氏（肥後考古学会々長）現場視察。

12月15日　写真撮影を行い、平成元年度工事施工区の文化財発掘調査を全て終了する。

第Ⅳ章　八反田（はったんだ）遺跡A・B地区の成果

第1節　遺跡の概要

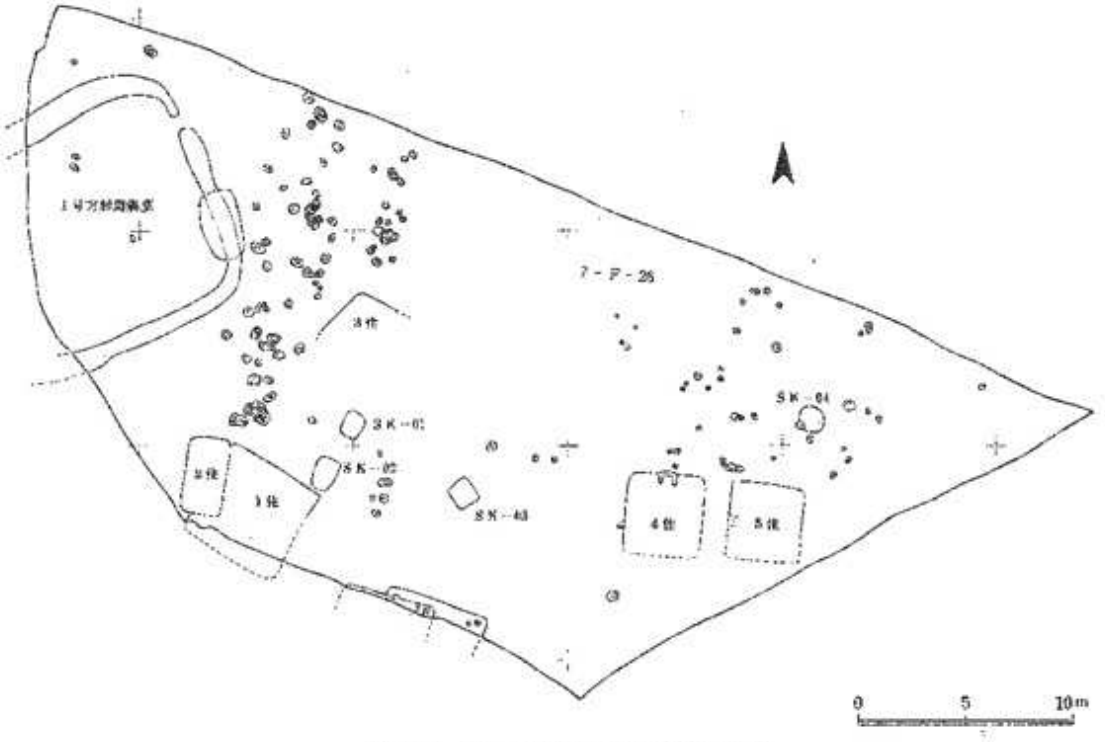
八反田遺跡A・B地区は、全体工事区域のほぼ中央で台地の南側縁部近くにあり、大グリッドではA地区が7−Fグリッドで B地区が5−F・6−F・6−Gグリッドに位置している。A地区は、B地区と位置的に直線距離で40mしか離れておらず、当初は間の地点も含め同一遺跡として調査する予定であったが、試掘調査の結果削平が著しく遺構が全く残っていなかったことから間の部分を調査から除外した。以上より、同一遺跡であるが調査の便宜上地点を二つに分けて報告している。



第4図　八反田遺跡A・B地区グリッド図

A地区

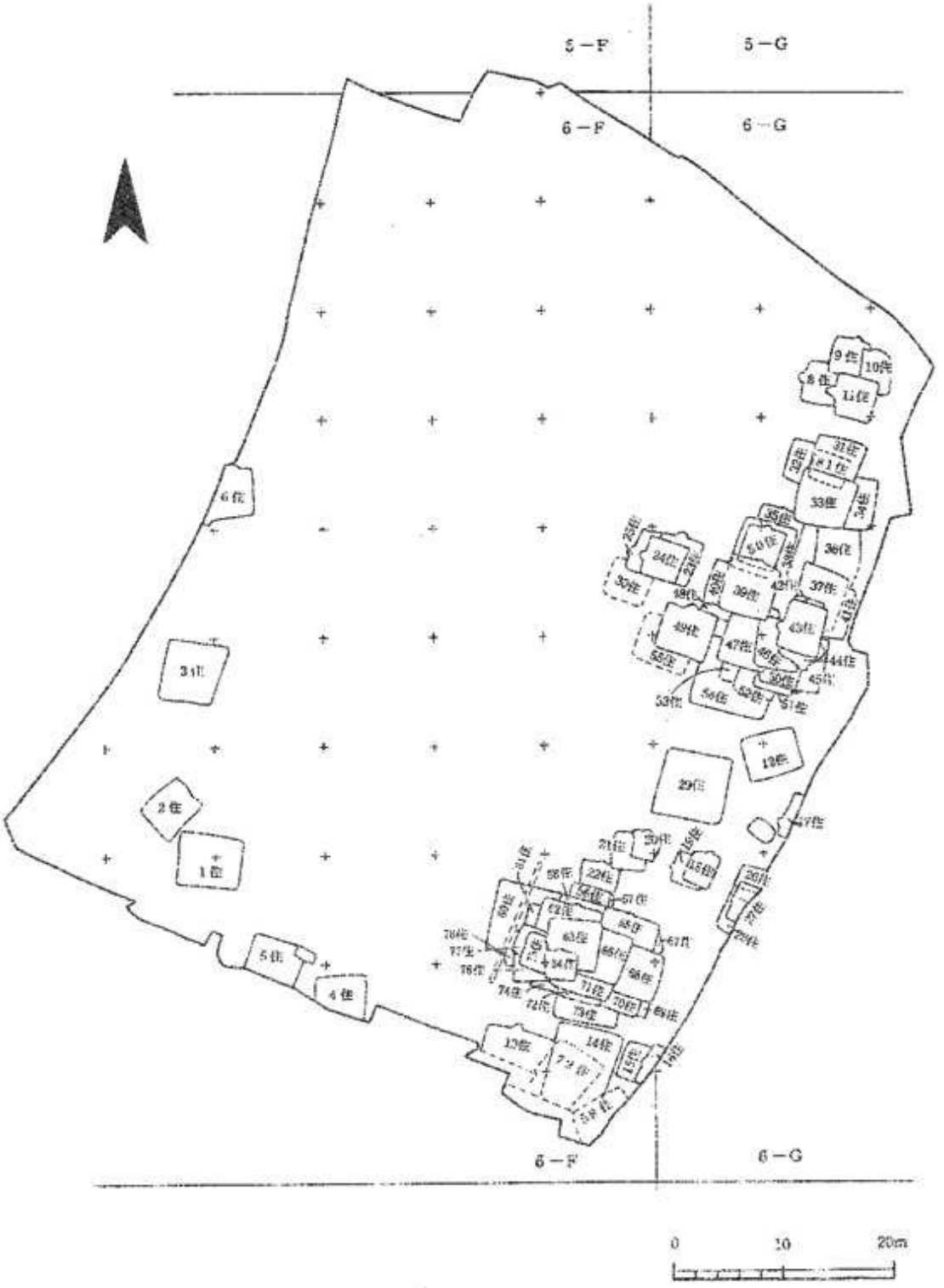
調査面積は、約1,500㎡である。台地縁部に当たるため全体が南側に傾斜している。遺跡の時期は、検出した遺構及び遺構内の出土遺物から弥生時代と古墳時代、奈良・平安時代の3時期に分けられる。遺構は、弥生時代後期の竪穴住居跡3軒と奈良・平安時代の竪穴住居跡4軒の計7軒、古墳時代の方形周溝墓1基、中世の土壙墓4基を検出調査している。開田により、削平を受けている為北側部分の遺構は残存状態があまり良好でない。



第5図　八反田遺跡A地区遺構配置図

B地区

調査面積は、約6,000㎡である。開田により、かなり削平を受けており遺構の残存状態は良くない。遺跡の時期は、検出した遺構及び遺構内の出土遺物から弥生時代と奈良・平安時代の2時期に分けられる。A地区で検出された古墳時代の遺構はこの地区までは延びていないようである。遺構は、竪穴住居跡だけの検出で、弥生時代の竪穴住居跡12軒と奈良・平安時代の竪穴住居跡68軒の計80軒である。他に、ピットが多数検出されたが、建物の復元は出来なかった。弥生時代の竪穴住居跡は、調査区の西側に点在し単独で存在し、切り合っているものはない。奈良・平安時代の竪穴住居跡は、調査区の東側で台地の縁部に集中しており、複雑に重複している。調査区の中央付近と北側は、竪穴住居跡の検出は全くない。しかし、この部分は地形的に高くなっている所であることから、削平により破壊された可能性が高い。

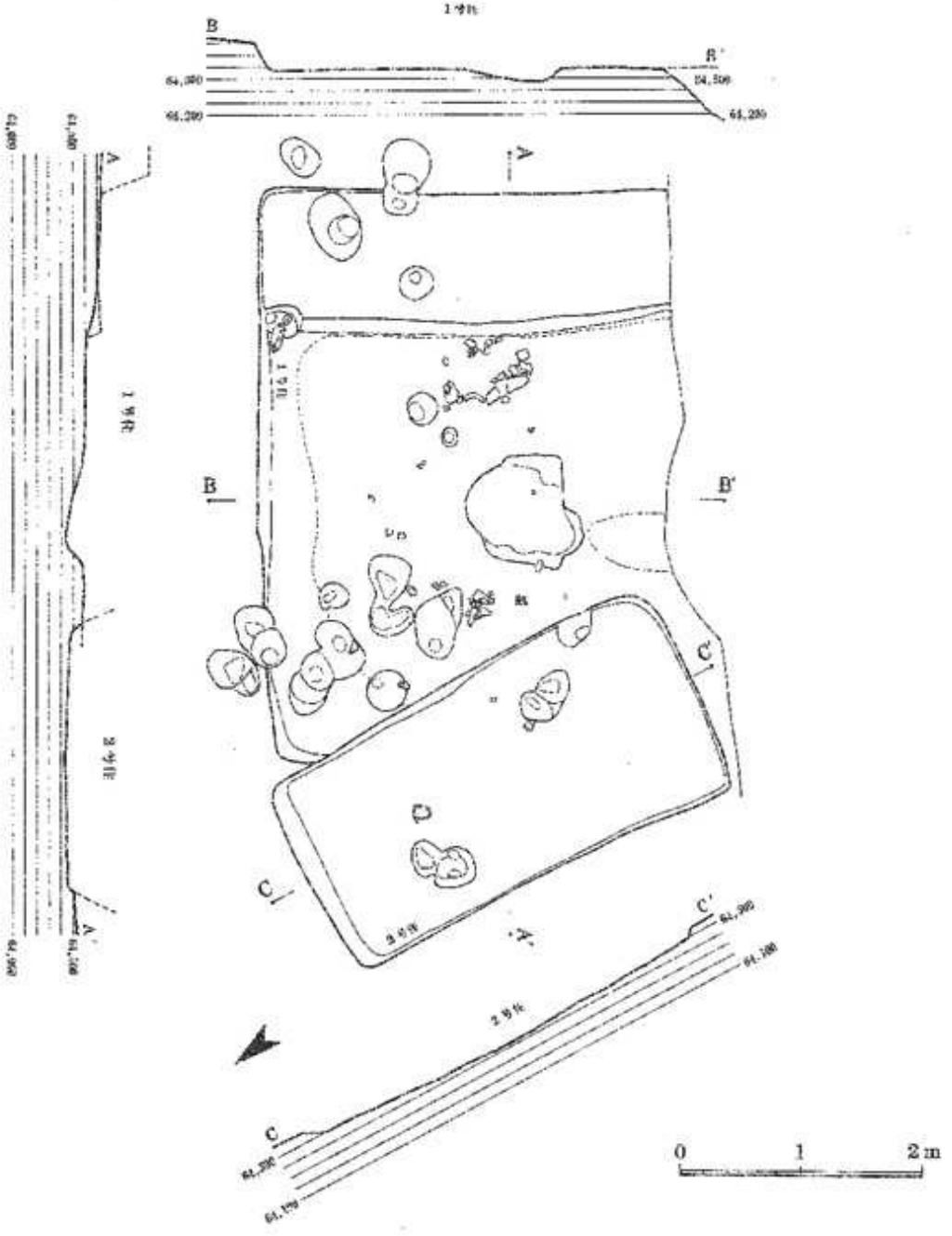


第6図　八反田遺跡B地区遺構配置図

第２節　八反田遺跡Ａ地区の遺構と遺物

１．弥生時代

(1) 竪穴住居跡と出土遺物

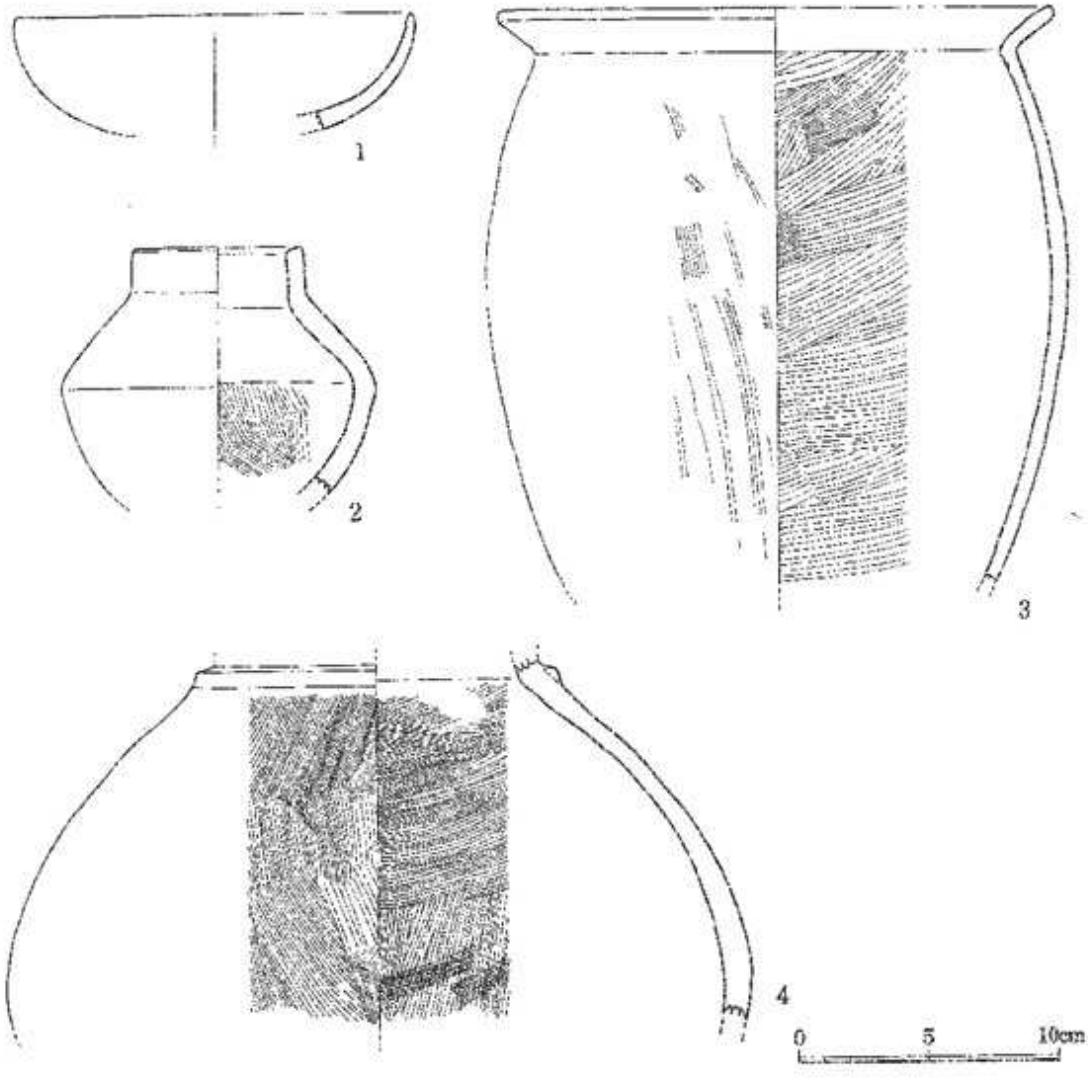


第７図　１号・２号住居跡実測図

1号住居跡

遺構（第7図）　出土遺物（第8図・第2表）

7−F−37グリッドに検出された住居跡で、南側は調査区外へ延びる。住居跡は、西側の壁を2号住居跡により切られ、2号住居跡より古い。住居跡の規模は、不明だが残っている北側壁が4.77mを測ることから、ほぼ同規模の隅丸方形か長方形を呈するものと考えられる。方位は、N−56°45′−Wをとる。住居跡のほぼ中央には、不整円形で断面が皿状を呈した炉があり、東側の壁にはベット状遺構が認められる。また、床には固く踏み締められた硬化面が壁付近まで広がっている。柱穴は、特定出来なかった。また、炉の位置関係から南側の壁は調査区外へはあまり延びないものと考えられる。



第8図　1号住居跡内出土土器実測図

第2表　1号住居跡内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
8-1-1	壺	口径 15.2 現存高 4.5	体部は内湾しながら立ち上がり外方に開く、端部はやや尖がり気味。	砂粒及び径1mm程の小石、金雲母を少量含む	淡黄白色	良好	ヘラ磨き	ナデ	○弥生
8-1-2	小型壺	口径 6.4 胴部径 12.1 現存高 9.6	胴部は大きく張らみ頸部に向って内傾する。口縁部は胴部より直ロし立ち上がり若干内傾する。端部は平坦である。	砂粒及び径1mm程の小石を多量に含む	橙色	不良	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ磨き	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目	○弥生 ○底部欠失
8-1-3	甕	口径 21.2 胴部径 22.3 現存高 22.3	胴部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外方に開く、端部は平坦であるがやや丸味をもつ。胴部は大きく張らみ中位より上に最大径がある。	砂粒及び白色小石、径1～2mm程の小石、角セン石を含む	暗褐色	良好	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目後ナデ	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目	○弥生
8-1-4	甕	胴部径 28.6 現存高 14.0	胴部が大きく張らみ、頸部が絞まる。頸部には三角形の突帯を1条貼り付ける。	砂粒及び径1～2mm程の小石、角セン石を多量に含む	淡黄橙色	やや不良	ハケ目	ハケ目	○弥生 ○口縁部及び底部欠失

遺物は、出土量は少ないが壺や甕・甕などが出土している。

2号住居跡

遺構（第7図）　出土遺物（第9図・第3表）

7－F－37グリッドに検出された住居跡で、1号住居跡と切り合い1号住居跡より新しい。規模は、長辺3.58m、短辺1.79mを測り隅丸長方形を呈している。方位は、N－5°00′－Eである。この住居跡には、硬化面や炉、柱穴などが見あたらないことから、特殊な住居跡と考えられる。

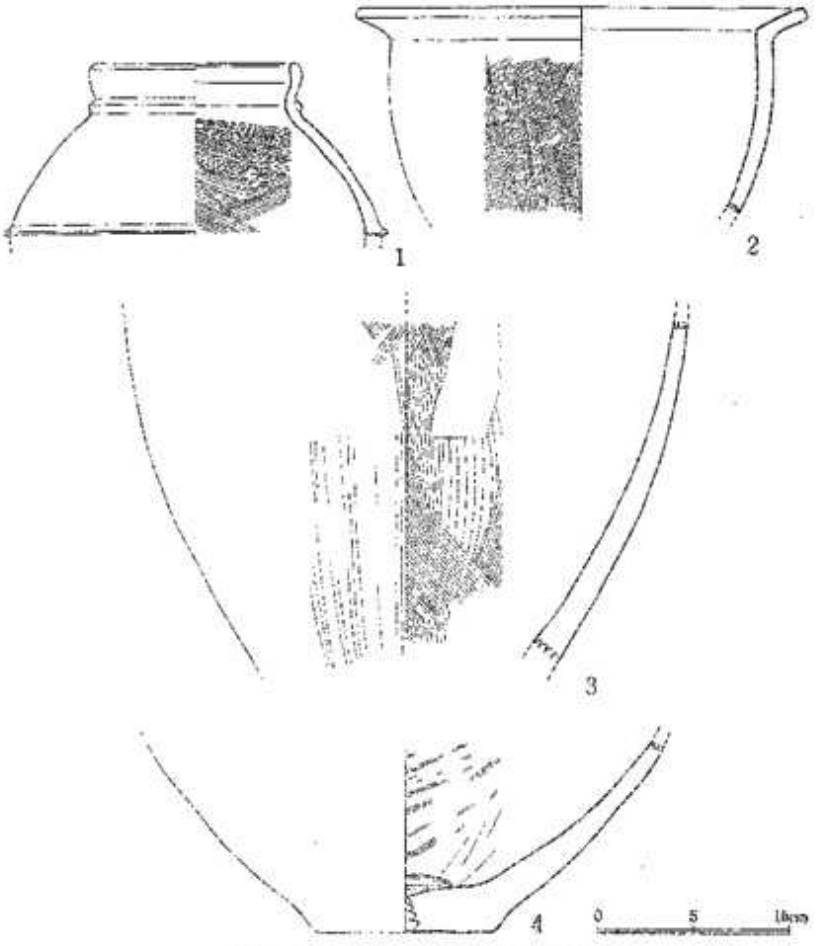
遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものは少ないが壺・甕・鉢が出土している。

6号住居跡

遺構（第10図）

7－F－36グリッドに検出された住居跡で、切り合っている7号住居跡より古い。住居跡の規模は、一部の検出でありその大半が南側の調査区外へ延びるため不明であるが、残っている北側壁が4.88mを測ることから一辺4.88mの隅丸方形か長方形を呈するものと考えられる。方位は、N－70°00′－Wをとる。住居跡は、東側と西側の壁にベット状遺構が認められが、炉や柱穴・硬化面等については不明である。

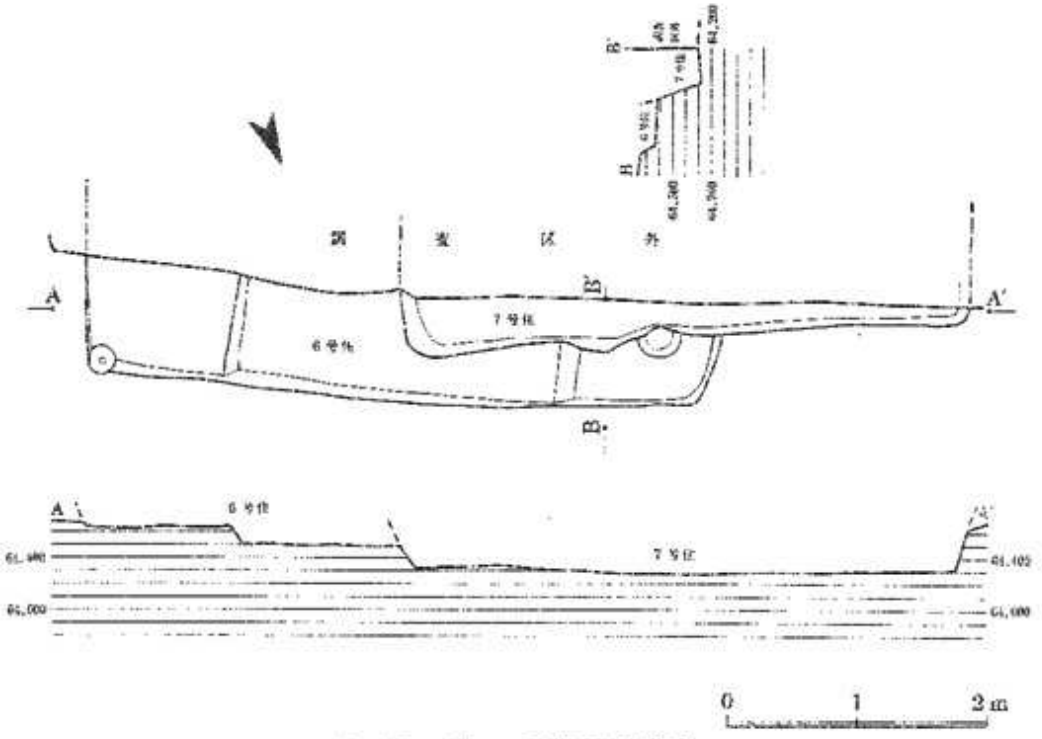
遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが高杯や甕などが出土している。



第9図　2号住居跡内出土土器実測図

第3表　2号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
9-1	甕	口径 16.4 現存高 9.2	頸部で屈曲した後口縁部が内湾しながら直ちに短かく立ち上がる。胴部はやや丸味をもつ	砂粒及び径1mm程の小石を多く含む	黄橙色	良好	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目後ナデ	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目	○赤色
9-2	鉢	口径 23.2 現存高 10.9	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外方に開く。底部は平底である。	砂粒及び白色小石、角セン石を含む	黄橙色	良好	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目	口縁部ヨコナデ 胴部ナデ	○赤色
9-3	壺	現存高 18.0	底部より内湾しながらさら上がる。	砂粒及び径1mm程の小石、角セン石、金雲母を含む	淡黄色	良	ハケ目後ナデ	ハケ目	○赤色 ○口縁部と底部欠失
9-4	壺	現存高 9.9 底径 9.2	底部は平底	砂粒及び径1～2mm程の小石、角セン石を含む	淡黄色	良	ナデ	ハケ目後ナデ	○赤色 ○底部のみ残存



第10図　6号・7号住居跡実測図

2．古墳時代

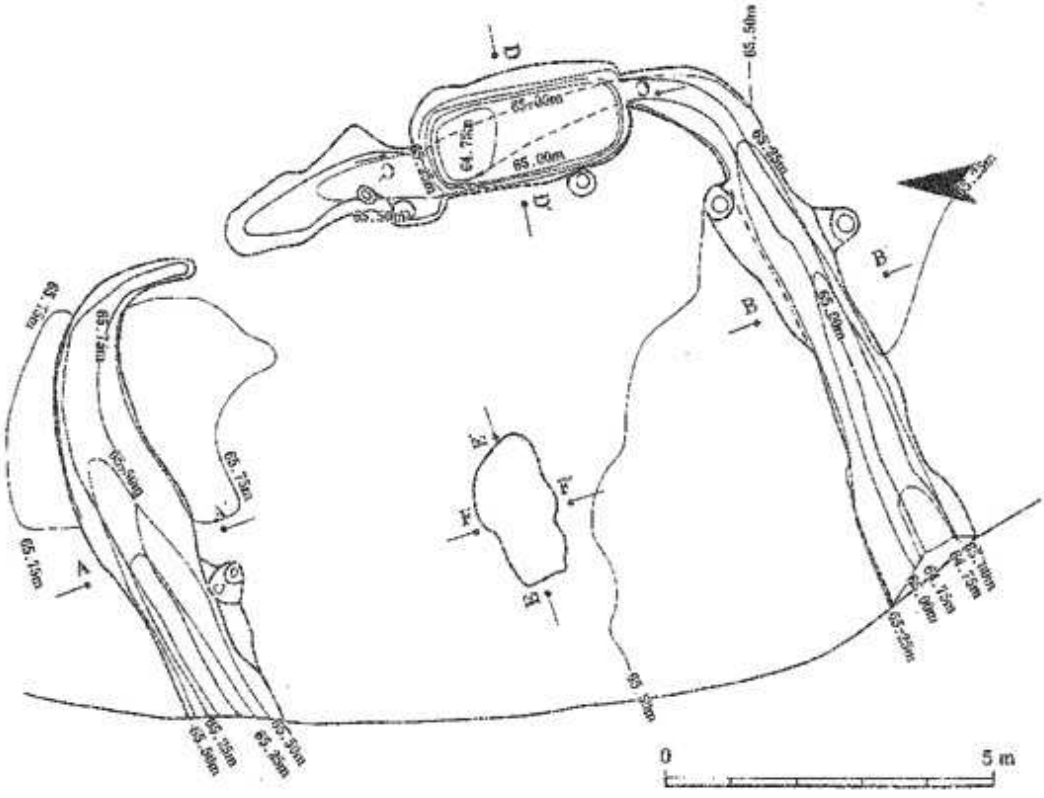
(1) 方形周溝墓と出土遺物

1号方形周溝墓（第11図～第14図）　出土遺物（第15図・第4表）

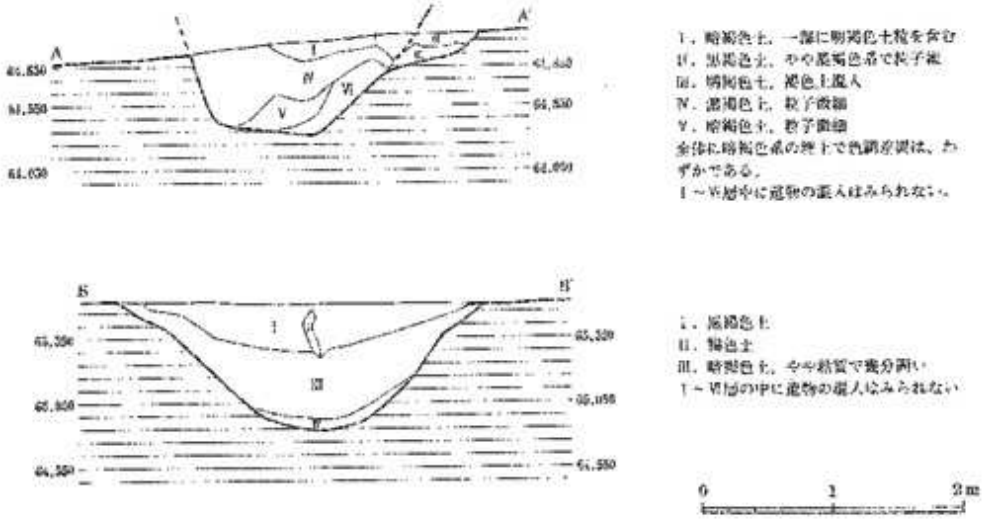
調査区西側部分で、7－F－17・18・23・24グリッドの四カ所の区域にわたって検出された。遺構確認面の海抜標高は、65.25m～65.75mを測る。周溝は、全体の半分程の検出で残りは調査区外へ延びる。陸橋部は、東側に位置し中心より北側にずれる。規模は、直交軸側の溝内側で長さ9.86m、外側で12.1mを測り、主軸側もほぼ同規模と考えられる。溝の幅は、0.35m～1.08mで深さは0.36m～0.49mを測り、断面形はU字形を呈し立ち上がり角度は内側が緩い。主軸方位は、N－71°30′－Eをとる。

主体部は、削平の為残存状態はあまり良くないが、中央付近に墓壙の掘り方を確認した。墓壙は、長辺2.31m、短辺0.7mの不整長方形を呈し、深さは5～37cmを測る。中には、棺を埋設する為のほぞ穴だけが確認でき、復元すると長さ約1.7m、幅約0.45mの組み合わせ式の棺が埋設されていた様である。棺材は、石材と考えられる安山岩の石片が出土していることから、組み合わせ式の箱式石棺と考えられる。墓壙内からは、副葬品等の遺物は全く出土しなかった。

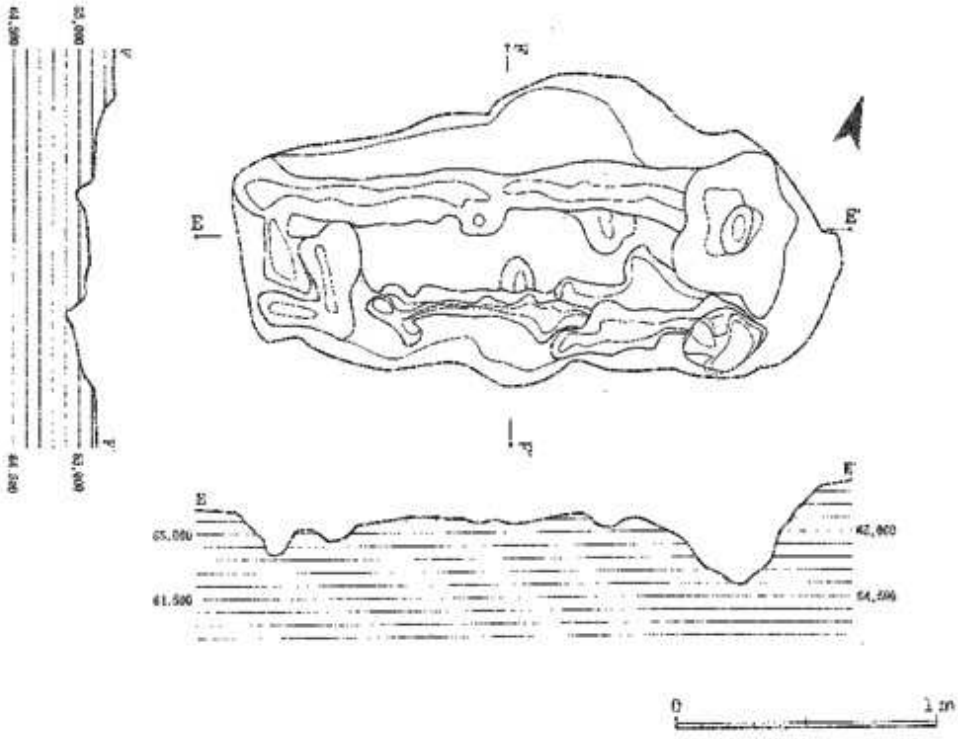
また、確認された陸橋部の南側周溝内からは、楕円長方形で長さ3.33m、幅1.71m、深さ0.83mの土壙が検出された。土壙内からは、破砕した甕が1点出土している。この土壙は、土層観察の際周溝との前後関係が確認できなかったことから、ほぼ同時期に掘られたものと考えて良い。



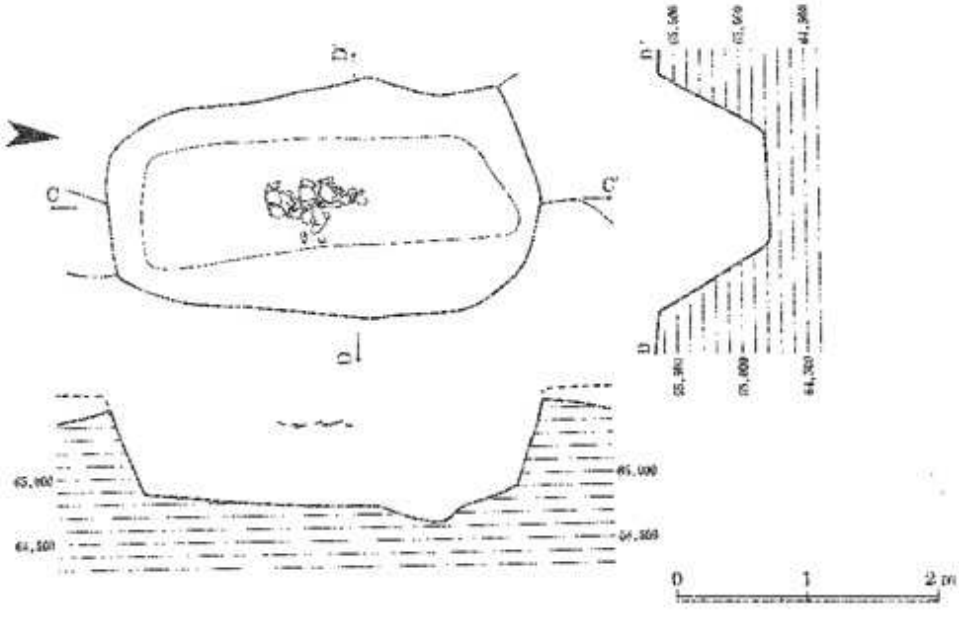
第11図　1号方形周溝墓測量図



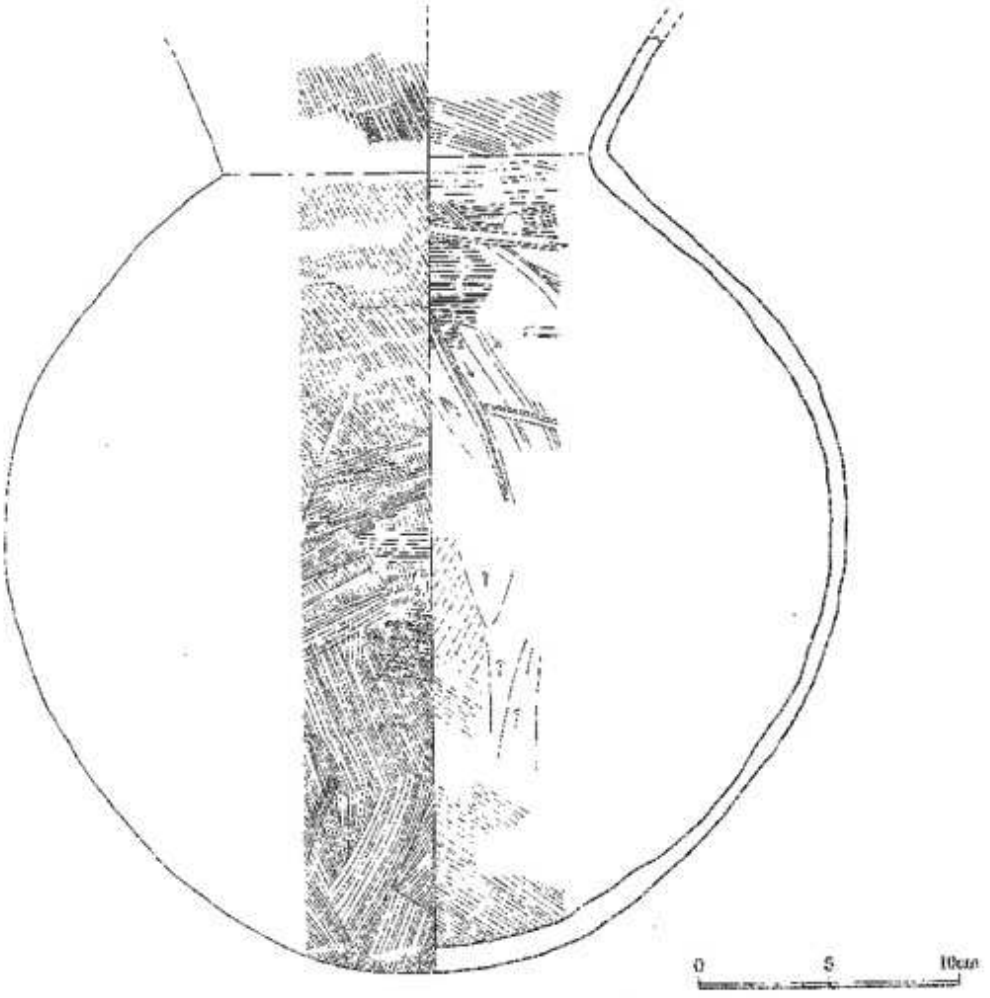
第12図　1号方形周溝墓周溝断面実測図



第13図　1号方形周溝墓主体部実測図



第14図　1号方形周溝墓土器出土状態実測図



第15図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図

第4表　1号方形周溝墓周溝内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
15	壺	最大径 14.8 頸部径 33.2 現存高 35.9	頸部でくの字に屈曲した後ほぼ直線的に立ち上がり外方に開く。頸部は内傾付近に最大径があり、球になる。	砂粒及び角セン石、金雲母、白色小石を多量に含み、径3mm前後の小石を少量含む	淡赤茶褐色	良	ハケ目	口縁部ハケ目 胴部ヘラ削りの後ハケ目	○上部欠 ○口縁部欠失

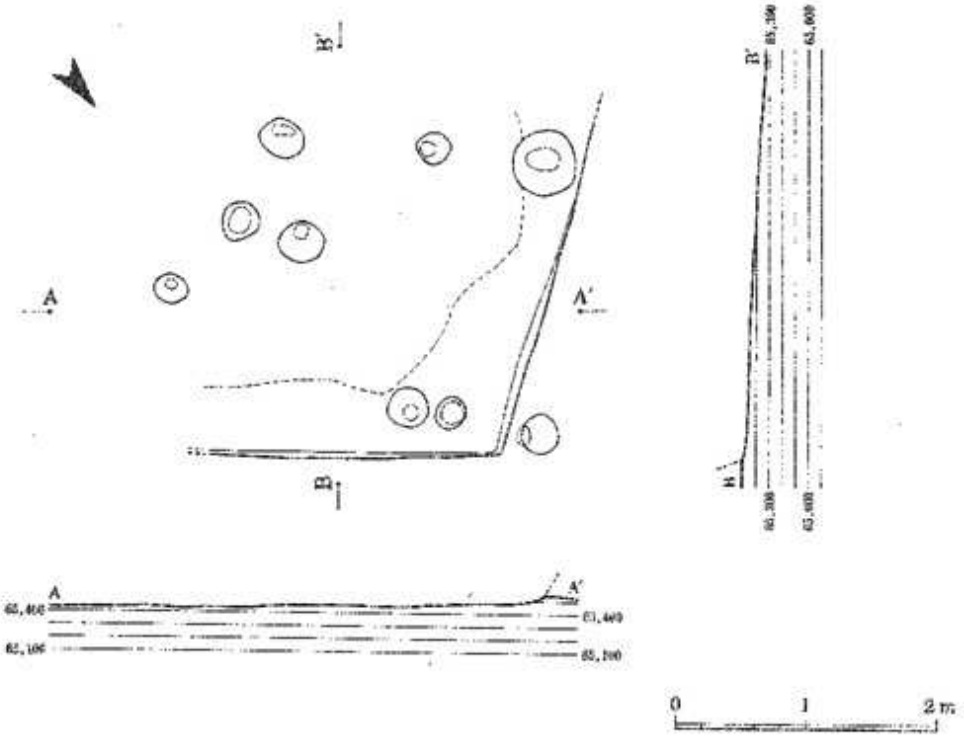
3．奈良・平安時代

(1) 竪穴住居跡と出土遺物

3号住居跡

遺構（第16図）

7−F−24・24グリッドに検出された住居跡で、その大半が削平されておりわずかに壁付近まで広がる硬化面と北西コーナー及び壁の一部が確認された。住居跡は、一部の検出であり全



第16図　3号住居跡実測図

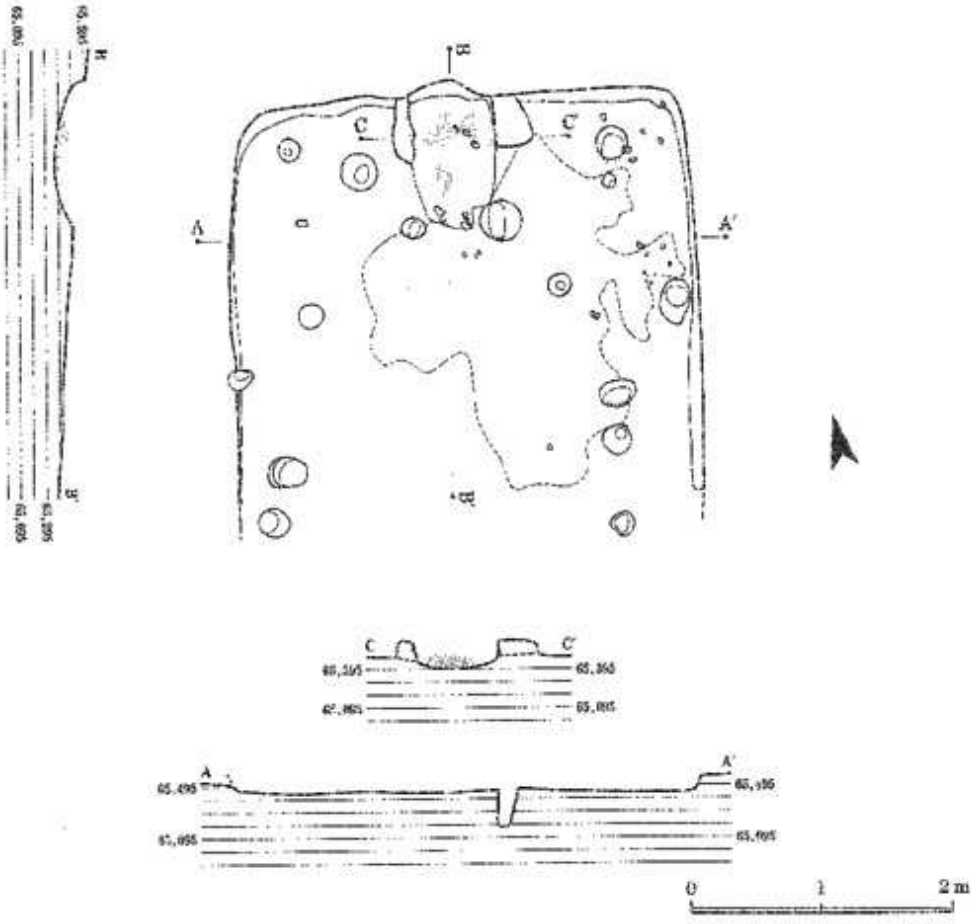
体規模や方位については不明である。また、遺物の出土が全くないため時期も不明で、一応新しい時期に、比定しておく。

4号住居跡

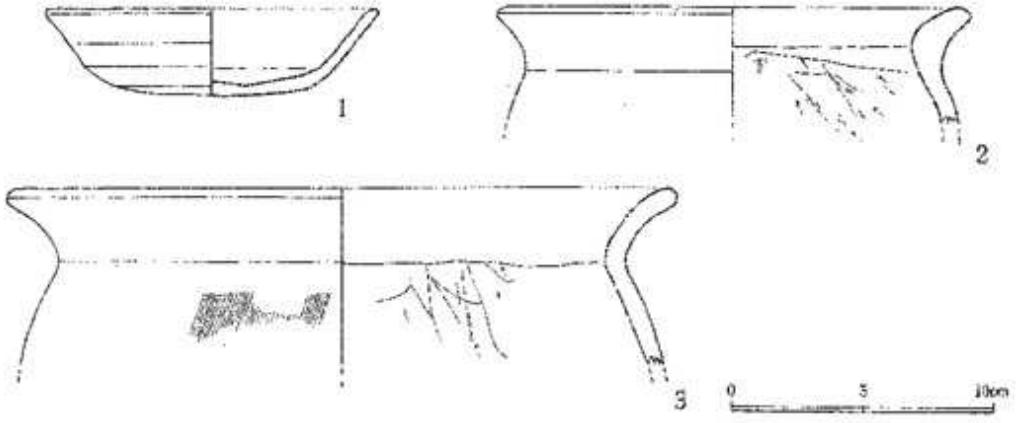
遺構（第17図）　出土遺物（第18図・第106図1・第5表・第44表1）

7－F－35グリッドで、5号住居跡のすぐ西側に検出された住居跡である。住居跡の南側部分は、削平されているため全体規模は不明であるが、完全に残っている北側壁が3.61mを測ることから、一辺が3.60m程度の隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－6°30′－Eをとる。北側壁面のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドがあり、煙道部が壁より少し外側にでている。床には、カマド近くまで広がる硬化面が確認され、柱穴は特定出来なかった。

遺物は、出土量は少ないが土師器の坏や皿・甕などが出土している。また、この住居跡からは、土師器坏の外面底部に墨書があるものが1点出土している。細片である為、文字の判読は出来ない。



第17図　4号住居跡実測図



第18図　4号住居跡内出土土器実測図

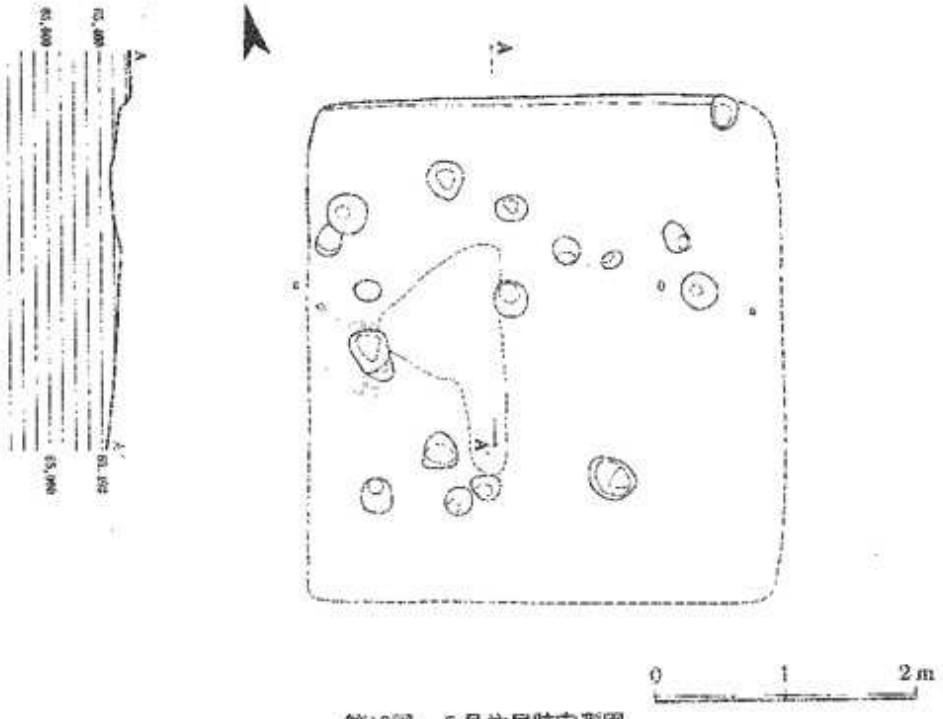
5号住居跡

遺構（第19図）　出土遺物（第106図2・第44表2）

7−F−34・35グリッドで、4号住居跡のすぐ東側に検出された住居跡である。その大半が

第5表　4号住居跡内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調査技法 外面	調査技法 内面	備考
18-1	坏	口径 12.8 器高 3.4 底径 7.3	体部はほぼ直線的に外方に開きながら立ち上がり端部は丸くなる。底部は丸底気味である。	砂粒及び金雲母を含む	明褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
18-2	甕	口径 18.2 現存高 4.4	頸部で屈曲した後口縁部が短かくやや外反気味に外方に開く、端部は丸味をもつ	砂粒及び白色小石、径1mm程の小石を含む	明褐色	良好	ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
18-3	甕	口径 25.8 現存高 6.9	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が外反しながら外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、径1～2mm程の小石を多く含む	褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ磨り	○土師器



第19図　5号住居跡実測図

削平されておりわずかに硬化面の一部と北西コーナー及び壁の一部が確認されたのみである。住居跡規模は、一部の検出であり不明であるが一辺3.61m前後の隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、4号住居跡とほぼ同じでN－6°30′－Eをとる。硬化面は、一部残っているが、柱穴の特定は出来なかった。また、西側の壁近くに黄白色粘土と焼土が若干認められることから、カマドは西側にあった可能性が強い。

遺物は、出土量は少ないが土師器の坏や甕などが出土している。また、この住居跡からは、土師器坏の外面底部に墨書があるものが1点出土している。細片であるため、文字の判読は出来ない。

7号住居跡

遺構（第10図）　出土遺物（第20図・第6表）

7−F−36・37グリッドで、6号住居跡と切り合って検出された住居跡である。住居跡は一部の検出でありその大半が南側の調査区外へ延びるため全体規模は不明であるが、一辺4.30m程の隅丸方形の住居跡と考えられる。方位は、N−76°00′−Wをとる。住居跡は、6号住居跡を切って作られており新しい。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の坏や皿・甕が1点出土している。

第20図　7号住居跡出土土器実測図

第6表　7号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
20 1 1	坏	口径 13.5 器高 2.4 底径 3.0	体部は内湾気味に大きく外方に開きながら立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒を少量含む	褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
20 1 2	坏	口径 12.4 器高 2.9 底径 3.0	体部は内湾気味に外方に開きながら立ち上がり、端部は丸味をもつ。	砂粒及び角セン石、石英粒を含む	淡褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器

4．奈良・平安時代以降

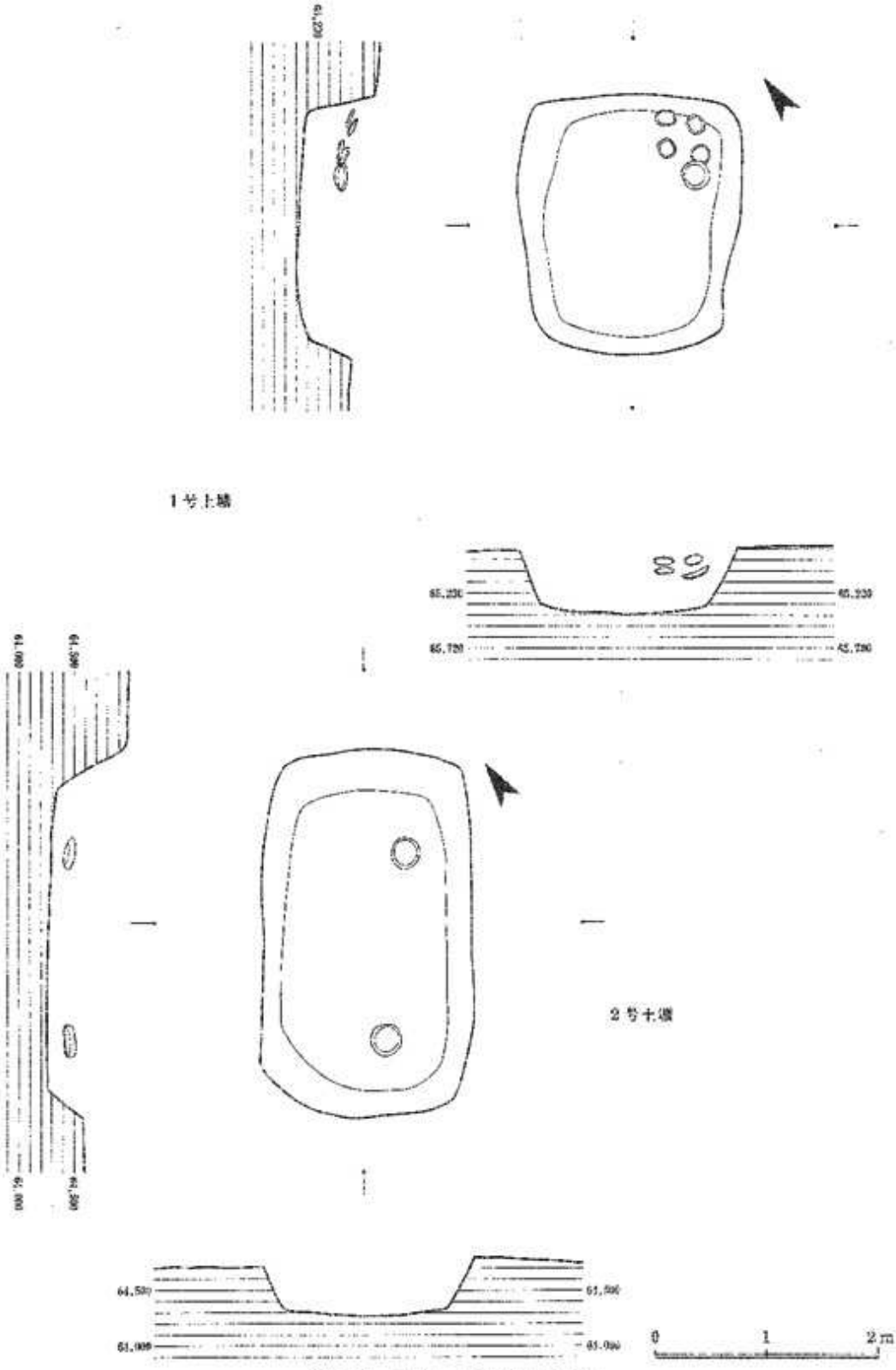
(1) 土壙と出土遺物

1号土壙（SK−01）

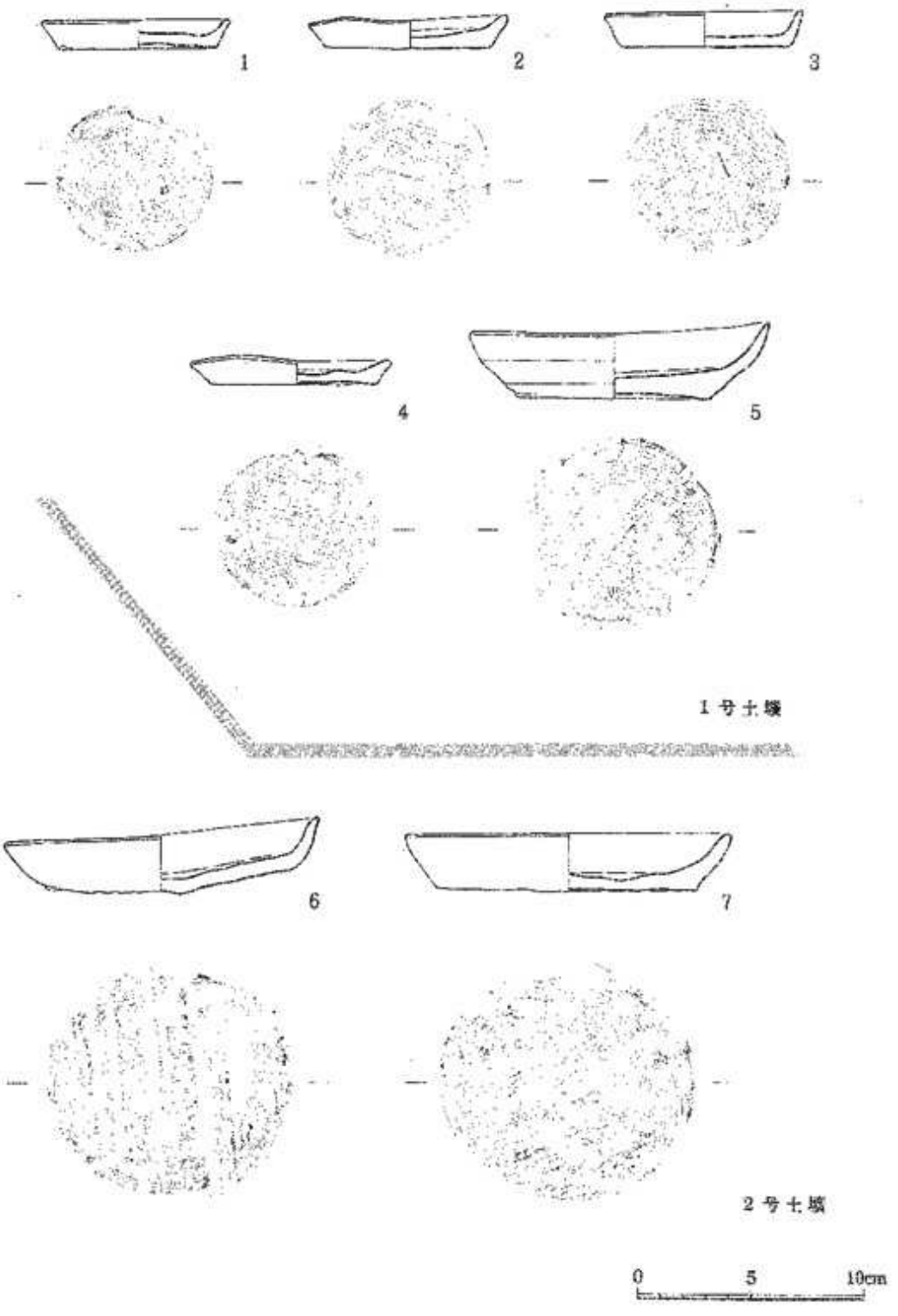
遺構（第21図）出土遺物（第22図1〜5・第7表1〜5）

7−F−24・25グリッドに検出された土壙で、規模は、長辺1.11m、短辺1.01m、深さ0.30mを測りやや歪方形を呈している。方位は、N−27°30′−Eをとる。土壙内からは、人骨の出土はなかったが土師器皿が北東コーナー付近に5点副葬されていた。皿は、すべて完形品で底部を下にして置かれていた。皿は、出土レベルが床より20cm程高いことから、頭部か足などの遺体の上に乗せていたものと考えられる。

遺物は、すべて土師器の皿で完形品である。皿は、大・小2種類の大きさがあり底部に糸切り痕が残っている。また、体部は低く浅い皿で、形が変形しておりあまり丁寧な作りではない。時期は、皿の形態的特徴から平安時代以降で中世の時期であろう。



第21図　1号・2号土壙実測図



第22図　土壙内出土土器実測図

第7表　土壙内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
22 1 1	皿	口径 8.4 器高 1.3 底径 7.0	体部は外方に開き短かく直線的に立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び雲母を含む	明褐色	良好	ヨコナデ 底部 糸切り	ヨコナデ	○土師器 ○完形品 ○1号土壙
22 1 2	皿	口径 8.8 器高 1.5 底径 7.1	体部は外方に開き短かく直線的に立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石、雲母を含む	明褐色	良好	ヨコナデ 底部 糸切りの後板状工具の撫形	ヨコナデ	○土師器 ○完形品 ○形がいびつ ○1号土壙
22 1 3	皿	口径 8.8 器高 1.6 底径 7.3	体部は外方に開き、短かく直線的に立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び雲母を含む	明褐色	良好	ヨコナデ 底部 糸切りの後板状工具の撫形	ヨコナデ	○土師器 ○完形品 ○1号土壙
22 1 4	皿	口径 8.2 器高 1.2 底径 7.2	体部は外方に開き短かく直線的に立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び長石を含む	明褐色	良好	ヨコナデ 底部 糸切りの後板状工具の撫形	ヨコナデ	○土師器 ○完形品 ○形がいびつ ○1号土壙
22 1 5	皿	口径 13.3 器高 3.0 底径 8.7	体部は外方に開き内湾しながら立ち上がる。端部は尖がり気味である。	砂粒及び雲母を含む	褐褐色	良好	ヨコナデ 底部 糸切りの後板状工具の撫形	ヨコナデ	○土師器 ○完形品 ○形がいびつ ○1号土壙
22 1 6	皿	口径 13.6 器高 2.3 底径 11.0	体部は外方に開きやや内湾気味に立ち上がる。端部はやや丸味をもつ	砂粒及び雲母を含む	明褐色	良	ヨコナデ 底部 糸切りの後板状工具の撫形	ヨコナデ	○土師器 ○完形品 ○形がいびつ ○2号土壙
22 1 7	皿	口径 14.5 器高 2.5 底径 11.4	体部は外方に開き内湾気味に立ち上がる。端部は丸味をもつ	砂粒及び白色土器を含む	褐褐色	良	ヨコナデ 底部 糸切りの後板状工具の撫形	ヨコナデ	○土師器 ○完形品 ○2号土壙

2号土壙（SK－02）

遺構（第21図）出土遺物（第22図6～7・第7表6～7）

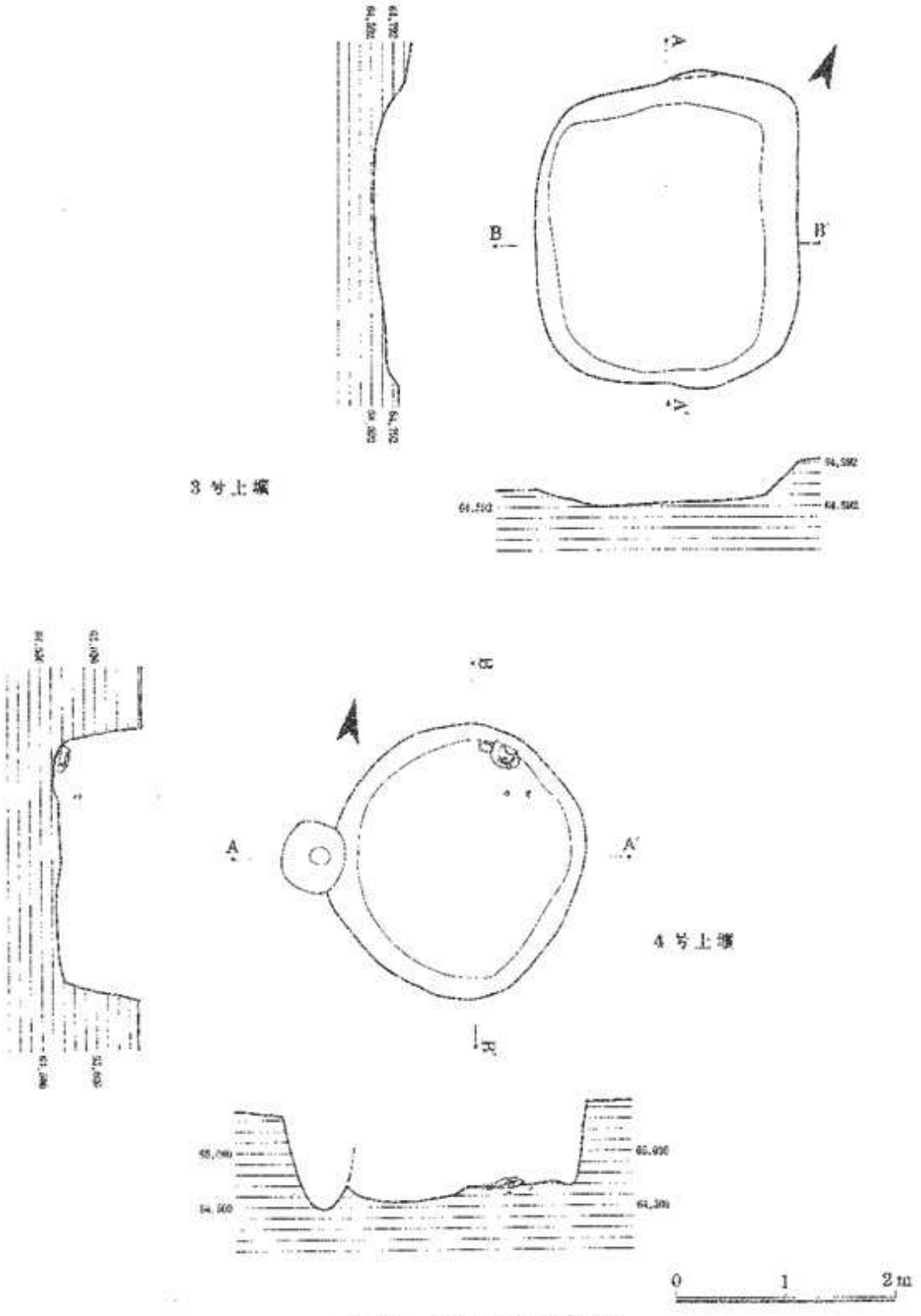
7－F－37グリッドに検出された土壙で、規模は、長辺1.66m、短辺0.94m、深さ0.22mを測り長方形を呈している。方位は、N－25°00′－Eをとる。土壙内からは、人骨の出土はなかったが土師器の皿が北側と南側壁近くに1点づつ副葬されていた。皿は、すべて完形品で北側が底部を下にして、南側が底部を上にして置かれていた。皿は、出土位置が東側の壁に近いことから遺体の横に置いていたものと考えられる。

遺物は、すべて土師器の皿で完形品である。皿は、底部に糸切り痕が残っており、体部が低く浅い皿で形が変形していてあまり丁寧な作りではない。時期は、皿の形態的特徴から平安時代以降で中世の時期であろう。

3号土壙（SK－03）

遺構（第23図）

7－F－36グリッドに検出された土壙で、規模は、長辺1.40m、短辺1.20m、深さ0.13mを



第23図　3号・4号土壙実測図

湾り不整方形を呈している。方位は、N－32°10′－Wをとる。土壙内からは、人骨や遺物の出土は全くなかったことから時期の特定は出来ないが、他の土壙とほぼ同時期で中世と考えられる。

4号土壙(SK－04)

遺構（第23図）

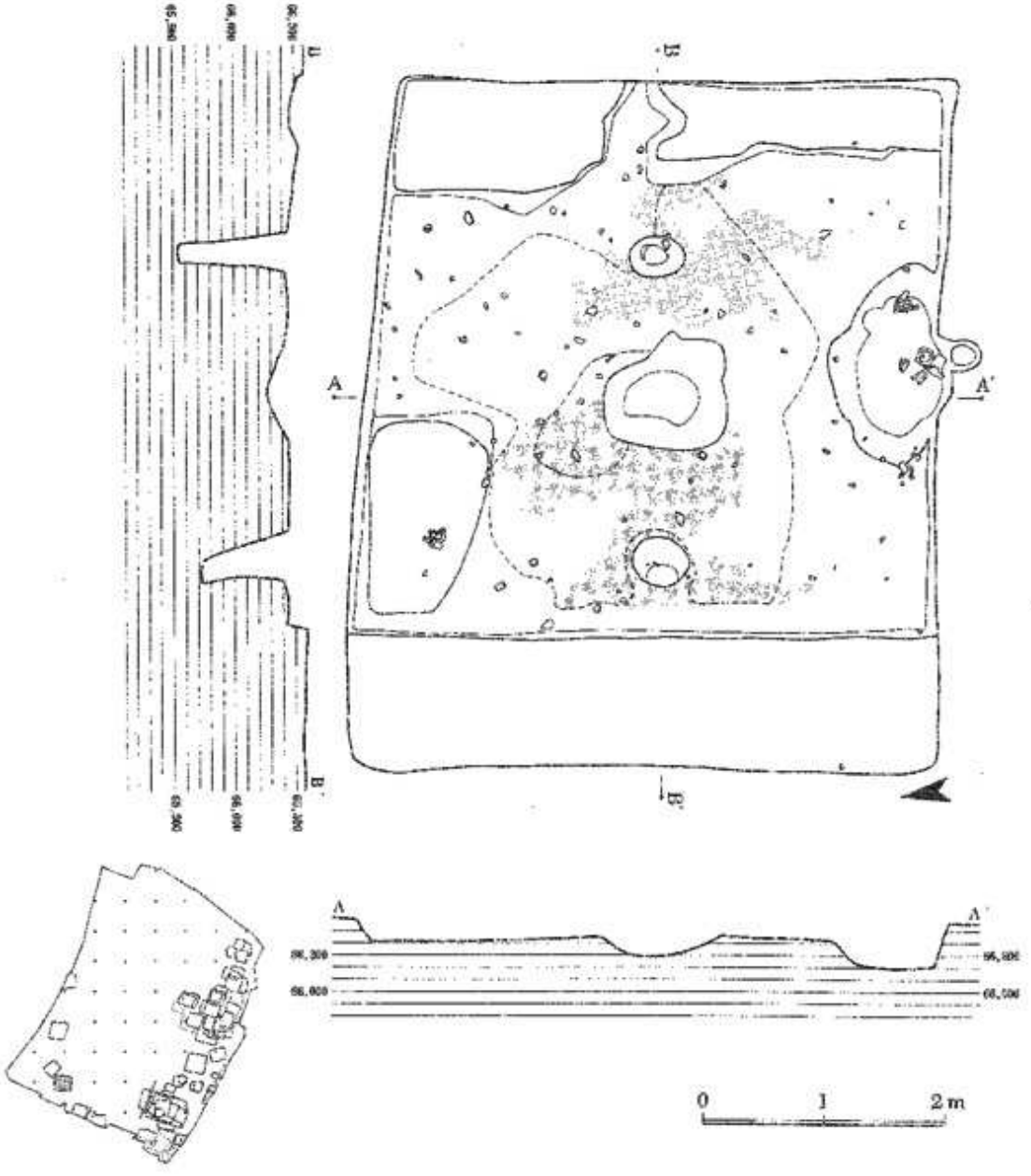
7－F－27グリッドに検出された土壙で、他の3基より12～20m程離れて検出された。規模は、直径1.27m、深さ0.44mを測り、不整円形を呈している。方位は、N－31°15′－Wをとる。土壙内からは、人骨や遺物の出土は全くなかったことから時期の特定は出来ないが、他の土壙とほぼ同時期で中世と考えられる。

第２節　八反田遺跡Ｂ地区の遺構と遺物

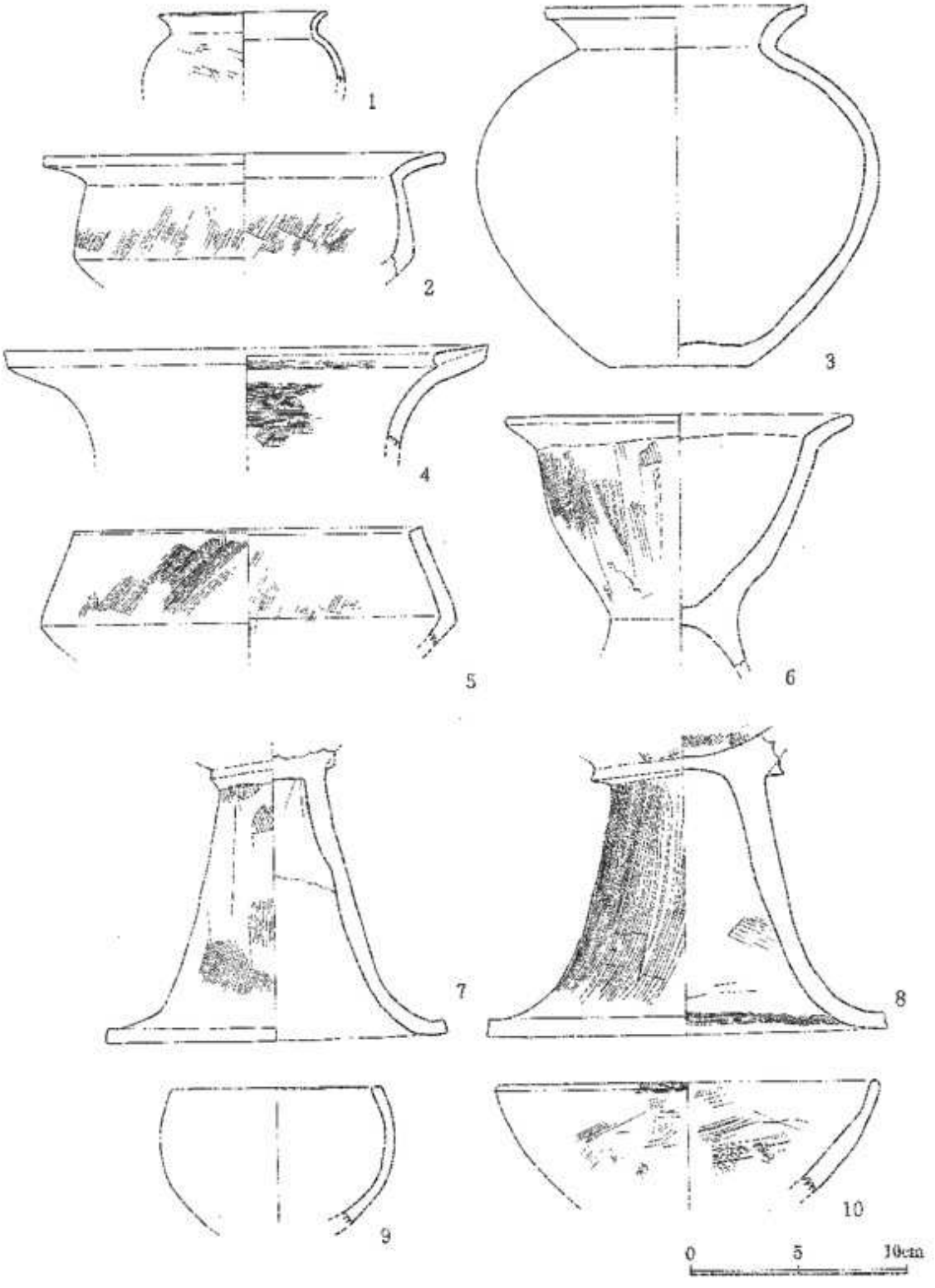
１．弥生時代

(1) 竪穴住居跡と出土遺物

１号住居跡



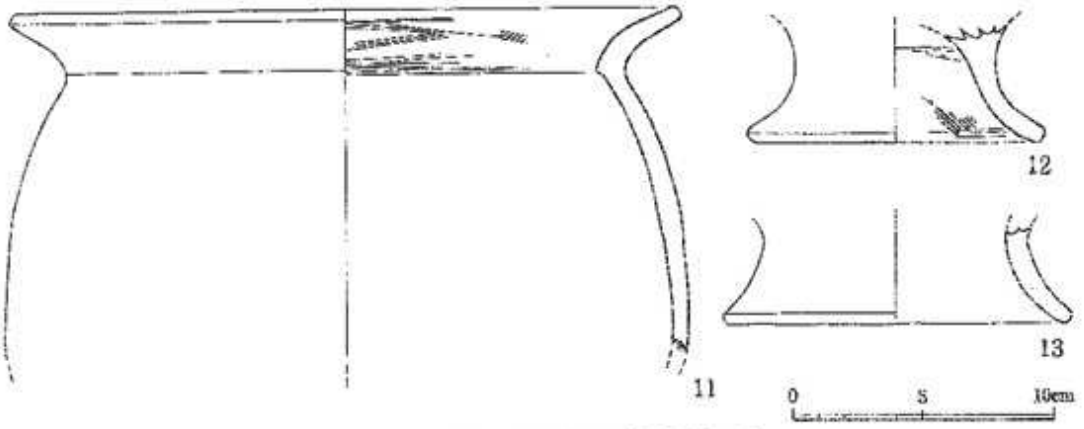
第24図　１号住居跡実測図



第25図　1号住居跡内出土土器実測図（1）

第8表　1号住居跡内出土遺物観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
25 1 1	壺	口径 7.8 現存高 3.4 胴部径 9.4	頸部で屈曲した後、口縁部はほぼ直口して立ち上がり外反する。端部は丸味もつ。胴部は大きく張らみ球形に近い。	砂粒を含む	淡褐色	良	ナデ	ナデ	○弥生 ○小型壺
25 1 2	鉢	口径 18.6 現存高 5.9 胴部径 15.8	胴部中位で内側に屈曲し、頸部ではさらに外方に屈曲し口縁部は外反気味に開く、端部はナデて平坦にしている。	砂粒及び白色小石を多く含み角セン石を少量含む	淡褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	○弥生
25 1 3	壺	口径 12.2 胴部径 18.7 器高 16.8 底径 6.6	胴部は大きく中位で張らみ、頸部で屈曲した後、口縁部が外反気味に外方に開く、端部は平坦にしている。底部は平底	砂粒及び角セン石を含む	淡褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目？	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目？	○弥生
25 1 4	壺	口径 22.4 現存高 4.8	長頸壺で口縁部にかけて外反しながら大きく外方に開く。	砂粒及び白色小石を多く含む	淡褐色	良	ナデ	ハケ目	○弥生 ○櫛先口縁
25 1 5	鉢	口径 16.2 現存高 5.6 胴部径 19.4	胴部中位付近で内側に屈曲しそのまま直線的に口縁部に至る。端部は平坦である。	砂粒及び角セン石、金雲母を含む	淡褐色	良	ハケ目	ハケ目	○弥生
25 1 6	器	口径 16.2 現存高 11.5	頸部で屈曲した後、口縁部が直線的に外方に開く端部は尖くなる。脚台が付く	砂粒を多く含み、角セン石、金雲母を少量含む	明褐色	良	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁	○弥生 ○脚台付
25 1 7	高坏	現存高 13.5 底部径 15.8	脚部は外方に開きながら緩やかに直線的に降りていき裾部が大きく外反し開く、端部は平坦である。坏部との境に1条の三角形の突帯を巡らす。	砂粒及び白色小石を含む	淡褐色	良	ハケ目	ナデ	○弥生 ○坏部欠失
25 1 8	高坏	現存高 12.9 底部径 18.6	脚部は外方に開きながらほぼ直線的に降りていき裾部が大きく外反し開く、端部は平坦である。坏部との境に1条の三角形の突帯を巡らす。	砂粒及び白色小石を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○坏部欠失
25 1 9	器	口径 9.6 現存高 6.5	胴部が大きく張らみ口縁部が内傾する。端部は平坦にしている。	砂粒及び径1～2mmの小石、角セン石を含む	淡褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○弥生 ○底部欠失
25 1 10	器	口径 17.8 現存高 5.2	口縁部に向って外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石、金雲母を含む	淡褐色	良	ハケ目	ハケ目	○弥生 ○底部欠失
25 1 11	器	口径 25.4 胴部径 26.2 現存高 13.4	頸部で屈曲した後、口縁部が外反気味に外方に開く、端部は平坦である。胴部は大きく張らむ。	砂粒及び白色小石を含む	黒褐色	良好	口縁部 ヨコナデ 胴部 不明	口縁部 ハケ目の後ナデ 胴部 不明	○弥生
25 1 12	器	脚台径 11.0 現存高 4.5	端部に向って外反しながら外方に開く、端部は平坦でやや丸味をもつ	砂粒及び白色小石、角セン石を含む	淡褐色	良	器面が荒れている為不明	ハケ目	○弥生 ○脚部か
25 1 13	器	脚台径 13.0 現存高 3.8	端部に向って外反しながら外方に開く、端部は平坦でやや丸味をもつ	砂粒及び白色小石、角セン石を含む	淡褐色	良	ヨコナデ	器面が荒れている為不明	○弥生 ○脚台



第26図　1号住居跡内出土土器実測図（2）

遺構（第24図）　出土遺物（第25・26図・第8表）

6－F－66・67・74・75グリッドに検出された住居跡で、規模は長辺5.64m、短辺4.78mを測り隅丸長方形を呈している。方位は、N－80°30′－Wをとる。住居跡のほぼ中央には、不整円形で断面が皿状を呈した炉があり、東側と西側の壁にはベット状遺構が認められ、特に西側のベッドはL字形を呈する。また、床には固く踏み締められた硬化面がベッド状遺構の際まで広がっており、一部には明褐色粘土により貼り床をしているのが確認された。柱穴は、2個検出され、2本柱の住居跡である。南側壁のほぼ中央には、貯蔵穴が検出された。

遺物は、小型壺・甕・台付き鉢・高坏などが出土している。

2号住居跡

遺構（第27図）　出土遺物（第28図・第9表）

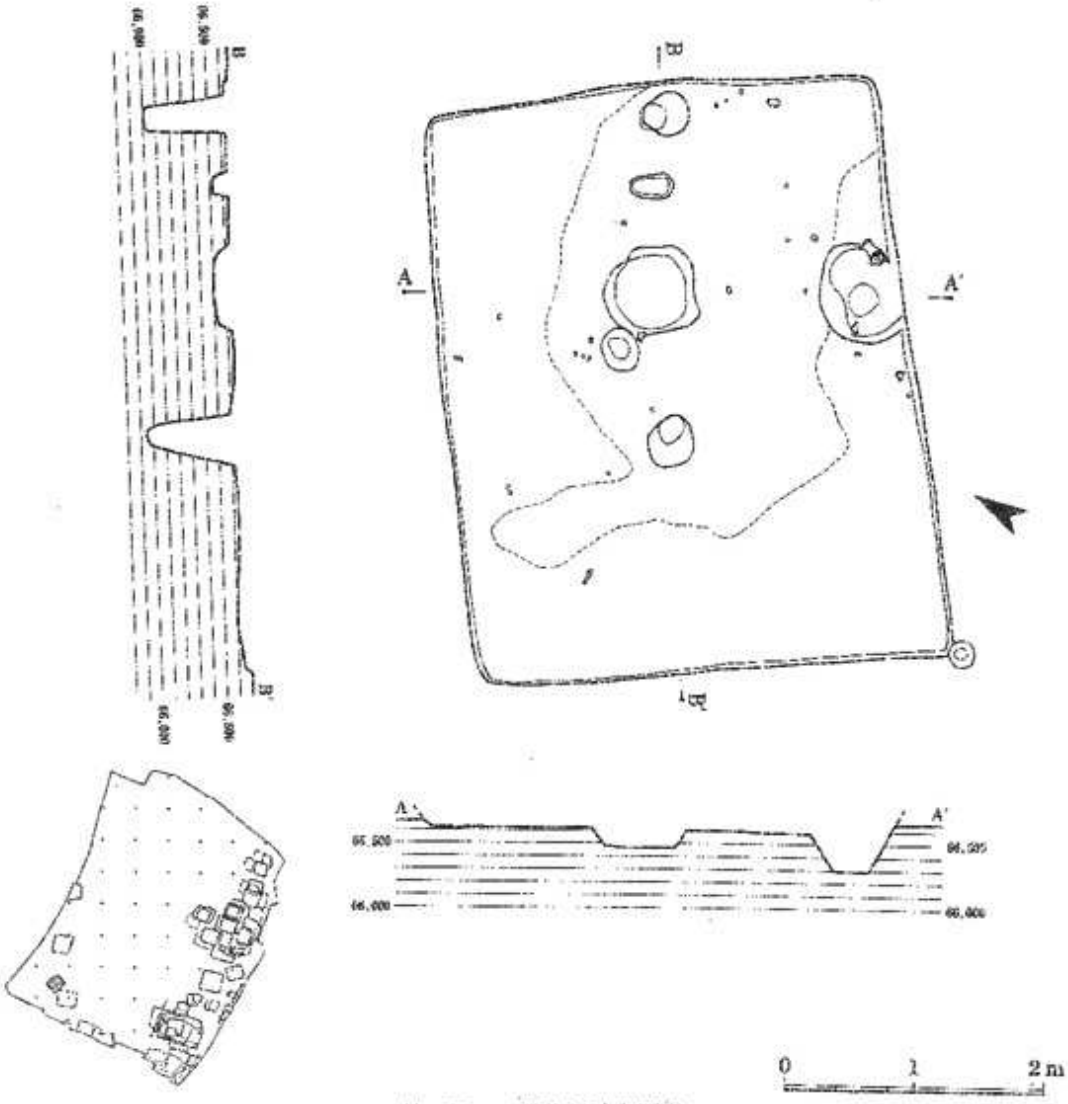
6－F－66グリッドに検出された住居跡で、規模は長辺4.58m、短辺3.62mを測り隅丸長方形を呈している。方位は、N－55°30′－Eをとる。住居跡のほぼ中央には、不整円形で断面が皿状を呈した炉があり、床には硬化面が壁近くまで広がっている。柱穴は、2個検出でき、2本柱の住居跡である。また、南側壁のほぼ中央には貯蔵穴が検出された。東側の柱穴は、位置的に壁に近すぎることから、1号住居跡同様、壁際にベッド状遺構があった可能性が強い。

遺物は、少量だが壺や甕・高坏・コップ形土器などが出土している。

3号住居跡

遺構（第29図）　出土遺物（第30図・第10表）

6－F－54・55グリッドに検出された住居跡で、規模は長辺5.36m、短辺4.86mを測り隅丸長方形を呈している。方位は、N－15°30′－Eをとる。住居跡のほぼ中央には、不整円形で断



第27図　2号住居跡実測図

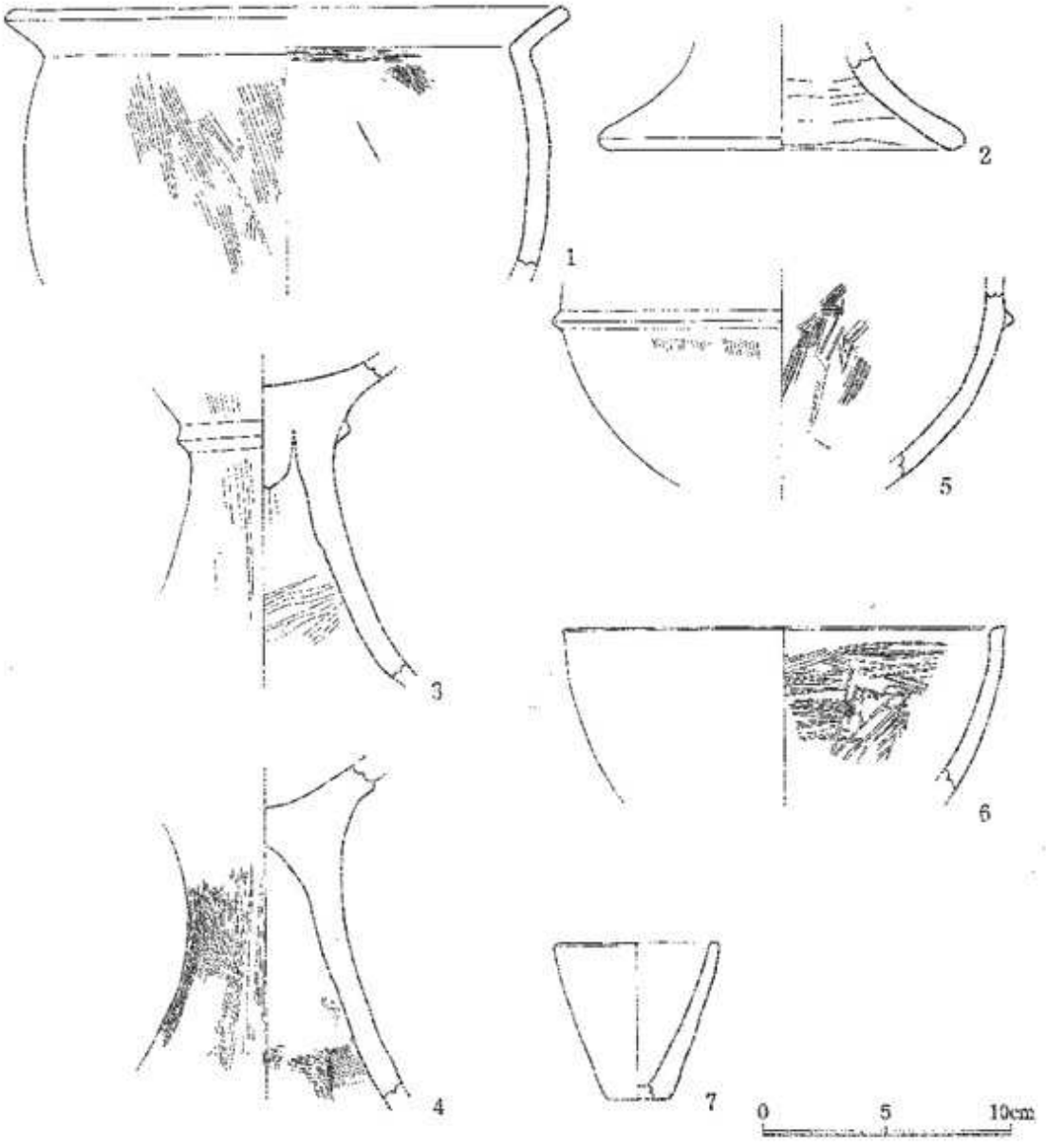
面が皿状を呈した炉があり、床には貯蔵穴の近くに硬化面の一部が認められた。柱は、2本で南側壁のほぼ中央には貯蔵穴が検出された。柱穴は、両側共に直径約0.8～1.1m、深さ約1.1mを測り、他の住居に比べて大きい。また、位置的に壁に近すぎることから壁際にベッド状遺構があった可能性が強い。

遺物は、ほとんどが細片で図化できた遺物は少ないが、壺や甕・鉢形土器などが出土している。

4号住居跡

遺構（第31図）　出土遺物（第32図・第11表）

6－F－87・88グリッドに検出された住居跡で、南側を半分程削平されている。住居跡の規



第28図　2号住居跡内出土土器実測図

模は不明であるが、北側壁が4.52mを測ることから4.5m前後の隅丸方形か長方形を呈するものと考えられる。方位は、真北である。住居跡のほぼ中央には、不整円形で断面が皿状を呈した炉があり、住居跡の北側壁面にはコの字形のベッド状遺構が認められる。床には、ベッド状

第9表　2号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
28 1	甕	口径 22.8 現存高 19.6 胴部径 21.2	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外方に開きながら立ち上がり、端部はナデで平坦である。胴部中位より上に最大径がくる。	砂粒及び白色小石、角セン石を含む	褐色	良好	口縁部ナデ 頸部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生
28 2	甕	胴径 14.9 現存高 3.9	端部に向って外反気味に外方に開く、端部は丸味をもつ	砂粒及び白色小石、角セン石を含む	淡褐色	良好	ナデ	ナデ	○弥生 ○無脚台
28 3	高杯	現存高 13.0	脚部に向って外反気味に外方に開いていく。	砂粒及び白色小石、径2㎜程の小石、金雲母を含む	褐色	良好	ハケ目	ハケ目	○弥生 ○杯部及び脚部欠失
28 4	高杯	現存高 11.9	脚部に向って外反気味に外方に開いていく。杯部と脚部の境に三角形を呈した突帯を貼り付ける。	砂粒及び白色小石、径2㎜程の小石、角セン石を多く含む	褐色	良	ハケ目	ハケ目	○弥生 ○杯部及び脚部欠失
28 5	壺	現存高 7.6 脚部径 12.0	脚部の破片で底部に近くなると思われる。最大径の部分に三角形の突帯を1条貼り付ける。	砂粒及び径1～2㎜程の小石を少量含む	淡褐色	良	ハケ目の後ナデ	ハケ目	○弥生 ○底部及びい縁部欠失
28 6	壺	口径 18.9 現存高 6.7	体部は外方に開き内湾しながら立ち上がり、端部はナデで平坦にしている。	砂粒及び角セン石、長石、金雲母を少量含む	淡褐色	良好	ナデ	ハケ目	○弥生 ○底部欠失
28 7	コップ状土器	口径 6.8 器高 6.4 底径 2.5	体部はやや内湾気味に外方に開きながら立ち上がり、端部はナデで平坦である。底部は平底	砂粒及び径1㎜程の小石、角セン石を含む	淡褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生

遺構の際まで広がる硬化面が確認された。柱穴は、検出できなかった。

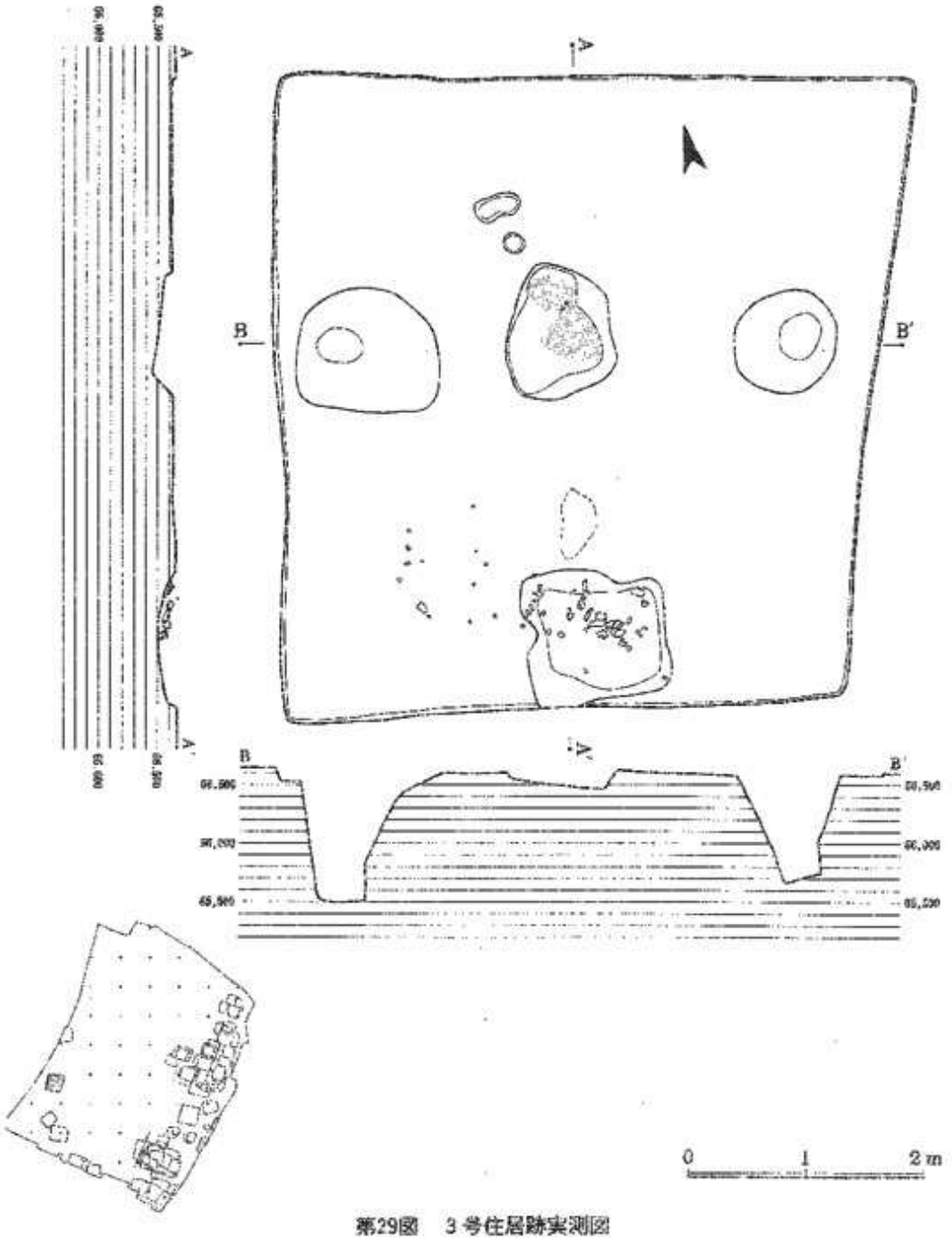
遺物は、ほとんどが細片で図化できた遺物は少ないが、壺や甕などが出土している。

5号住居跡

遺構（第33図）　出土遺物（第34図・第12表）

6－F－74・87グリッドに検出された住居跡で、南側を半分程調査されている。住居跡の規模は不明であるが、北側壁が5.03mを測ることから5m前後の隅丸方形か長方形を呈するものと考えられる。方位は、N－21°30′－Eをとる。住居跡のほぼ中央には、円形で断面が皿状を呈した炉があり、床には炉を中心に広がる硬化面が確認された。東側壁のほぼ中央には、貯蔵穴が検出され、貯蔵穴内からはほぼ完全に復元出来た壺が1点出土している。柱穴は、北側に1個検出されたことから、2本柱の住居跡と考えられる。この住居跡内の西側部分には、炭化した木材や焼土が認められたことから、火災住居であろう。

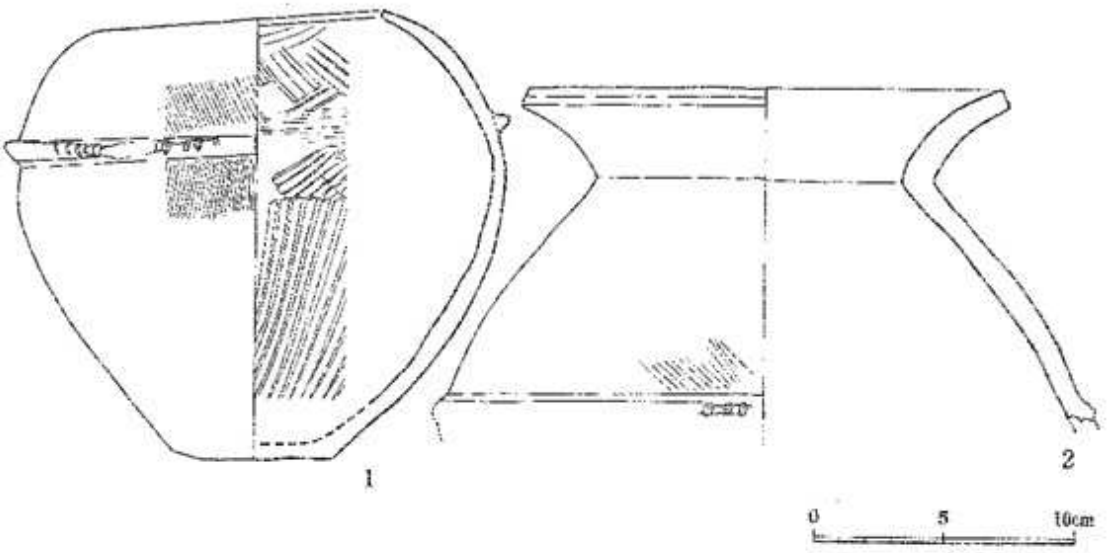
遺物は少量で、ほとんどが細片で図化できたものは少ないが、壺や甕などが出土している。



第29図　3号住居跡実測図

第10表　3号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
30 - 1	土師器 甕形	口径 10.8 胴部径 18.6 器高 17.4 底径 6.1	胴部に大きく張らみ口縁部に向って内湾しながら内傾する。端部は平坦にしている。無頸である。胴部に1条の刷目突帯を貼り付け、底部は平底である。	砂粒及び白色小石を含む	褐色	良	ハケ目	ハケ目	○弥生
30 - 2	甕	口径 18.2 現存高 13.8	頸部すぼの中に屈曲した後、口縁部が外反気味に外方に開く、縁部は平坦である。胴部には1条の刷目突帯を貼り付ける。	砂粒及び白色小石、角セン石を含む	淡褐色	やや不良	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 不明	○弥生



第30図　3号住居内出土土器実測図

6号住居跡

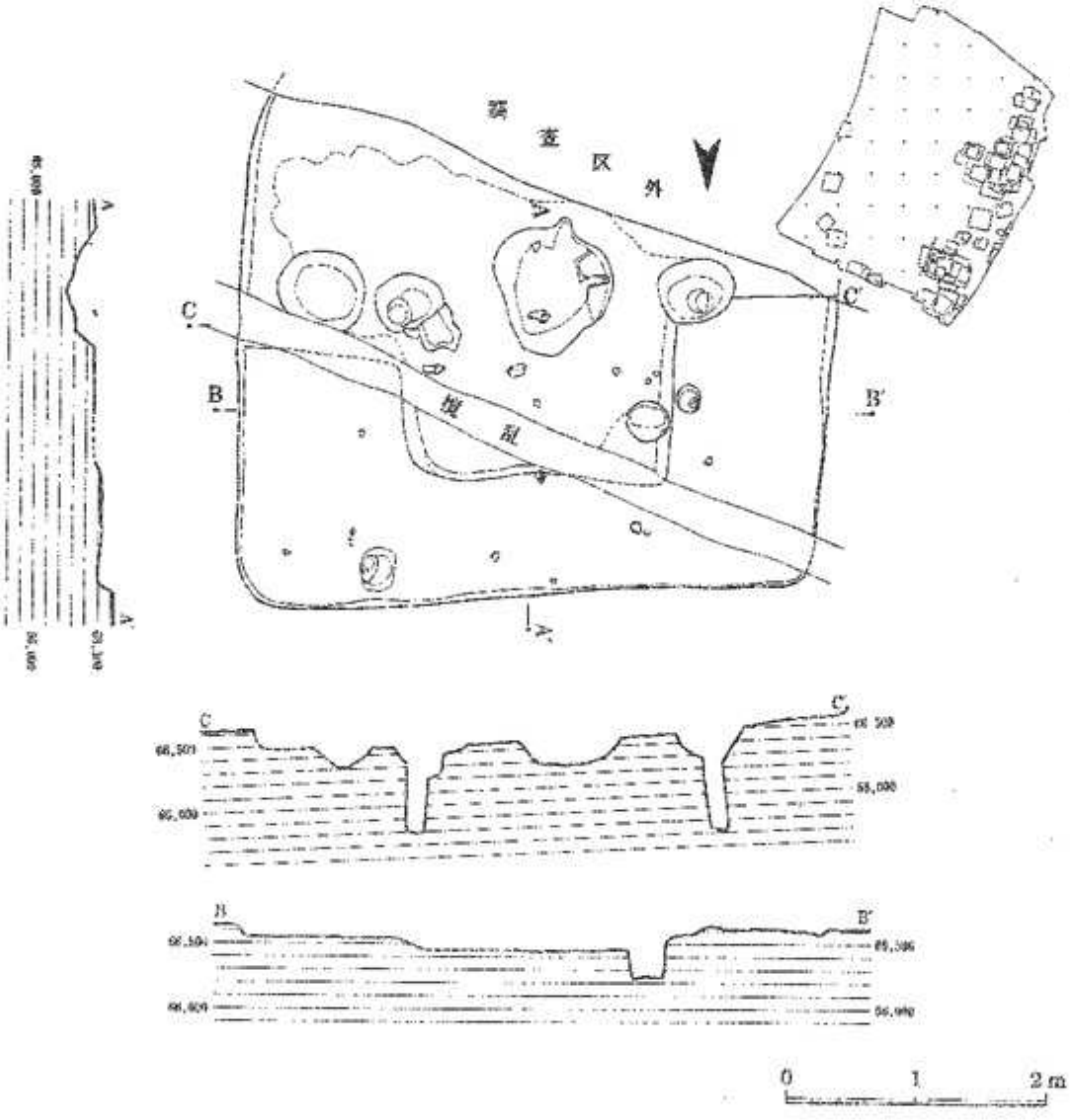
遺構（第35図）　出土遺物（第36図・第13表）

6－F－34・35グリッドに検出された住居跡で、南側をほとんど削平されており、南東コーナー部分のみを検出している。また、全体的に住居跡の残存状態も悪く、硬化面の一部が認められただけで、炉跡や柱穴それに貯蔵穴は検出されなかった。全体規模は不明であるが、5m前後の住居跡と考えられ、方位は、N－3°30′－Wをとる。

遺物は、少量で、ほとんどが細片であることから図化できたものは少ないが、壺や甕・高坏などが出土している。

第11表　4号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
32－1	壺	口径 20.2 現存高 1.5	口縁部片で外方に開き縁端は平坦にしている。頸部には刻目を施す。	砂粒及び白色小石を含む	淡褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	○弥生
32－2	壺	口径 18.5 現存高 19.8	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部がやや外反気味に外方に開く。頸部は丸味をもつ。頸部と胴部に三角形の突帯を1条づつ貼り付ける。	砂粒及び径1～2mm程の小石、角セン石を含む	淡褐色	良	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目	○弥生
32－3	壺	胴部径 25.6 現存高 8.8	胴部に三角形の突帯を貼り付け刻目を施す。	砂粒及び角セン石を含む	淡褐色	良	ハケ目	ナデ	○弥生



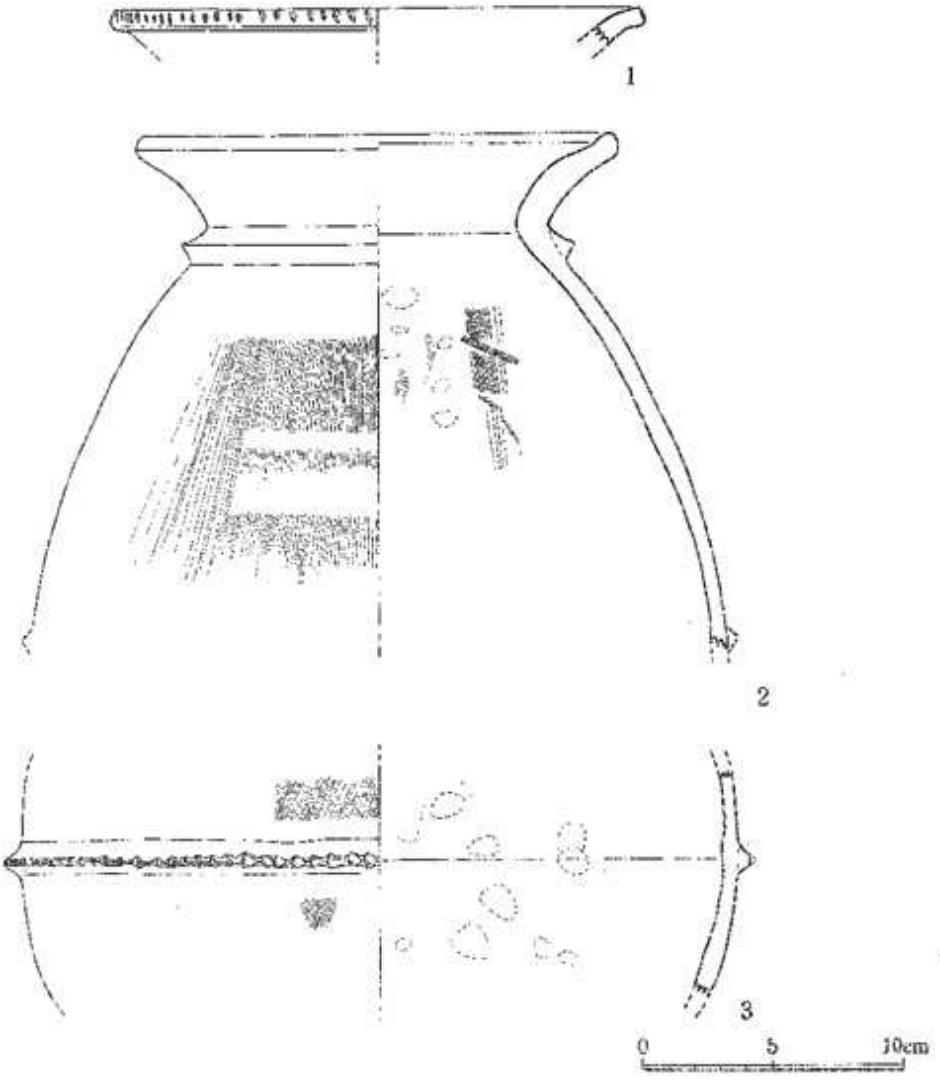
第31図　4号住居跡実測図

12号住居跡

遺構（第37図）

6－G－59・60・61・62グリッドに検出された住居跡で、削平がひどくわずかに北東コーナー部分の壁を確認しただけで、そのほとんどが推定である。規模は不明であるが、5×4m前後の隅丸長方形を呈するものと考えられる。方位は、N－77°00′－Eをとる。住居跡のほぼ中央には、円形で断面が皿状を呈した炉があり、柱穴は2個検出でき、2本柱の住居跡である。床面は、削平され残っていない。住居跡の東側には、ベッド状遺構がわずかに確認された。

遺物は、甕の破片が少量出土している。しかし、細片であることから図化できなかった。



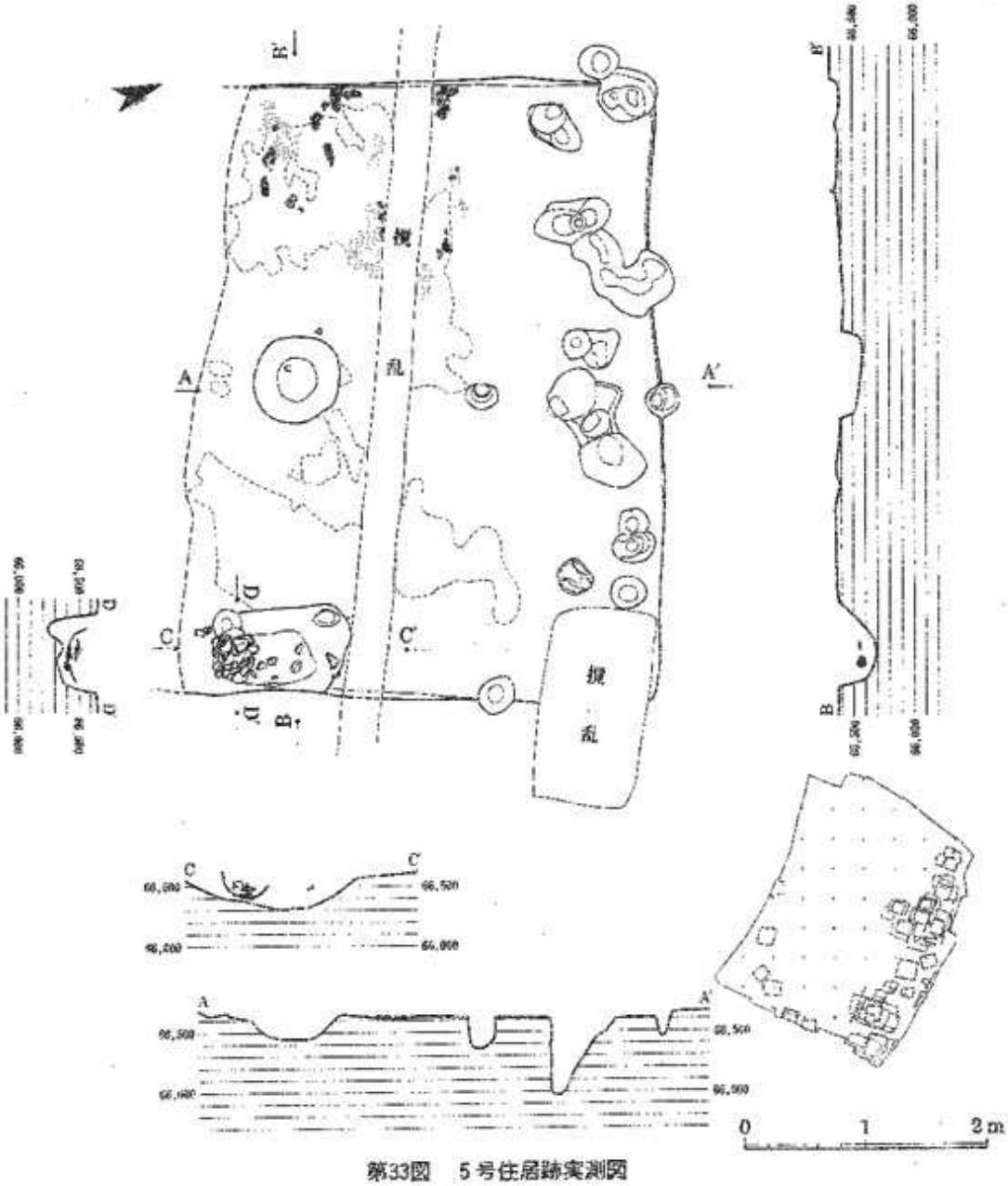
第32図　4号住居跡内出土土器実測図

29号住居跡

遺構（第38図）

6－F－70・6－G－61グリッドに検出された住居跡で、削平がひどく範囲だけの確認である。住居跡の規模は、不明で6ｍ前後の隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－78°00′－Wをとる。炉及び床面は、削平されて残っていなかった。柱穴は、4個検出でき、4本柱住居跡である。

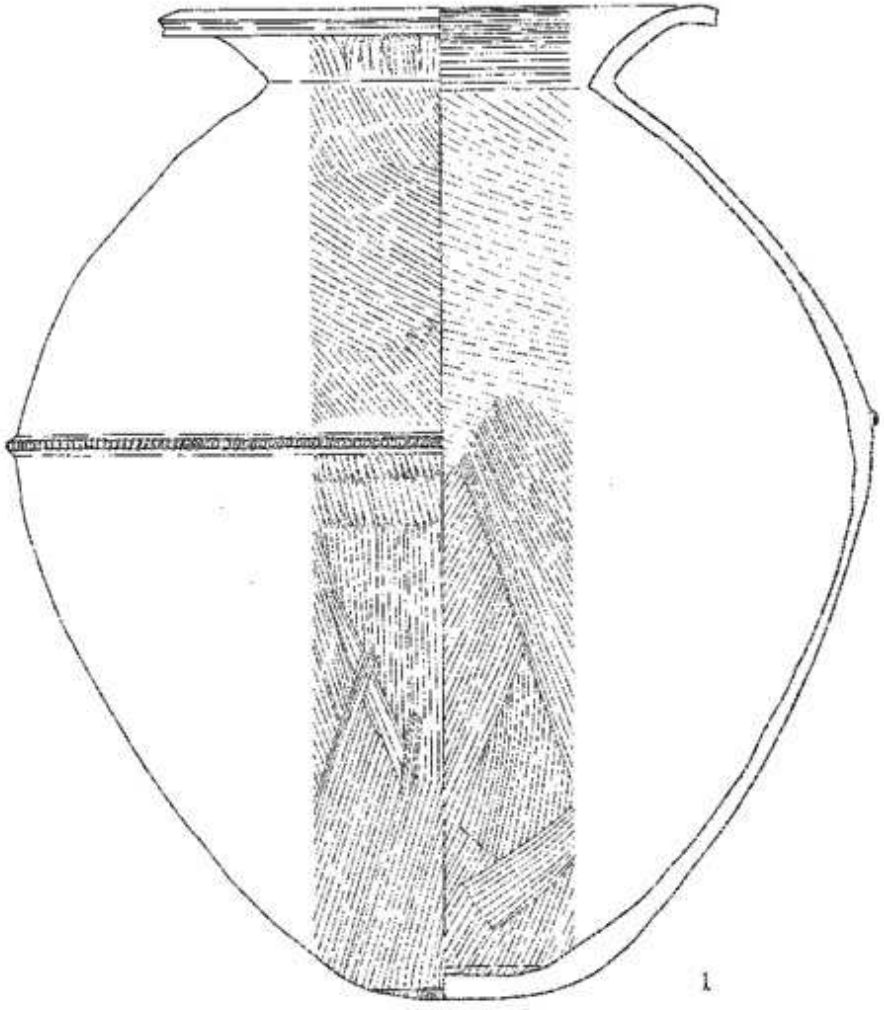
遺物は、甕の破片が少量出土している。しかし、細片であることから図化できなかった。

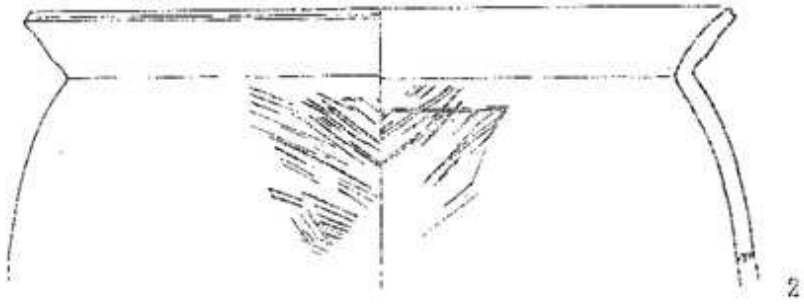


第33図　5号住居跡実測図

第12表　5号住居跡内出土土器観察表

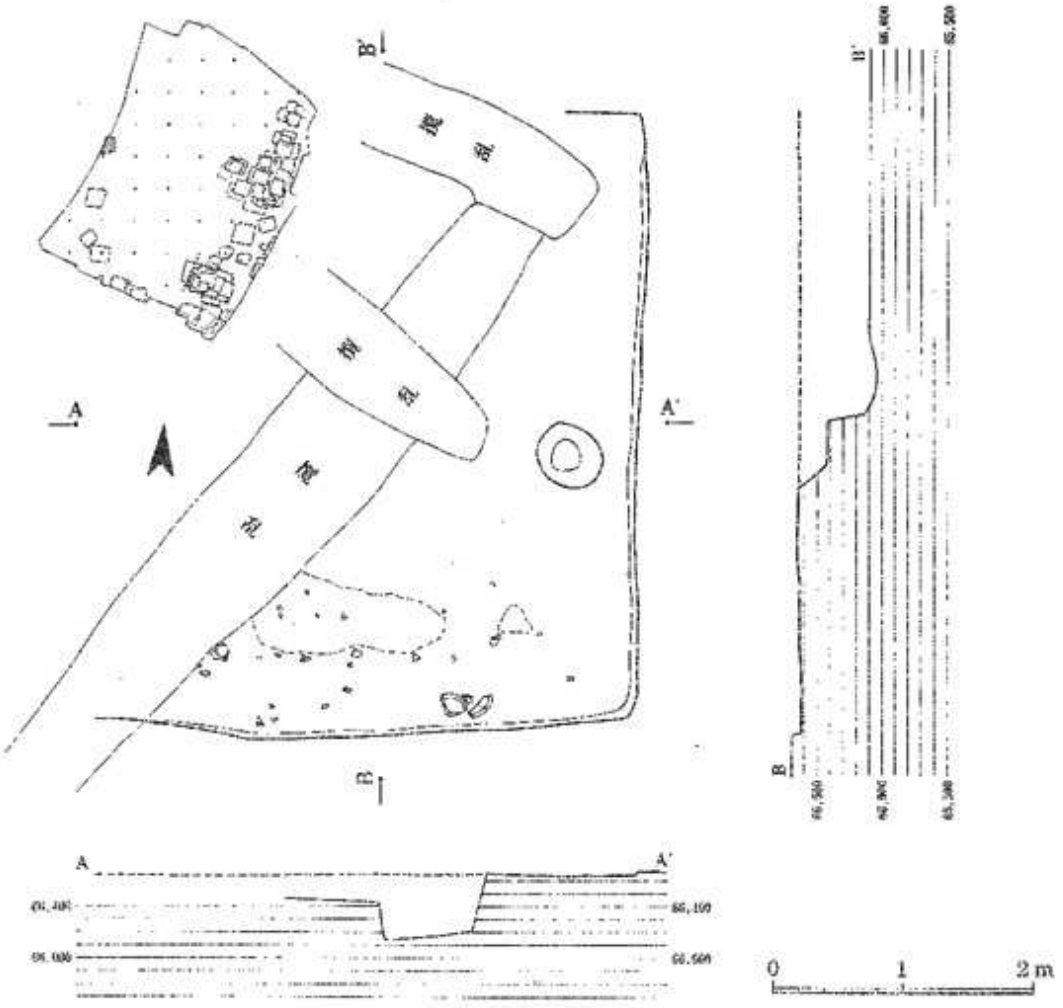
図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
34 1 1	壺	口径 21.7 胴部径 33.2 器高 35.3 底径 6.4	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部に外反しながら外方に開く、胴部は平坦である。胴部は大きく膨らみ中位に最大径があり1条の刻目突帯を貼り付ける、底部は丸底気味	砂粒及び金雲母を多く含む	淡赤褐色	良好	口縁部 ハケ目 胴部 ハケ目	口縁部 ハケ目 胴部 ハケ目	○穿孔 ○沈線
34 1 2	鉢	口径 26.8 現存高 9.5	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外方に開く、胴部は平坦である。	砂粒及び白色小石、角セン石を多く含む	淡褐色	良好	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	○穿孔





0 5 10cm

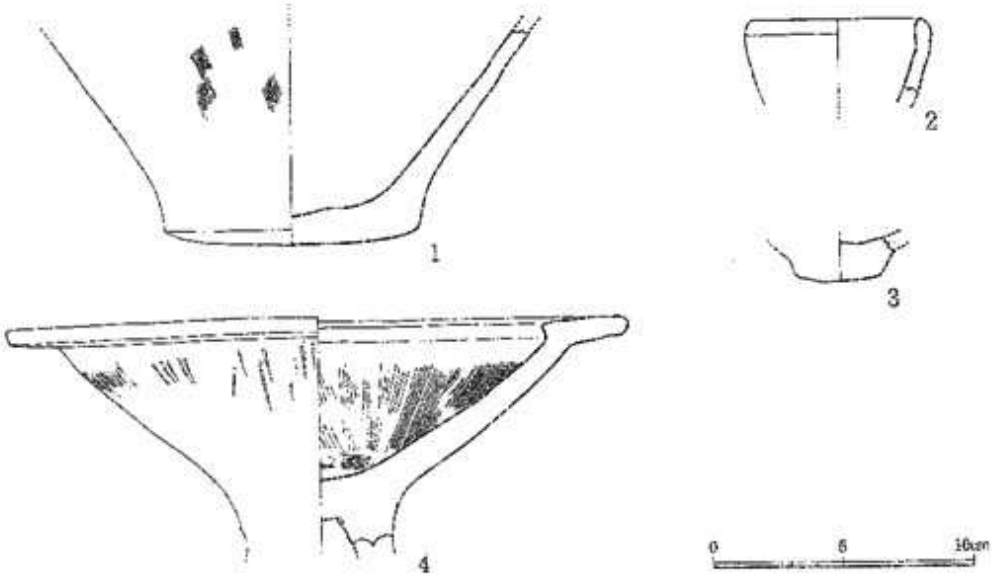
第34図　5号住居跡内出土土器実測図



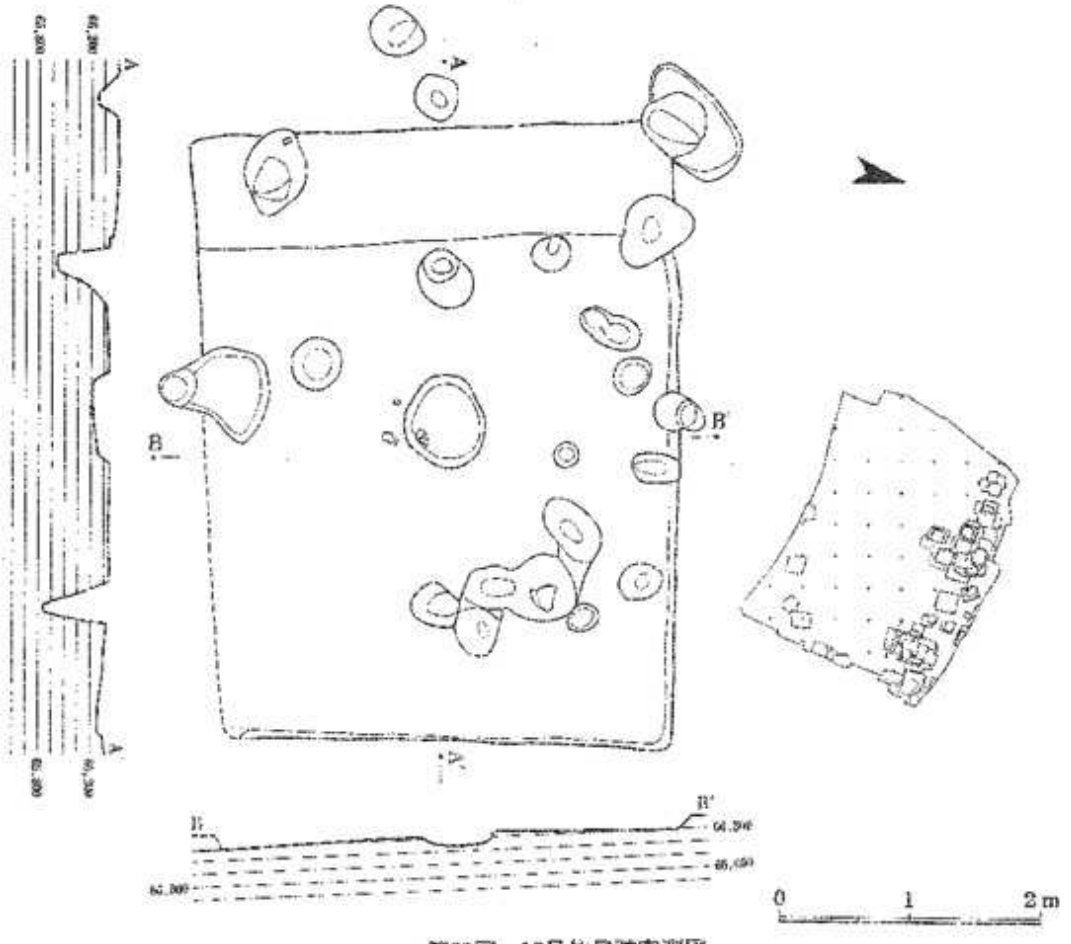
第35図　6号住居跡実測図

第13表　6号住居跡内出土土器観察表

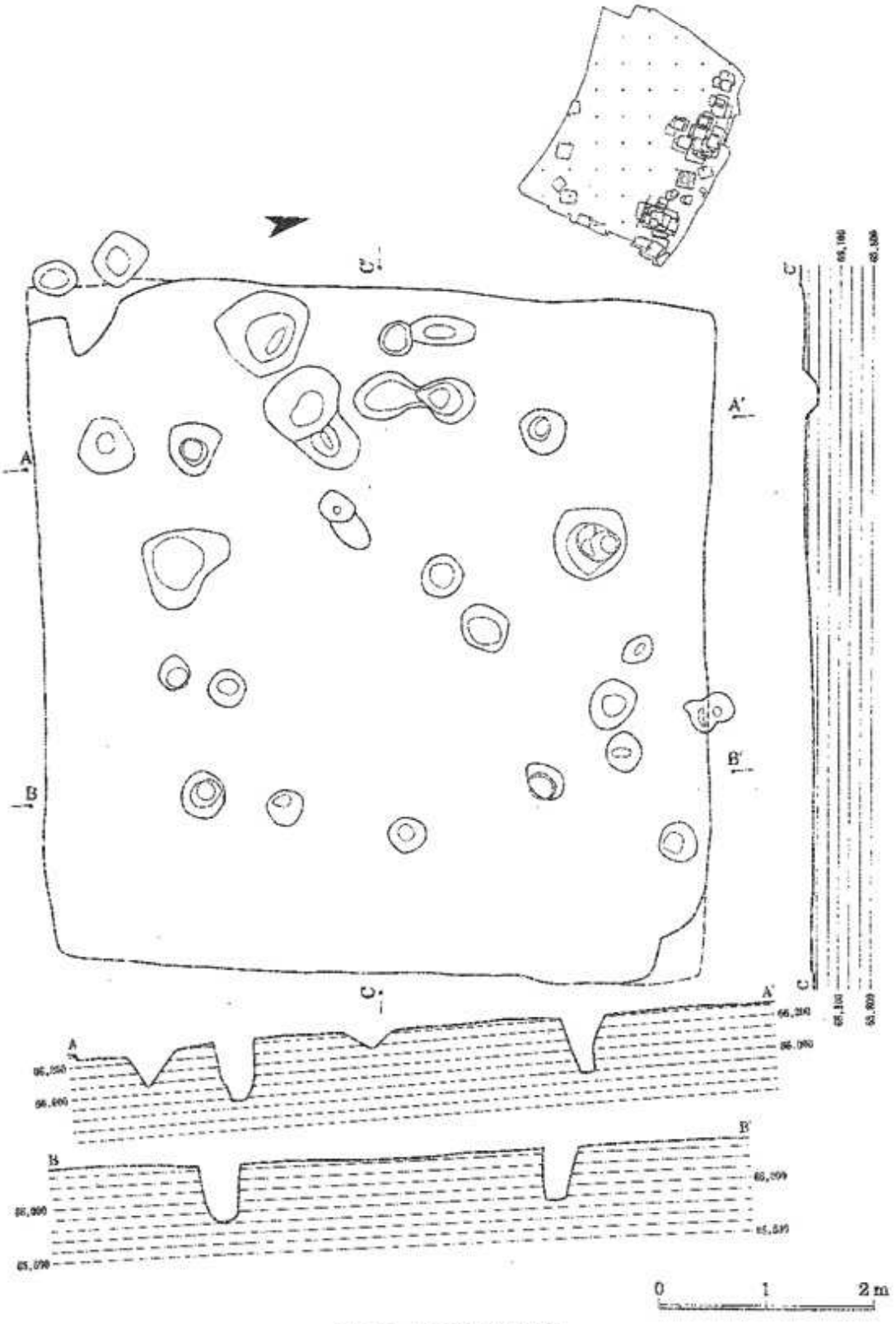
遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
36-1	甕	現存高 8.1 底径 9.8	丸底気味の底部である。	砂粒及び径2～3mm程の小石を多く含み、角セン石、金雲母を少量含む	明褐色	良	ハケ目	磨滅が激しいため不明	○弥生 ○底部
36-2	コップ状土器	口径 6.2 現存高 2.9	体部がやや内湾気味に外方に開きながら立ち上がり、口縁部がやや内側に屈曲する。端部は丸味をもつ。	砂粒及び径1mm程の小石、角セン石を含む	暗褐色	良	手づくね整形	手づくね整形	○弥生 ○手づくね土器 ○3と同一個体の可能性
36-3	コップ形土器	現存高 1.2 底径 3.2	丸底気味の底部である。2と同一個体と考えられる。	砂粒及び径1mm程の小石、角セン石を含む	暗褐色	良	手づくね整形	手づくね整形	○弥生 ○手づくね土器 ○底部 ○2と同一個体の可能性
36-4	高杯	口径 23.8 現存高 8.4	体部は内湾気味に大きく外方に開きながら立ち上がり、口縁部はほぼ水平に開く。	砂粒及び径1～2mm程の小石を多く含み、角セン石、金雲母を少量含む	淡褐色	良	口縁部ナデ ハケ目	口縁部ナデ ハケ目	○弥生 ○脚部



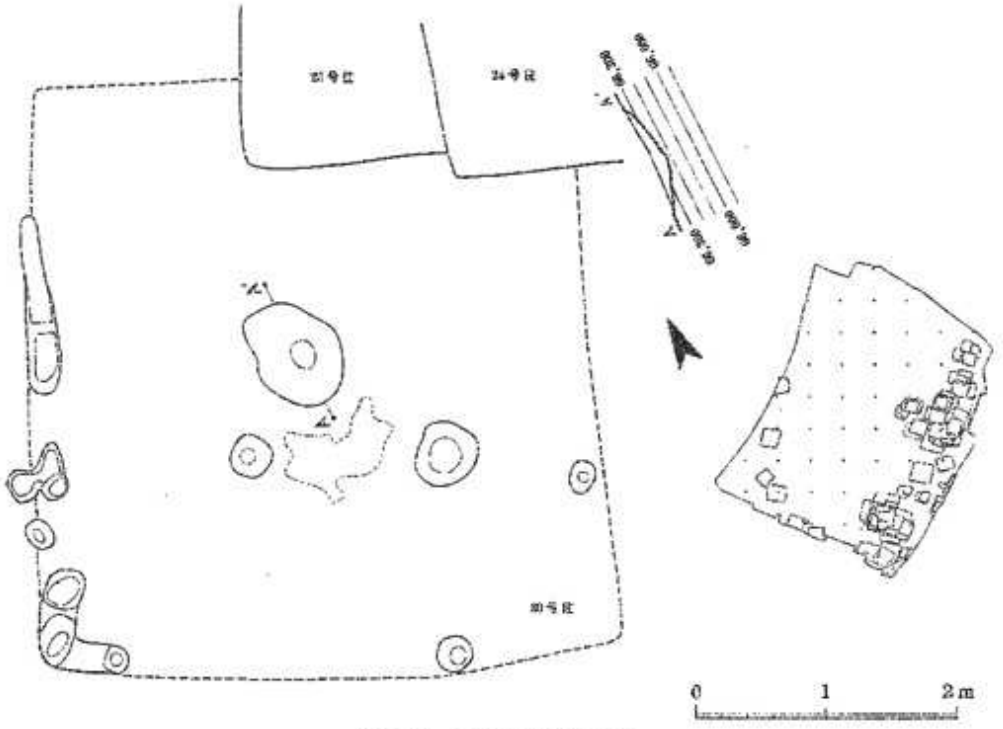
第36図　6号住居跡内出土土器実測図



第37図　12号住居跡実測図



第38図　29号住居跡実測図



第39図　30号住居跡実測図

30号住居跡

遺構（第39図）

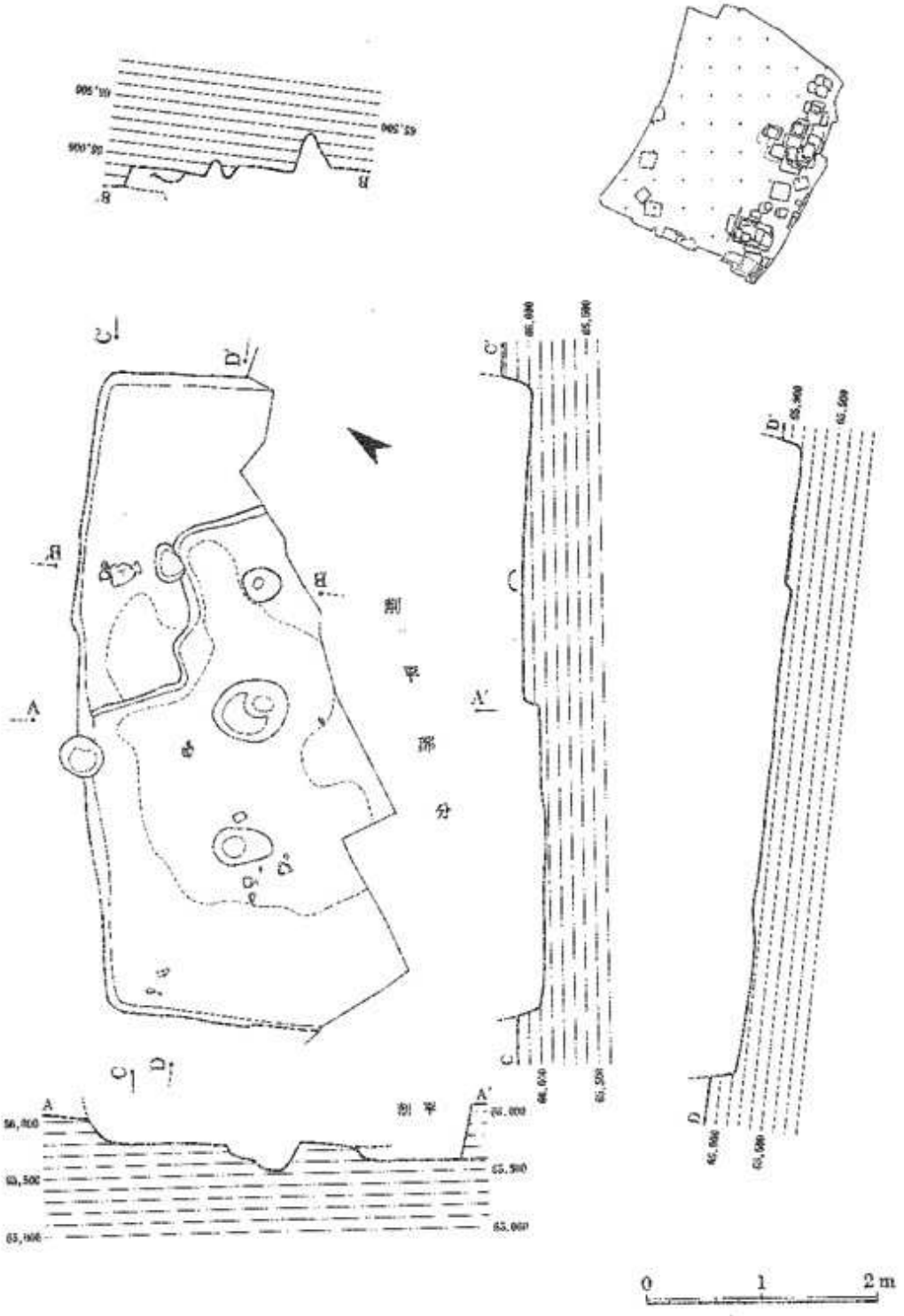
6－F－50・6－G－41グリッドに検出され、奈良・平安時代の24・25号住居跡に切られている。この住居跡は、全体的に削平がひどくわずかに硬化面の一部と、炉跡だけが確認できた。遺物は全く出土しなかった。

59号住居跡

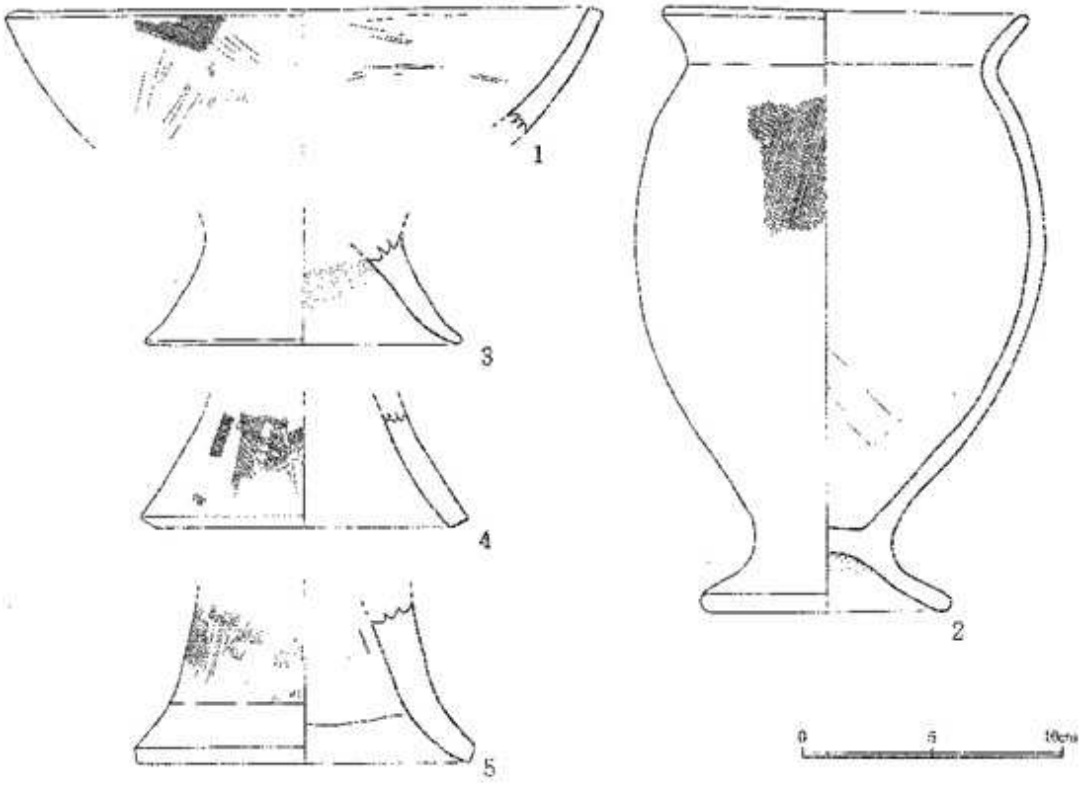
遺構（第40図）　出土遺物（第41図・第14表）

6－F－91グリッドで、奈良・平安時代の14号住居跡の床面下に検出された住居跡である。住居跡は、北側の壁を検出しただけで、そのほとんどが削平され残っていないことから、規模は不明であるが、検出した北側壁が5.56mを測ることから一辺が5.56mの隅丸方形か長方形を呈するものと考えられる。方位は、N－53°00′－Eをとる。住居跡の東側壁には、コの字形かL字形のベッド状遺構が認められ、床には硬化面が壁際まで広がっている。柱穴は、検出されなかった。

遺物は、少量で、そのほとんどが細片であることから図化できたものは少ないが、鉢や甕などが出土している。



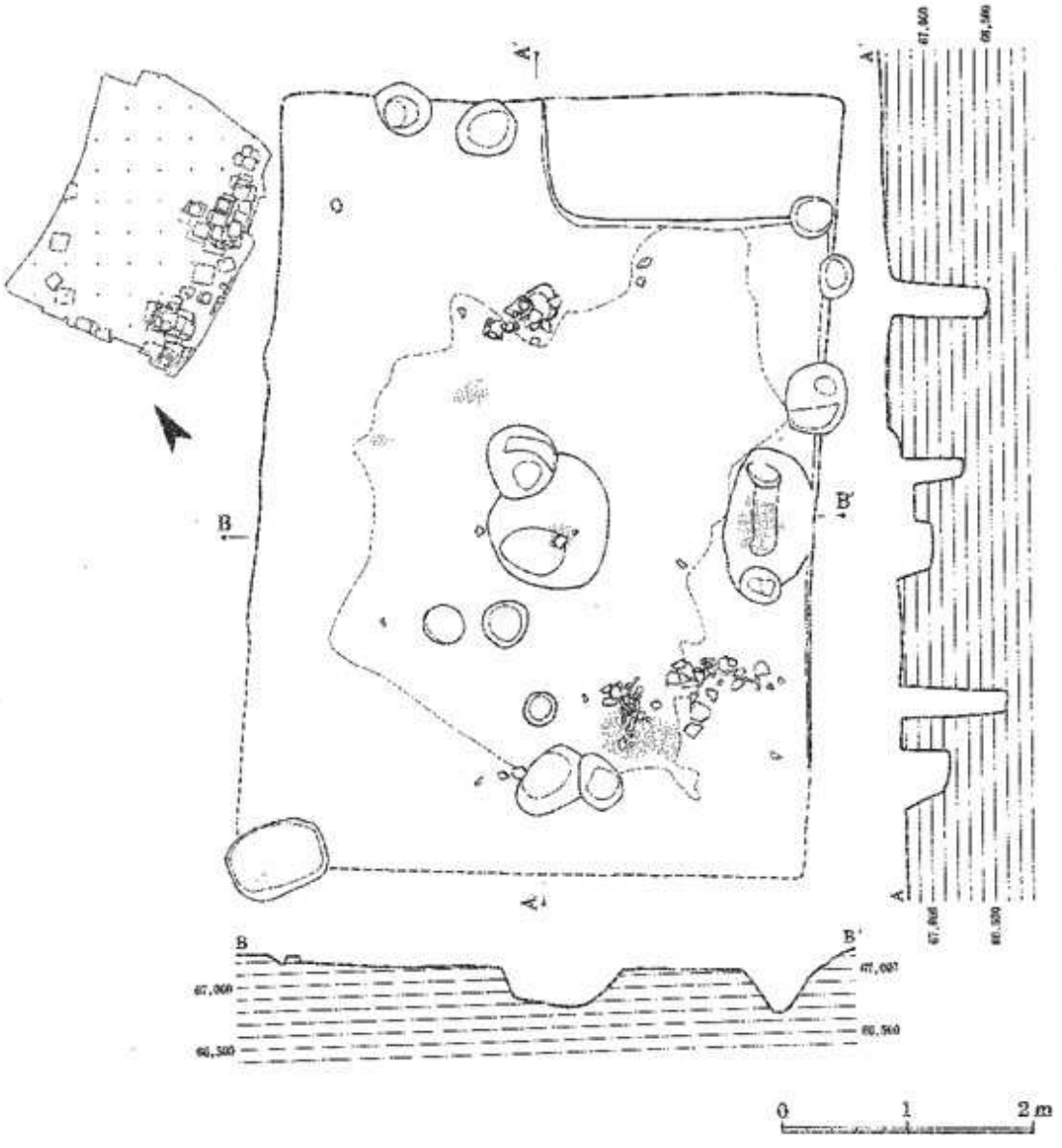
第40図　59号住居跡実測図



第41図　59号住居跡内出土土器実測図

第14表　59号住居跡内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
41-1-1	壺	口径 23.0 現存高 4.9	体部は内湾気味に外方に開きながら立ち上がり、端部に至る。端部はナデて平坦にしている。	砂粒及び赤色小石、径2mm前の小石を多く含み、黒ッンゴ、金雲母を少量含む。	淡褐色	良	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○底部欠失
41-1-2	壺	口径 14.1 器高 23.9 胴部径 15.8 脚台径 9.7 脚台高 2.3	胴部でくの字に屈曲した後、口縁部が外方に開きながら直線的に立ち上がる。端部は丸くなる。胴部は中位より上に最大径がくる。脚は長く裾部に向って直線的に大きく外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び径1～3mm程の小石を多く含み、長石、角セン石を含む	褐灰色	良	口縁部ナデ 胴部ハケ目の後ナデ 脚台部ナデ	口縁部ナデ 胴部ナデ 脚台部ナデ	○弥生
41-1-3	壺	脚台径 12.2 現存高 4.5	裾部に向ってやや外反気味に外方に開く、端部は丸くなる。底部との境には粘土が多量に付着する。	砂粒及び径3mm程の小石、長石、角セン石を多く含む	褐灰色	良	ナデ	ナデ	○弥生 ○脚台
41-1-4	壺	脚台径 12.6 現存高 4.5	裾部に向って直線的に外方に開く、端部はナデて平坦にしている。	砂粒及び径1～2mm程の小石、長石、角セン石を多く含む	淡褐色	良	ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生 ○脚台
41-1-5	壺	脚台径 13.1 現存高 6.5	裾部に向ってやや外反し外方に開く、端部はナデて平坦にしている。	砂粒及び褐色土粒、白色小石、径2mm程の小石を多量に含む	淡褐色	良	ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生 ○脚台

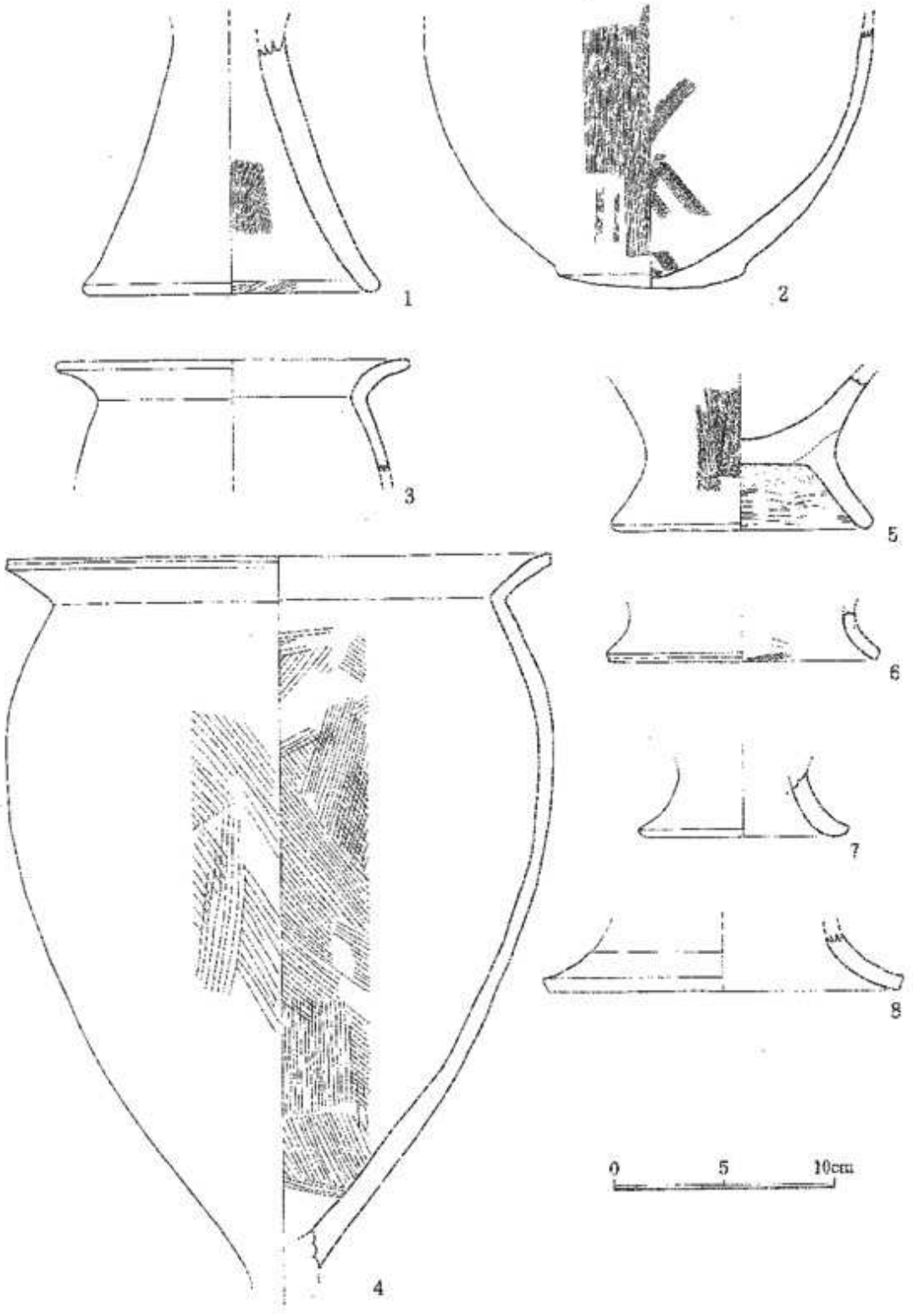


第42図　79号住居跡実測図

79号住居跡

遺構（第42図）　出土遺物（第43図・第103図14.15・第15表・第45表14.15）

6—F—89・90・91・92グリッドで、奈良・平安時代の14号・15号住居跡の床面下に検出された住居跡である。住居跡は、上部を14号・15号住居跡により削られていることからあまり残存状態が良好でない。また、南側部分が一部削平されている為規模は不明であるが、長辺が6m前後で短辺が4.42mを測る隅丸長方形を呈するものと考えられる。方位は、N—77°00′—Eをとる。住居跡のほぼ中央には、円形で断面が皿状を呈した炉があり、柱穴は、2個検出され2本柱の住居跡である。また、住居跡の東側壁には、ベッド状遺構が認められ、床には硬化面



第43図　79号住居跡内出土土器実測図

第15表　79号住居跡内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
43-1	器台	現存高 12.0 底径 13.6	胴部上方にくびれ部があり、くびれ部より裾端部に向って若干外反気味に降りていき外方に開く、端部は丸味をもつ	砂粒及び白色小石を多く含み、角セン石を少量含む	淡褐色	良	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○口縁部欠失
43-2	壺	現存高 11.8 底径 8.6	胴部は大きく膨らみ球形に近くなるものと考えられる。底部は丸底気味	砂粒及び径1～2㎜程の小石を多く含む	暗褐色	良	ハケ目 底部ナデ	ハケ目	○弥生
43-3	甕	口径 16.0 現存高 5.1	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が外反しながら外方に開く、端部はナデて平坦である。	砂粒及び角セン石、金雲母を含む	暗褐色	良	口縁部ヨコナデ 胴部不明	口縁部ヨコナデ 胴部不明	○弥生
43-4	甕	口径 24.8 胴最径 24.8 現存高 32.6	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が外反気味に外方に開く、端部はナデて平坦にしている。胴部最大径は中位より上にある。	砂粒を多く含み、径2㎜程の小石を少量含む	淡褐色	良	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目	○弥生 ○脚台部欠失
43-5	壺	現存高 6.7 脚台径 12.0 脚台高 3.0	脚は裾端部に向って直線的に外方に開く、端部は丸味をもつ	砂粒及び白色小石を含む	淡褐色	良	ハケ目	ヨコナデ	○弥生 ○裾脚台
43-6	壺	現存高 2.3 脚台径 12.4	端部に向って外反しながら外方に開く、端部はナデて平坦にしている。	砂粒及び金雲母を含む	褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○弥生 ○裾脚台
43-7	壺	現存高 3.2 脚台径 9.6	端部に向ってやや外反気味に外方に開く、端部はやや尖がり気味	砂粒を多く含み、角セン石、金雲母を少量含む	茶褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○弥生 ○裾脚台
43-8	壺	現存高 2.6 脚台径 16.4	端部に向って外反しながら外方に開く、端部はナデて平坦にしている。	砂粒及び金雲母を少量含む	茶褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○弥生 ○裾脚台

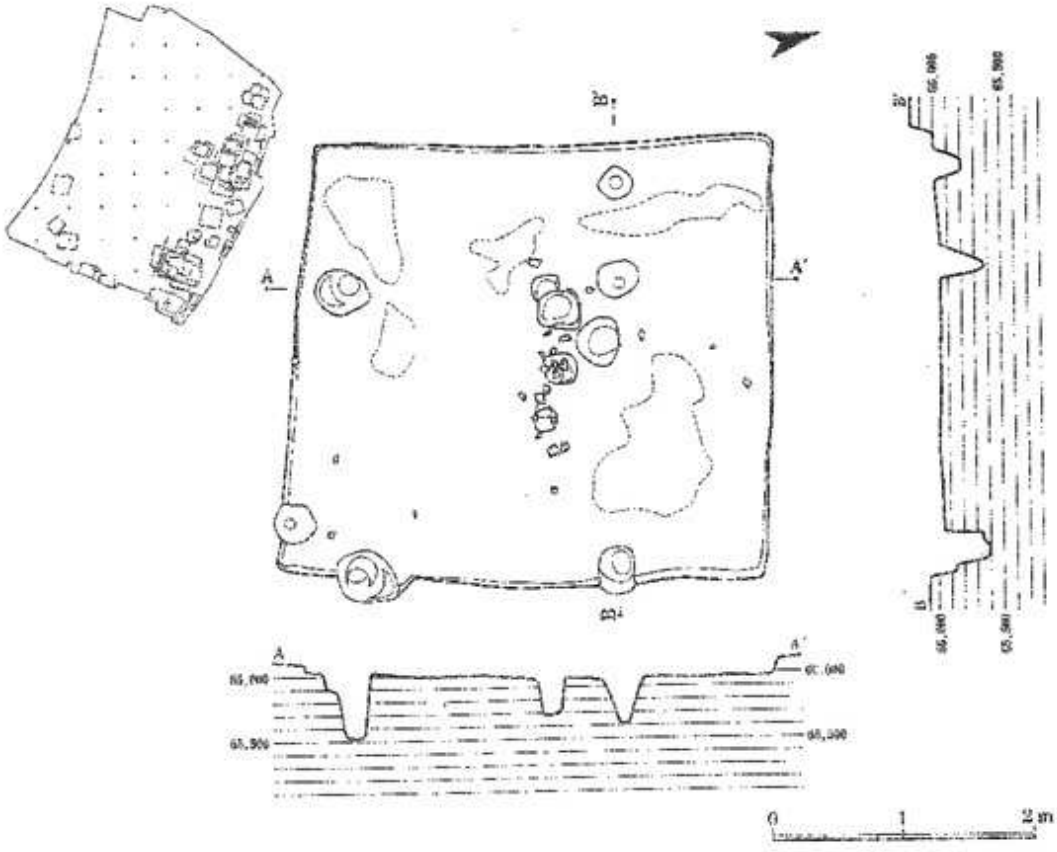
が境界近くまで広がっている。この住居跡は、炭化した木材や焼土が認められることから、火災住居と考えられる。

遺物は、それほど多くないが壺や甕・器台などと共に鉄鏃1点と不明鉄器1点が出土している。

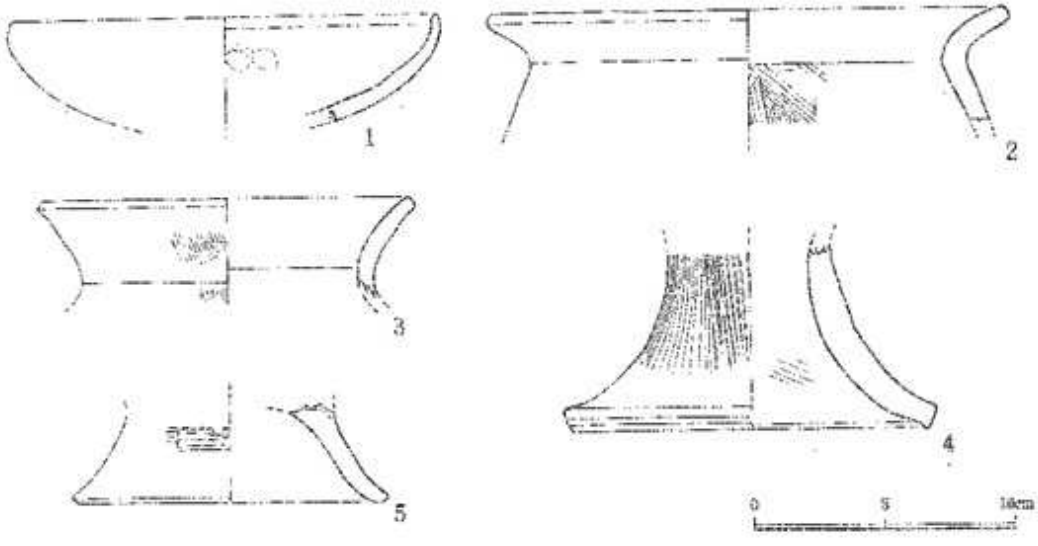
81号住居跡

遺構（第44図）　出土遺物（第45図・第103図16・第16表・第45表16）

6—G・39グリッドで、奈良・平安時代の31号・35号住居跡の床面下に検出された住居跡である。住居跡は、上部を31号・35号住居跡により削られていることからあまり残存状態が良好でないが、長辺が3.55m、短辺3.42mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N—18°30′—Eをとる。床には、一部に硬化面が確認されたが、削平によりあまり残っていない。また、炉跡や柱穴の特定はできなかった。住居跡には、ベッド状遺構があった可能性も考えられることか



第44図　81号住居跡実測図



第45図　81号住居跡内出土土器実測図

第16表　81号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
45－1	壺	口径 16.3 現存高 4.1	体部はやや内湾気味に立ち上がり大きく外反する。口縁部は若干内傾し端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石、金雲母を多く含む	暗褐色	良	ナデ	ナデ	○弥生 ○底部欠失
45－2	甕	口径 20.0 現存高 4.4	頸部でくの字屈曲した後、口縁部は外反気味に外方に開く。端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石を多く含む	黒褐色	良	口縁部ナデ 頸部ハケ目の後ナデ	口縁部ナデ 頸部ハケ目	○弥生
45－3	甕	口径 14.0 現存高 3.9	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部はやや外反気味に外方に開く、端部は平坦である。	砂粒及び白色小石、角セン石、金雲母を含む	淡褐色	良	口縁部ハケ目の後ナデ 頸部ハケ目	ナデ	○弥生
45－4	甕	脚台径 13.8 現存高 7.1	端部に向って外反しながら大きく外方に開き、端部はナデで平坦である。	砂粒及び白色小石を多く含む	淡褐色	良	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○甕脚台
45－5	甕	脚台径 12.0 現存高 3.5	端部に向ってやや外反気味に外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を多く含む	暗褐色	良	ナデ	ナデ	○弥生 ○甕脚台

ら、平面プランが隅丸長方形を呈していた可能性もある。

遺物の出土量は、それほど多くないが壺や甕などが出土している。

奈良・平安時代

(1) 竪穴住居跡と出土遺物

8号住居跡

遺構（第46図）

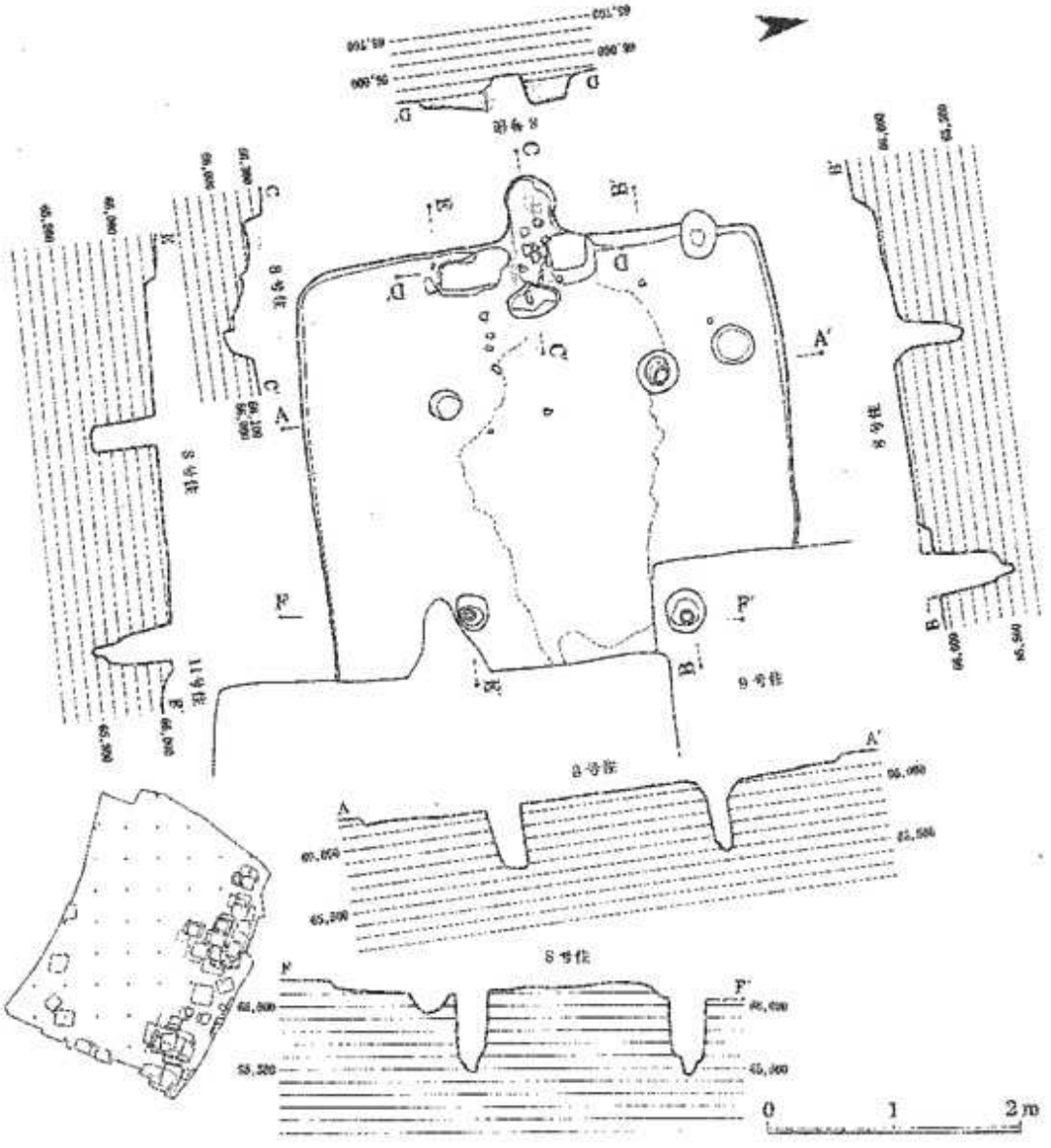
6－G－22グリッドに検出された住居跡で、切り合っている9号・10号・11号住居跡の4軒中では一番古い。住居跡は、東側部分を9号と11号住居跡により切られている為規模は不明であるが、完全に検出できた西側壁が3.84mを測ることから、一辺が4m程度の隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－86°30′－Wをとる。西側壁のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドがあり、煙道部は壁より外側にでている。床には、固く踏み締められた硬化面が中央付近に広がっている。また、柱穴は、4個検出され、4本柱の住居跡である。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の坏や甕が出土している。

9号住居跡

遺構（第47図）

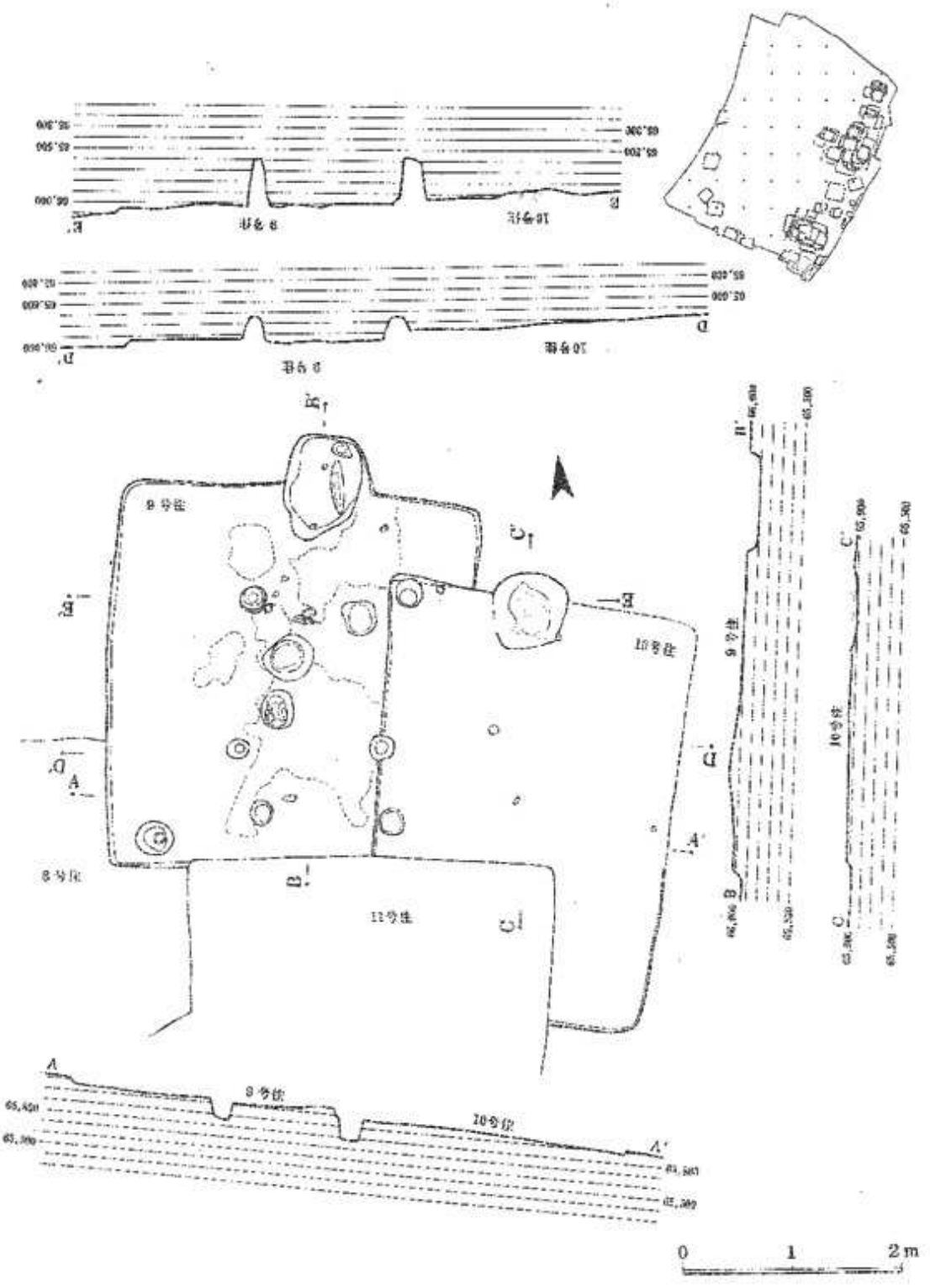
6－G－22・23グリッドに検出された住居跡で、切り合っている8号住居跡より新しく、10



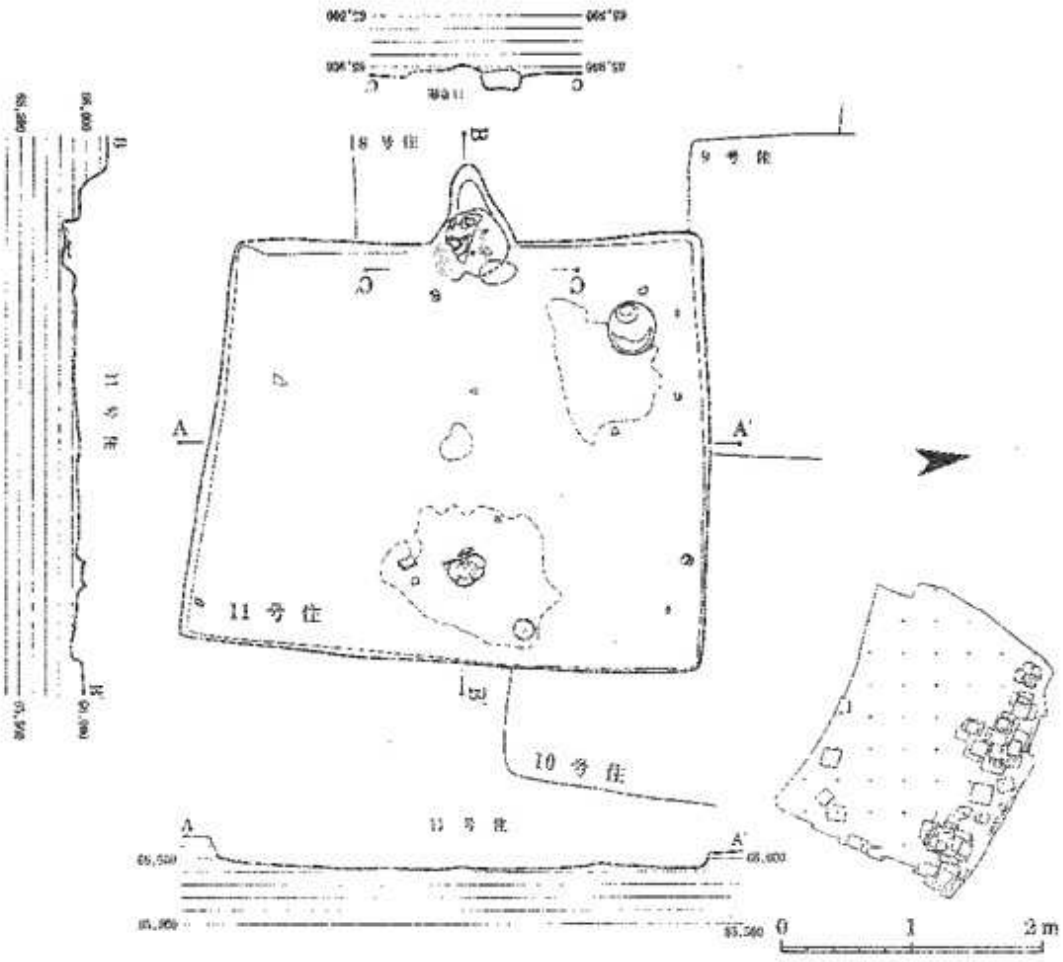
第46図　8号住居跡実測図

号・11号住居跡より古い。住居跡は、南側部分を10号と11号住居跡により切られているが、長辺3.94m、短辺3.30mを測る隅丸方形を呈し、方位は、N−6°00′−Eをとる。北側壁のほぼ中央には、カマドがあり、煙道部は壁より外側にでている。また、袖部分は削平され残っていない。床には、硬化面が中央付近に広がっている。また、柱穴は、4個検出され、4本柱の住居跡である。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の坏や甕が出土



第47図　9号・10号住居跡実測図

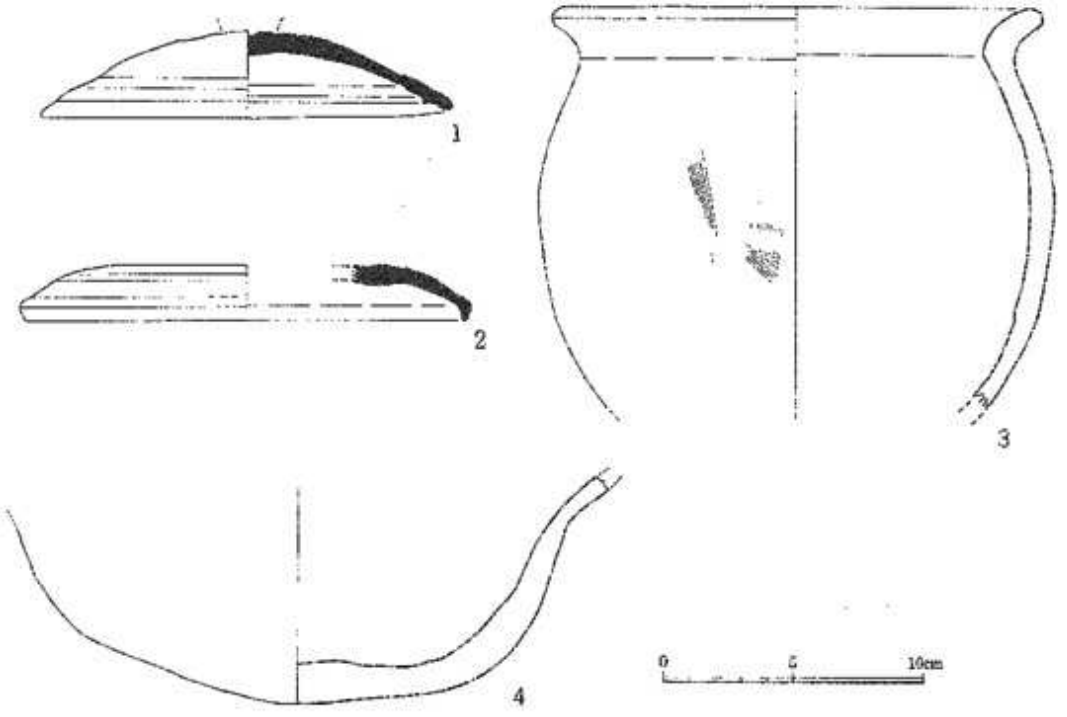


第48図　11号住居跡実測図

第17表　11号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
49 1	壺	口径 13.8 頸部径 3.4	口縁部に刻目は見られずその直ぐ端部に至る。内側には下方に短かく突出する受部をもつ。天井はドーム状にたりソマミが欠落した痕跡がある。	緻密 砂粒を含む	灰白色	堅緻 良	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器 ○ツマミ部欠失
49 2	蓋	口径 16.8 現存高 3.1	口縁部が肥厚し、明瞭な段を有する。端部はやや丸味をもつ	緻密 砂粒を含む	灰白色	堅緻 良好	天井部へラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器
49 3	壺	口径 13.2 頸部径 19.8 現存高 15.5	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が外反傾斜に外方に緩かく開く。端部は丸くなる。胴部は球胴である。	砂粒及び径1～2mmの小石、角セン石を含む	暗褐色	やや不良	口縁部 ヨコナデ 胴部 器面が荒れている為不明瞭ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 器面が荒れている為不明瞭	○上師器
49 4	鉢	現存高 8.4	底部は丸底で体部は内湾気味に外方に開きながら立ち上がる。	砂粒及び白色小石、角セン石、長石、金雲母を多く含む	褐色	良	器面が荒れている為不明	器面が荒れている為不明	○上師器 ○口縁部欠失

している。



第49図　11号住居跡内出土土器実測図

10号住居跡

遺構（第47図）

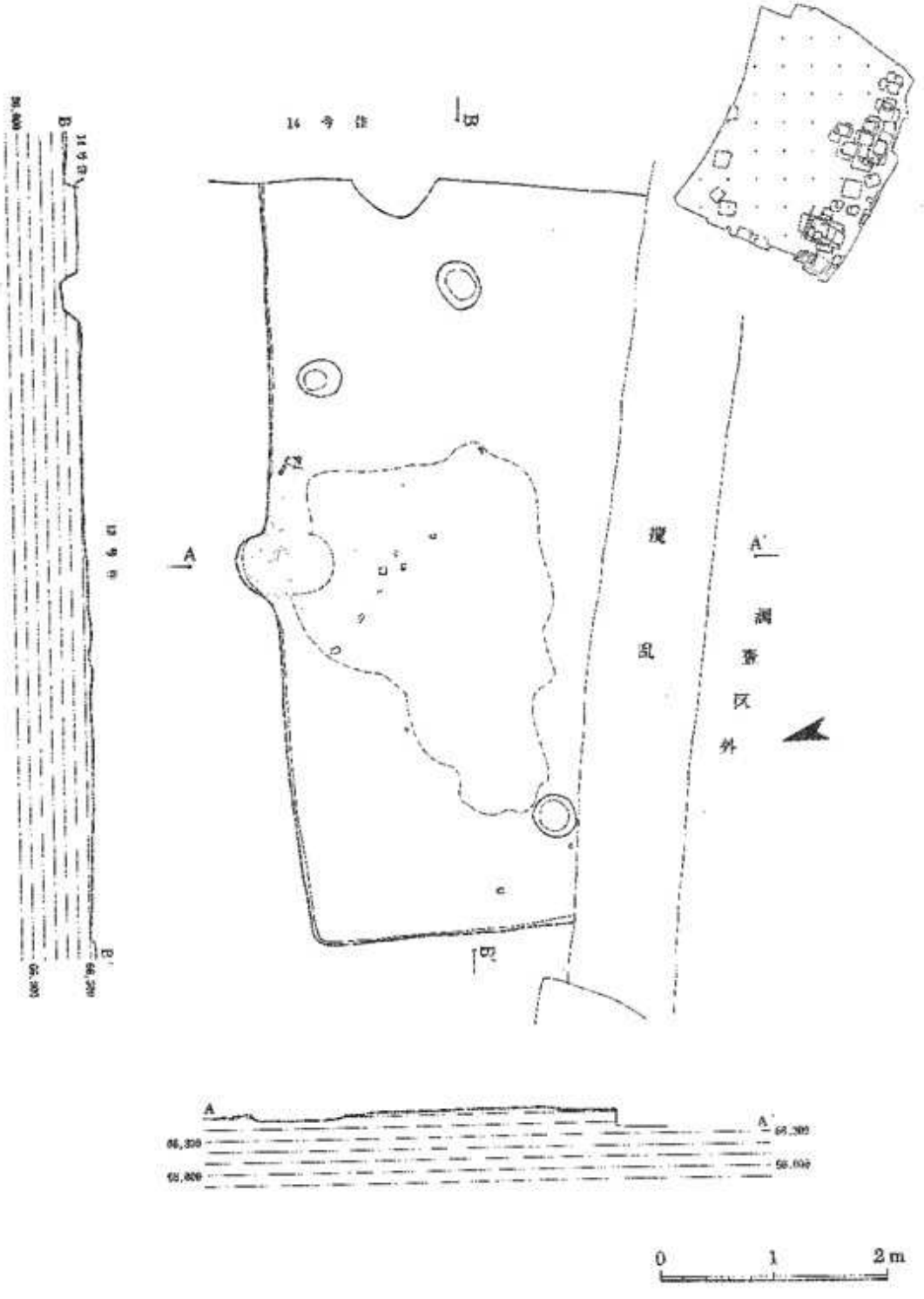
6－G－22・23グリッドに検出された住居跡で、切り合っている8号・9号住居跡より新しく、11号住居跡より古い。住居跡は、南側部分を11号住居跡により切られており、東側壁が削平により不明瞭であるが長辺約3.80m、短辺約2.50mを測り隅丸長方形を呈するものと考えられる。方位は、N－12°30′－Eをとる。北側壁のほぼ中央には、カマドがあり、煙道部は壁より外側にでている。また、袖部分は削平されほとんど残っていないが黄白色粘土がわずかに残っていることから、袖は粘土で作られていたものと考えられる。硬化面は削平され確認されなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の甕が出土している。

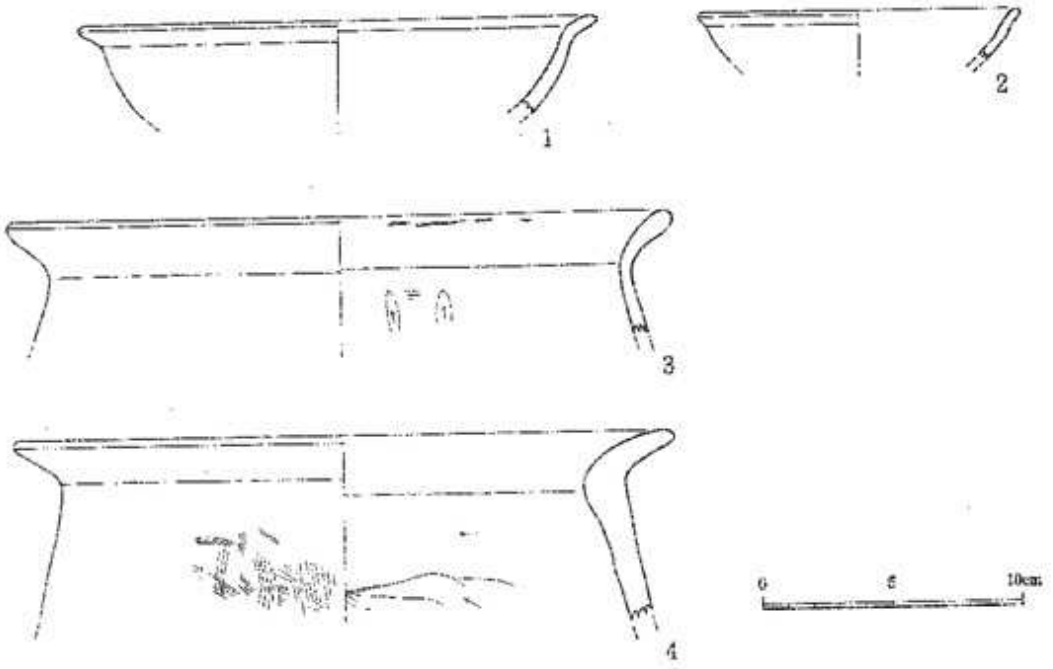
11号住居跡

遺構（第48図）　出土遺物（第49図・第17表）

6－G－22・23・39グリッドに検出された住居跡で、切り合っている8号・9号・10号住居跡の4軒の中では一番新しい。住居跡は、長辺3.82m、短辺3.20mを測る隅丸方形を呈し、方位は、N－83°30′－Wをとる。西側壁のほぼ中央には、カマドがあり、煙道部は壁より外側に



第50図　13号住居跡実測図

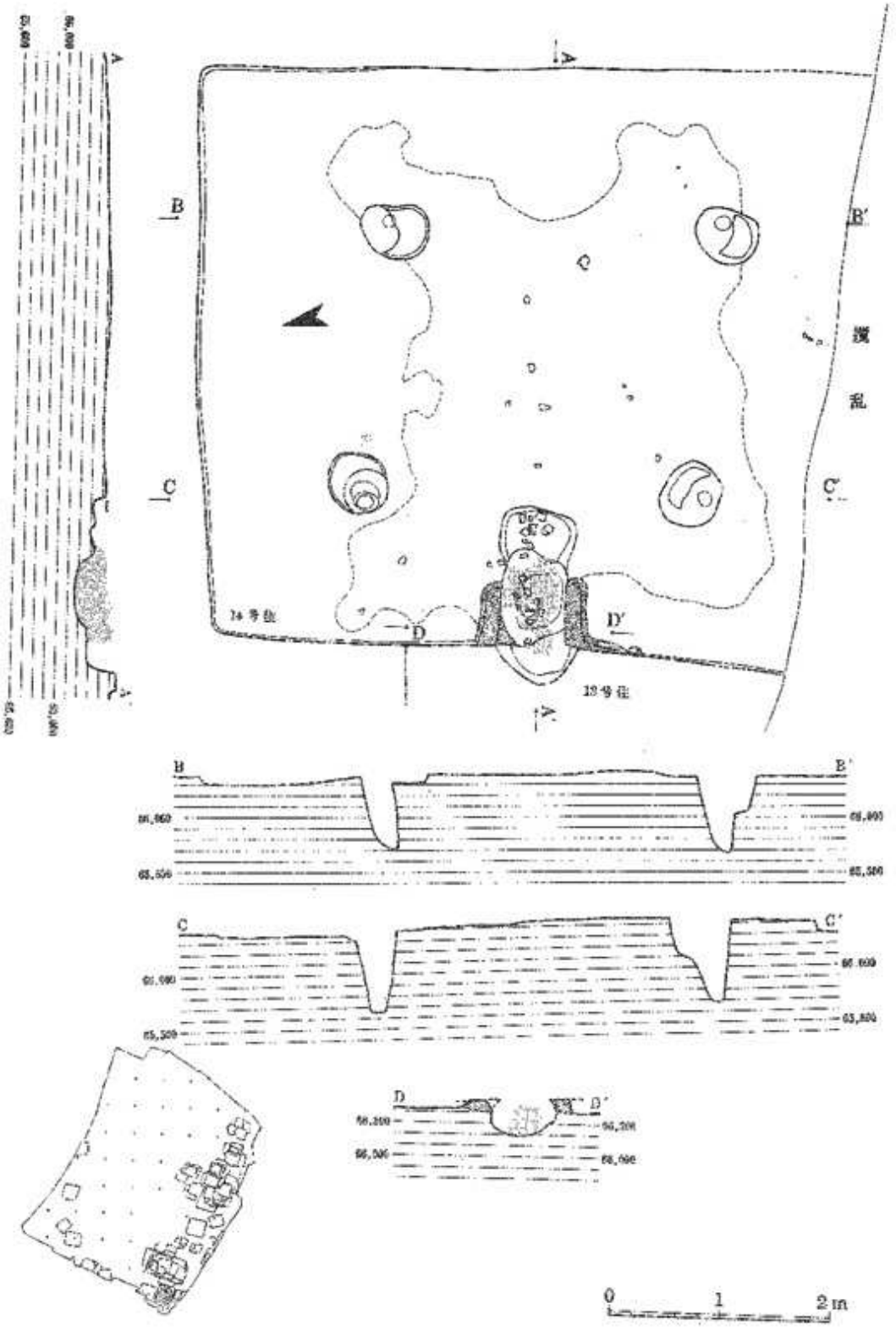


第51図　13号住居跡内出土土器実測図

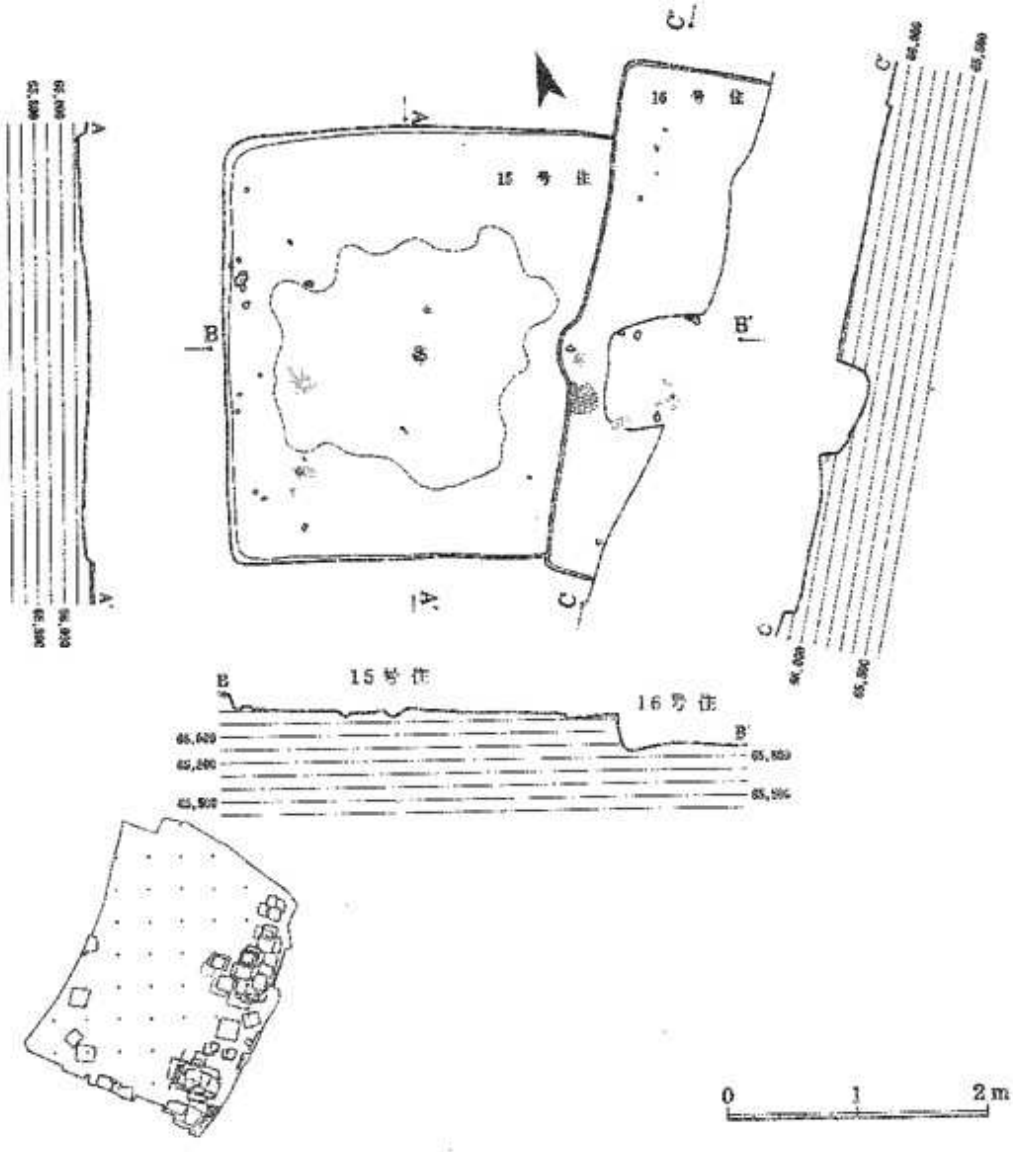
第18表　13号住居跡内出土土器観察表

遺構番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
S1-1	鉢	口径 20.0 現存高 3.7	体部は、外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、口縁部が短かく外方にさらに屈曲する。端面はやや尖がり気味である。	砂粒及び径2mm程の小石、角セン石、金雲母を含む	明褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○底部欠失
S1-2	鉢	口径 12.4 現存高 2.0	体部は外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がり、口縁部が若干外方に屈曲する。端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を含む	橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○底部欠失
S1-3	壺	口径 25.6 現存高 4.7	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部がやや外反気味に外方に開く。端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、径2mm程の小石、角セン石を多く含む	淡褐色	良	ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 頸部 ヘラ削り	○土師器
S1-4	壺	口径 25.4 現存高 6.9	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部がやや外反気味に外方に開く。端部は丸味をもつ	砂粒及び白色小石、径2～3mm程の小石、角閃石を多く含む	明褐色	良	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 頸部 ヘラ削り	○土師器

でている。また柚部分は削平されあまり残っていないが、黄白色粘土を使い作っている。床には、一部残っている硬化面が確認された。　遺物は、少量であるが、土師器の甕や鉢、須恵器の蓋が出土している。



第52図　14号住居跡実測図

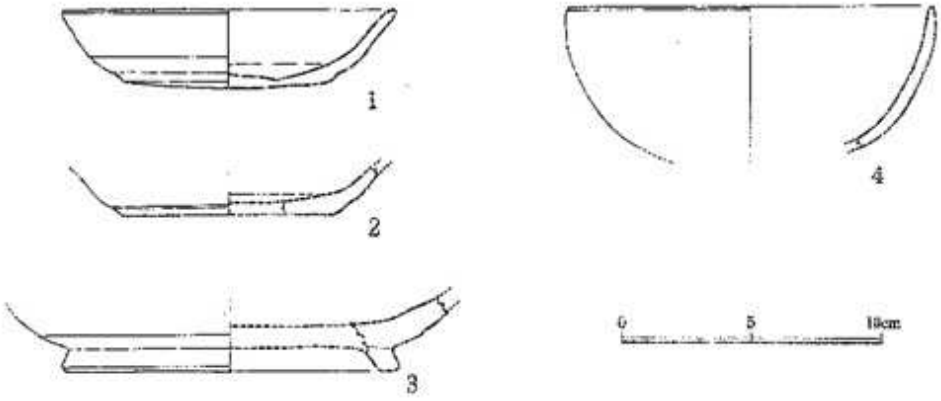


第53図　15・16号住居跡実測図

13号住居跡

遺構（第50図）　出土遺物（第51図・第18表）

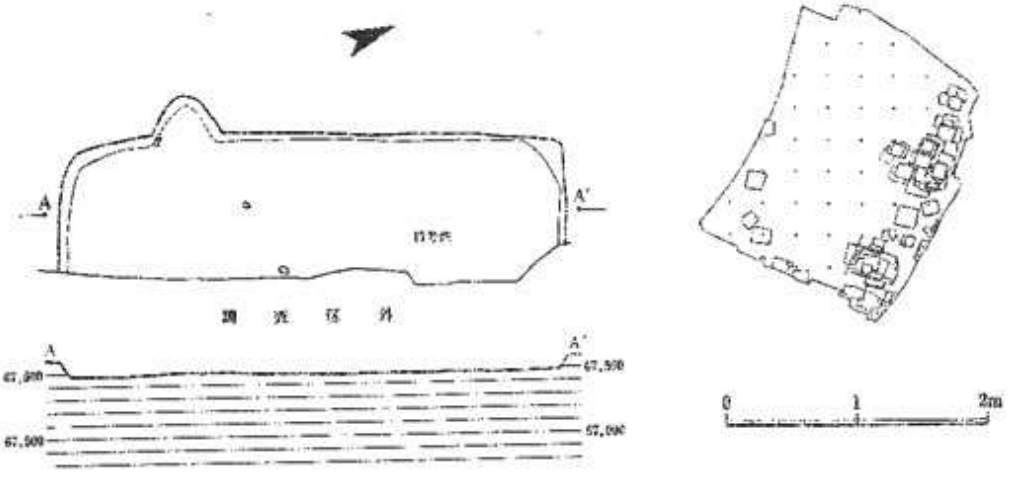
6—F—89・90・92グリッドに検出された住居跡で、東側部分を14号住居跡に切られており古い。住居跡は南側部分を削平され全体の半分程しか残っていないが、一辺が7m前後の隅丸方形を呈するものと考えられ、他の住居跡に比べてかなり大型である。方位は、N—13°00′—Eをとる。北側壁のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドがあり、煙道部は壁より若干外側にでている。床には、硬化面が中央付近に広がっている。柱穴は、不明である。



第54図　15号住居跡内出土土器実測図

第19表　15号住居跡内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
54-1	坏	口径 12.8 器高 3.0 底径 8.2	体部は外方に開きながらやや内弯気味に立ち上がり口縁部が若干外傾する。端部は丸味をもつ、底部は丸底気味である。	砂粒及び白色小石、金雲母を含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
54-2	坏	現存高 1.6 底径 8.2	体部は外方に開きながらやや内弯気味に立ち上がる。	砂粒及び径1mm程の小石、金雲母を含む	明褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○底部のみ残存
54-3	坏	現存高 2.3 高台径 13.0 高台高 0.8	体部は外方に開きながらやや内弯気味に立ち上がり、底部との境には長方形の高台を端部が外方に開くように貼り付ける。端部は丸味をもつ	砂粒及び白色小石、角セン石、金雲母を含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部はない為不明	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
54-4	鉢	口径 14.0 現存高 5.5	体部は内弯しながら立ち上がり外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び径1mm程の小石を含む	外面 黒褐色 内面 黒色	良	ヘラ磨き	ヘラ磨き カーボン付着	○内黒土器 ○底部欠失



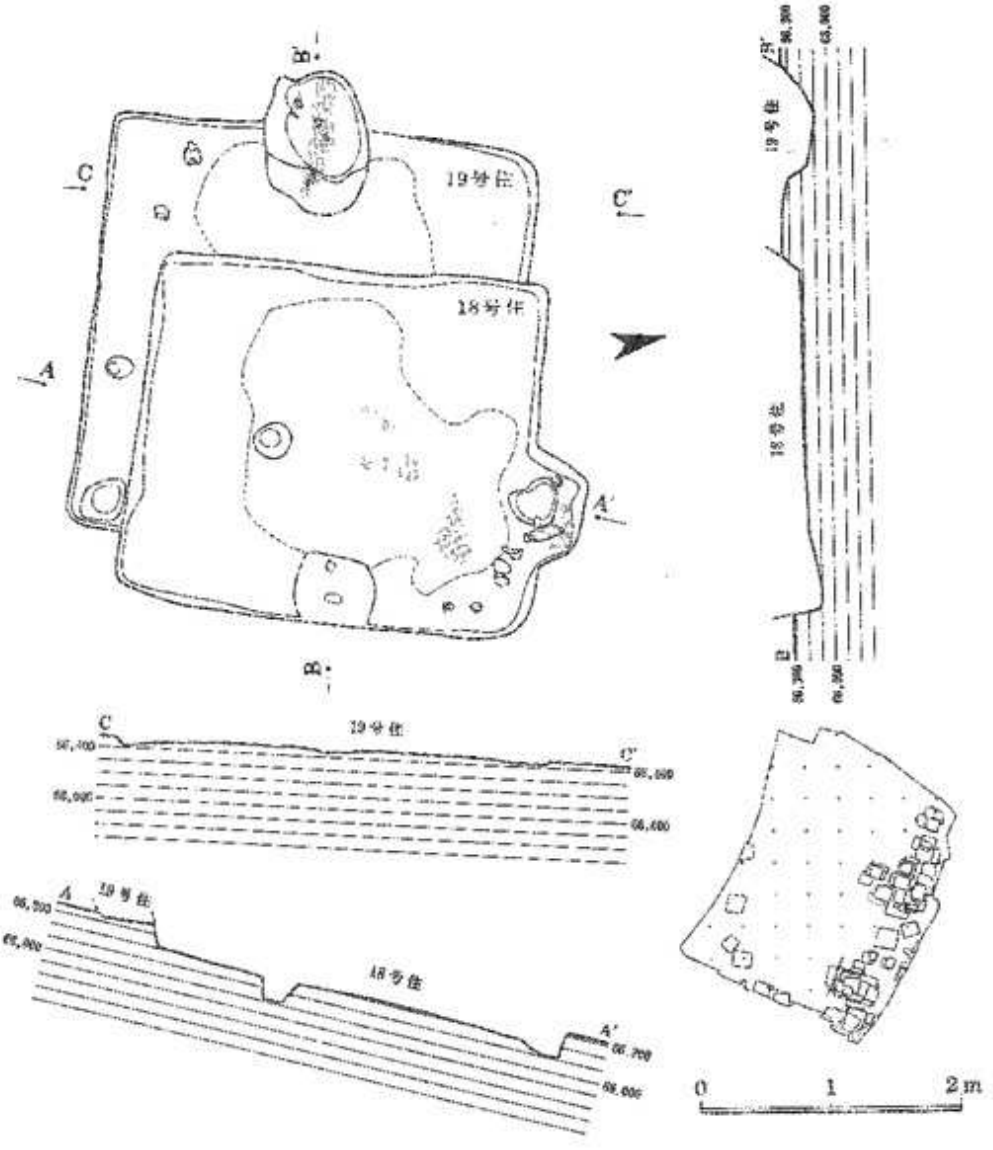
第55図　17号住居跡実測図

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の甕や鉢・皿、それに須恵器の坏が出土している。

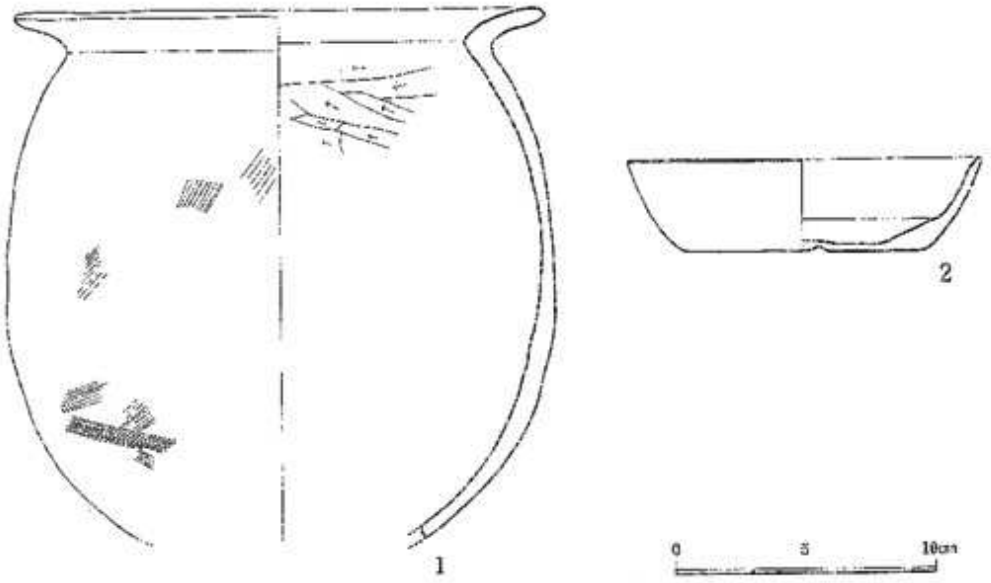
14号住居跡

遺構（第52図）

6－F－89・90・91・92グリッドに検出された住居跡で、13号住居跡を切っており新しい。住居跡は、南側部分を削平されているが、北側壁部分が完全に検出され5.24mを測ることから、



第56図　18・19号住居跡実測図



第57図　18号住居跡内出土土器実測図

第20表　18号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
57 1	甕	口径 20.4 現存高 21.5 胴部径 21.1	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部がやや外反気味に外方へ大きく開く、端部は丸くなる。胴部は中位有点で大きく張ちふ、球形に近い	砂粒及び径1～2mmの小石、金雲母を多く含む	暗褐色	良	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目の後ナデ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り	○土師器
57 2	坏	口径 13.5 器高 3.6 底径 9.2	体部はやや内彎気味に外方に開きながら立ち上がり、端部にやや丸味をもつ	砂粒及び角セン石、金雲母を含む	明褐色	良	ヨコナデ底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器

他の辺もほぼ同規模で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－76°00′－Wをとる。西側壁の柱穴中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドがあり、煙道部は壁より若干外側にでている。床には、被化面が中央付近に広がっている。また，柱穴は、直径約60cmを測るやや大型のものが4箇検出され、4本柱の住居跡である。

遺物は、細片であることから図化できたものはないが、土師器の甕や坏、それに須恵器の坏などが出土している。

15号住居跡

遺構（第53図）　出土遺物（第54図・第103図1・第19表・第45表1）

6－F－90・91グリッドに検出された住居跡で、14号住居跡のすぐ東側にあり、切り合っている16号住居跡より古い。住居跡は、東側部分を切られているが、西側壁部分が完全に検出され3.34mを測ることから、他の辺もほぼ同規模で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－73°30′－Wをとる。床には、被化面が中央付近に広がっている。カマドは、確認できなかっ

たことから東側の縁にあるものと考えられる。

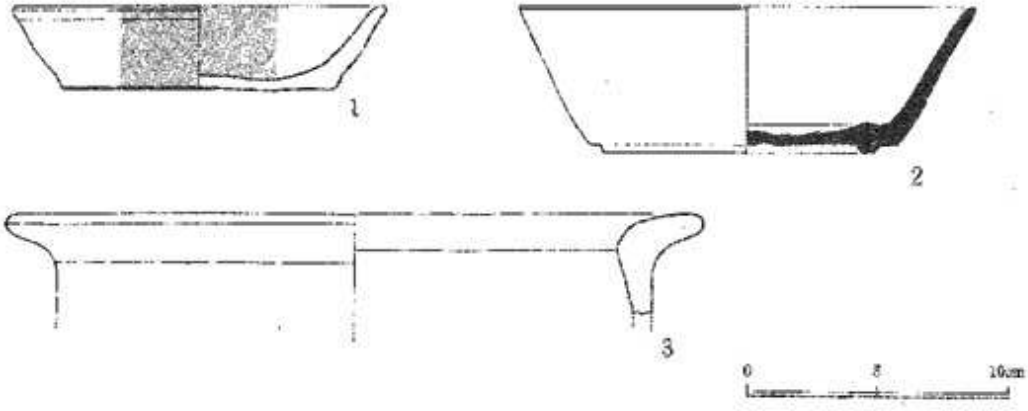
遺物は、少量だが土師器の甕や坏・皿、それに須恵器の坏、鉄鏃などが出土している。

16号住居跡

遺構（第53図）

6－F－81・90・91グリッドに検出された住居跡で、切り合っている15号住居跡より新しい。また、東側部分の大半は削平されており残っていない。住居跡は、西側壁部分が完全に検出され4.00mを測ることから、他の辺もほぼ同規模で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－62°00′－Wをとる。カマドは、西側壁のほぼ中央付近にあり、煙道部は壁より若干外側にでており、残存状態はあまり良くないが袖を作った黄白色粘土が一部確認された。硬化面や、柱穴は検出できなかった。

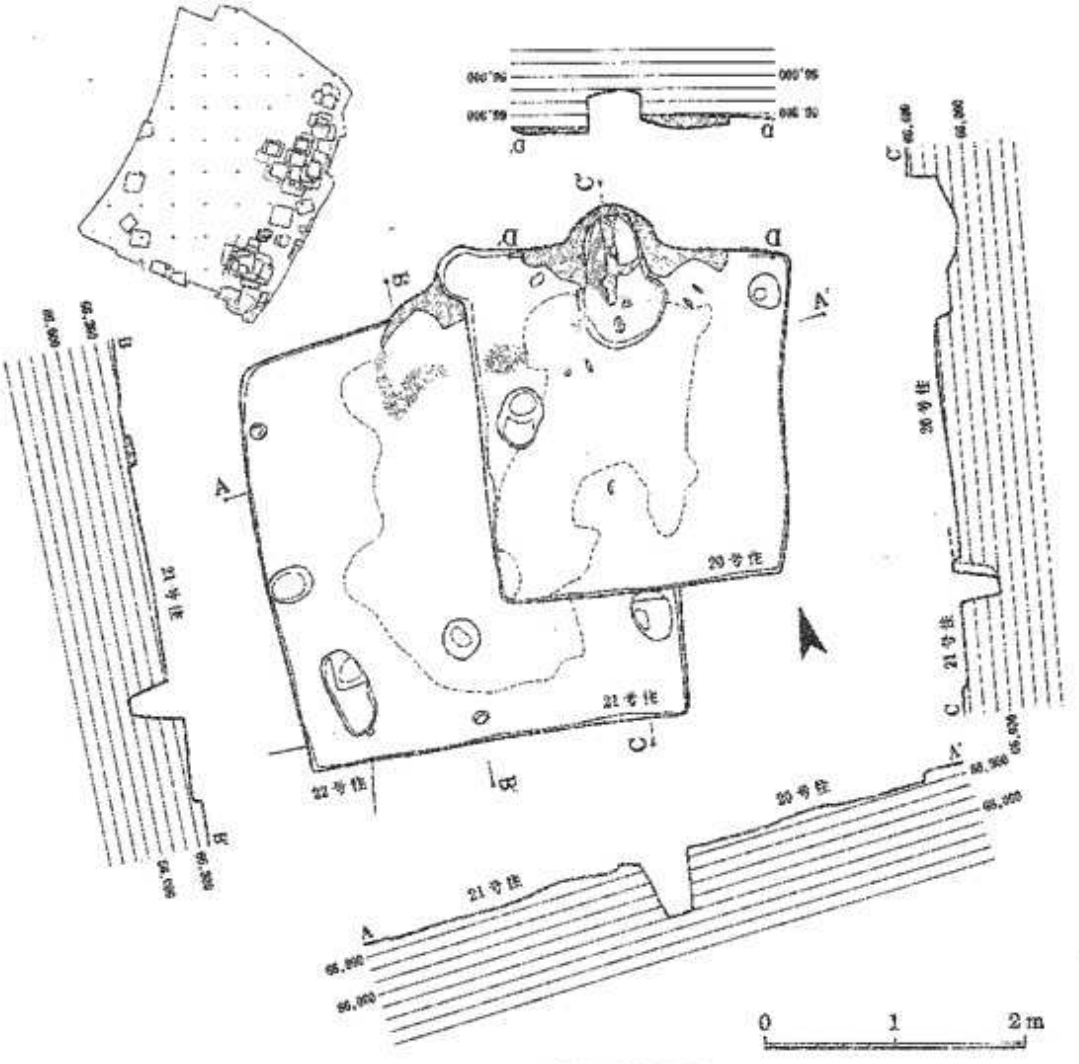
遺物は、少量であり、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の甕や坏が出土している。



第58図　19号住居跡内出土土器実測図

第21表　19号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
58－1	坏	口径 14.4 器高 3.2 底径 10.6	体部はほぼ直線的に外方に開きながら立ち上がり、端部はやや丸味をもつ	砂粒及び角セン石、金雲母を含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
58－2	坏	口径 17.5 器高 5.7 高台径 9.8 高台高 0.4	体部はほぼ外方に開きながらほぼ直線的に立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。底部には低い台形の高台をほぼ垂直に貼り付ける。	緻密 砂粒を含む	灰褐色	やや不良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け
58－3	甕	口径 26.8 残存高 3.8	頸部で屈曲した後、口縁部が大きく外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、径1～2mm程の小石、金雲母、角セン石を多く含む	淡褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器



第59図　20・21号住居跡実測図

17号住居跡

遺構（第55図）

6－G－62グリッドに検出された住居跡で、単独であるが東側の大部分を削平され残っていない。西側部分が完全に検出され3.80mを測ることから、他の辺もほぼ同規模で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－66°30′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや柱穴、硬化面などは検出できなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の甕や坏が出土している。

18号住居跡

遺構（第56図）　出土遺物（第57図・第20表）

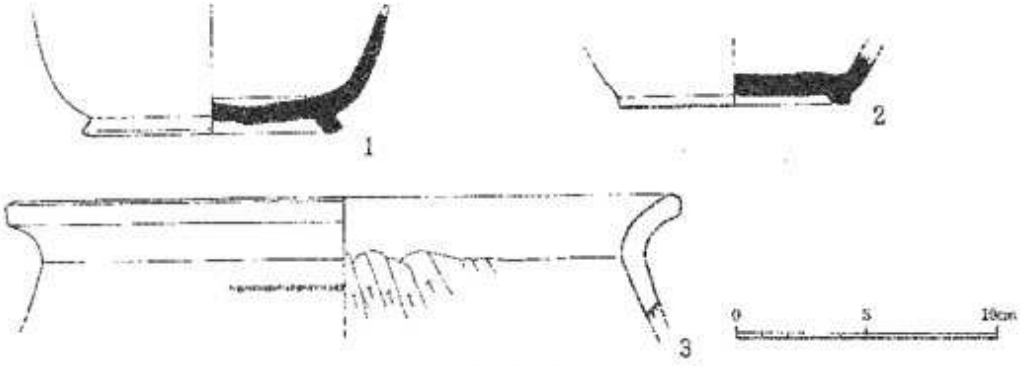
6－G－61・80グリッドに検出された住居跡で、切り合っている19号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺3.04m、短辺2.72mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－15°30′－Eをとる。北側壁には、カマドがあり、煙道部は壁より若干外側にでている、袖部分は削平のため残っていない。床には硬化面が中央付近に広がっており、東側壁のほぼ中央には貯蔵穴が検出された。また、柱穴は検出できなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の甕や坏が出土している。

19号住居跡

遺構（第56図）　出土遺物（第58図・第21表）

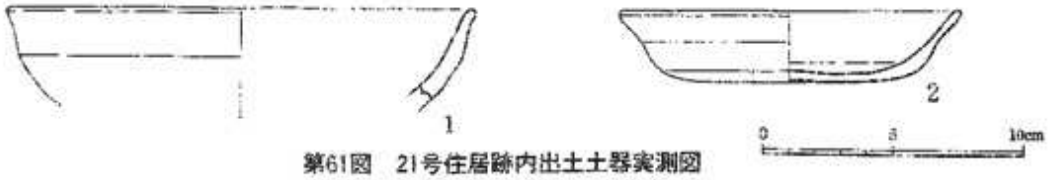
6－G－61・80グリッドに検出された住居跡で、切り合っている18号住居跡より古い。住居跡の規模は、長辺3.30m、短辺3.22mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－71°30′－W



第60図　20号住居跡内出土土器実測図

第22表　20号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
60－1	坏	現存高 4.6 高台径 10.0 高台高 0.6	体部は内彎気味に立ち上がり外方に開く。底部には方形の高台を端面が外方に開くように貼り付ける。	緻密 砂粒及び白色小石を含む	灰色	堅緻 良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○口縁部欠失 ○高台貼り付け
60－2	坏	現存高 1.7 高台径 9.0 高台高 0.4	体部との境に低い高台を貼り付ける。端面は丸味を帯びる。	緻密 砂粒を多く含む	淡灰褐色	やや不良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○口縁部欠失 ○高台貼り付け
60－3	甕	口径 25.9 現存高 4.4	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部はやや外反しながら外方に開く。端部はナデて平坦にしている。	砂粒を多く含み、金雲母、角セン石を少量含む	淡褐色	良	ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 頸部 ヘラ削り	○土師器



第61図　21号住居跡内出土土器実測図

第23表　21号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
61	坏	口径 18.0 現存高 3.5	体部が内湾しながら立ち上がり外方に開く。口縁部が若干外に開き端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石、金雲母を含む	明褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○底部欠失
61	坏	口径 13.0 器高 2.7 底径 9.0	体部はやや内湾気味に外方に開きながら立ち上がり、端部は丸くなる。底部はやや丸底気味である。	砂粒及び金雲母を多く含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器

をとる。西側壁のほぼ中央には、カマドがあり、煙道部は壁より若干外側にでている。袖部分は、削平のため残っていない。床には、硬化面が中央付近に広がっており、柱穴は検出できなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の甕や坏、須恵器の坏などが出土している。

20号住居跡

遺構（第59図）　出土遺物（第60図・第22表）

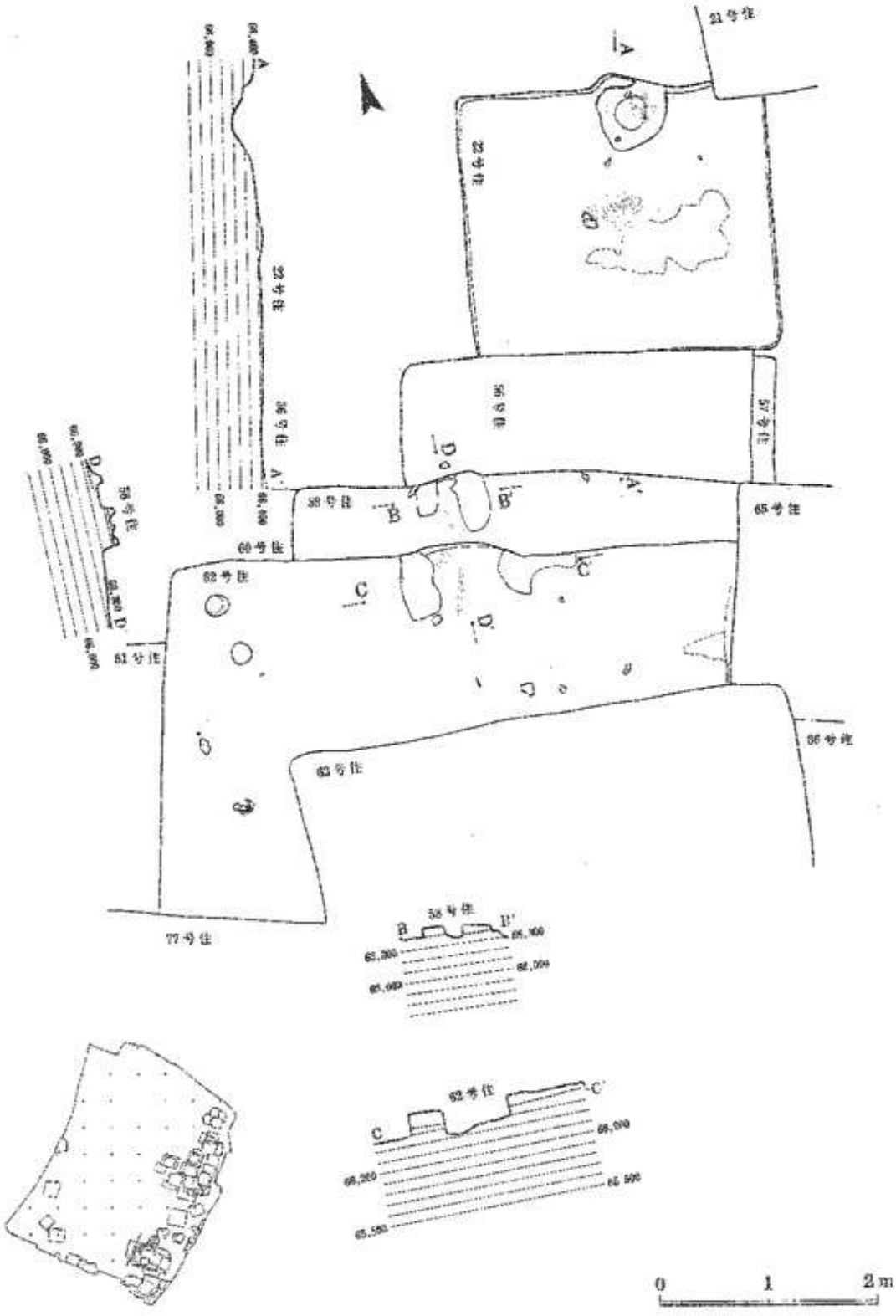
6－F－70・71、6－G－61・80グリッドに検出された住居跡で、切り合っている21号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺2.54m、短辺2.32mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－13°30′－Eをとる。北側壁のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドがあり、煙道部は壁より若干外側にでている。床には、硬化面が中央付近に広がっており、柱穴は検出できなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の甕や坏、須恵器の坏などが出土している。

21号住居跡

遺構（第59図）　出土遺物（第61図・第23表）

6－F－70・71グリッドに検出された住居跡で、切り合っている20号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺3.28m、短辺2.64mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－7°00′－Eをとり、20号住居跡とほぼ同方向である。北側壁のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドがあるが、20号住居跡により破壊されている。また、煙道部は壁より若干外側にでている。



第62図　22号・56号・57号・58号・62号住居跡実測図

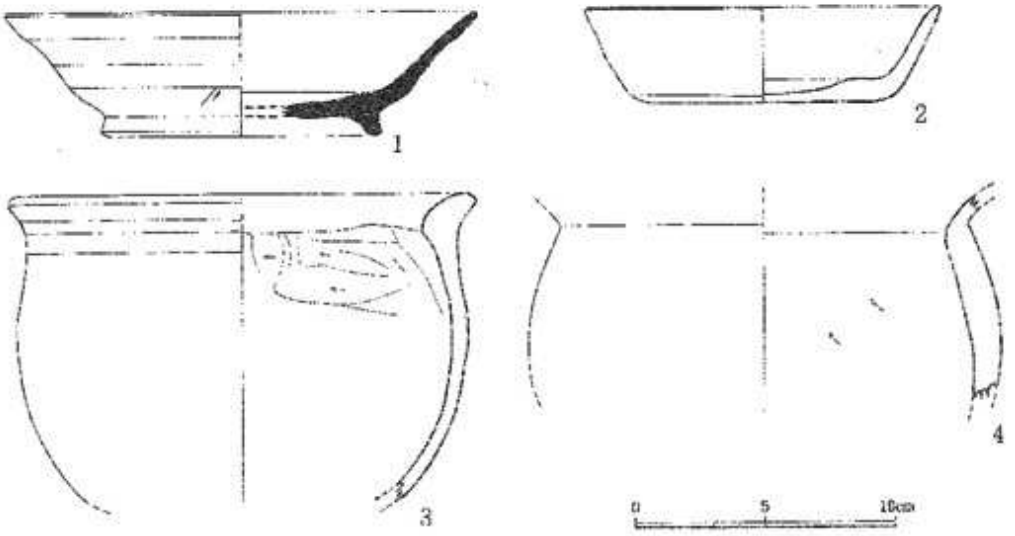
床には、硬化面が中央付近に広がっており、柱穴は検出できなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の甕や坏などが出土している。

22号住居跡

遺構（第62図）　出土遺物（第63図・第24表）

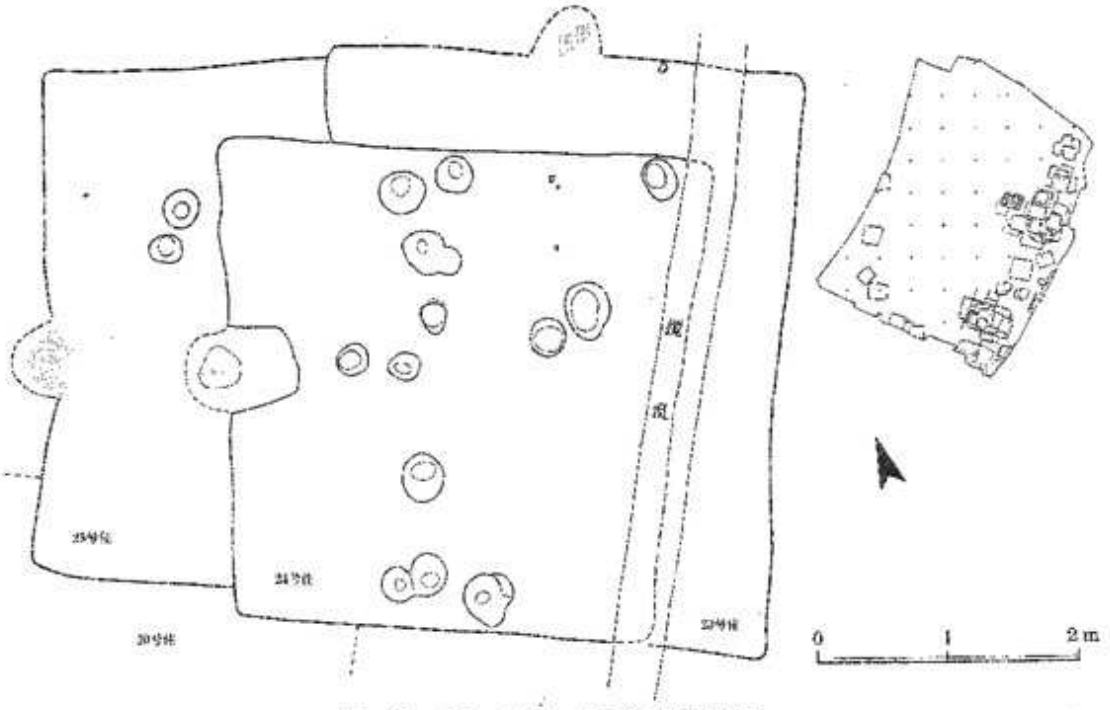
6－F－71グリッドに検出された住居跡で、切り合っている21号・56号住居跡より古い。住居跡の規模は、長辺2.82m、短辺2.42mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－14°30′－



第63図　22号住居跡内出土土器実測図

第24表　22号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
63－1	坏	口径 18.0 器高 4.8 高台径 10.8 高台高 0.8	体部は大きく外方に開きながらほぼ直線的に立ち上がり、端部は丸くなる。底部との境には長方形の高台を端部が外方に開くように貼り付ける。端部はナデてやや丸味を帯びる。	砂粒及び角センセン石、金雲母を含む緻密	紫色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け
63－2	坏	口径 13.6 器高 3.7 底径 10.6	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び微白土粒、金雲母を含む	淡黄色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○十師器
63－3	甕	口径 18.0 現在高 11.9 胴部径 17.3	口縁部が短かく外方に開き、端部は丸味をもつ、胴部は球形である。	砂粒及び径1～2mm程の小石をあく含み、金雲母を少量含む	暗褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 器面が荒れている為不明	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○底部欠失
64－4	甕	現存高 7.0 胴部径 14.2	頸部でくの字に屈曲した後、外反気味に外方に開く。	砂粒及び径1～2mm程の小石を多量に含む	暗褐色	良	胴部 ハケ目	胴部 ヘラ削り	○土師器 ○口縁部、底部欠失



第64図　23号・24号・25号住居跡実測図

Eをとる。北側壁のほぼ中央には、カマドがあり、削平されて残存状態はあまり良くない。また、煙道部は壁より若干外側にでている。床には、硬化面が中央付近に確認できたが、周辺にはあまり広がっていない。柱穴は、検出できなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の甕や坏、須恵器の坏が出土している。

23号住居跡

遺構（第64図）

6・G－41グリッドに検出された住居跡で、切り合っている24号住居跡より古く、25号住居跡より新しい。住居跡は、全体的にそのほとんどが削平され、床面も残っていない状態であり、範囲確認ができただけである。住居跡の規模は、長辺4.48m、短辺3.64mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－23°00′－Eをとる。北側壁のほぼ中央には、カマドがあり、削平され残存状態はあまり良くない。また、煙道部は壁より若干外側にでている。柱穴は、検出できなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の甕や坏が出土している。

24号住居跡

遺構（第64図）　出土遺物（第65図・第25表）

6−F−50、6−G−41グリッドに検出された住居跡で、切り合っている23号・25号住居跡の3軒の中では一番新しい。住居跡は、全体的にそのほとんどが削平され、床面も残っていない状態であり、範囲確認ができただけである。住居跡の規模は、長辺3.72m、短辺3.50mの隅丸方形の住居跡と考えられる。方位は、N−68°30′−Wをとる。西側壁には、カマドがあり削平されているため残存状態はあまり良くない。また、煙道部は壁より若干外側にでている。柱穴は、検出できなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたもの少ないが、土師器の甕や坏、須恵器の蓋が出土している。

25号住居跡

遺構（第64図）

6−F−31・51、6−G−41グリッドに検出された住居跡で、切り合っている23号・24号住居跡の3軒の中では一番古い。住居跡は、全体的にそのほとんどが削平され、床面も残っていない状態であり、範囲確認ができただけである。住居跡の規模は、残っていた西側壁から一辺3.94m前後の隅丸方形の住居跡と考えられる。方位は、N−69°00′−Wをとる。西側壁には、カマドがあり削平されているため残存状態はあまり良くない。また、煙道部は壁より若干外側にでている。柱穴は、検出できなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の甕や坏が出土している。

第65図　24号住居跡内出土土器実測図

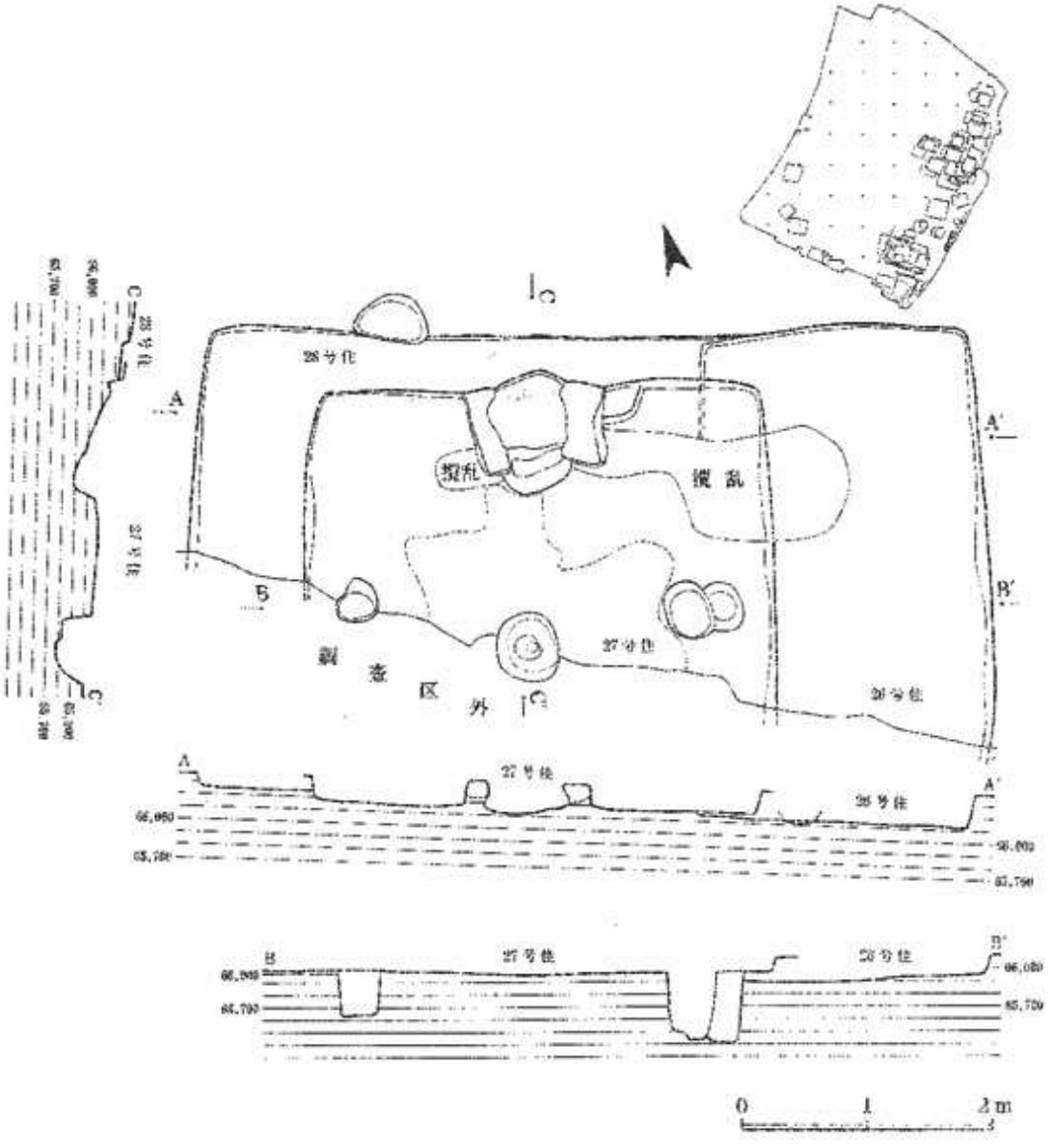
第25表　24号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整 外面	調整 内面	備考
65 1	坏	口径 13.8 器高 3.8 底径 9.0	体部が直線的に立ち上がり外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、金雲母を含む	淡褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
65 2	蓋	口径 19.4 現存高 1.6	口縁部が内側に短かく垂直し段を有する。端部は丸味をもつ	砂粒を多く含む	淡灰色	やや不良	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器

26号住居跡

遺構（第66図）

6－G－79・80グリッドに検出された住居跡で、切り合っている27号住居跡より古く、28号住居跡より新しい。住居跡は、南側部分を削平されているため規模は不明だが長辺3.20m前後で短辺2.16mの隅丸長方形を呈するものと考えられる。方位は、N－73°30′－Wをとる。住居



第66図　26号・27号・28号住居跡実測図

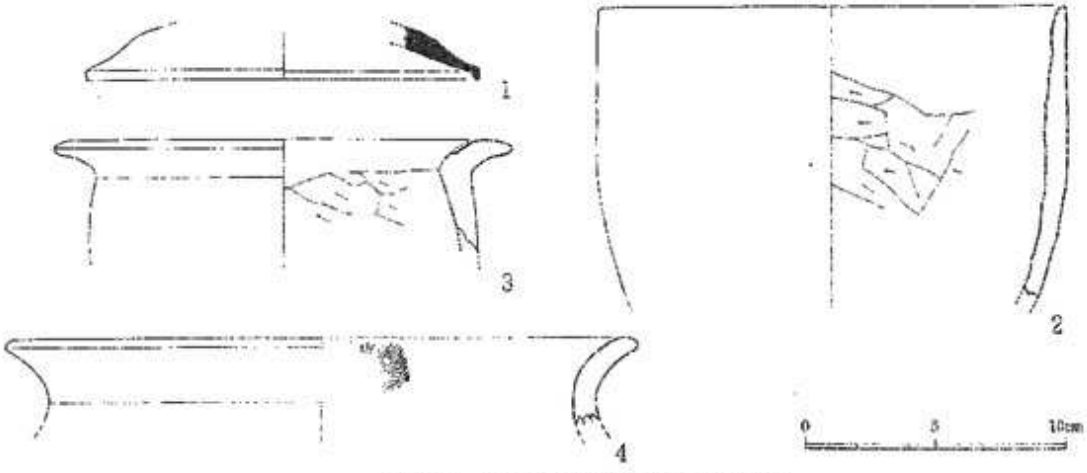
跡内からは、柱穴や、硬化面などは検出できなかった。

遺物は、全く出土していない。

27号住居跡

遺構（第66図）　出土遺物（第67図・第103図2・第26表・第45表2）

6－G－79・80グリッドに検出された住居跡で、切り合っている26号・28号住居跡の3軒の中では一番新しい。住居跡は、南側部分を削平されているため、規模は不明だが残っている北側壁から一辺3.72m前後の隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－68°30′－Wをとる。住居跡北側壁の中央付近には、袖を黄白色粘土で作ったカマドがあり、煙道部は壁より若干外側にでている。柱は、4本と考えられ、硬化面は中央付近を中心に広がっている。



第67図　27号住居跡内出土土器実測図

第26表　27号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
67－1	甕	口径 15.0 現存高 2.1	口縁部は屈曲し、明瞭な段を有する。胴部は直線的に伸び端部は尖味をもつ、天井部は高くドーム状になる。	緻密 砂粒及び白色小石を含む	灰色	堅緻良	ヨコナデ	ヨコナデ	○胴部張 ○天井部欠失
67－2	鉢	口径 18.0 現存高 11.2	口縁部は胴部より直線的に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び径2mm前の小石、角セン石、金雲母を多く含む	暗褐色	良	口縁部ヨコナデ 胴部 器面が荒れている為不明	口縁部ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○底部欠失
67－3	壺	口径 17.6 現存高 4.4	頸部で屈曲した後口縁部が外反しながら大きく外方に開く、端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び白色小石を含む	暗褐色	良	口縁部ヨコナデ 胴部 器面が荒れている為不明	口縁部ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
67－4	甕	口径 24.4 現存高 3.2	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が外反しながら外方に開く、端部は尖くなる。	砂粒及び径2mm径の小石を多く含み、角セン石を少量含む	淡褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器

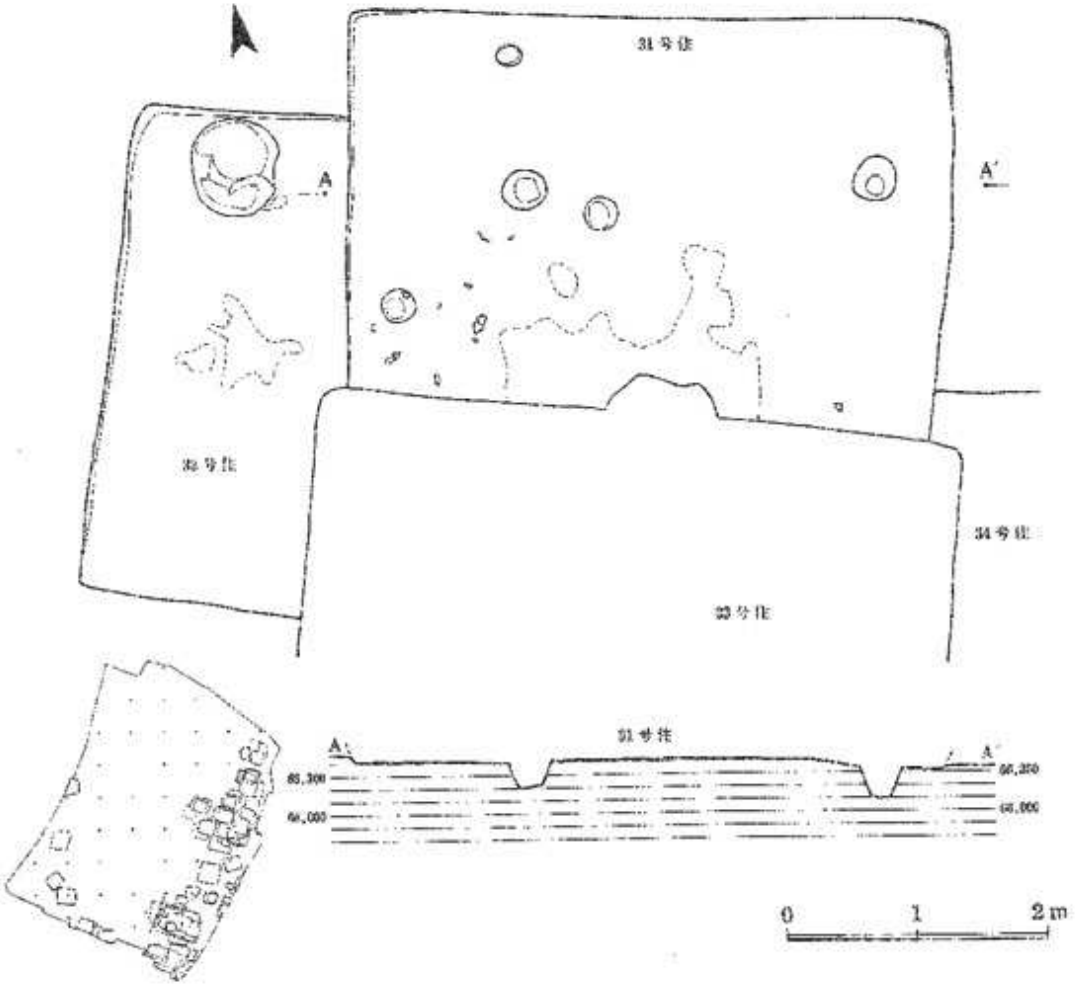
遺物は、少量で、また細片であることから図化できたもの少ないが、土師器の甕や坏・鉢、それに須恵器の蓋が出土している。また、鋤と考えられる鉄器が1点出土している。

28号住居跡

遺構（第66図）

6－G－80グリッドに検出された住居跡で、切り合っている26号・27号住居跡の3軒の中では一番古い。住居跡は、南側部分を削平されているため、規模は不明だが一辺4m前後の隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－12°30′－Eをとる。

遺物は、全く出土していない。



第68図　31号・32号住居跡実測図

31号住居跡

遺構（第68図）

6－G－39グリッドに検出された住居跡で、切り合っている32号・34号住居跡より新しく、33号住居跡より古い。住居跡は、南側部分がないことから規模は不明だが、残っている北側壁から一辺4.64m前後の隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－12°00′－Eをとる。柱穴は2個検出され、4本柱の住居跡と考えられる。硬化面は、中央付近に広がっている。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の甕や坏などが出土している。

32号住居跡

遺構（第68図）

6－G－39グリッドに検出された住居跡で、切り合っている31号・33号住居跡の3軒の中では一番古い。ただし、34号住居跡との前後関係は不明である。住居跡は、東側部分がないことから規模は不明だが、残っている西側壁から一辺3.80m前後の隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－70°00′－Wをとる。住居跡は、削平が著しく硬化面の一部が確認されただけである。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の甕などが出土している。

33号住居跡

遺構（第69図）　出土遺物（第70図・第27表）

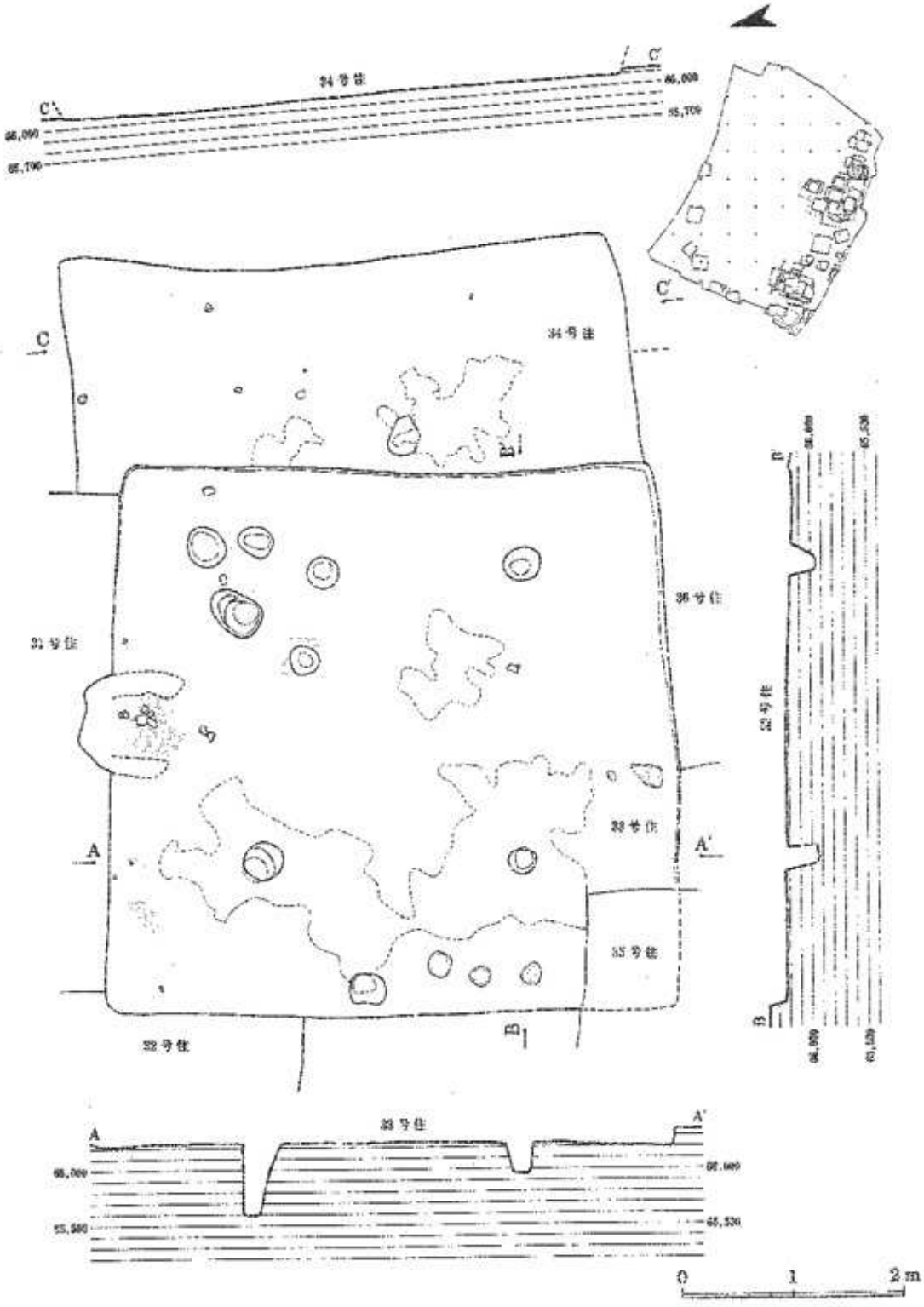
6－G－39・42グリッドに検出された住居跡で、切り合っている35号住居跡より古く、31号・32号・34号・36号住居跡よりも新しい。住居跡の規模は、長辺4.98m、短辺4.96mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－10°30′－Eをとる。カマドは、北側壁のほぼ中央にあるが、削平が著しく確認できただけである。柱穴は、4個検出され、4本柱の住居跡である。硬化面は、西側に一部確認された。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の甕や坏、須恵器の坏などが出土している。

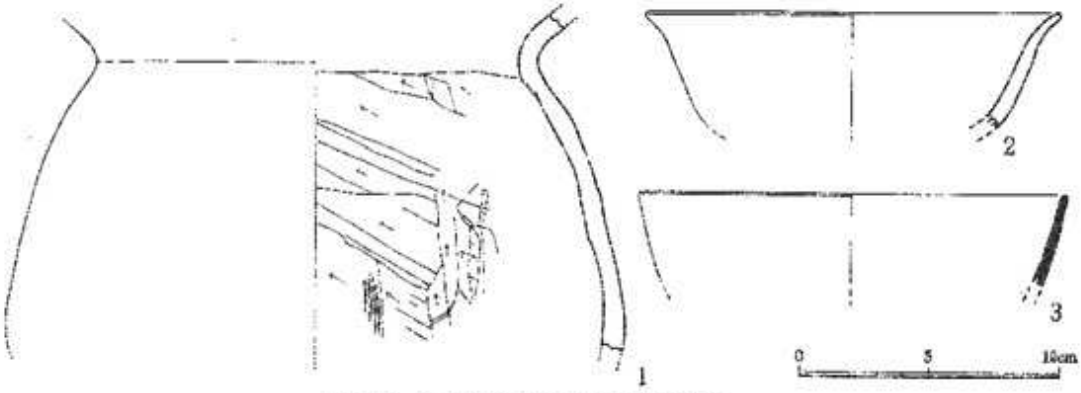
34号住居跡

遺構（第69図）

6－G－39・42グリッドに検出された住居跡で、切り合っている31号・33号住居跡より古く、36号住居跡よりも新しい。住居跡は、削平が著しく範囲を確認しただけで正確な規模は不明で



第69図　33号・34号住居跡実測図



第70図　33号住居跡内出土土器実測図

第27表　33号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
70 1 1	甕	頸部径 17.0 胴部径 23.8 現存高 12.4	頸部でくの字に屈曲した後、外方に開く。胴部は大きく張られる。	砂粒及び径1～2mm位の小石、角セン石、長石、金雲母を含む	明褐色	良	口縁部ナデ 頸部 胴部が欠れている為不明	口縁部ナデ 胴部ヘラ削り	○土師器 ○口縁部、底部欠失
70 1 2	坏	口径 16.0 現存高 4.5	体部は外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がり、口縁部が外傾する。端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石、金雲母を含む	明褐色	やや不良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○底部欠失
70 1 3	坏	口径 16.5 現存高 3.6	体部は外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がる。端部は丸くなる。	微密 砂粒を多く含む	灰白色	軟質 良	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器 ○底部欠失

あるが、一辺5.04m前後の隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－77°30′－Wをとる。住居跡内からは、硬化面の一部を確認しただけで、カマドや柱穴については不明である。

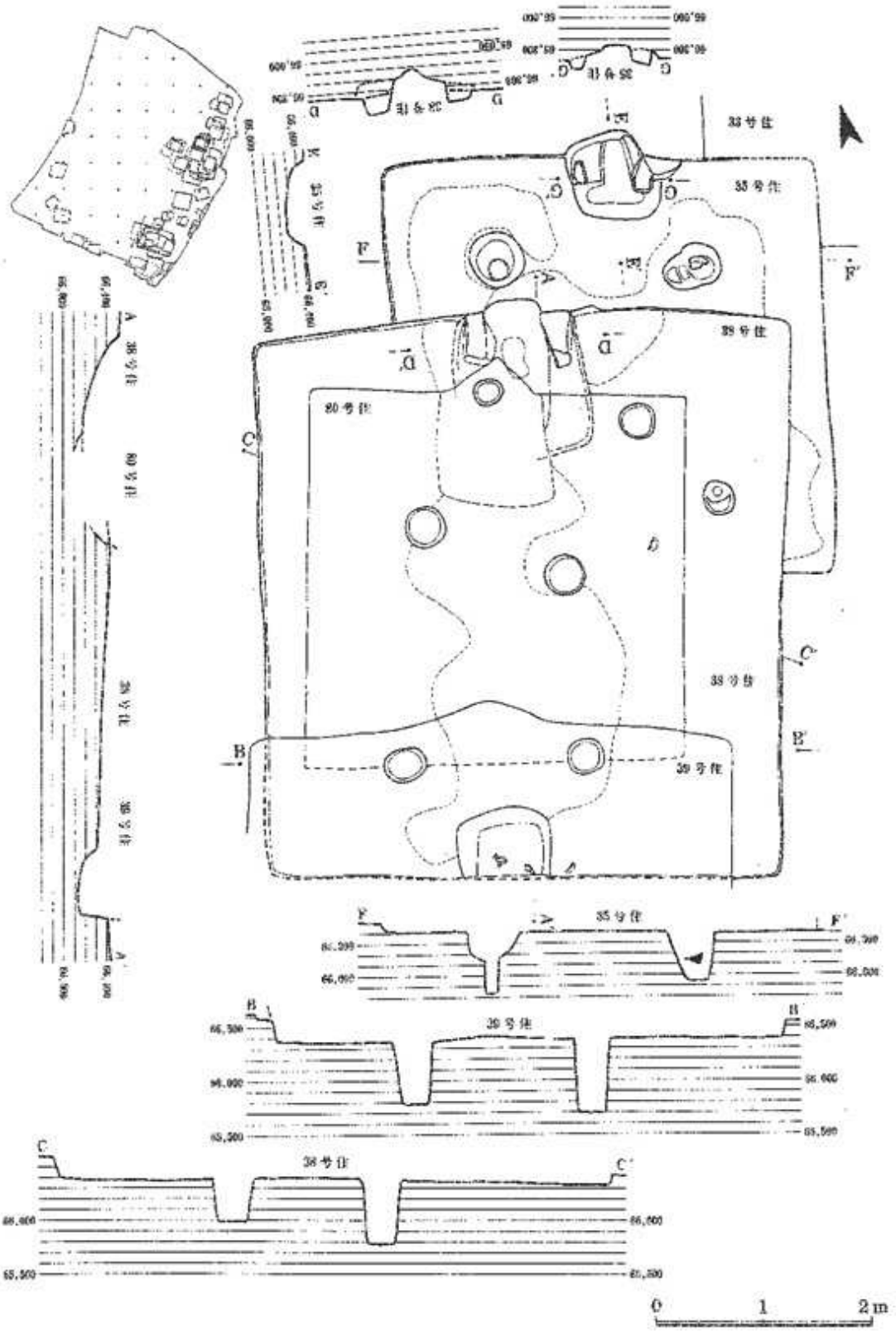
遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、須恵器の坏などが出土している。

35号住居跡

遺構（第71図）

6－G－39・40・42グリッドに検出された住居跡で、切り合っている38号住居跡より古く、33号住居跡よりも新しい。住居跡の規模は、長辺4.05m、短辺3.87mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－14°30′－Eをとる。住居跡北側壁のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドがあり、硬化面はほぼ全体に広がっている。柱穴は、カマドの近くに2個検出できたことから、4本柱の住居跡と考えられる。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の甕や甑などが出土している。



第71図　35号・38号住居跡実測図

36号住居跡

遺構（第72図）

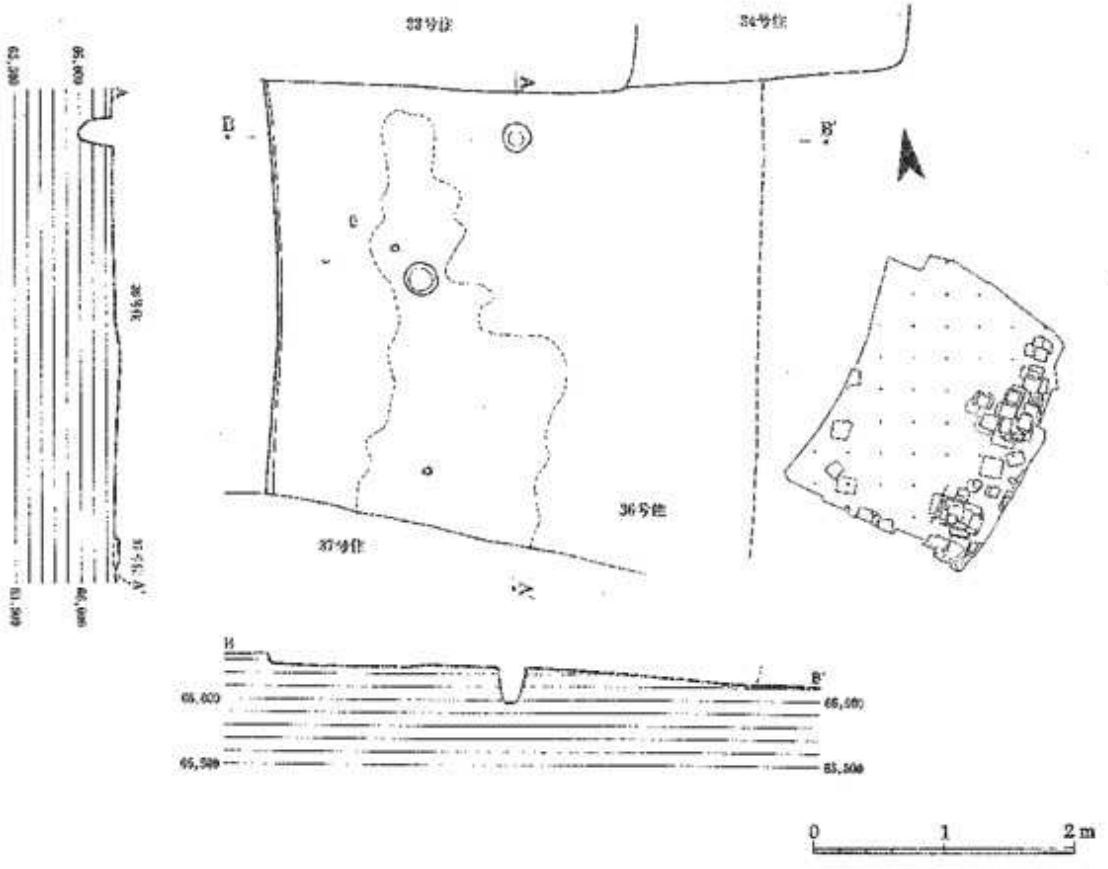
6－G－39・42グリッドに検出された住居跡で、切り合っている33号・34号・37号住居跡より古い。住居跡の規模は、南側壁の一部を検出しただけで、他の住居跡に切られたり削平が著しいため不明である。平面プランは、隅丸方形と考えられ、方位は、N－80°45′－Wをとる。住居跡は、削平が著しく硬化面の一部が確認されただけである。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の甕が出土している。

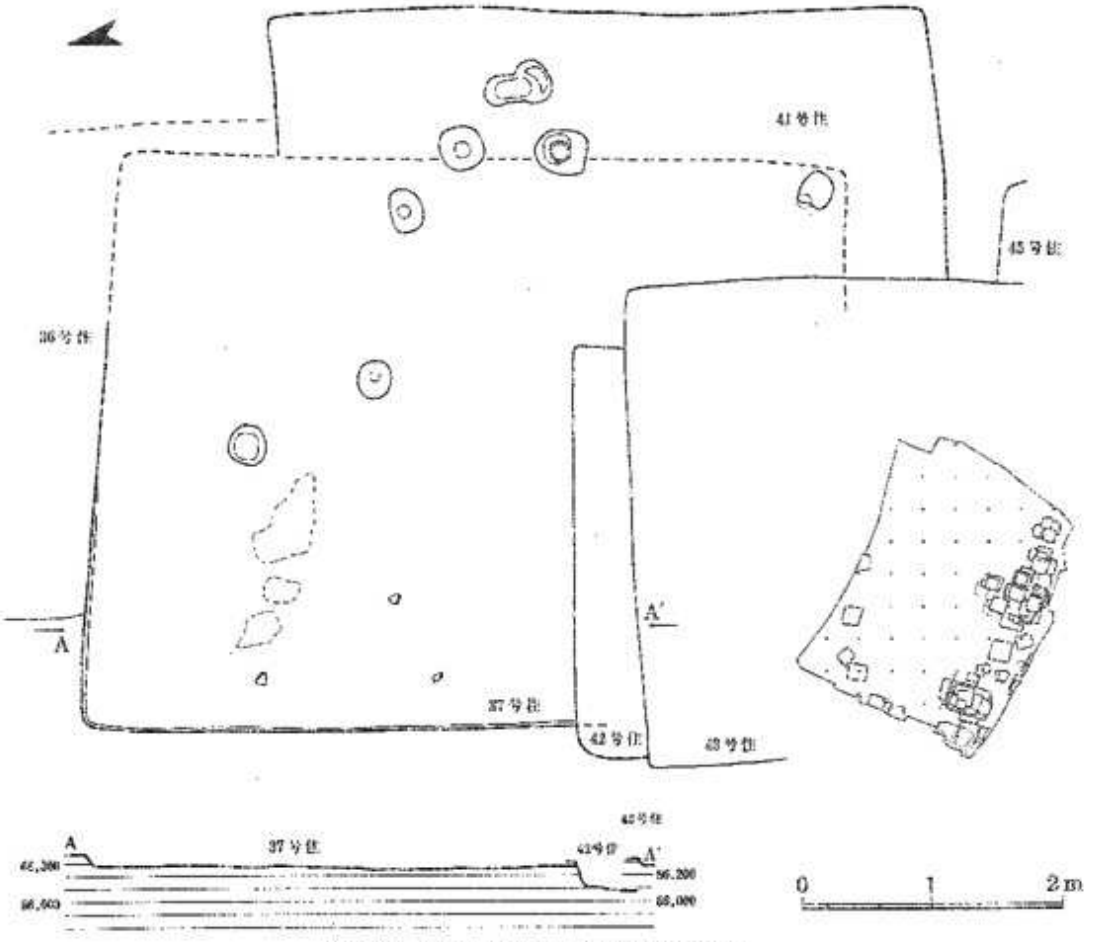
37号住居跡

遺構（第73図）

6－G－42グリッドに検出された住居跡で、切り合っている42号・43号住居跡より古く、36号・41号住居跡よりも新しい。住居跡は、削平が著しく検出できたのは北西コーナーとその周



第72図　36号住居跡実測図



第73図　37号・41号・42号住居跡実測図

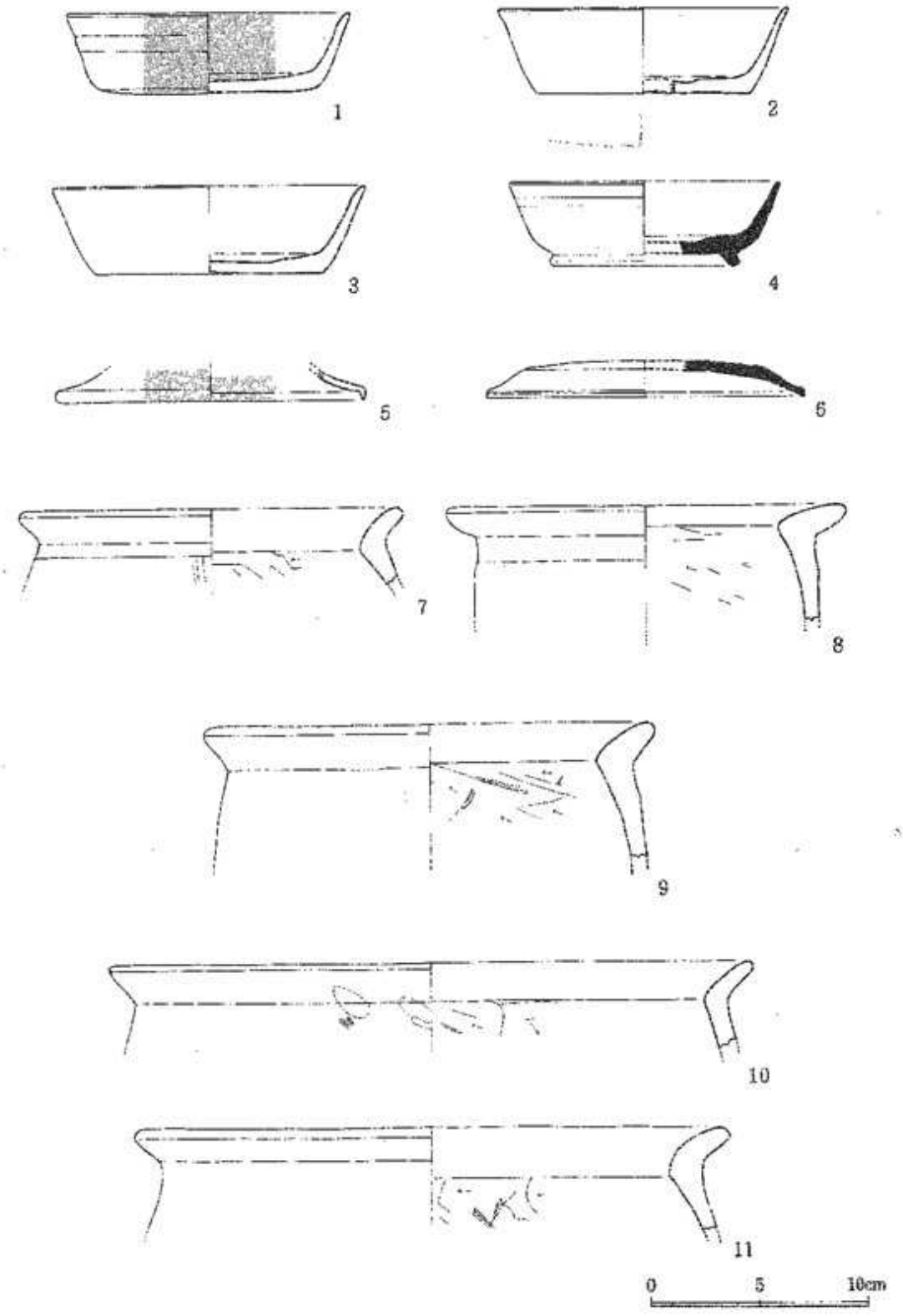
辺だけであとは推定である。規模は、不明で一辺4m前後の方形または長方形を呈するものと考えられる。方位は、N－11°00′－Eをとる。住居跡内からは、硬化面の一部を確認しただけである。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、須恵器の坏が出土している。

38号住居跡

遺構（第71図）　出土遺物（第74図・第28表）

6－G－39・40・41・42グリッドに検出された住居跡で、切り合っている39号・80号住居跡より古く、35号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺5.22m、短辺4.94mを測り隅丸方形を呈する。方位は、N－14°30′－Eをとる。北側壁の中央付近には、袖を黄白色粘土で作ったカマドがあり、煙道部は壁より若干外側にでている。硬化面は、中央付近を中心に広がっている。さらに、南側壁のほぼ中央には、不整方形の貯蔵穴が検出され、柱穴は不明である。



第74図　38号住居跡内出土土器実測図

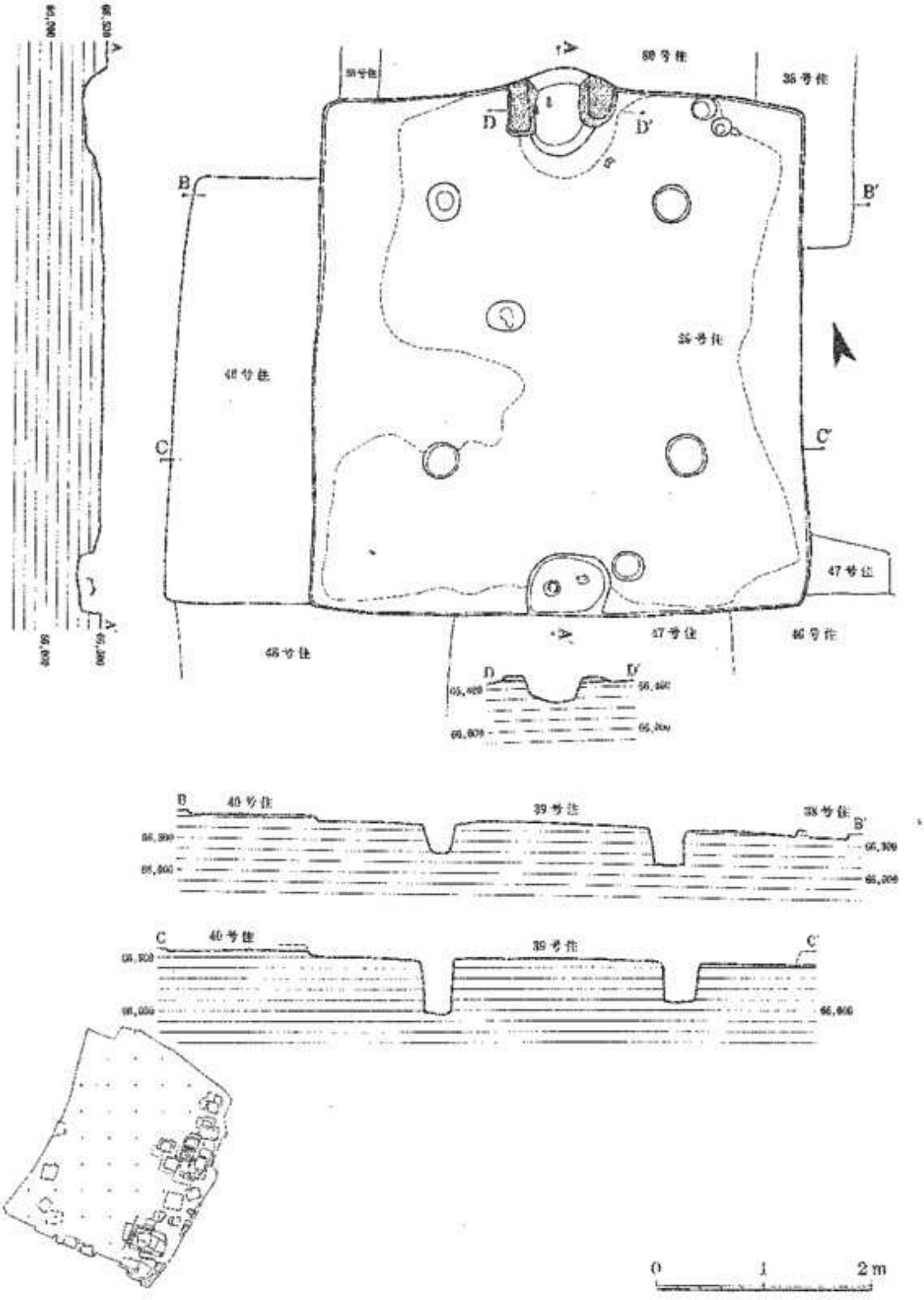
第28表　38号住居跡内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
74－1	坏	口径 13.0 器高 3.8 底径 10.0	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部はやや丸味をもつ。	砂粒及び角セン石、金雲母を少量含む	赤褐色	やや不良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
74－2	坏	口径 13.4 器高 4.0 底径 10.0	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び褐色土粒、角セン石を少量含む	明褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
74－3	坏	口径 14.4 器高 4.1 底径 10.4	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び褐色土粒、角セン石を少量含む	淡褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
74－4	坏	口径 12.4 器高 3.9 高台径 8.8 高台高 0.5	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部はやや丸味をもつ。	緻密 砂粒を含む	灰黒色	堅緻良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け
74－5	蓋	口径 14.3 現存高 1.4	天井部から外反しながら外方に開き、口縁部は垂下に屈曲し、明瞭な段を有す。端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び角セン石、金雲母を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
74－6	蓋	口径 14.6 器高 1.7	口縁部はほぼ垂下に屈曲し、明瞭な段を有する。端部は尖がる。	緻密 砂粒及び角セン石を含む	灰色	堅緻良	天井部ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器
74－7	甕	口径 17.6 現存高 3.3	頸部で屈曲した後、口縁部がほぼ直線的に短かく外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び径1～2mm程の小石、角セン石、金雲母を多く含む	褐色	良	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り	○土師器
74－8	甕	口径 18.4 現存高 5.3	頸部で屈曲した後、口縁部がほぼ直線的に短かく外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、角セン石、金雲母を含む	暗褐色	良	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り	○土師器
74－9	甕	口径 20.9 現存高 6.2	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に短かく外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、角セン石、金雲母を含む	淡褐色	良	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り	○土師器
74－10	甕	口径 28.7 現存高 3.7	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石、金雲母を多く含む	淡褐色	良	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り	○土師器
74－11	甕	口径 27.5 現存高 4.7	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が外反気味に外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石、金雲母を多く含む	淡褐色	良	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り	○土師器

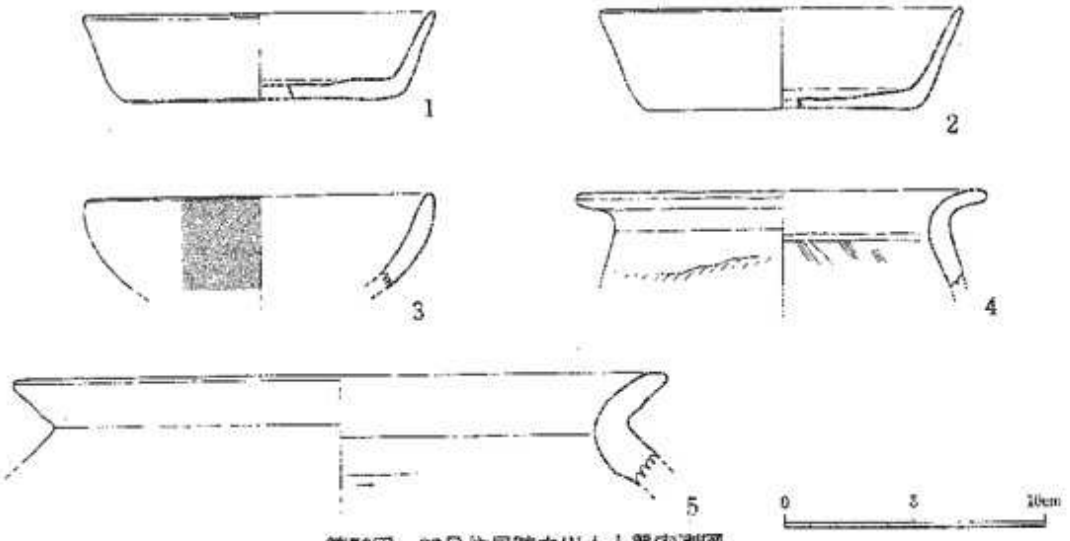
遺物は、少量で、図化できたものは少ないが、土師器の坏や蓋・甕、それに須恵器の坏などが出土している。

39号住居跡

遺構（第75図）　出土遺物（第76図・第103図3～6・第29表・第45表3～6）



第75図　39号住居跡実測図



第76図　39号住居跡内出土土器実測図

第29表　39号住居跡内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
76-1	坏	口径 13.4 器高 5.4 底径 10.6	体部は外方に開きながら外反気味に立ち上がり端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、角セン石、金雲母を含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
76-2	坏	口径 14.0 器高 3.9 底径 10.4	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部は丸味をもつ	砂粒及び白色小石、金雲母を含む	淡褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
76-3	鉢	口径 13.0 現存高 3.6	体部は外方に開き、内湾しながら立ち上がり、端部は丸味をもつ	砂粒及び白色小石を少量含み、角セン石を多く含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布
76-4	甕	口径 17.6 現存高 2.3	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が外方に開き、外反気味に立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、金雲母を含む	褐色	良	口縁部ヨコナデ 頸部ハケ目	口縁部ヨコナデ 頸部ヘラ削り	○土師器
76-5	甕	口径 25.1 現存高 3.3	頸部がくの字に屈曲した後、口縁部が外方に開き、緩慢直線的に立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、角セン石、金雲母を多く含む	赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器

6－G－41・42グリッドに検出された住居跡で、切り合っている38号・40号・46号・47号・48号・80号住居跡の中では一番新しい。住居跡の規模は、長辺4.84m、短辺4.52mを測り隅丸方形を呈する。方位は、N－14°30′－Eをとり、38号住居跡と同方向である。住居跡北側壁の中央付近には、袖を黄白色粘土で作ったカマドがあり、煙道部は壁より若干外側にでている。硬化面は、中央付近を中心に広がっている。さらに、南側壁のほぼ中央には、不整方形の貯蔵穴が検出された。柱穴は、4個検出でき、4本柱の住居跡である。

遺物は、少量で、図化できたものは少ないが、土師器の坏や甕・甕・高坏、それに須恵器の

坏などと共に鉄鏃や鉄製刀子・鉄釘・不明鉄器が出土している。

40号住居跡

遺構（第77図）

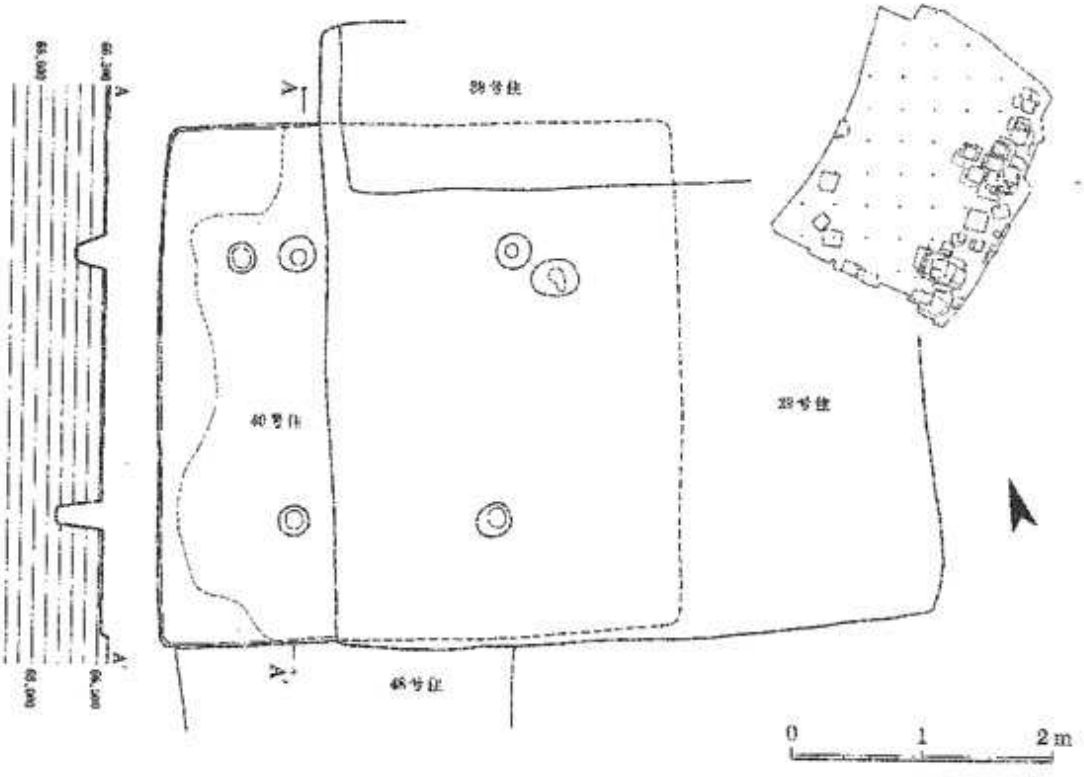
6－G－41グリッドに検出された住居跡で、切り合っている39号・47号住居跡より古く、48号住居跡より新しい。住居跡の規模は、検出できた西側壁が3.98mを測ることから、他もほぼ同規模で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－19°00′－Eをとる。住居跡内には、硬化面がほぼ全域に広がっており、柱穴が壁近くに2個検出できたことから4本柱の住居跡と考えられる。カマドは確認できなかった。

遺物は、少量で、図化できたものはないが、須恵器の蓋などが出土している。

41号住居跡

遺構（第73図）

6－G－42・50グリッドに検出された住居跡で、切り合っている37号・42号・43号住居跡の中では一番より古い。住居跡は、範囲だけの確認であることから規模は不明だが、一辺5m前



第77図　40号住居跡実測図

後の隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－14°00′－Eをとる。住居跡内には、カマドや硬化面、柱穴などは検出できなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の坏や甕が出土している。

42号住居跡

遺構（第73図）

6－G－42グリッドに検出された住居跡で、切り合っている43号住居跡より古く、37号・41号住居跡より新しい。住居跡は、範囲だけの確認であり、43号住居跡に切られその大半がないことから、規模は不明だが、一辺3.2m前後の隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－15°30′－Eをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面、柱穴などは検出できなかった。

遺物は、全く出土しなかった。

43号住居跡

遺構（第78図）　出土遺物（第79図・第30表）

6－G－42・59グリッドに検出された住居跡で、切り合っている37号・41号・42号・44号・45号・46号住居跡の中では一番新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態はあまり良くないが、長辺3.70m、短辺3.68mを測り、隅丸方形を呈する。方位は、N－79°30′－Wをとる。西側壁のほぼ中央には、カマドが検出された。しかし、削平が著しいため袖は残っていない。硬化面は、カマド近くに一部確認され、柱穴は4個検出され4本柱の住居跡である。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の坏や皿・甕、須恵器の坏などが出土している。

44号住居跡

遺構（第78図）　出土遺物（第80図・第31表）

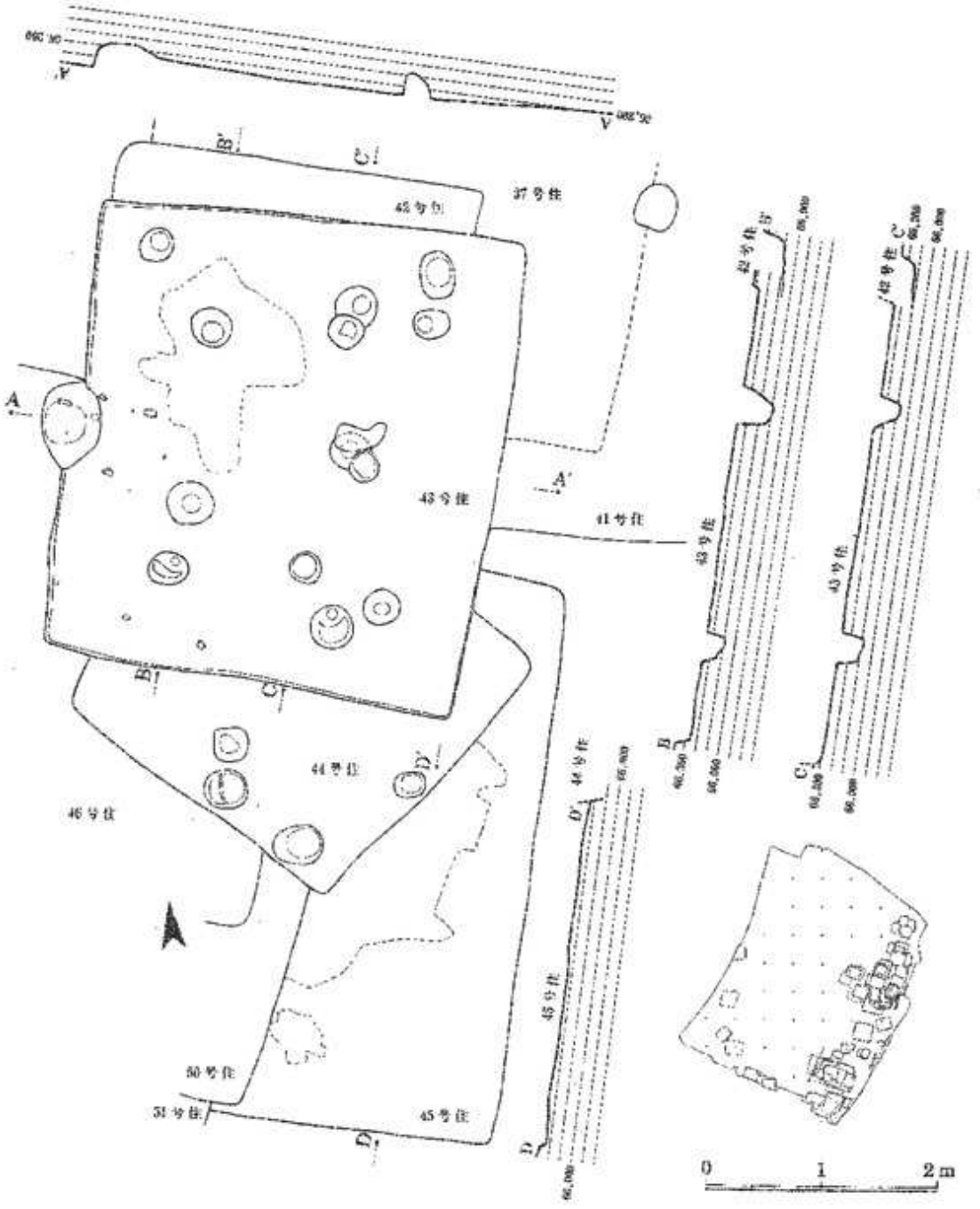
6－G－59グリッドに検出された住居跡で、切り合っている43号住居跡より古く、45号・46号・50号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明だが一辺3m前後で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－52°00′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面、柱穴などは検出されなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の坏などが出土している。

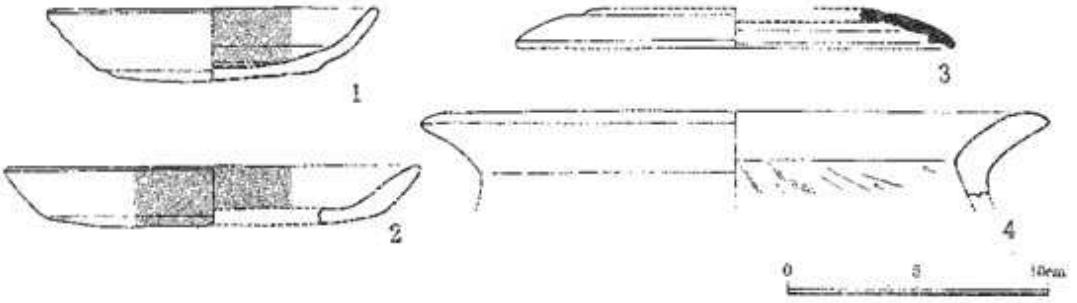
45号住居跡

遺構（第78図）

6～G－59グリッドに検出された住居跡で、切り合っている43号・44号・46号・50号・51号住居跡の中では一番古い。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの



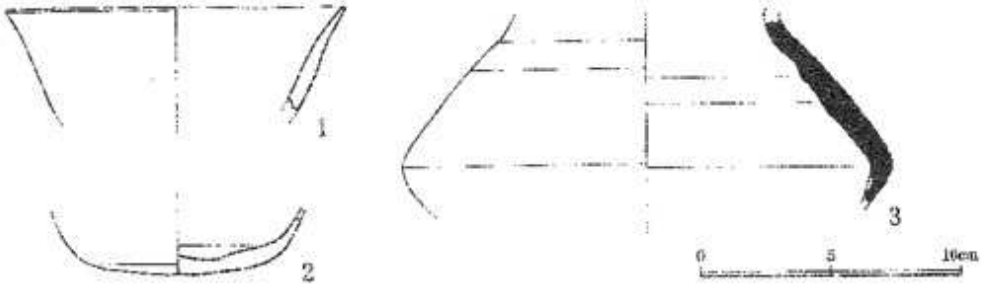
第78図　43号・44号・45号住居跡実測図



第79図　43号住居跡内出土土器実測図

第30表　43号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
79 1 1	杯	口径 12.7 器高 2.8 底径 8.0	体部は外方に大きく開きながら内湾気味に立ち上がり、端部は丸味をもつ。底部は丸底気味である。	砂粒及び金雲母、角ヤン石を多く含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内面に赤色顔料塗布
79 1 2	皿	口径 16.0 器高 2.3 底径 12.8	体部は大きく外方に開き、ほぼ直線的に短かく立ち上がる。端部は丸味をもつ	砂粒を少量含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
79 1 3	鉢	口径 16.6 器高 1.5	口縁部の屈曲は見られず、端部はやや尖がる。さらに内側に下方に突出する突部をもつ	砂粒及び角ヤン石を少量含む	淡灰色	堅緻 良	天井部ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器
79 1 4	甕	口径 24.0 残存高 3.2	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外方に開く端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び白色小石、金雲母を多く含む	淡褐色	良	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り	○土師器



第80図　44号住居跡内出土土器実測図

確認であることから、規模は不明だが一辺5m前後で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－14°00′－Eをとる。住居跡内には、中央付近に硬化面が広がっており、柱穴は検出されなかった。

遺物は、全く出土していない。

第31表　44号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
80 1	鉢	口径 13.0 現存高 4.1	体部は外方に開きながらやや外反気味に立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び白色小石、金雲母を含む	淡褐色	不良	ヨコナデ	ヨコナデ	○小破器 ○底部欠失
80 2	坏	現存高 2.1 底径 7.7	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、底部は丸底である。	砂粒及び白色小石を多く含む	明褐色	不良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○口縁部欠失
80 3	壺	現存高 7.2 胴部径 18.8	胴部片で口縁部、底部の形態は不明	緻密 砂粒を含む	淡灰褐色	やや不良	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器 ○口縁部、底部欠失

46号住居跡

遺構（第82図）　出土遺物（第81図・第103図7、8・第32表・第45表7、8）

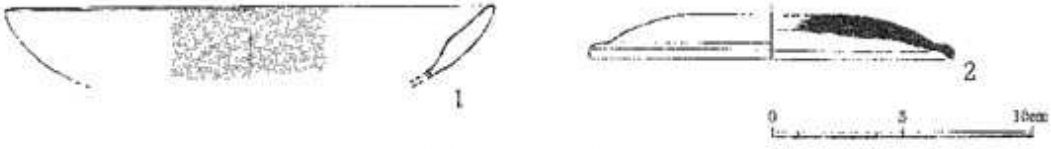
6－G－41・42・59・60グリッドに検出された住居跡で、切り合っている39号・43号・44号住居跡より古く、45号・47号・50号・51号・52号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明だが一辺4.5m前後で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－10°30′－Eをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の坏や甕・甕などが出土している。

47号住居跡

遺構（第82図）

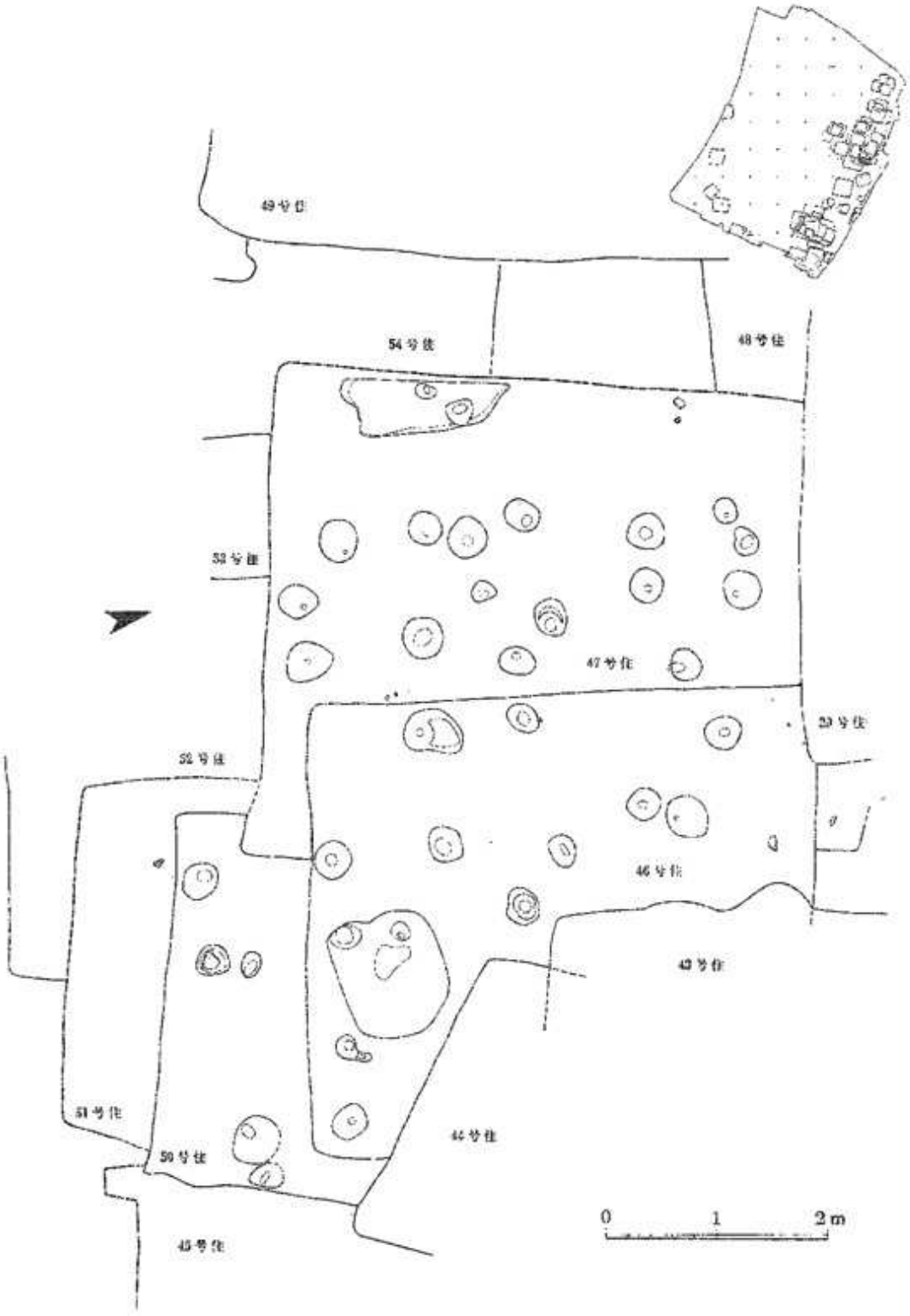
6－G－41・42・59・60グリッドに検出された住居跡で、切り合っている39号・46号住居跡



第31図　46号住居跡内出土土器実測図

第32表　46号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
81 1	甕	口径 18.8 現存高 2.9	体部は内湾気味に緩かく立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、金雲母を含む	赤褐色	良	ヨコナデ 体部下半ヘラ削り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○底部欠失
81 2	壺	口径 14.1 器高 1.7	口縁部は湾曲し明瞭な段を有する。頸部は外方に開き、尖がる。天井部はドーム状になる。	緻密 砂粒及び白色小石を含む	灰白色	焼成良	天井部ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器



第82図　46号・47号・50号・51号住居跡実測図

より古く、48号・50号・51号・52号・53号・54号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明だが一辺4.8m前後で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－18°00′－Eをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は確認されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器や須恵器の坏・蓋・甕などが出土している。

48号住居跡

遺構（第83図）

6－G－41グリッドに検出された住居跡で、切り合っている39号・40号・47号・49号住居跡の中では一番古い。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明だが隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－78°00′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は確認されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、全く出土していない。

49号住居跡

遺構（第83図）　出土遺物（第84図・第33表）

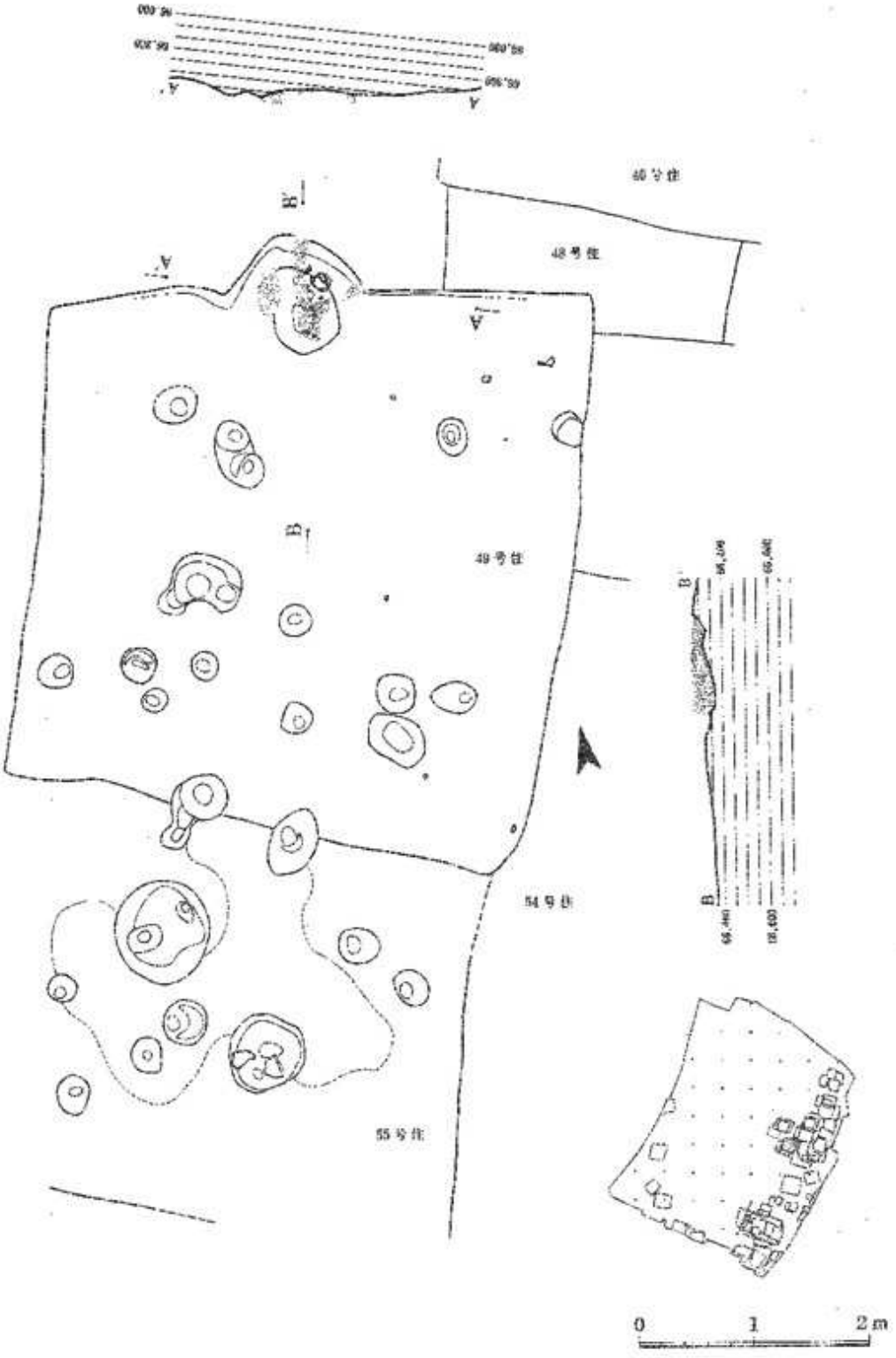
6－G－41・60グリッドに検出された住居跡で、切り合っている48号・54号・55号住居跡の中では一番新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明だが一辺4.6m前後で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－10°30′－Eをとる。北側壁のほぼ中央には、カマドが検出されたが削平が著しく袖などは残っていない。硬化面は、確認されなかったが、柱穴が4個検出され4本柱の住居跡である。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の甕や高坏・甕などが出土している。

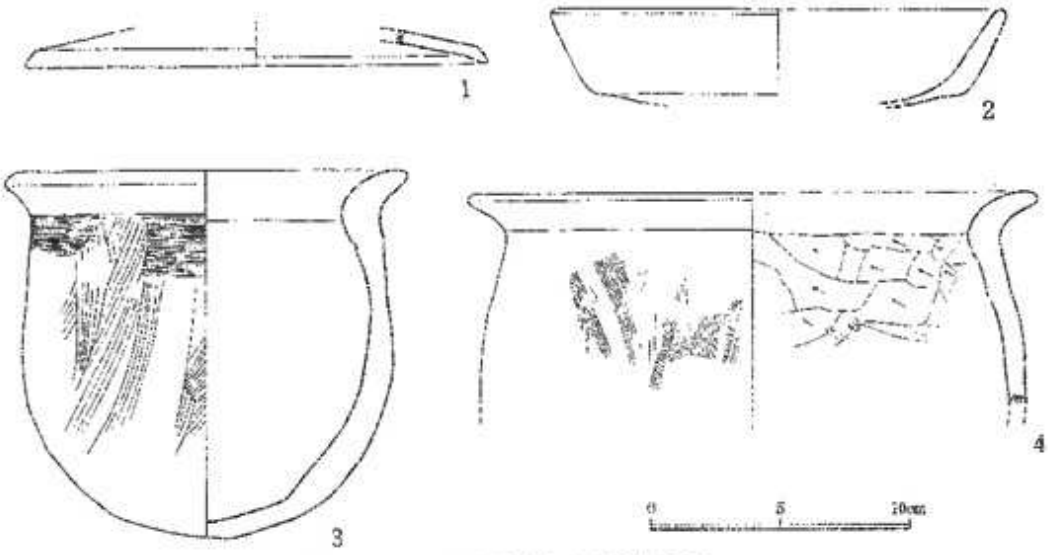
50号住居跡

遺構（第82図）

6－G－59・60グリッドに検出された住居跡で、切り合っている44号・46号・47号住居跡より古く、45号・51号・52号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明だが一辺4m前後で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－72°00′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また，柱穴の特定もできなかった。



第83図　48号・49号・55号住居跡実測図



第84図　49号住居跡内出土土器実測図

第33表　49号住居跡内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
84-1	壺	口径 17.8 現存高 1.3	口縁部が屈曲し、肩を為する。頸部は外方に大きく開きやや丸味を帯びる。	砂粒を多く含み、角セン石、長石、金雲母を少量含む	明褐色	ややわ良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○天井部欠失
84-2	高坏	口径 17.0 現存高 3.7	坏部は内側に屈曲した後、外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び径1～2㎜程の小石、金雲母を含む	淡褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○坏部のみ残存
84-3	甕	口径 15.2 胴部径 14.3 器高 14.2	頸部で若干屈曲した後、口縁部は緩かく外反気味に外方に開く。端部は丸くなる。胴部は中位付近で若干張らみ、底部は丸底である。	砂粒及び径1～2㎜程の小石、金雲母、角セン石を多く含む	淡褐色	良	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目	口縁部ヨコナデ 胴部器面が荒れている為不明	○土師器
84-4	甕	口径 21.9 現存高 8.2	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は緩かく外反気味に外方に開く。端部は丸くなる。	砂粒及び径2㎜程の小石を多く含み、角セン石を少量含む	淡褐色	良	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り	○土師器

遺物は、全く出土していない。

51号住居跡

遺構（第82図）

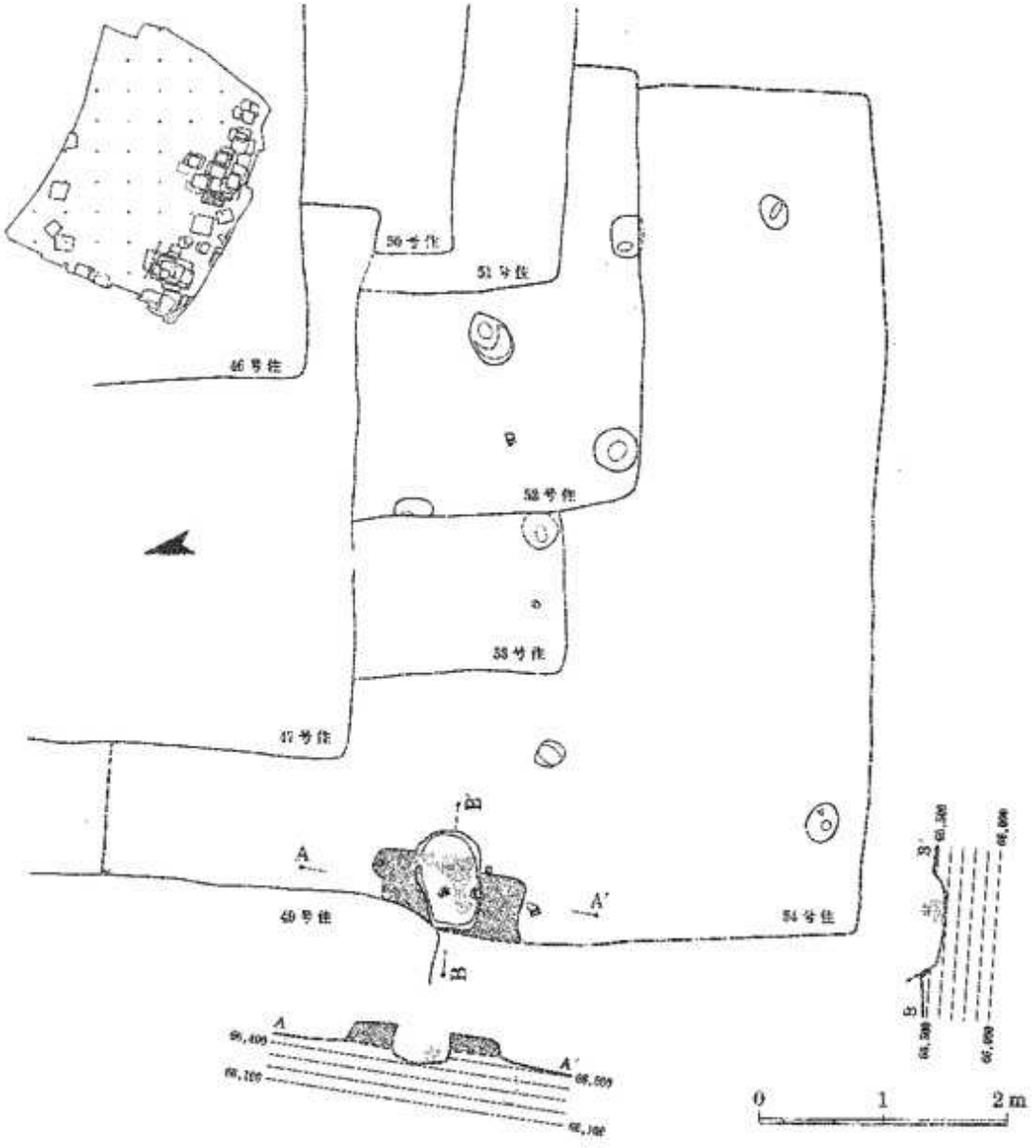
6－G－59・60グリッドに検出された住居跡で、切り合っている47号・50号住居跡より古く、52号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明だが一辺3.3m前後で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－72°30′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の甕が出土している。

52号住居跡

遺構（第85図）

6－G－59・60グリッドに検出された住居跡で、切り合っている47号・51号住居跡より古く、



第85図　52号・53号・54号住居跡実測図

53号・54号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明だが一辺3.6m前後で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－75°30′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の坏や甕が出土している。

53号住居跡

遺構（第85図）

6－G－60グリッドに検出された住居跡で、切り合っている47号・52号住居跡より古く、54号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－11°00′－Eをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、全く出土していない。

54号住居跡

遺構（第85図）

6－G－59・60グリッドに検出された住居跡で、切り合っている47号・49号・50号・51号・52号・53号住居跡の中では一番古い。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明だが一辺6.9m前後で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－73°30′－Wをとる。西側壁のほぼ中央には、カマドが検出されたが削平が著しく袖などは残っていない。硬化面は、確認されていない。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の坏や甕が出土している。

55号住居跡

遺構（第83図）

6－F－50・51、6－G－41・60グリッドに検出された住居跡で、49号住居跡により切られている。住居跡は、削平により残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模や方位は不明である。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、全く出土していない。

56号住居跡

遺構（第62図）

6－F－71グリッドに検出された住居跡で、切り合っている58号・65号住居跡より古く、22号・57号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明だが一辺3.2m前後で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－15°00′－Eをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の甕が出土している。

57号住居跡

遺構（第62図）

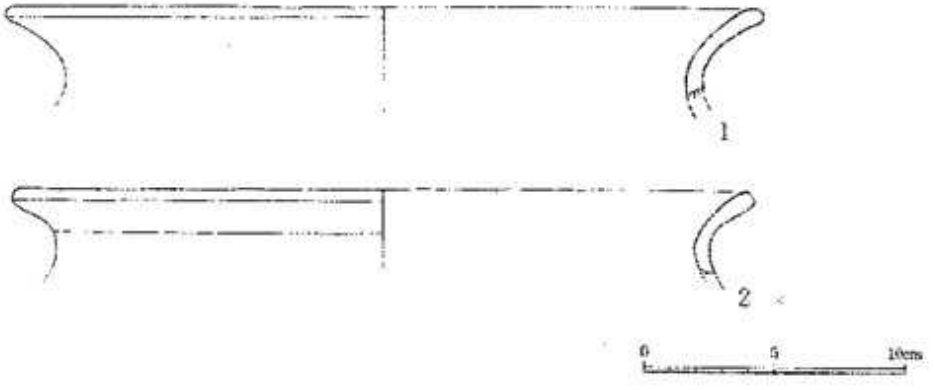
6－F－71グリッドに検出された住居跡で、切り合っている56号・58号・65号住居跡中では一番古い。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－15°00′－Eをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、全く出土していない。

58号住居跡

遺構（第62図）　出土遺物（第86図・第34表）

6－F－71グリッドに検出された住居跡で、切り合っている62号・65号住居跡より古く、56号・57号・60号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いによって残存状態が悪く、また



第86図　58号住居跡内出土土器実測図

第34表　58号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
86	甕	口径 23.2 現存高 3.2	頸部で屈曲した後、口縁部が外反気味に外方に開く、端部はやや丸味をもつ	砂粒を多く含み、白色小石、径1～2mmの小石、金雲母を含む	淡橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器
86	甕	口径 28.4 現存高 3.2	頸部で屈曲した後、口縁部が外反気味に外方に開く、端部は平坦でやや丸味をもつ	砂粒及び径1～2mmの小石、角セン石、金雲母を含む	淡橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器

範囲だけの確認であることから、規模は不明で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－19°30′－Eをとる。北側壁には、カマドが作られており、袖を作った黄白色粘土が検出された。硬化面は、確認されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の甕が出土している。

60号住居跡

遺構（第87図）

6－F－71・72グリッドに検出された住居跡で、切り合っている58号・61号・62号・77号・78号住居跡の中では一番古い。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明であるが一辺6.5m前後で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－76°40′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

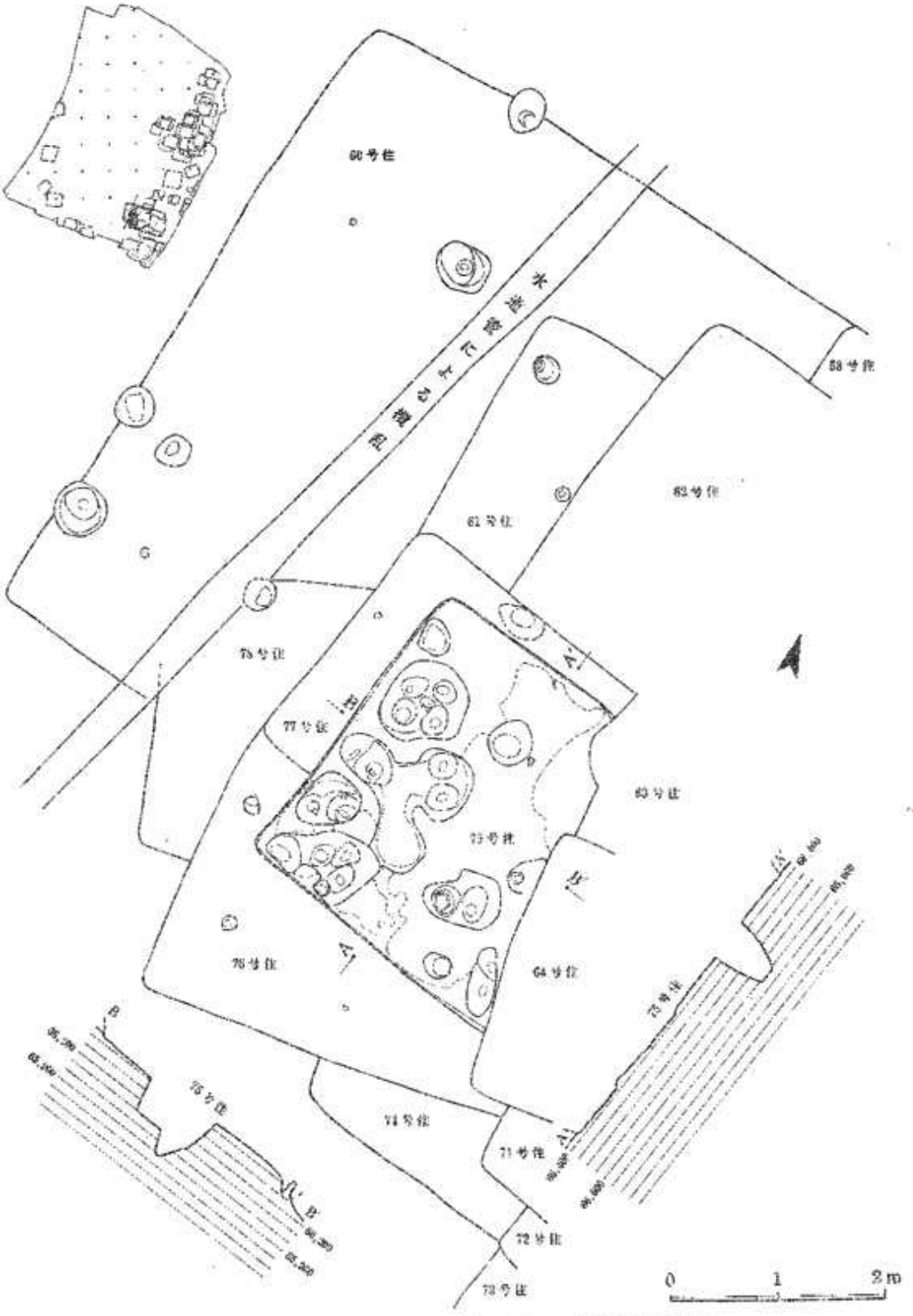
遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の坏が出土している。

61号住居跡

遺構（第87図）

6－F－72グリッドに検出された住居跡で、切り合っている62号・77号住居跡より古くて、60号住居跡より新しい。住居跡は、削平により残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－76°30′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、全く出土していない。



第87図　60号・61号・74号・75号・76号・77号・78号住居跡実測図

62号住居跡

遺構（第62図）　出土遺物（第102図7・第103図9・第44表7・第45表9）

6－F－71・72グリッドに検出された住居跡で、切り合っている63号・65号・77号住居跡より古く、58号・60号・61号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いによって残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－20°00′－Eをとる。北側壁には、袖を黄白色粘土で作ったカマドが検出された。硬化面の確認や柱穴の特定はできなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の坏や甕と共に不明鉄器1点が出土している。この住居跡からは、土師器坏の外面体部下半に圏圏とヘラ書きされたものが1点出土している。

63号住居跡

遺構（第88図）　出土遺物（第89図・第102図8・第103図10・第35表・第44表8・第45表10）

6－F－71・90グリッドに検出された住居跡で、切り合っている64号住居跡より古く、62号・65号・66号・75号・77号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺4.56m、短辺4.32mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－83°00′－Wをとる。西側壁のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドが検出され、硬化面は中央付近に広がっている。柱穴は、特定はできなかった。

遺物は、細片が多いことから図化できたものは少ないが、土師器の坏や甕・甑・鍋、須恵器の坏などと共に鉄製刀子が1点出土している。また、この住居跡からは土師器坏の外面体部に圏？と書かれた墨書土器が1点出土している。

64号住居跡

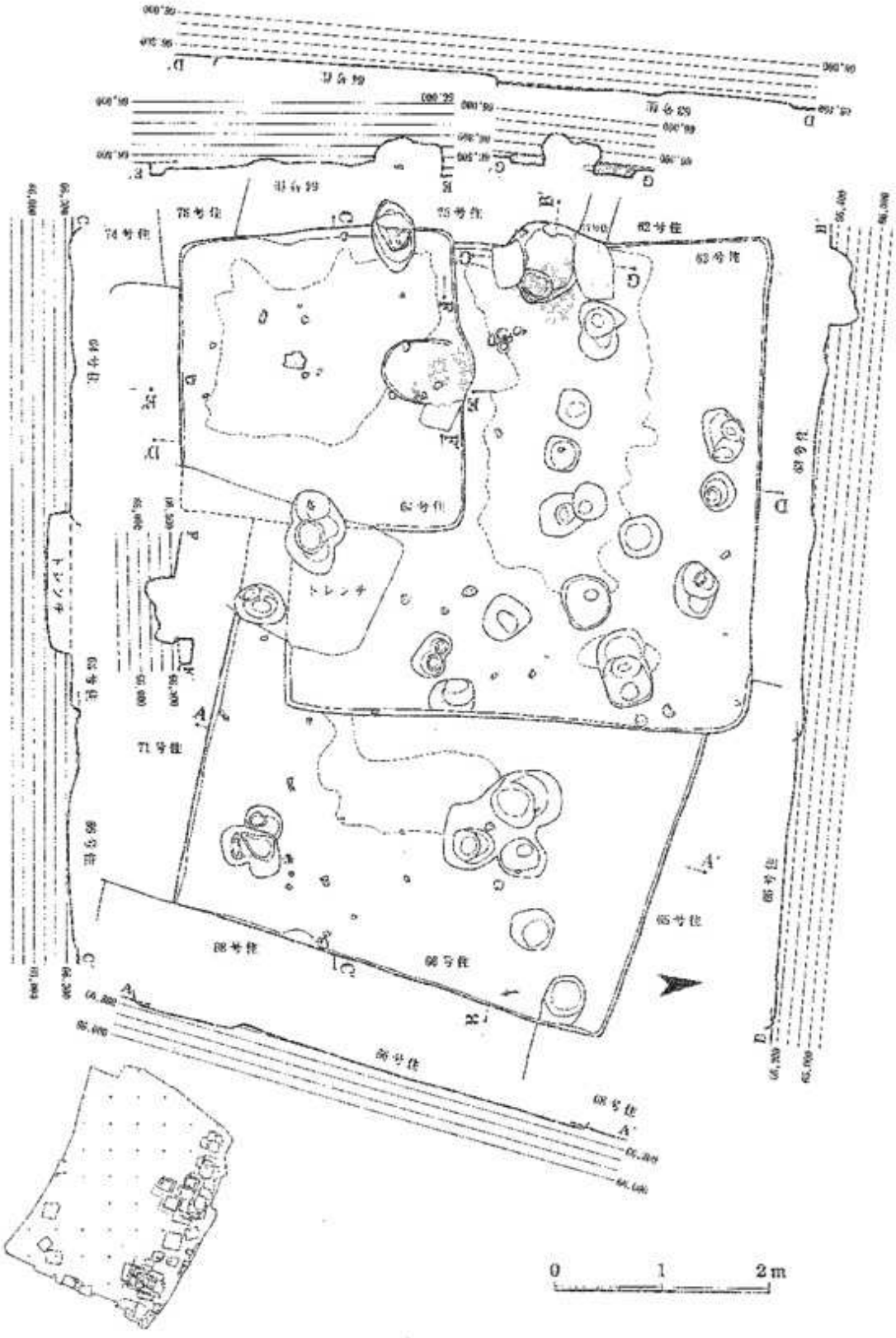
遺構（第88図）　出土遺物（第90図・第36表）

6－F－71・72・90グリッドに検出された住居跡で、切り合っている63号・66号・71号・75号・76号住居跡の中では一番新しい。住居跡の規模は、長辺2.78m、短辺2.64mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－3°30′－Eをとる。北側壁のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドが検出され、硬化面は中央付近を中心に壁際まで広がっている。柱穴は、特定はできなかった。

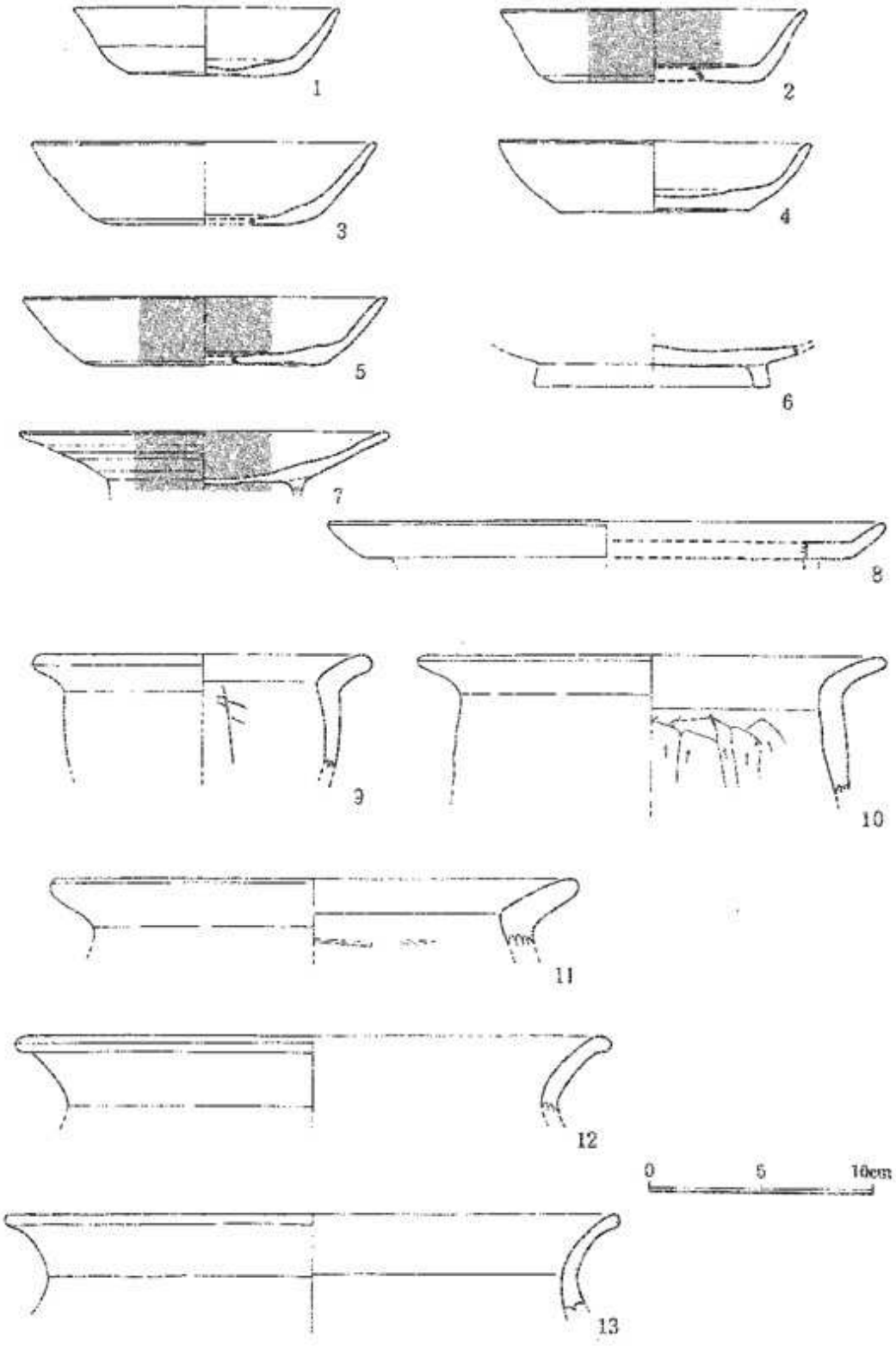
遺物は、細片が多いことから図化できたものは少ないが、土師器の坏や甕・椀・甑、須恵器の蓋などが出土している。

65号住居跡

遺構（第92図）



第88図　63号・64号・66号住居跡実測図



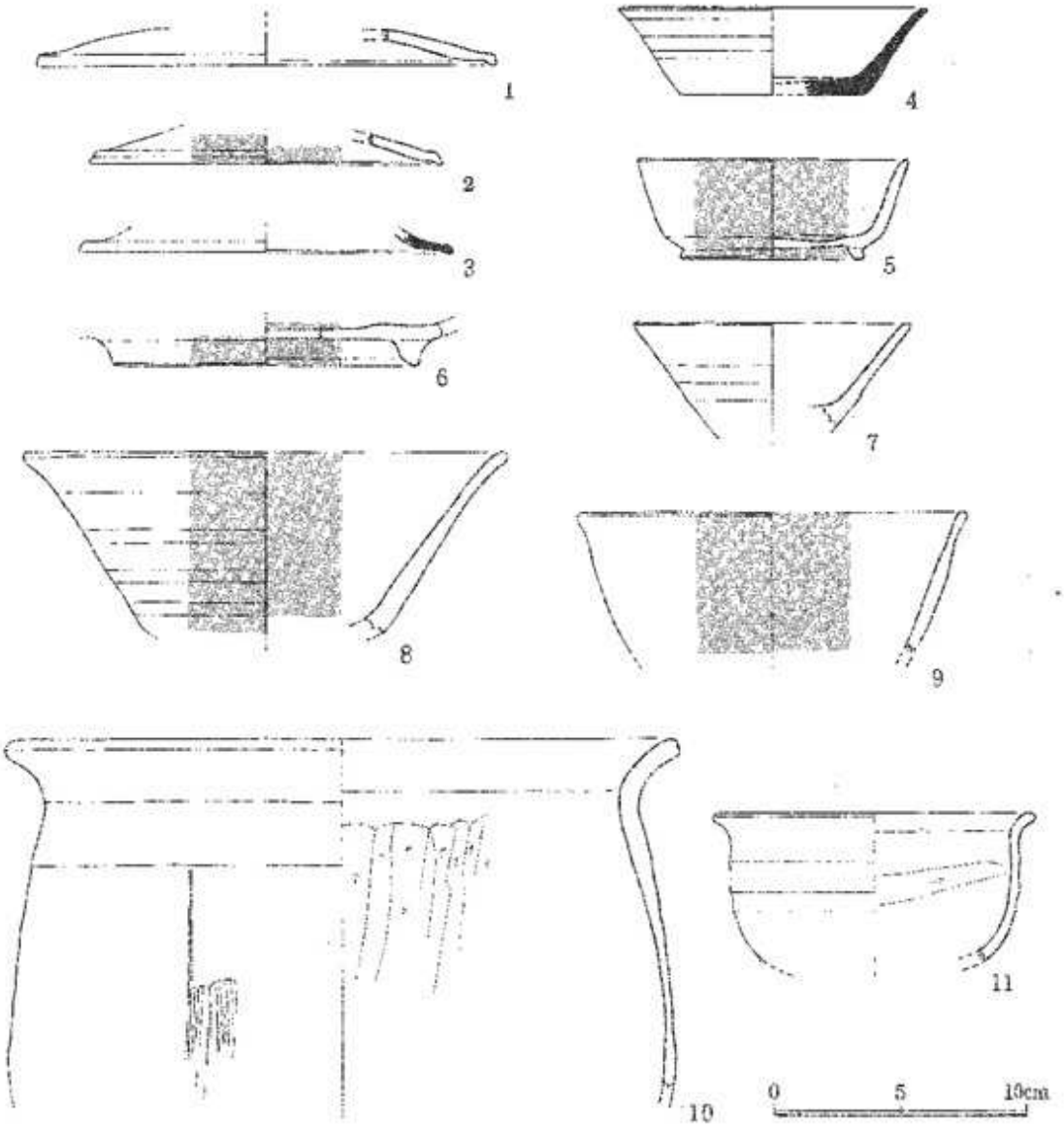
第89図　63号住居跡内出土土器実測図

第35表　63号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
89－1	坏	口径 12.6 器高 3.7 底径 8.6	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり，端部はやや丸味をもつ	砂粒及び褐色土粒を含む	淡褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
89－2	坏	口径 13.8 器高 3.3 底径 9.0	体部は外方に開きながらやや外反気味に立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母含む	褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
89－3	坏	口径 15.4 器高 3.7 底径 8.0	体部は外方に開きながらやや大きく外反気味に立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石、金雲母を含む	黄褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
89－4	坏	口径 14.1 器高 3.3 底径 8.5	体部は内湾しながら立ち上がり、外方に開く。端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
89－5	坏	口径 16.2 器高 3.1 底径 11.6	体部は外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石を含む	淡褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
89－6	坏か鉢	現存高 1.5 高台径 10.6 高台高 1.0	底方形の高台を胴部が外方に開くように張り付ける。端部はアデで平坦である。	砂粒及び褐色土粒、角セン石を含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○高台張り付け ○底部のみ残存
89－7	壺	口径 16.6 現存高 2.7	体部は大きく外方に開き直線的に立ち上がる。端部は丸味をもつ	角セン石、金雲母を少量含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○高台張り付け
89－8	甕	口径 24.8 現存高 1.7	体部は緩かく外方に開き直線的に立ち上がる。端部は丸味をもつ。底面には高台を張り付けた痕跡が残る。	砂粒及び角セン石を少量含む	赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○高台張り付け
89－9	甕	口径 15.2 現存高 5.1	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部がやや外反気味に外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、角セン石を含む	明褐色	良	口縁部ヨコナデ 胴部不明	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り	○土師器
89－10	甕	口径 21.0 現存高 6.9	頸部で屈曲した後、口縁部が直線的に外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び褐色土粒、径1～2mmの小石、金雲母を含む	淡褐色	良	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り	○土師器
89－11	甕	口径 23.6 現存高 3.0	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、金雲母を含む	淡褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器
89－12	甕	口径 26.6 現存高 3.4	頸部で屈曲した後、口縁部が外反気味に開く、端部は肥厚し丸くなる。	砂粒及び径2mm程の小石、角セン石、褐色土粒を少量含む	淡褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器
89－13	甕	口径 27.6 現存高 4.0	頸部で屈曲した後、口縁部が外反し外方に開く、端部は丸味を帯びる。	砂粒を多く含み、径2mmの小石、角セン石を少量含む	淡褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器

6−F−71、6−G−70グリッドに検出された住居跡で、切り合っている63号・66号・68号住居跡より古く、56号・57号・58号・62号・67号住居跡より新しい。住居跡の規模は、残っている北側壁が5.90mを測ることから他もほぼ同規模で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N−18°30′−Eをとる。北側壁のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドが検出され、硬化面は東側壁際に一部確認された。柱穴は、2個検出され4本柱の住居跡と考えられる。

遺物は、細片であることから図化できたものはないが、土師器の坏や甕、須恵器の坏などが出土している。



第90図　64号住居跡内出土土器実測図

第36表　64号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
90 1 1	壺	口径 18.2 現存高 1.4	口縁部は屈曲し、明瞭な段を有する。端部はやや外方に開き尖がる。天井部は低い。	砂粒及び角セン石、金雲母を含む	明褐色	やや不良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○天井部欠失
90 1 2	壺	口径 14.0 現存高 1.2	口縁部は屈曲し、明瞭な段を有する。端部は外方に開き尖がる。天井部は低い。	砂粒及び角セン石を含む	赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○天井部欠失
90 1 3	壺	口径 14.4 現存高 0.8	口縁部は屈曲し、明瞭な段を有する。端部は外方に開き尖がる。	緻密 砂粒を含む	淡灰色	堅緻 良	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器
90 1 4	坏	口径 12.2 器高 3.5 底径 7.4	体部は外方に開きながらやや外反気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	緻密 砂粒を多く含む	茶褐色	やや不良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器
90 1 5	坏	口径 10.4 器高 4.2 高台径 7.4 高台高 0.4	体部は外方に開きながらほぼ直線的に立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。底部には体色との差に方形の高台を端部が外方に開くように貼り付ける。	砂粒及び長石、金雲母を多く含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○高台貼り付け
90 1 6	坏	現存高 1.2 高台径 12.2 高台高 1.0	底部に方形の高台をほぼ垂直に貼り付ける。端部はやや丸味をもつ。	砂粒及び径1mm程の小石、角セン石、金雲母を含む	淡褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○高台貼り付け ○底部のみ残存
90 1 7	壺	口径 11.0 現存高 4.2	体部は大きく外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び径2mm程の小石、角セン石を少量含む	淡褐色	やや良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○底部欠失
90 1 8	壺	口径 19.2 現存高 7.3	体部は大きく外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部付近でやや外反する。端部は丸くなる。	砂粒を多く含み、角セン石、金雲母を少量含む	淡褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○底部欠失
90 1 9	壺	口径 15.4 現存高 5.6	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石を含み、角セン石を少量含む	明褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○底部欠失
90 1 10	壺	口径 26.8 現存高 13.9 胴部径 26.4	頸部で屈曲した後、口縁部が外反気味に外方に開く。端部は丸くなる。	砂粒及び径2～5mm程の小石、角セン石、金雲母、長石を含む	淡褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
90 1 11	鉢	口径 12.8 現存高 6.0	底部から内湾しながら外方に開き体部上半は直口する。口縁部は短かく外反し外方に開く。端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石を含む	明褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ 胴部にヘラ削りが認められる	○土師器 ○底部欠失

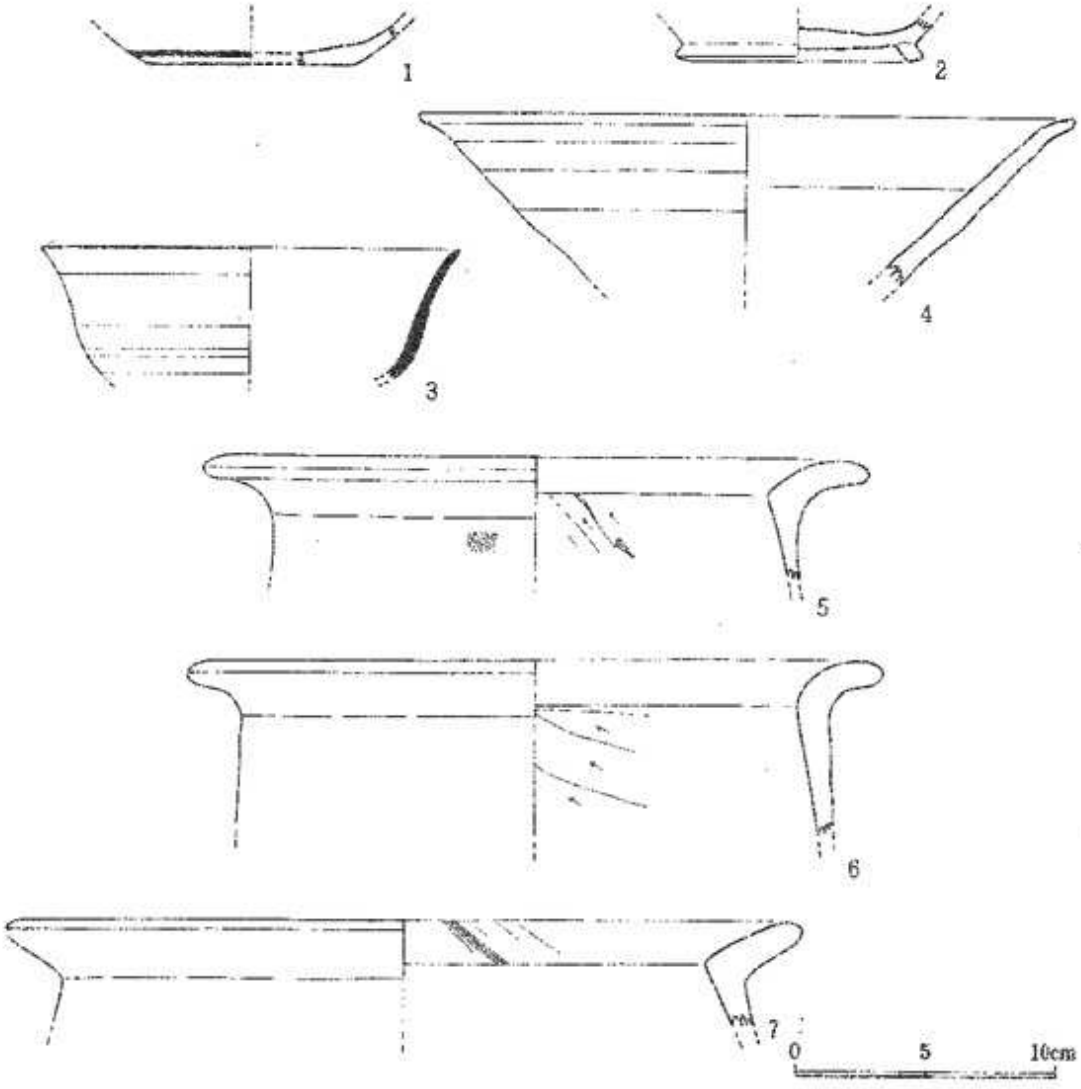
66号住居跡

遺構（第88図）　出土遺物（第91図・第102図9・第37表・第44表9）

6－F－71・90グリッドに検出された住居跡で、切り合っている63号・64号住居跡より古く、65号・68号・71号住居跡より新しい。住居跡の規模は、残っている東側壁が4.40mを測ること

から他もほぼ同規模で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－21°00′－Eをとる。住居跡内からは、硬化面が中央付近に一部検出された。しかし、カマドの検出や柱穴の特定はできなかった。

遺物は、ほとんどが細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の坏や・椀・甕、それに須恵器の坏などが出土している。また、この住居跡からは土師器坏の内面底部に歪とヘラ書きされたものが1点出土している。



第91図　66号住居跡内出土土器実測図

第37表　66号住居跡内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
91－1	坏	現存高 1.3 底径 7.8	体部は内湾気味に外方に開きながら立ち上がる。	砂粒及び角セン石、金雲母を含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部 手転ヘラ切り ヘラ磨きにより線文を施す（同心円）	ヨコナデ	○土師器 ○底部のみ残存
91－2	坏	現存高 1.4 高台径 9.6 高台高 0.7	体部との境に長方形の高台を接着が外方へ開くように貼り付ける。	砂粒及び金雲母を含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○高台貼り付け ○底部のみ残存
91－3	椀	口径 16.2 現存高 3.0	体部は内湾気味に外方に開きながら立ち上がり、口縁部が外方に開く。端部はやや尖がり気味。	緻密 砂粒を含む	灰白色	堅緻 良	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器 ○底部欠失
91－4	甕	口径 25.2 現存高 6.5	体部は大きく外方に開き直線的に立ち上がり、口縁部が若干外方に開く、端部はナデて平坦にしている。	砂粒及び褐色土粒を少量含む	淡褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○底部欠失
91－5	甕	口径 25.6 現存高 4.7	頸部で屈曲した後、口縁部が外反しながら大きく外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、角セン石、金雲母を含む	淡褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
91－6	甕	口径 26.8 現存高 6.4	頸部で屈曲した後、口縁部が外反しながら大きく外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、径2mm弱の小石、角セン石、金雲母を多く含む	淡褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 横方向が乱れている為不明	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
91－7	甕	口径 30.6 現存高 4.1	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び径1～2mm弱の小石、角セン石、金雲母を含む	淡褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器

67号住居跡

遺構（第92図）

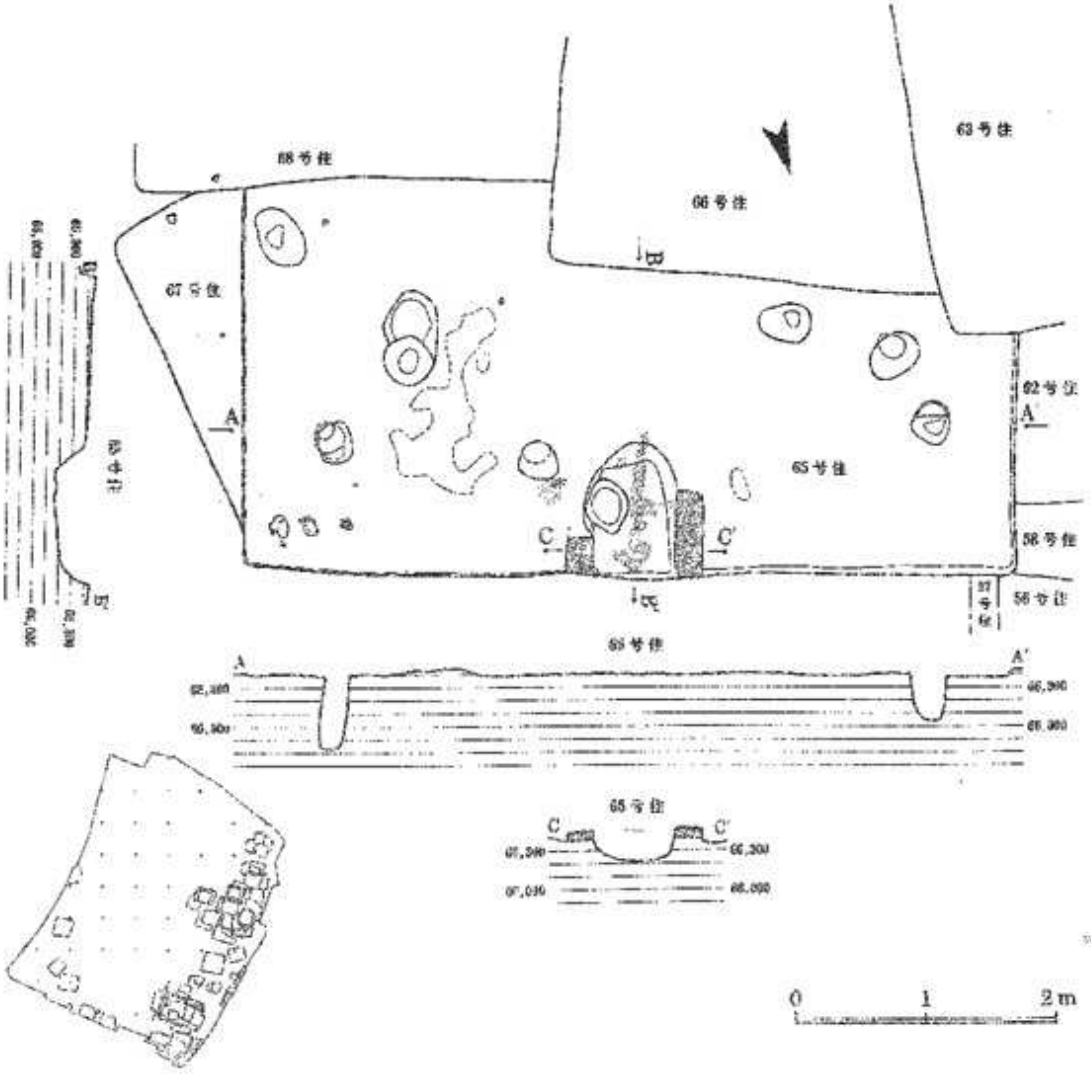
6－G－80グリッドに検出された住居跡で、切り合っている65号・68号住居跡より古い。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－77°30′－Eをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、ほとんどが細片であることから図化できたものはないが、土師器の甕が出土している。

68号住居跡

遺構（第93図）　出土遺物（第94図・第103図11、12・第38表・第45表11、12）

6－F－71・90、6－G－80・81グリッドに検出された住居跡で、切り合っている66号・71号住居跡より古く、65号・67号・68号・71号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であるが、残っていた東側壁の長さが4.02mを測るこ



第92図　65号・67号住居跡実測図

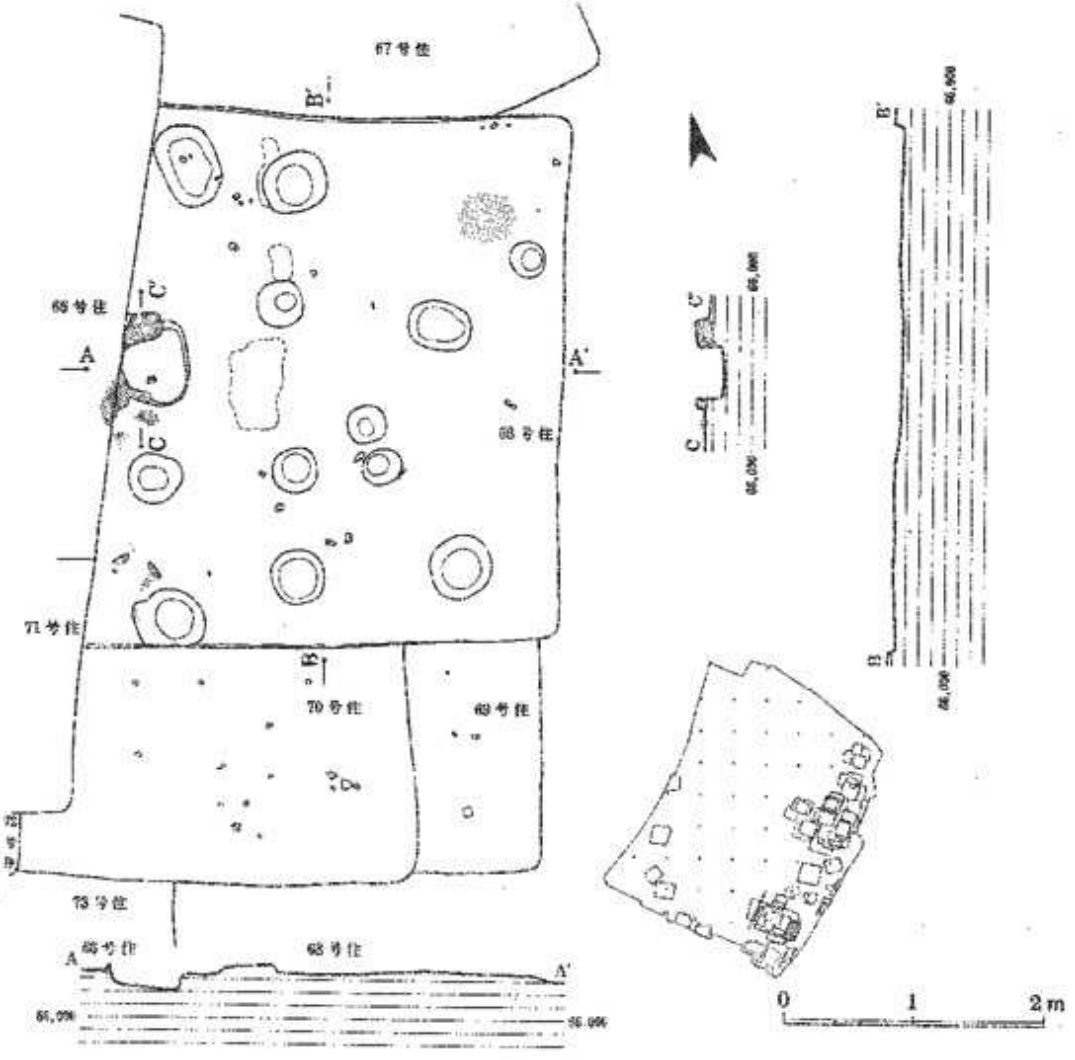
とからほぼ同規模で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－71°00′－Wをとる。西側壁のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドが検出され、硬化面はカマドの近くに一部確認された。柱穴は、特定できなかった。

遺物は、少量で、またほとんどが細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の坏や甕、須恵器の坏などと共に鉄製刀子が2点出土している。

69号住居跡

遺構（第93図）　出土遺物（第95図・第39表）

6－F－90グリッドに検出された住居跡で、切り合っている68号・70号住居跡の中では一番



第93図　68号・69号・70号住居跡実測図

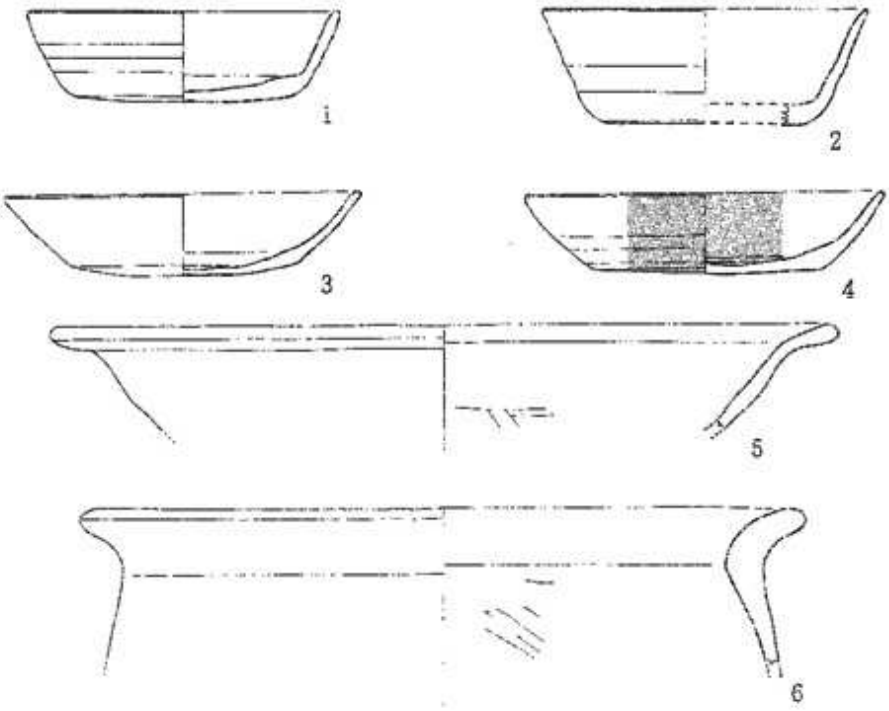
古い。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明であるが隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－71°30′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、またほとんどが細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の坏や甕などが出土している。

70号住居跡

遺構（第93図）

6－F－90グリッドに検出された住居跡で、切り合っている68号・71号・72号住居跡より古

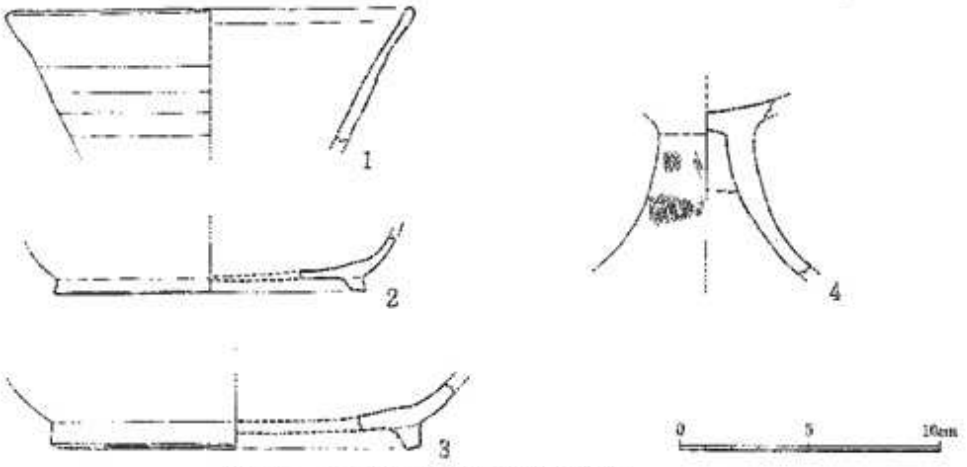


第94図　68号住居跡内出土土器実測図

0　5　10cm

第38表　68号住居跡内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
94－1	坏	口径 12.0 器高 3.5 底径 8.6	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石、金雲母を含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○十師器
94－2	坏	口径 12.5 器高 4.4 底径 7.4	体部は外方に開きながらほぼ直線的に立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び長1～2mm程の小石、角セン石を含む	灰褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○上師器
94－3	坏	口径 13.8 器高 4.1 底径 9.0	体部は大きく外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。底部は丸底である。	砂粒及び角セン石、金雲母を含む	淡黄色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○上師器
94－4	坏	口径 13.8 器高 3.2 底径 8.9	体部は大きく外方に開きながら、やや内湾気味に立ち上がり、端部はやや丸くなる。	砂粒及び白色小石、角セン石、金雲母を含む	明褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
94－5	鉢	口径 30.4 現存高 4.1	頸部で若干外方に張出し口縁部が水平近くに開き緩かく直線的に立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び茶色土粒、径1～2mm程の小石、金雲母を多く含む	明褐色	良	器面が荒れている為不明	器面が荒れている為不明	○十師器 ○底部欠失
94－6	甕	口径 28.0 現存高 5.9	頸部で屈曲した後、口縁部が外方に開き外反しながら立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び褐色土粒、径2mm程の小石、角セン石、金雲母を多く含む	淡褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 不明	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○十師器



第95図　69号住居跡内出土土器実測図

第39表　69号住居跡内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
95-1	椀	口径 15.6 現存高 5.2	体部は外方に開きながら緩慢に立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び角ヒン石、金雲母を含む	明褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○底部欠失
95-2	杯	残存高 2.1 高台径 12.0 高台高 0.6	体部は外方に開きながら、内湾気味に立ち上がり、底部との境には方形の高台を端部が外方に開くように貼り付ける。	砂粒及び金雲母を多く含む	明褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○底部のみ残存 ○高台貼り付け
95-3	杯	残存高 2.2 高台径 14.2 高台高 1.0	体部との境に長方形の高台を端部が外方に開くように貼り付ける。	砂粒及び径1mm程の小石、角ヒン石、金雲母を含む	明褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○底部のみ残存 ○高台貼り付け
95-4	鉢	現存高 0.8	縁部は側端部に向って外反しながら外方に開く	砂粒及び白色小石を含む	明褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○杯部と脚部欠失

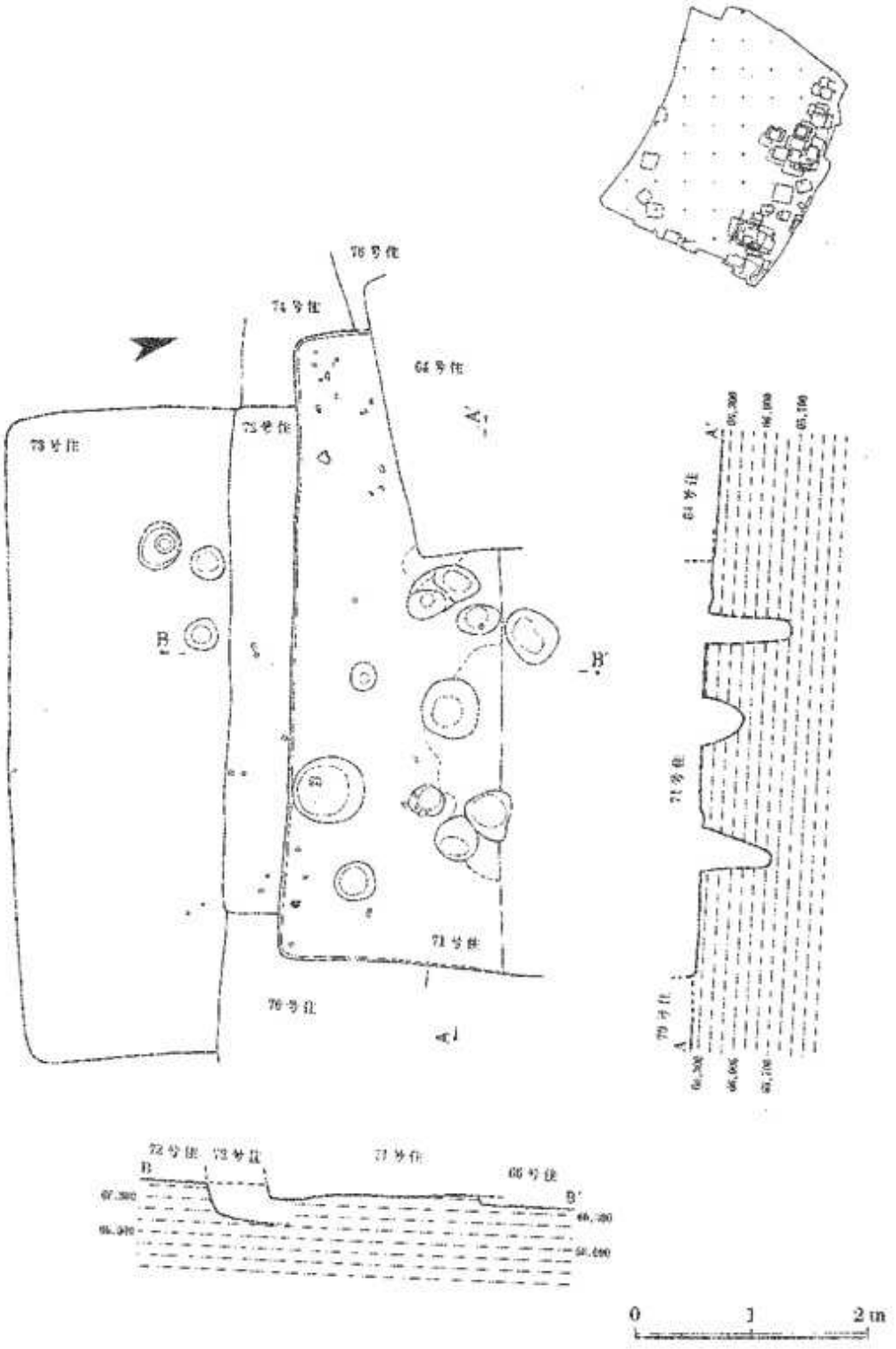
く、69号・73号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから、規模は不明であるが隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－72°30′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、またほとんどが細片であることから図化できたものはないが、土師器の杯や甕が出土している。

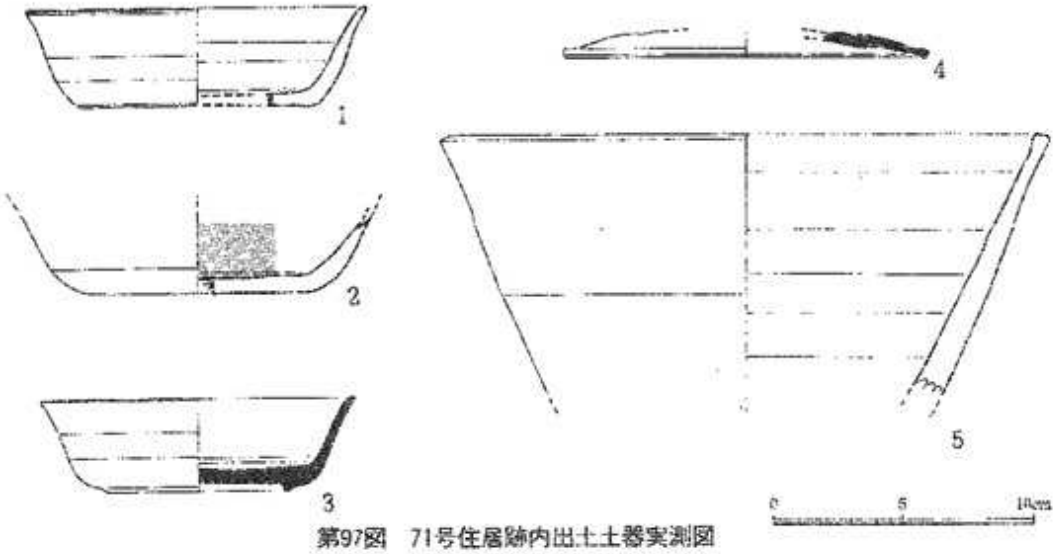
71号住居跡

遺構（第96図）　出土遺物（第97図・第40表）

6－F－90グリッドに検出された住居跡で、切り合っている63号・64号・66号住居跡より古く、68号・70号・72号・79号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が



第96図　71号・72号・73号住居跡実測図



第97図　71号住居跡内出土土器実測図

第40表　71号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
97 1 1	坏	口径 13.1 器高 3.8 底径 9.0	体部は外方に開きながら、やや内彎気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。端部はやや丸く立る。	砂粒及び角セン石、長石、金雲母を含む	明褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
97 1 2	坏	現存高 3.1 底径 8.8	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がる。	砂粒及び径1～2mm程の小石、金雲母を多く含む	外面 暗色 内面 赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内面に赤色顔料塗布 ○口縁部欠失
97 1 3	坏	口径 12.1 器高 3.6 高台径 7.0 高台高 0.2	体部は外方に開きながらやや外反気味に立ち上がり、端部は丸味をもつ。断面が三角形の低い高台を貼り付ける。端部は丸味をもつ。	緻密 砂粒及び白色小石を含む	淡色	軟質良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け
97 1 4	蓋	口径 14.0 現存高 1.0	口縁部は屈曲せず端部はナデて平坦にしている。天井部は低い。	緻密 砂粒を少量含む	淡色	強質良	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器 ○天井部欠失
97 1 5	鉢	口径 23.4 現存高 10.1	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部はナデて平坦にしている。	砂粒及び白色小石、角セン石、金雲母を含む	明褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○底部欠失

あまり良くないが、残っていた南側壁の長さが5.50mを測ることからほぼ同規模で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－71°30′－Wをとる。住居跡内からは、硬化面が66号住居跡の南側壁近くに一部確認されたが、カマドの検出や柱穴の特定はできなかった。

遺物は、少量で、またほとんどが細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の坏や蓋・甕、それに須恵器の坏や蓋などが出土している。

72号住居跡

遺構（第96図）

6－F－90グリッドに検出された住居跡で、切り合っている71号住居跡より古く、70号・73号・79号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く範囲だけの確認であるが、一辺4.38m前後の規模で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－72°00′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、またほとんどが細片であることから図化できたものはないが、土師器の坏や甕が出土している。

73号住居跡

遺構（第96図）

6－F－90グリッドに検出された住居跡で、切り合っている70号・72号・79号住居跡の中で一番古い。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く範囲だけの確認であるが、一辺5.58m前後の規模で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－74°30′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、またほとんどが細片であることから図化できたものはないが、土師器の坏や甕が出土している。

74号住居跡

遺構（第87図）

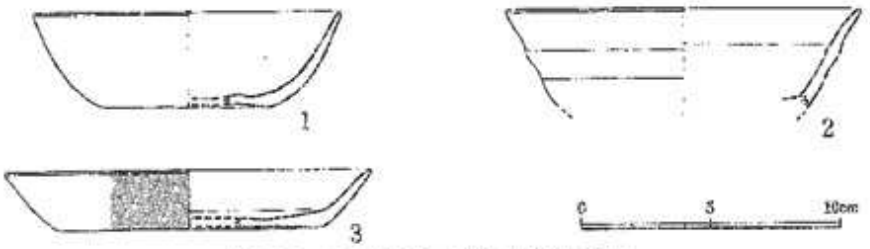
6－F－89・90グリッドに検出された住居跡で、切り合っている71号・72号・73号・76号住居跡の中で一番古い。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから規模は不明であるが隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－71°30′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、またほとんどが細片であることから図化できたものはないが、土師器の坏や甕が出土している。

75号住居跡

遺構（第87図）　出土遺物（第98図・第103図13・第41表・第45表13）

6－F－71・72・89・90グリッドに検出された住居跡で、切り合っている63号・64号住居跡より古く、76号・77号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く範囲だけの確認であるが、一辺3.04m前後の規模で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、



第98図　75号住居跡内出土土器実測図

第41表　75号住居跡内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
98-1	坏	口径 13.8 器高 3.7 底径 6.4	体部は内湾しながら立ち上がり、外方に開く。端部は丸味をもつ。底部はやや上げ底気味。	砂粒及び角セン石を含む	淡褐色	やや不良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
98-2	坏	口径 13.8 器高 3.8	体部はやや外反気味に立ち上がり外方に開く。端部は丸くなる。	砂粒及び径1mm程の小石、角セン石、金雲母を含む	橙褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○底部欠失
98-3	皿	口径 14.1 器高 2.3 底径 10.0	体部は直線的に短かく立ち上がり大きく外方に開く。端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石、金雲母を含む	淡褐色	やや不良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布

N－71°00′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、またほとんどが細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の坏や皿・甕などと共に鉄斧が1点出土している。

76号住居跡

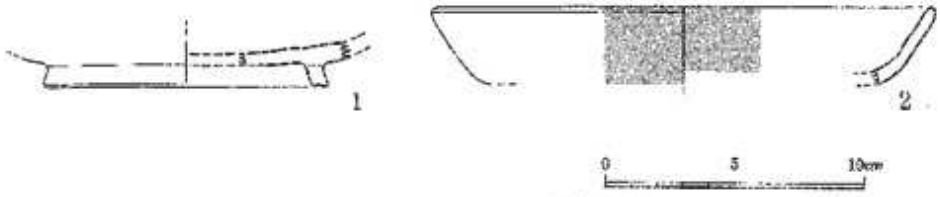
遺構（第87図）　出土遺物（第102図12・第44表12）

6－F－72・89・90グリッドに検出された住居跡で、切り合っている64号・71号・75号・77号住居跡より古く、74号・78号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから規模は不明で、隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－4°00′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、またほとんどが細片であることから図化できたものはないが、土師器の坏や甕が出土している。この住居跡からは、土師器坏の外面底部に墨書のあるものが1点出土している。墨書の判読は、出来ない。

77号住居跡

遺構（第87図）　出土遺物（第99図・第42表）



第99図　77号住居跡内出土土器実測図

第42表　77号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
99-1	坏	現存高 1.2 高台径 10.8 高台高 0.9	体部との境に長方形の高台を端部が外方に開くように貼り付ける。	砂粒及び角セン石を含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○高台貼り付け ○底部のみ残存
99-2	皿	口径 19.4 現存高 3.0	体部は緩傾斜に急かく立ち上がり端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を多く含む	赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○底部欠失

6－F－71・72グリッドに検出された住居跡で、切り合っている63号・75号住居跡より古く、60号・61号・62号・76号・78号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く、また範囲だけの確認であることから規模は不明で、隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－70°30′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、またほとんどが細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の坏や皿・甕が出土している。

78号住居跡

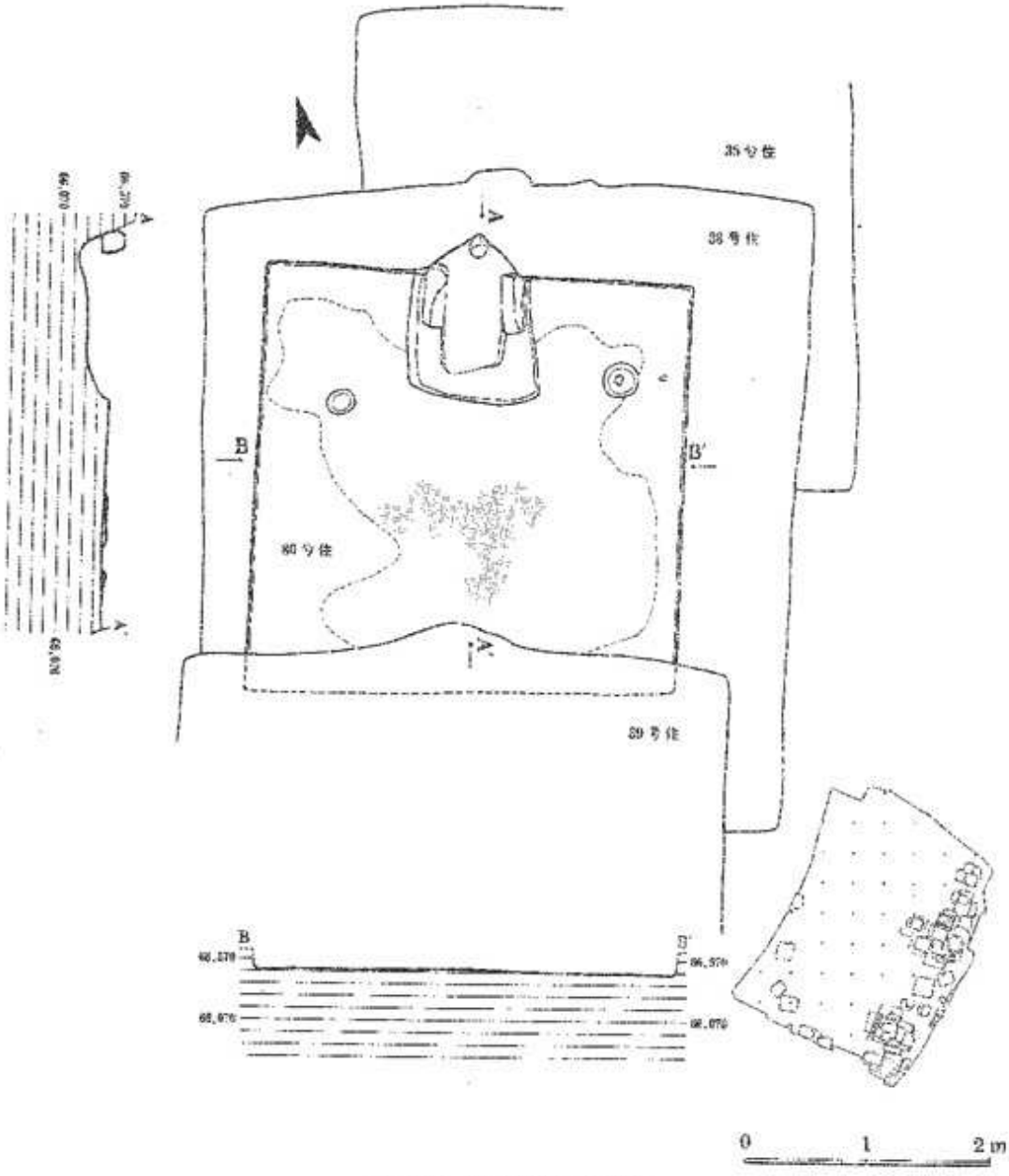
遺構（第87図）

6－F－72・89グリッドに検出された住居跡で、切り合っている76号・77号住居跡より古く、60号住居跡より新しい。住居跡は、削平や切り合いにより残存状態が悪く範囲だけの確認であるが、一辺2.72m前後の規模で隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－72°30′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出されなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、またほとんどが細片であることから図化できたものはないが、土師器の坏や甕が出土している。

80号住居跡

遺構（第100図）　出土遺物（第101図・第43表）



第100図　80号住居跡実測図

第101図　80号住居跡内出土土器実測図

第43表　80号住居跡内出土土器観察表

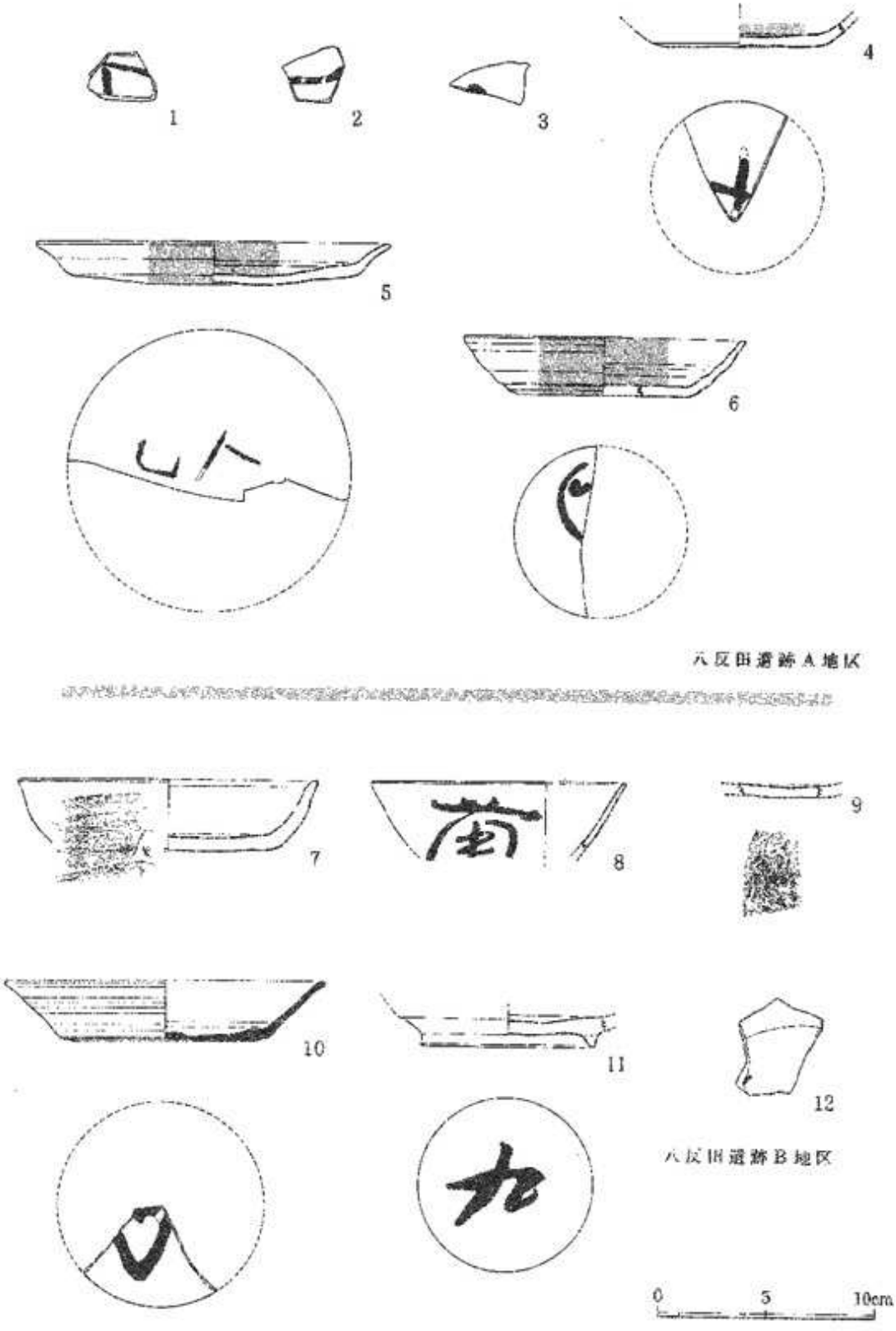
図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
101 - 1	坏	口径 15.0 現存高 3.1	体部は直線的に立ち上がり外方に開く。端部は丸味をもつ	砂粒及び角セン石、金雲母を含む	赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○底部欠失
101 - 2	坏	口径 14.0 器高 3.2 底径 11.3	体部は外反気味に立ち上がり、外方に開く。端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石を含む	淡赤褐色	やや不良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器

6－G－41・42グリッドに検出された住居跡で、切り合っている39号住居跡より古く、38号住居跡より新しい。住居跡は、38住居跡の上面に検出されたもので、規模は長辺3.48m、短辺3.42mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－17°00′－Eをとる。北側壁のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドがあり、煙道部は壁より若干外側にでている。硬化面は、中央付近を中心に壁際まで広がっている。また、柱穴の特定はできなかった。

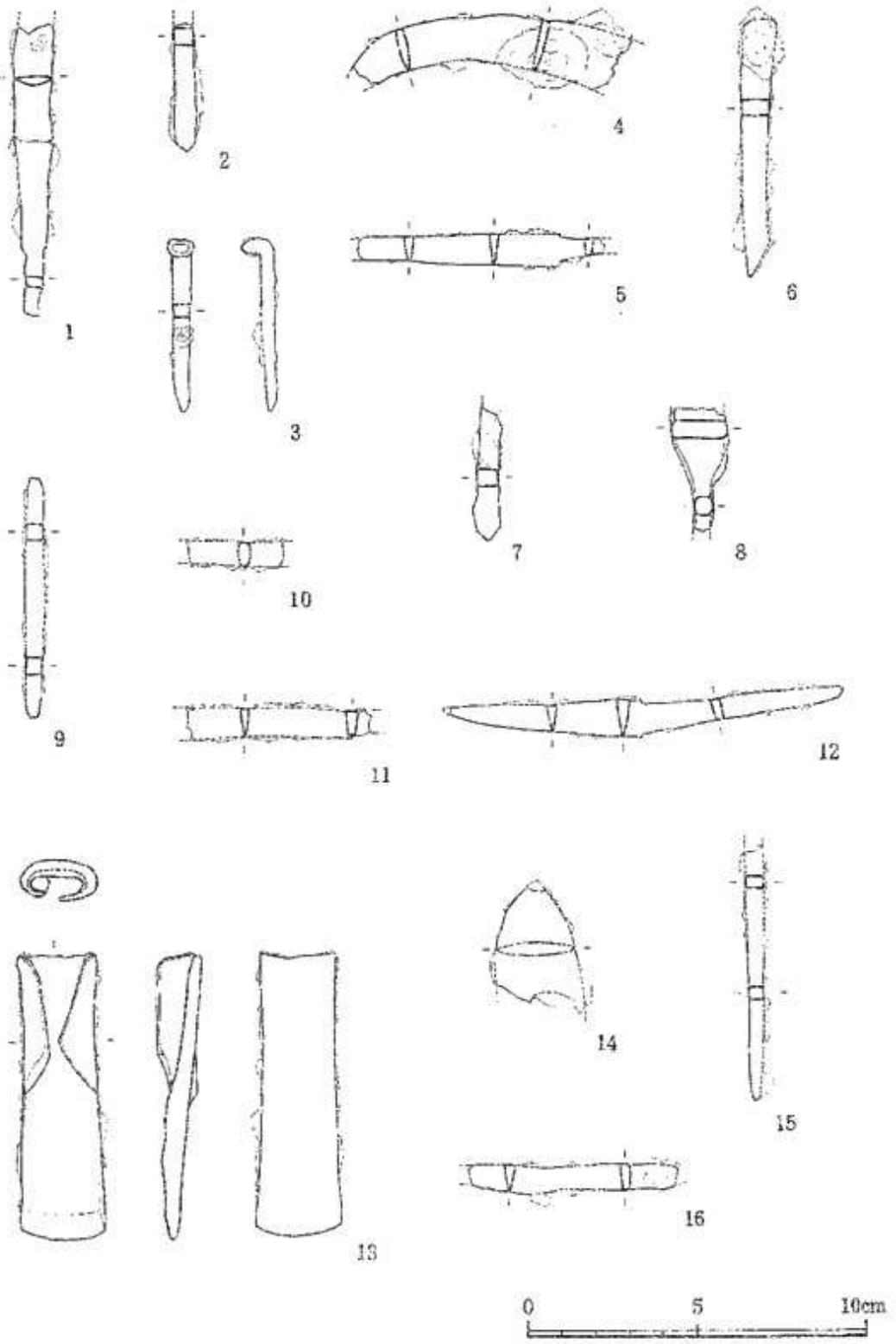
遺物は、少量で、またほとんどが細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の坏や甕が出土している。

第44表　八反田遺跡A・B地区出土墨書・ヘラ書き土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
102 - 1	坏？		坏か皿の底部片、底部外面に墨書不明	砂粒及び金雲母を多く含む	橙色	良	回転ヘラ切り	ナデ	八反田遺跡A地区4号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
102 - 2	坏？		坏か皿の底部片、底部外面に墨書不明	砂粒及び金雲母を多く含む	橙色	良	回転ヘラ切り	ナデ	八反田遺跡A地区5号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
102 - 3	坏？		坏か皿の底部片、底部外面に墨書不明	砂粒を多く含む	橙色	良	回転ヘラ切り	ナデ	八反田遺跡A地区一括 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
102 - 4	坏	現存高 1.1 底径 7.6	底部外面に墨書不明	砂粒及び金雲母を多く含む	橙色	やや不良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	八反田遺跡A地区一括 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
102 - 5	皿	口径 16.3 器高 2.0 底径 13.0	体部は外反気味に立ち上がり端部は丸くなる。底部外面に墨書不明	砂粒及び金雲母を多く含む	橙色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	八反田遺跡A地区一括 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
102 - 6	坏	口径 13.0 器高 2.7 底径 7.8	体部はやや内湾気味に立ち上がり端部は丸くなる。底部外面に墨書不明	金雲母及び角セン石を含む	橙色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	八反田遺跡A地区一括 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布



第102図　八反田遺跡A・B地区出土墨書・ヘラ書き土器実測図



第103図　八反田遺跡B地区出土鉄器実測図

第44表　八反田遺跡A・B地区出土墨書・ヘラ書き土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
102 ： 7	坏	口径 13.8 器高 3.3 底径 10.0	体部はやや内湾気味に立ち上がり端部はやや尖がり気味、体部外面で底部との境付近にヘラ書き線刻	砂粒及び金雲母を含む	橙色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	八反田遺跡B地区62号住居跡 ○土師器 ○外面に赤色顔料塗布
102 ｜ 8	椀	口径 11.8 現存高 3.0	体部は直線的に立ち上がり端部は丸味を持つ。体部外面に段状稜か	砂粒及び角セン石を含む	黄褐色	やや不良	ヨコナデ	ヨコナデ	八反田遺跡B地区63号住居跡 ○土師器
102 ： 9	坏？		坏か皿底部片、底部外面にヘラ書き線刻	金雲母を多く含む	橙色	良	回転ヘラ切り	ヨコナデ	八反田遺跡B地区66号住居跡 ○土師器
102 ： 10	坏	口径 14.8 器高 2.9 底径 9.6	体部は直線的に立ち上がり端部は丸くなる。底部外面に墨書不明	微密 砂粒を含む	灰白色	硬質 良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	八反田遺跡B地区一括 ○須恵器
102 ｜ 11	坏	現存高 1.8 高台高 0.6 高台径 8.0	底部に台形の高台を貼り付ける。体部外面に墨痕	砂粒及び金雲母を多く含む	淡黄色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	八反田遺跡B地区一括 ○土師器
102 ｜ 12	坏？		坏か皿の底部片、底部外面に墨痕不明	砂粒を多く含む	橙色	良	回転ヘラ切り	ヨコナデ	八反田遺跡B地区76号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布

第45表　八反田遺跡B地区出土鉄器観察表

図版番号	出土遺構	器種	法量（cm）	特徴	備考
103 ： 1	15号住居跡	鏃？	全長8.7 身長6.7　茎長2.0 身幅1.1　茎幅0.5 身厚0.3　茎厚0.4	身の断面はレンズを呈する	先端部欠失
103 ｜ 2	27号住居跡	茎？	現存長3.8 幅6.5 厚0.5	断面は方形を呈する	茎部分
103 ｜ 3	39号住居跡	釘	全長5.2 幅0.5 厚0.4	断面は方形を呈し、頭部分を曲げている	完形品
103 ： 4	〃	鏃	全長8.2 先端部1.3 茎部1.8 厚0.2		先端部及び茎部欠失
103 ｜ 5	〃	刀子	現存長7.3 〃身長6　現存茎長1.3 身幅1　茎幅0.6 身厚0.3　茎厚0.3～0.2	両関	茎の一部及び刃先端部欠失

第45表　八反田遺跡B地区出土鉄器観察表

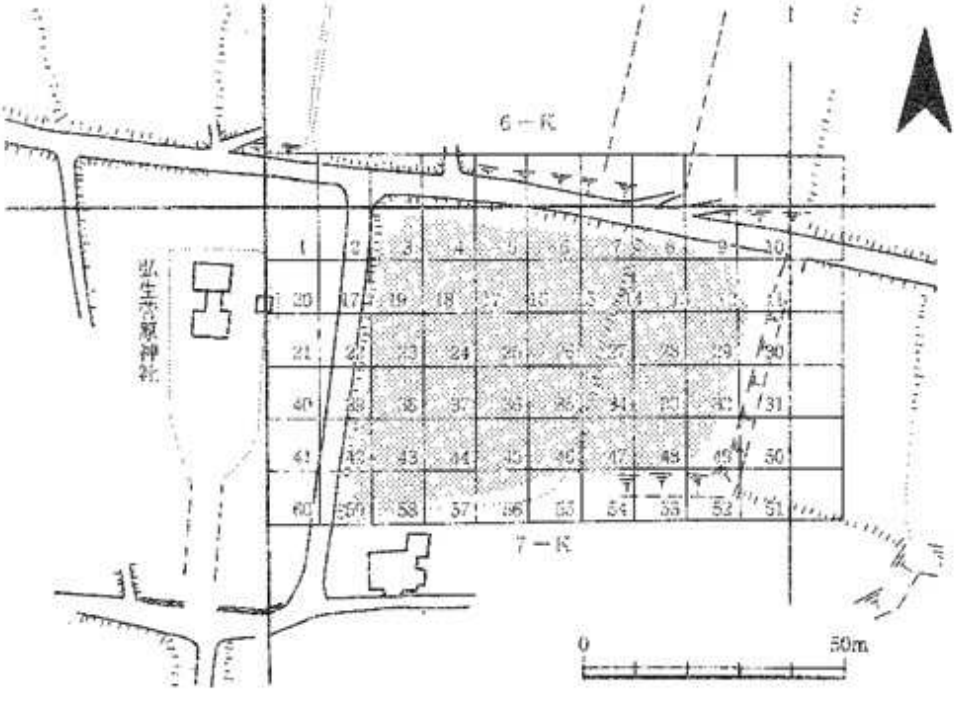
図版番号	出土遺構	種類	法量（cm）	特徴	備考
103 - 6	38号住居跡	不明	全長8 幅1～0.7 厚0.5	断面は長方形を呈する	
103 - 7	46号住居跡	茎？	現存長4.0 幅0.6 厚0.5		
103 - 8	〃	不明	現存長3.7 現存身長2.4　現存茎長1.3 身幅1.8　茎幅0.6 身厚0.7　茎厚0.6	断面は長方形を呈し、刃部はない	茎の一部及び身先端部欠失
103 - 9	62号住居跡	不明	全長7.1 幅0.5 厚0.5		
103 - 10	63号住居跡	刀子茎？	現存長2.9 幅0.7 厚0.4～0.2		身及び茎部欠失
103 - 11	68号住居跡	刀子	現存長5.5 〃身長4.6　現存茎長0.9 身幅0.8　茎幅0.7 身厚0.3　茎厚0.4～0.2		茎及び身先端部欠失
103 - 12	〃号住居跡	刀子	全長11.6 身長5.7　茎長5.9 身幅1.1　茎幅0.8 身厚0.3～0.4　茎厚0.3～0.2	関端	茎は変形品 （身先端部やや欠失）
103 - 13	75号住居跡	斧	全長6.4 幅2.6 厚0.7～0.4	袋状斧でソケット部分は両端から折り曲げている 刃は片刃	変形品
103 - 14	79号住居跡	鏃	現存長3.7 幅3.0 厚0.4	無茎三角鏃？	
102 - 15	〃	穿か茎？	現存長7.6 幅0.5～0.3 厚0.4～0.2	断面は方形を呈し、先端は尖がる	端部欠失
103 - 16	81号住居跡	刀子	現存長7.2 現存身長2.5　茎長4.7 身幅0.9　茎幅0.8 身厚0.3　茎厚0.3		身切先部分欠失

第Ⅴ章　八反畑（はったんばた）遺跡の成果

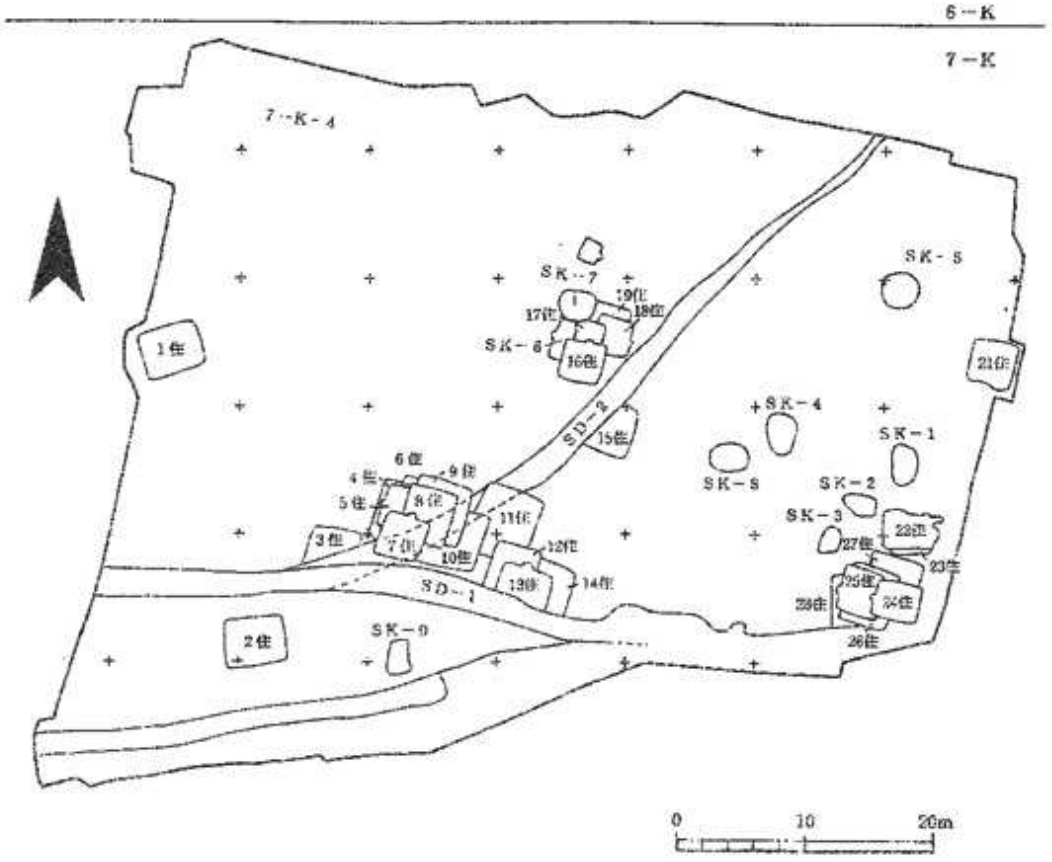
第１節　遺跡の概要

八反畑遺跡は、八反田遺跡Ａ・Ｂ地点の東約40ｍ離れた地点に所在し、道路を隔てたすぐ西側には弘生菅原神社がある。遺跡は、平成元年度工事施工区域の東端にあたり、調査区のすぐ東側は谷がはいり落ち込んでいく。但し、台地自体は谷により完全に分断されているわけではなく、幅は狭いが東側の台地につながっている。

遺跡は、大グリッドでは7－Ｋグリッドに位置している。調査面積は、約3,800㎡で海抜標高は66.4ｍから65.6ｍの高さで全体的に東側に向かって傾斜している。遺跡の時期は、検出した遺構及び出土遺物から、弥生時代と奈良・平安時代の２時期に分けられる。検出された遺構は、弥生時代の竪穴住居跡５軒と溝遺構１本、それに奈良・平安時代の竪穴住居跡22軒と土壙９基、平安時代以降の溝遺構１本である。竪穴住居跡は、弥生時代のものが調査区西側に単独で検出され、奈良・平安時代の竪穴住居跡や土壙は調査区の中央から東側区域に集中しており、複雑に切り合っている。当遺跡も、竪穴住居跡など遺構の残存状態はあまり良好でないことから、



第104図　八反畑遺跡グリッド図



第105図　八反畑遺跡遺構配置図

八反田遺跡A・B地区と同じく開田によりかなり削平を受けているものと考えられる。

第2節　遺構と遺物

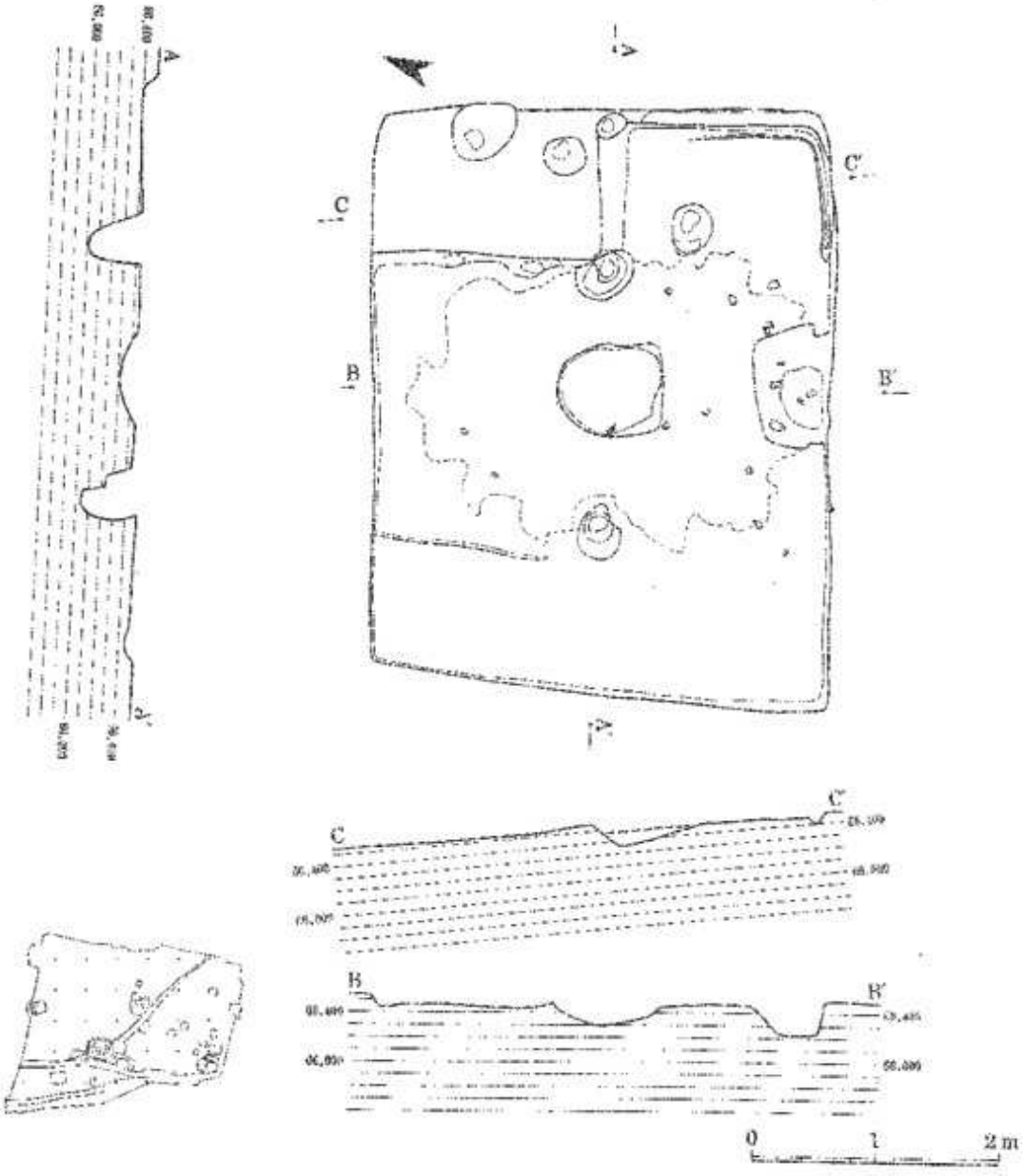
1．弥生時代

(1) 竪穴住居跡と出土遺物

1号住居跡

遺構（第106図）　出土遺物（第107図・第162図1・第46表・第68表1）

7－K－23グリッドに検出した住居跡で、規模は長辺4.50m、短辺3.68mを測り隅丸長方形を呈している。方位は、N－70°00′－Eをとる。住居跡のほぼ中央には、不整円形で断面が皿状を呈した炉があり、東側と西側の壁際にはベッド状遺構が検出された。床には、硬化面が炉を中心に壁付近まで広がっている。柱穴は、東西に2個あり、2本柱の住居跡である。また南側壁の中央には不整方形の貯蔵穴が検出された。住居跡の東南コーナー壁際には、幅10cm、深さ0.70cmの細い溝が確認されたが、途中で切れており全周には巡っていなかった。



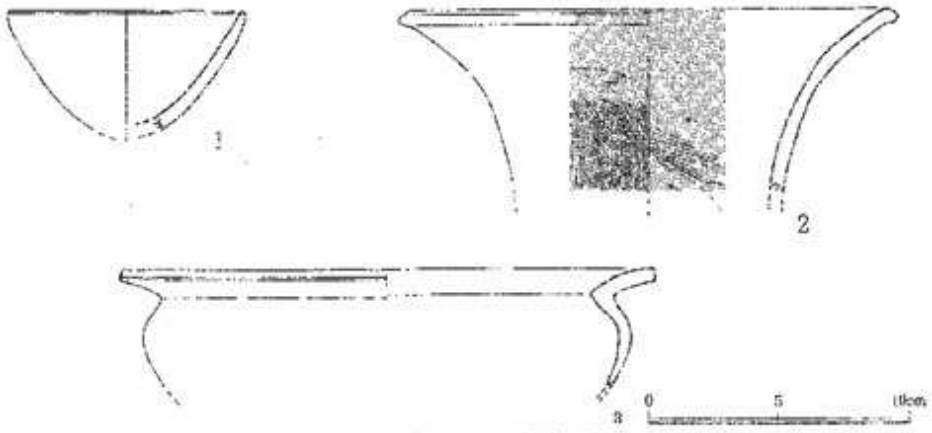
第106図　1号住居跡実測図

遺物は、少量で、ほとんどが細片であることから図化できたものは少ないが、壺や甕それに鉄斧が1点出土している。

2号住居跡

遺構（第108図）

7−K−43・44・57・58グリッドに検出した住居跡で、規模は長辺4.48m、短辺3.42mを測



第107図　1号住居跡内出土土器実測図

第46表　1号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	器型の特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
107 1 1	壺	口径 9.2 現存高 4.6	底部から直線的に立ち上がり口縁部に至り、底部は丸くなる。	砂粒、長石を多く含む	淡黄橙色	良好	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生
107 1 2	壺	口径 10.2 現存高 7.1	口縁部は外反しながらラッパ状に開き、底部はつまみ出して成形されている。	砂粒、小石を多く含む、長石、雲母、角センも少量含む	淡黄橙色	良好	胴部上半部はナデ 下半部はハケ目	胴部上半部はヨコナデ 下半部にハケ目の後ナデ	○内外面に赤色顔料塗布 ○弥生
107 1 3	浅鉢	口径 20.8 現存高 4.8	胴部でくの字に屈曲した後、口縁部に外反しながら外に開き端部はやや平坦にしている。	砂粒、小石を多く含む。長石、黒雲母を少量含む	淡黄橙色	良好	ナデ	口縁部ナデ 胴部は磨面が荒れているため不明	○弥生

り隅丸長方形を呈している。方位は、N－84°00′－Eをとる。住居跡のほぼ中央には、不整円形で断面が皿状を呈した炉があり、東側と西側の壁際にはベッド状遺構が検出された。床には、硬化面が炉を中心に壁付近まで広がっている。柱穴は、東西に2個あり、2本柱の住居跡である。また、南側壁の中央には貯蔵穴が検出された。

遺物は、少量で、細片のため図化できたものはないが、壺や甕が出土している。

3号住居跡

遺構（第109図）

7－K－37・34グリッドに検出した住居跡で、南側部分の半分程を2号溝により切られていることから規模は不明だが、一辺が3.90m前後で隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと考えられる。方位は、N－10°00′－Eをとる。住居跡内からは、東側の壁近くに硬化面が一部確認されただけで、炉や柱穴は検出されなかった。

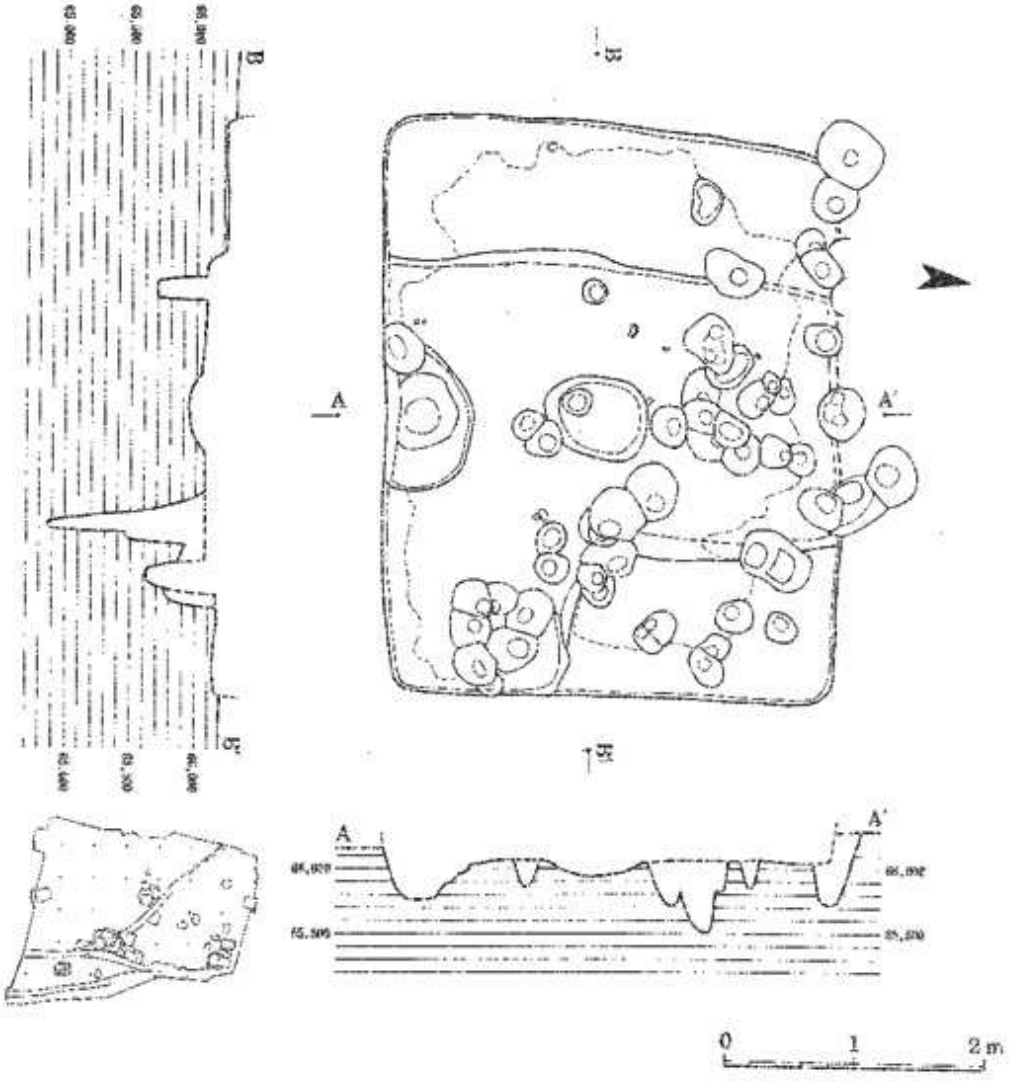
遺物は、全く出土していない。

6号住居跡

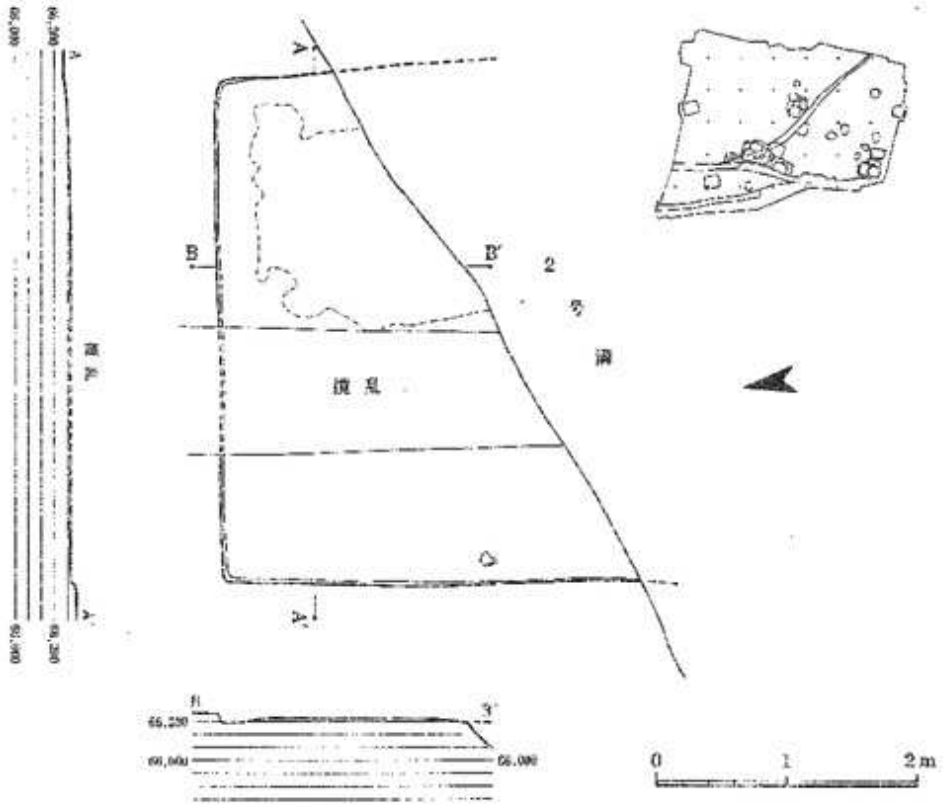
遺構（第125図）

7－K－36グリッドに検出した住居跡で、切り合っている4号・8号・9号住居跡の中では一番古い。住居跡は、そのほとんどが他の住居跡に切られ一部の確認であることから、規模や方位については不明だが、円形を呈するものと考えられる。

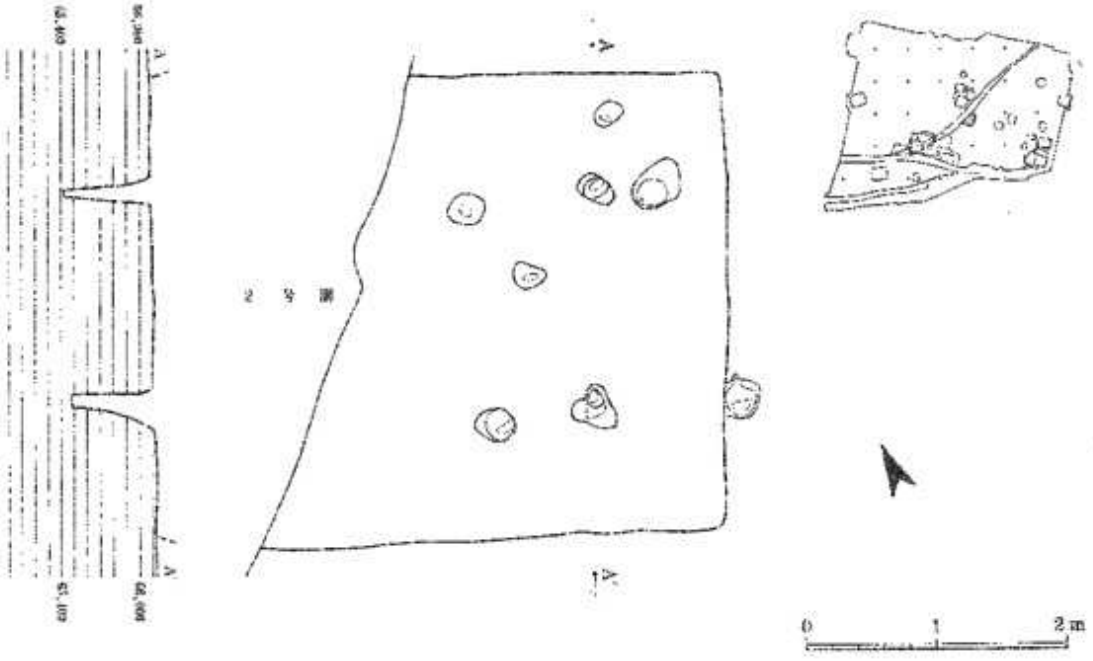
遺物は、全く出土していない。



第108図　2号住居跡実測図



第109図　3号住居跡実測図



第110図　15号住居跡実測図

15号住居跡

遺構（第110図）

7－K－26・34・35グリッドに検出した住居跡で、西側部分の半分程を2号溝により切られ、また削平が著しく範囲だけの確認であることから規模は不明だが、一辺が3.52m前後で隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと考えられる。方位は、N－67°30′－Eをとる。住居跡内からは、柱穴が2個検出されたが位置関係より4本柱の住居跡と考えられる。炉は検出されなかった。

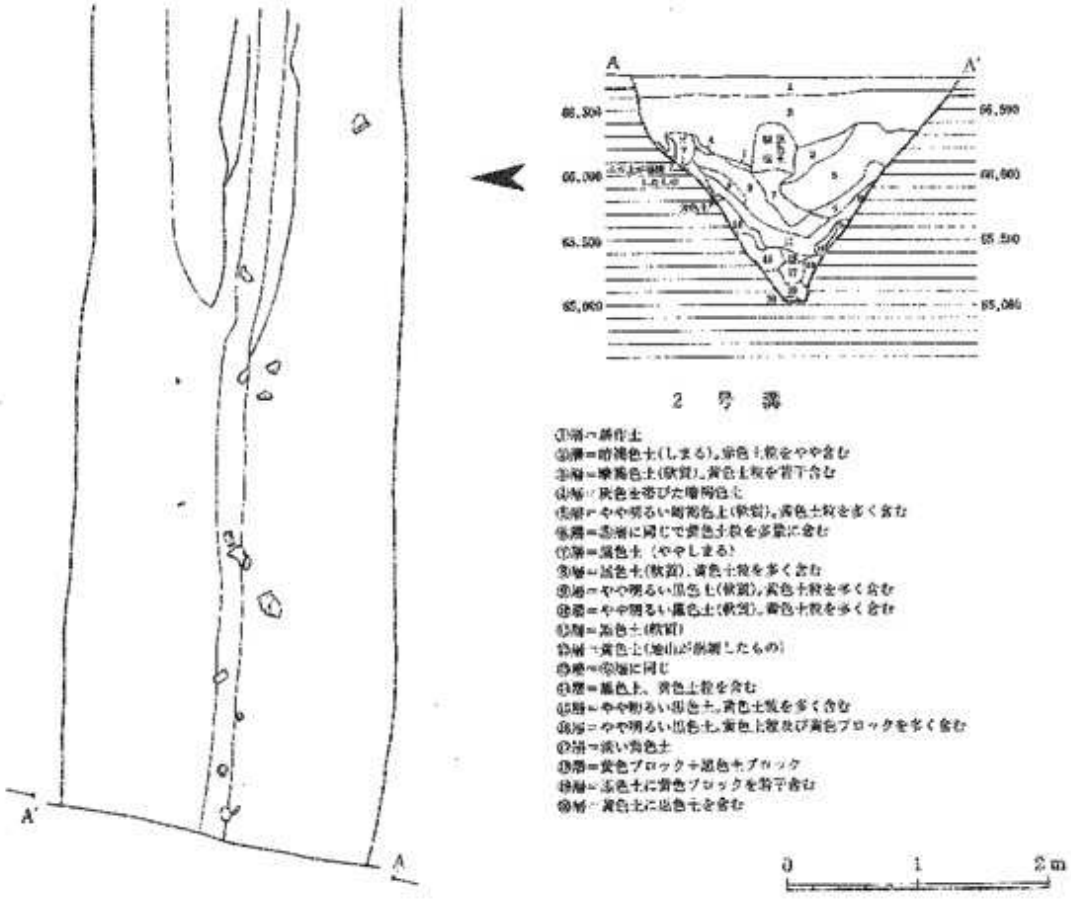
遺物は、全く出土していない。

(2) 溝遺構と出土遺物

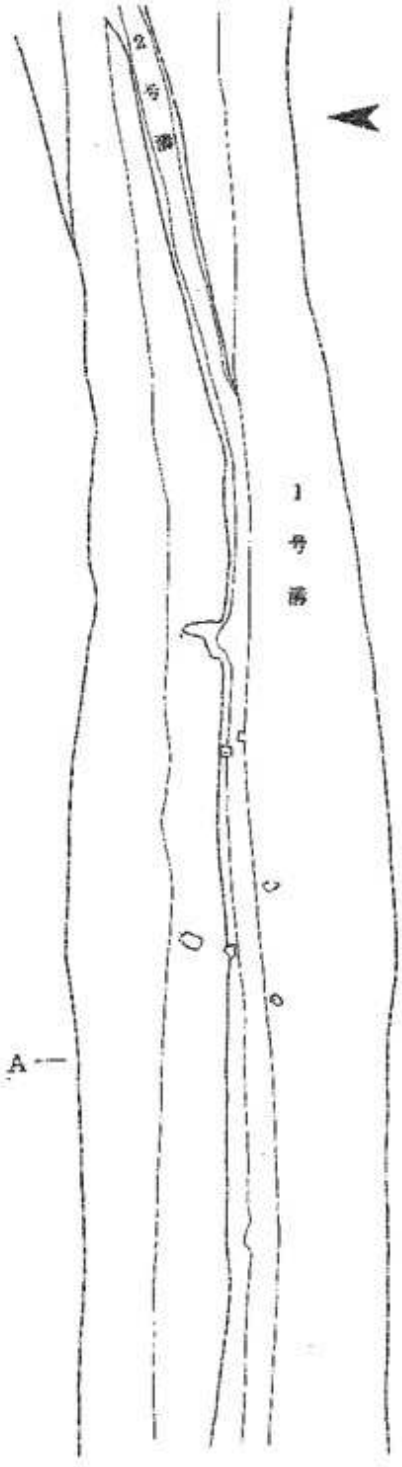
2号溝（SD－02）

遺構（第111図～第118図）出土遺物（第119図～第124図・第162図13,14・第47表・第68表13,14）

溝は、調査区西南部の端である7－K－42グリッドから北東部の端である7－K－8グリッド



第111図　1号・2号溝実測図（1）

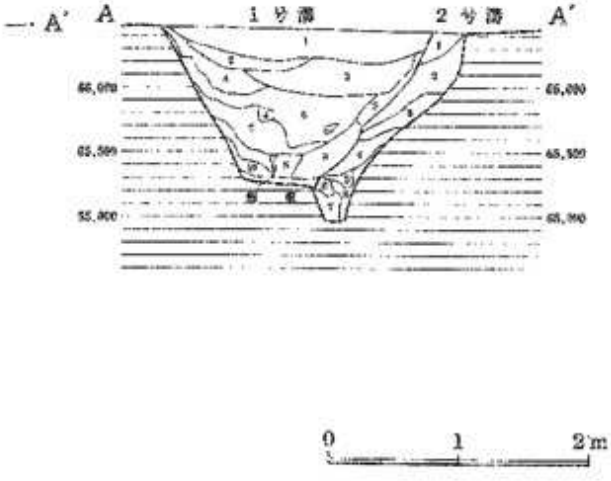


1　号　溝

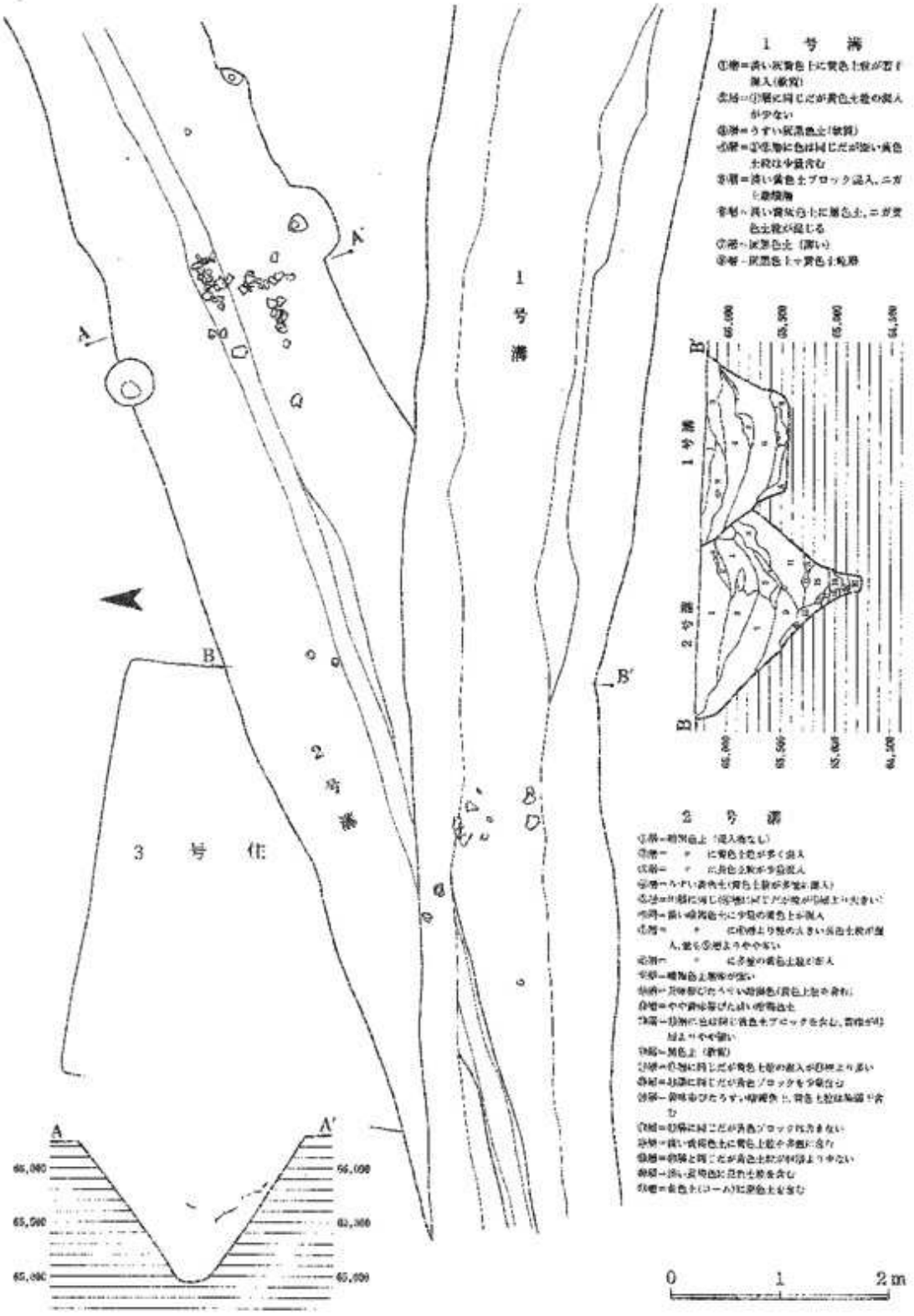
①層＝明るい黒色土
②層＝淡灰色土に黄褐色及び赤色土粒を若干含む
③層＝黒褐色土に淡黄灰色土混入
④層＝灰黄色土
⑤層＝明暗褐色に黄褐色土粒を含む
⑥層＝④層に同じ
⑦層＝やや明るい黒色土に淡黄灰色土ブロックを含む
⑧層＝明るい暗褐色土
⑨層＝黒色土
⑩層＝黒色土に多量の黄色土粒を含む
⑪層＝黒色土に黄色土ブロックを含む

2　号　溝

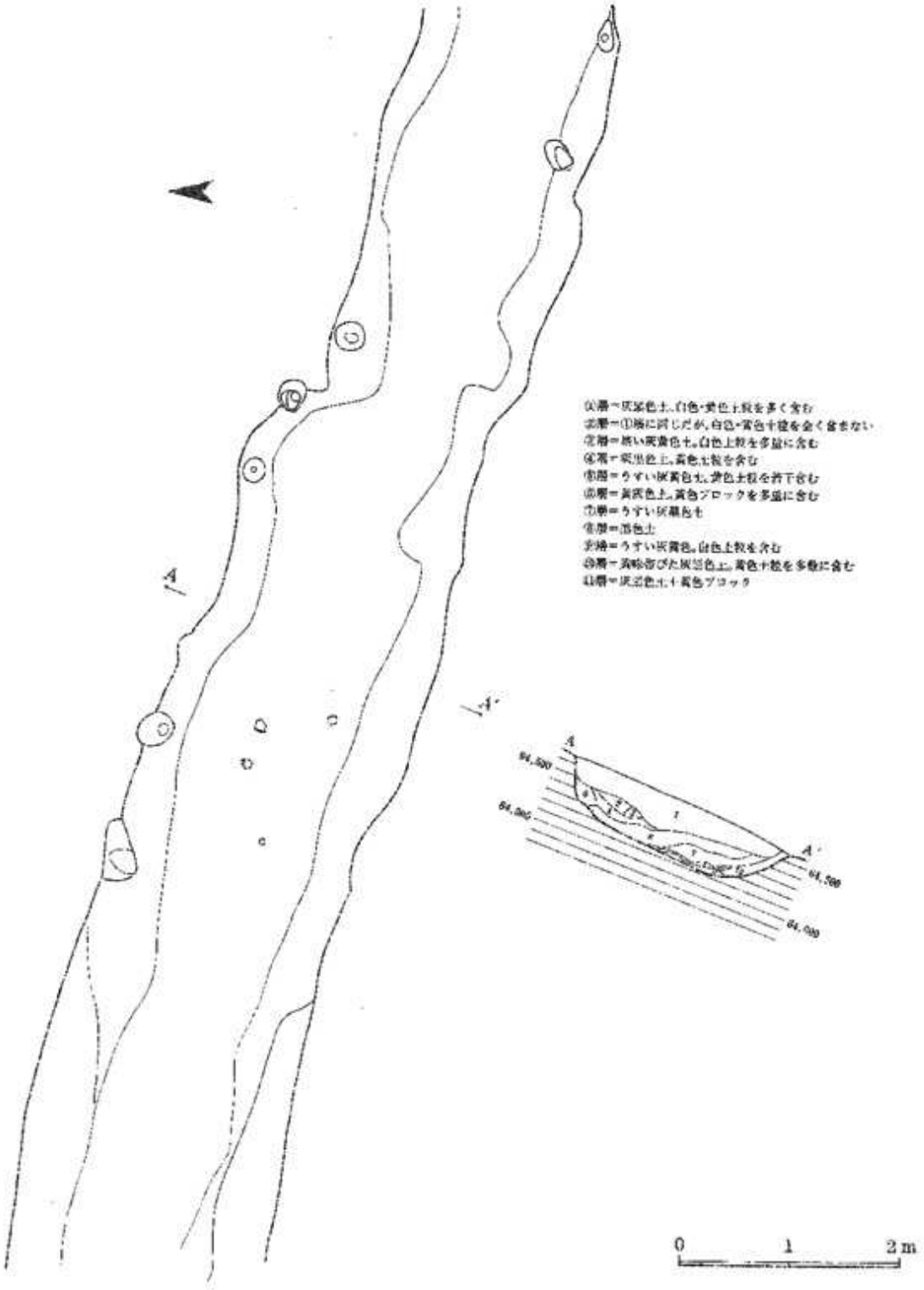
①層＝明るい黒色土
⑤層＝明るい黒色土に黄色土粒が若干混入
⑥層＝明るい黒色土に黄色土粒が多量に混入
④層＝⑥層に同じ
⑤層＝③層に同じだが黄色土粒の混入比率が⑤層より少ない
⑥層＝黒色土に多量の黄色土ブロックが混入
⑦層＝黒色土に黄色土ブロック及び黄色土粒混入
⑧層＝⑦層に同じ



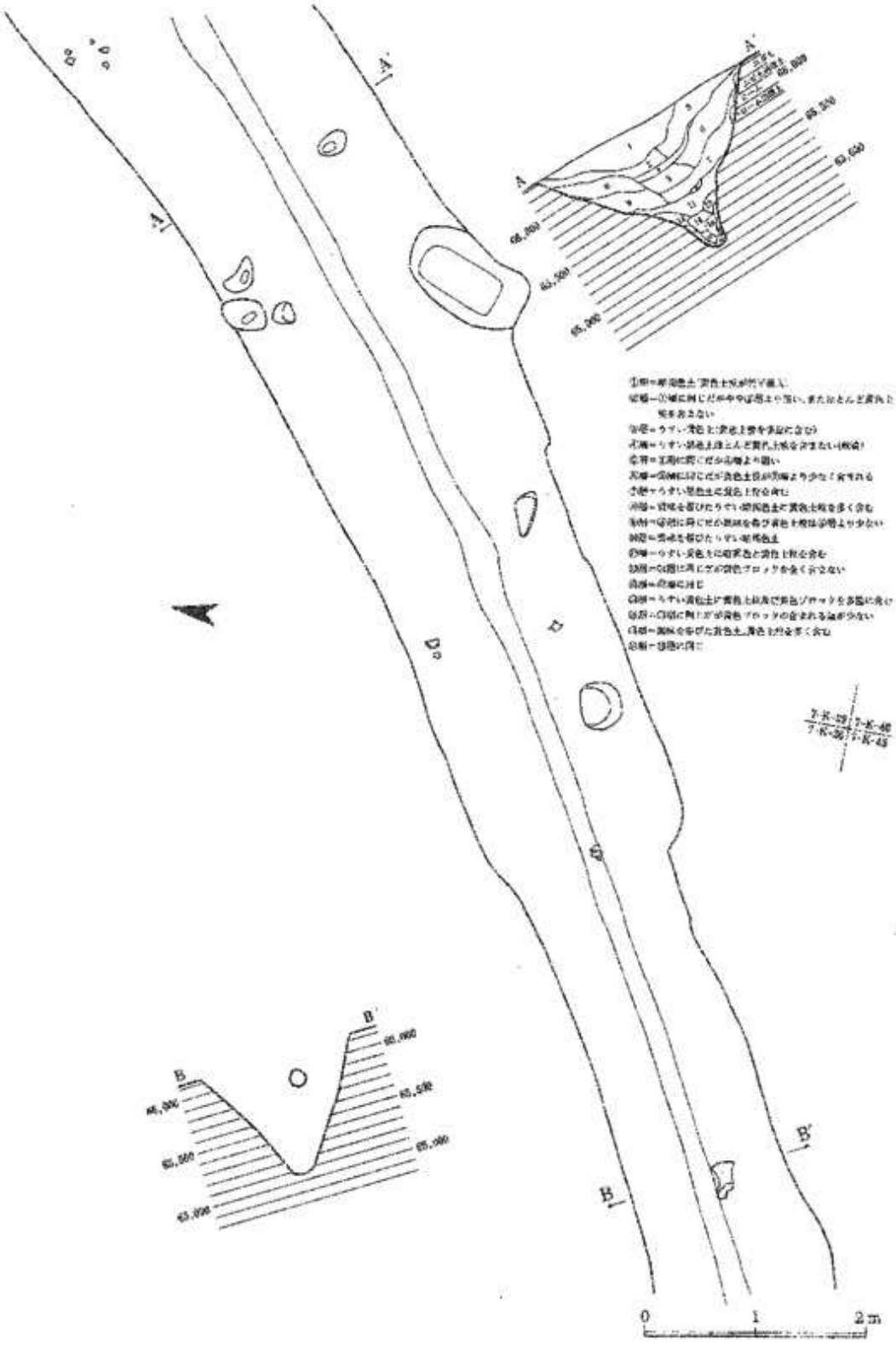
第112図　1号・2号溝実測図（2）



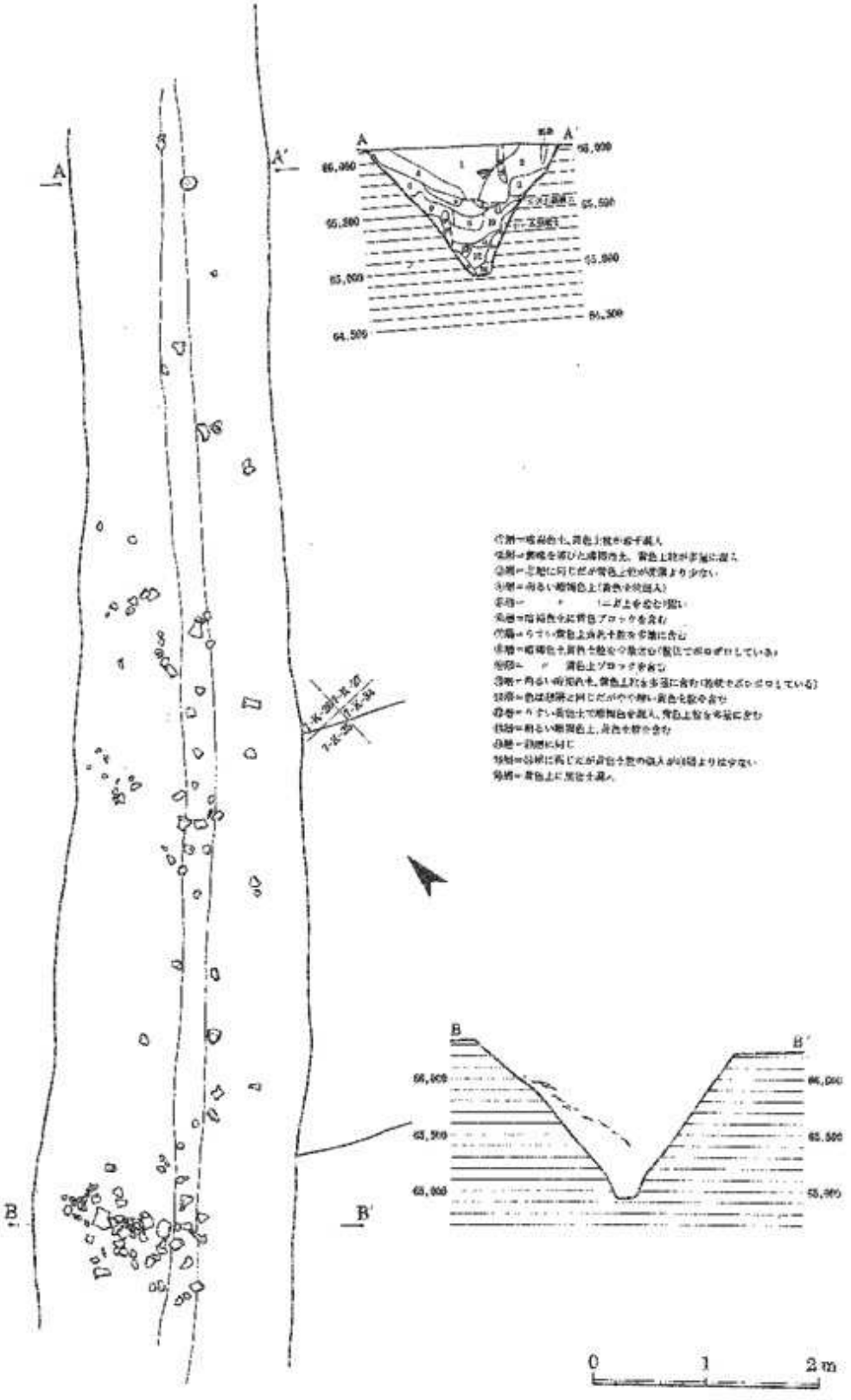
第113図　1号・2号溝実測図（3）



第114図　1号溝実測図（4）



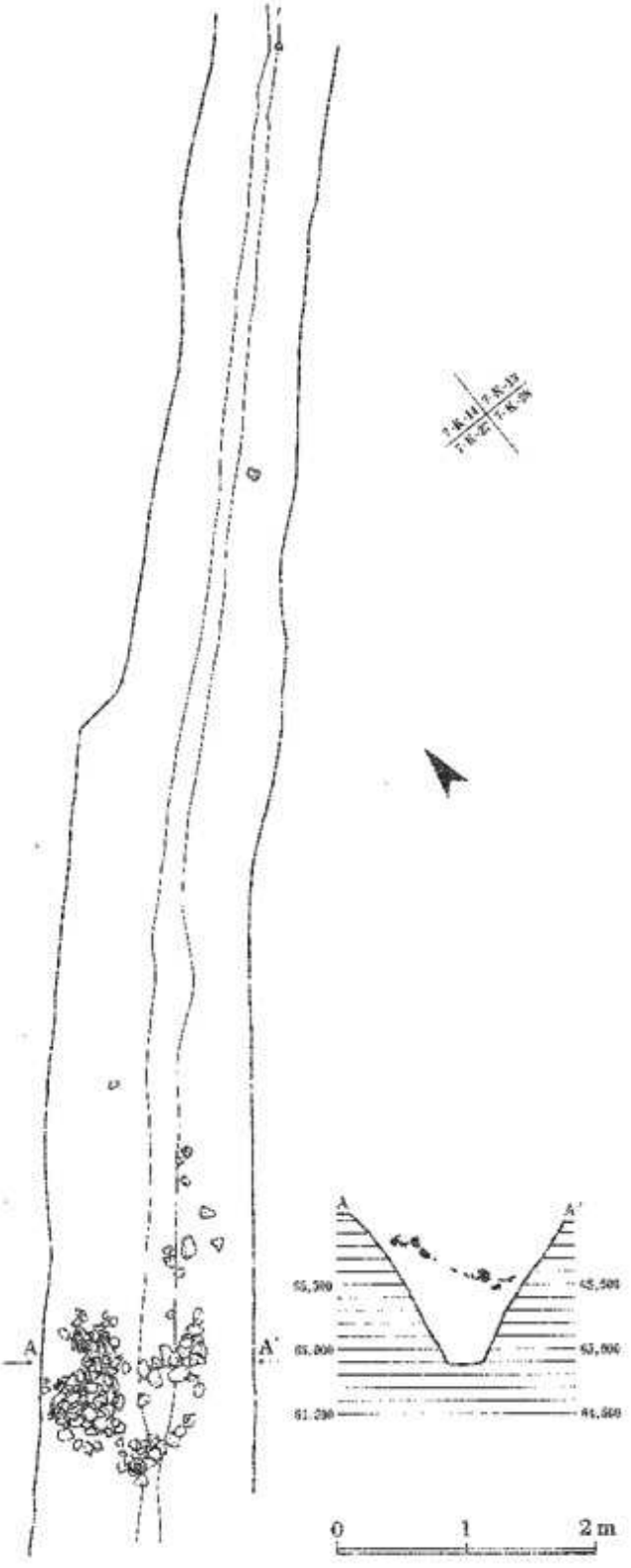
第115図　2号溝実測図（4）



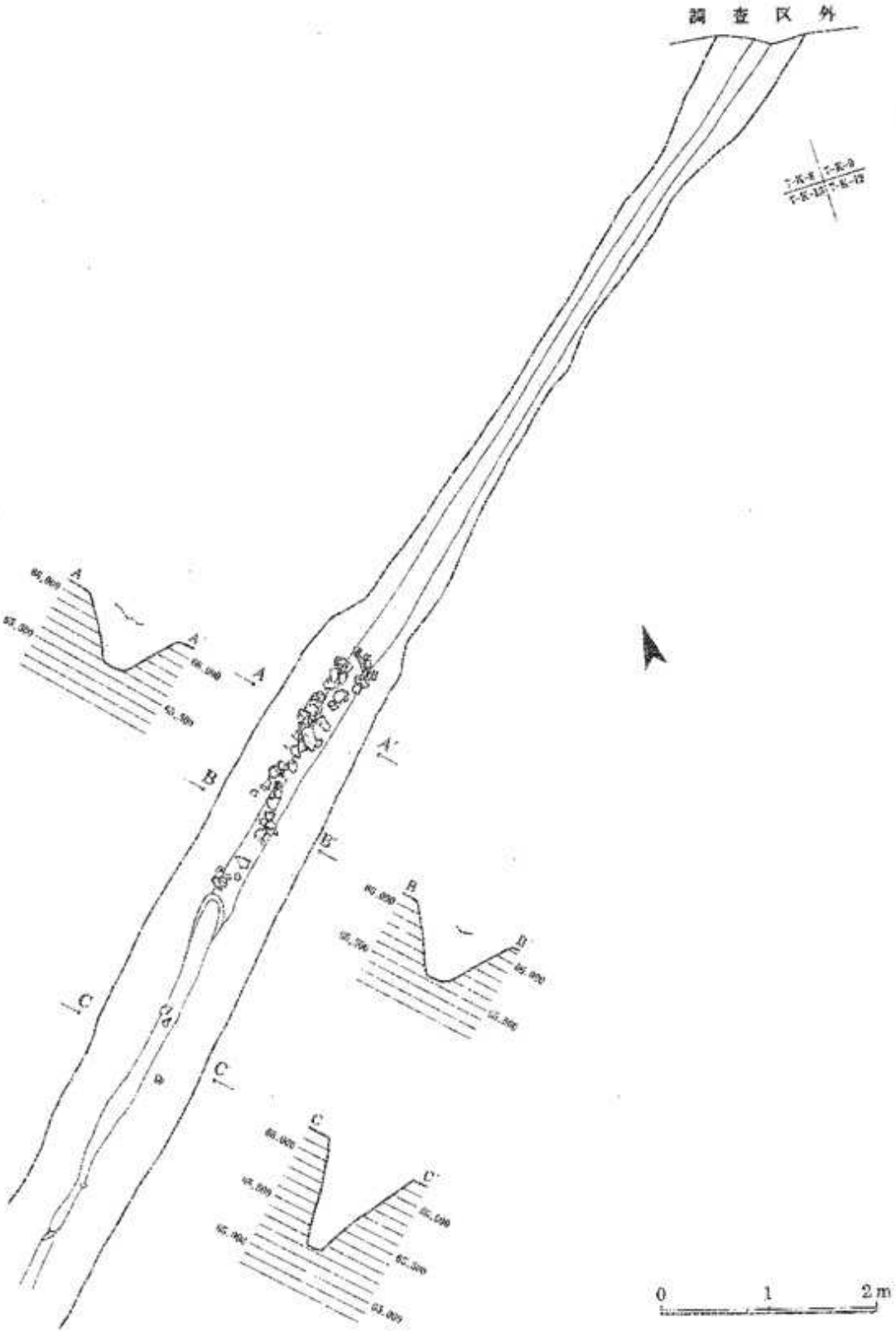
第116図　2号溝実測図（5）

まで、調査区を分断する形で弧状に掘られている。調査した溝の長さは、72.6mを測り、溝の両側はさらに調査区外へ延びる。調査区は、開田により全体的に削平されており、他の遺構は残存状態があまり良くなかったが溝遺構は比較的良く残っていた。ただし、溝の北側部分は大きく削平されていた。溝は、幅2.39m、深さ1.58mで、残りが良くない北側部分は幅0.27m、深さ0.35mを測り断面がV字形を呈している。溝基底面の幅は、0.14mを測る。溝は、平安時代以降と考えられる1号溝に切られている。1号溝は、7－K－43と44グリッドの境付近から始まり、2号溝と全く重なるように掘られ、そのまま真っすぐ東へ延びる。2号溝は、7－K－44グリッドの真ん中付近から曲がり北東へ延びていく。溝上面からは、土塁や柱穴など施設の遺構は検出されなかった。

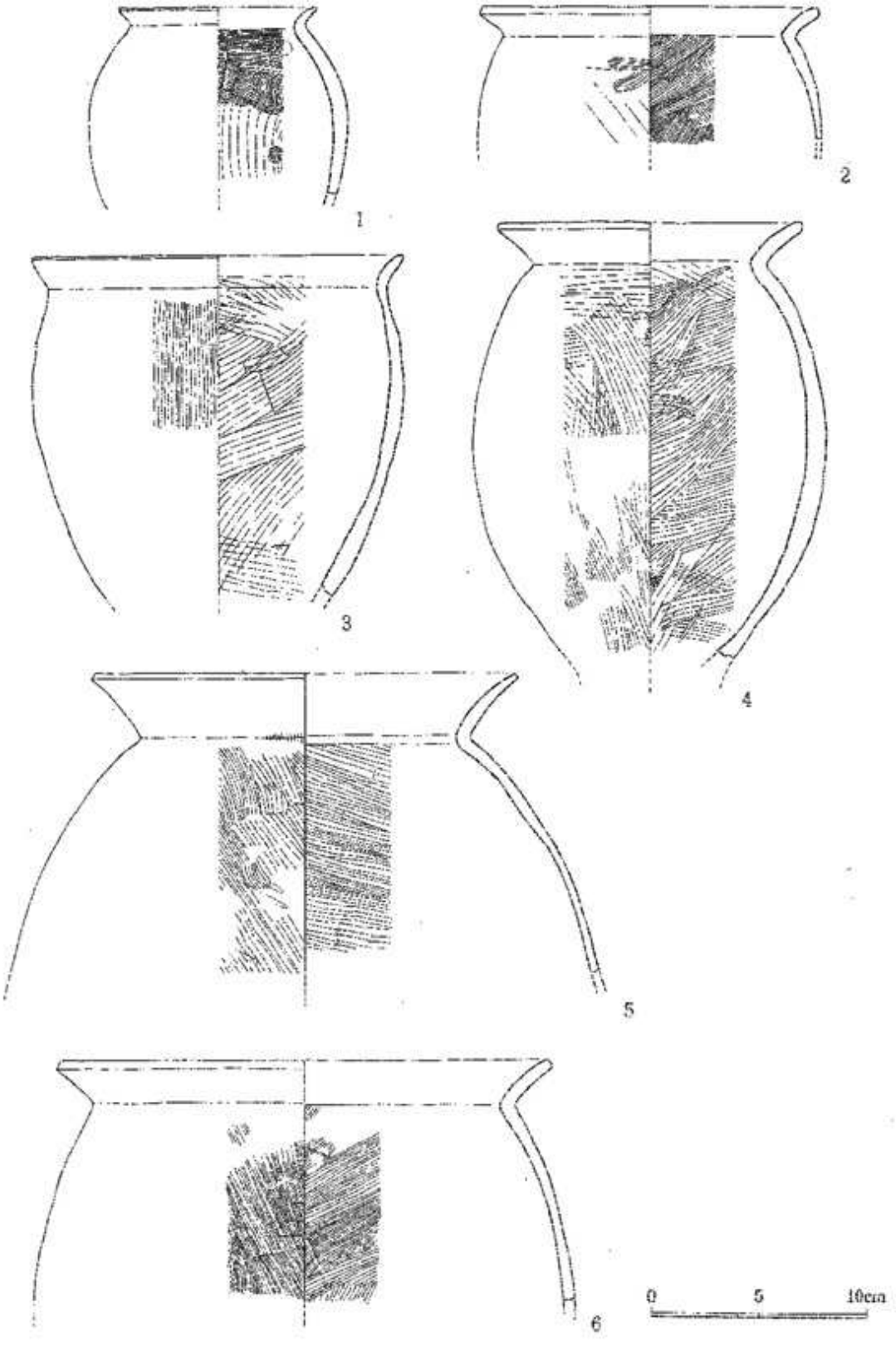
溝内からは、北西側から投棄された様な状態で多くの遺物が出土した。遺物は、そのほとんどが溝の中位に集中しており、下位からの出土はほとんどない。遺物は、その大半が破片で完形のものはなく、甕や壺・ジョッキ形土器・鉢・高坏・器台などと共に鉄斧と鉄鏃が出土している。



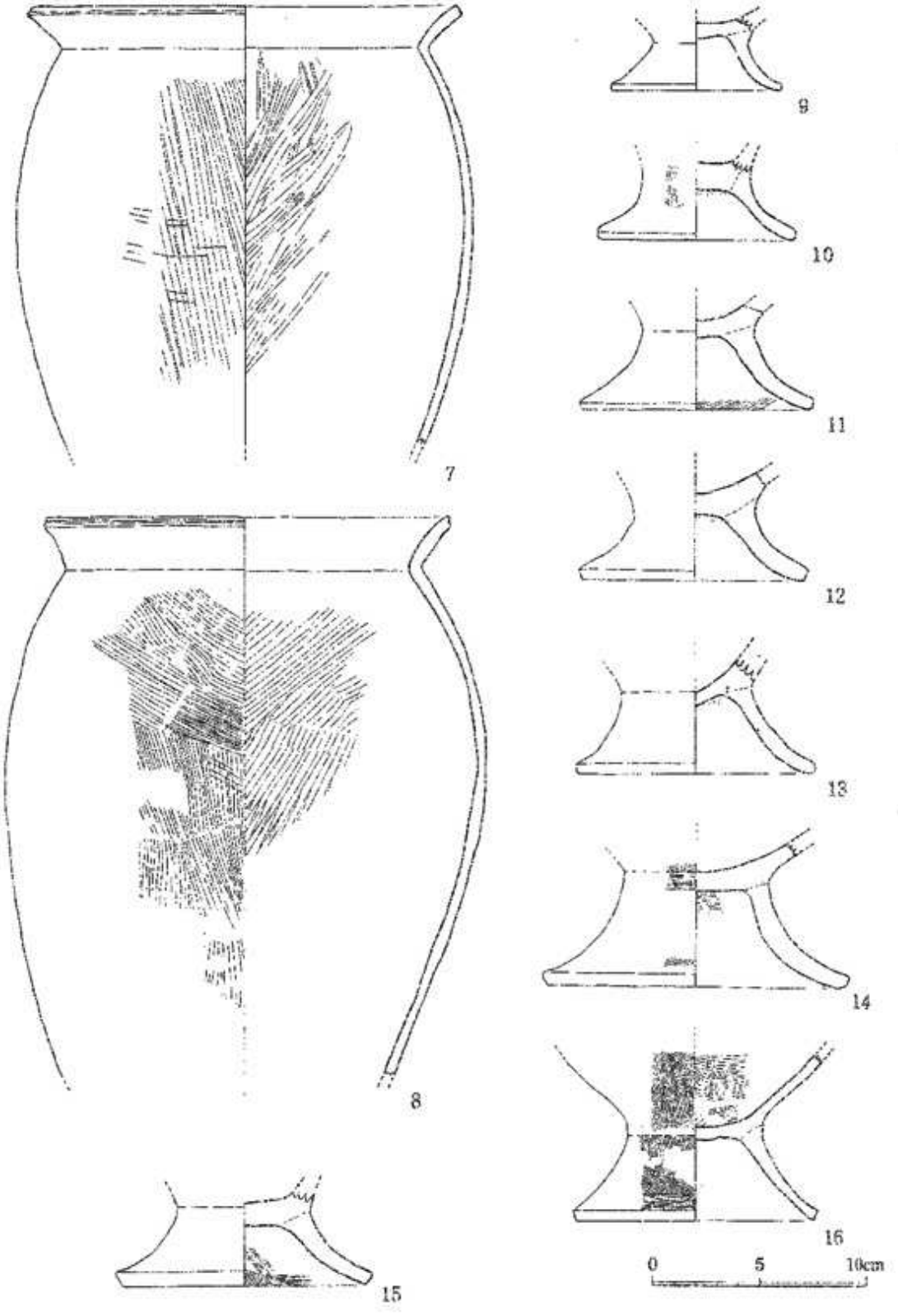
第117図　2号溝実測図（6）



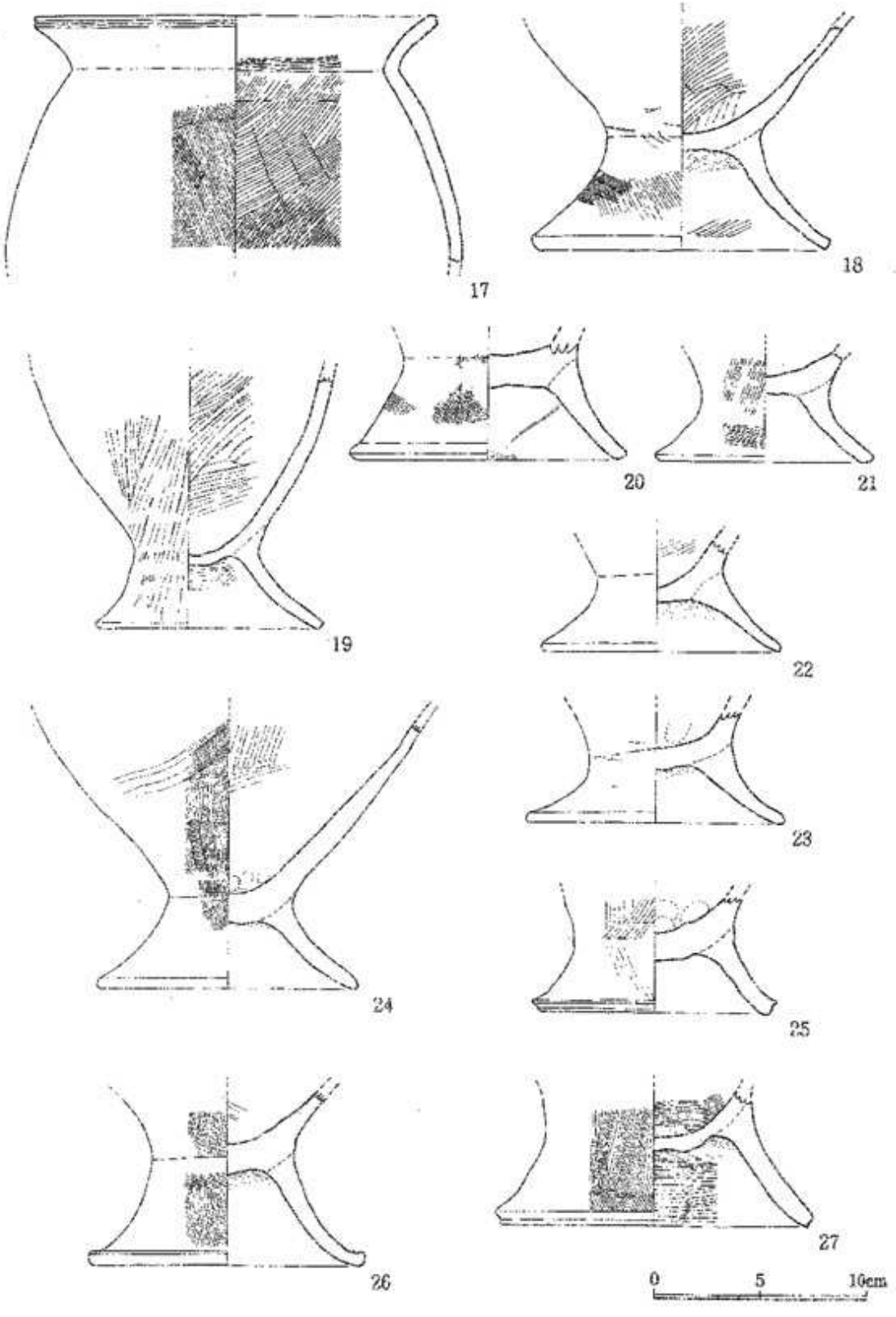
第118図　2号溝実測図（7）



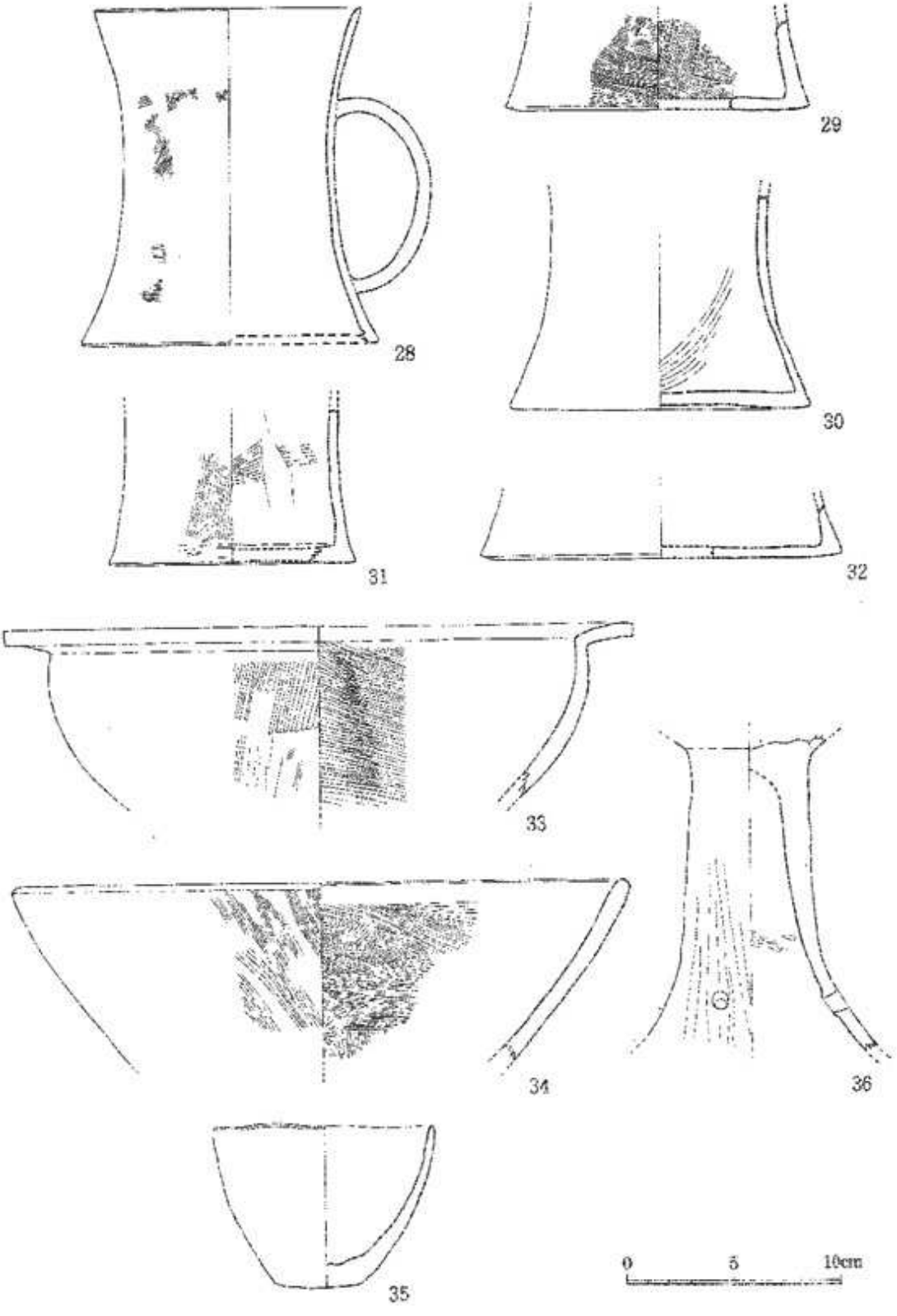
第119図　2号溝（ＳＤ－０２）内出土土器実測図（１）



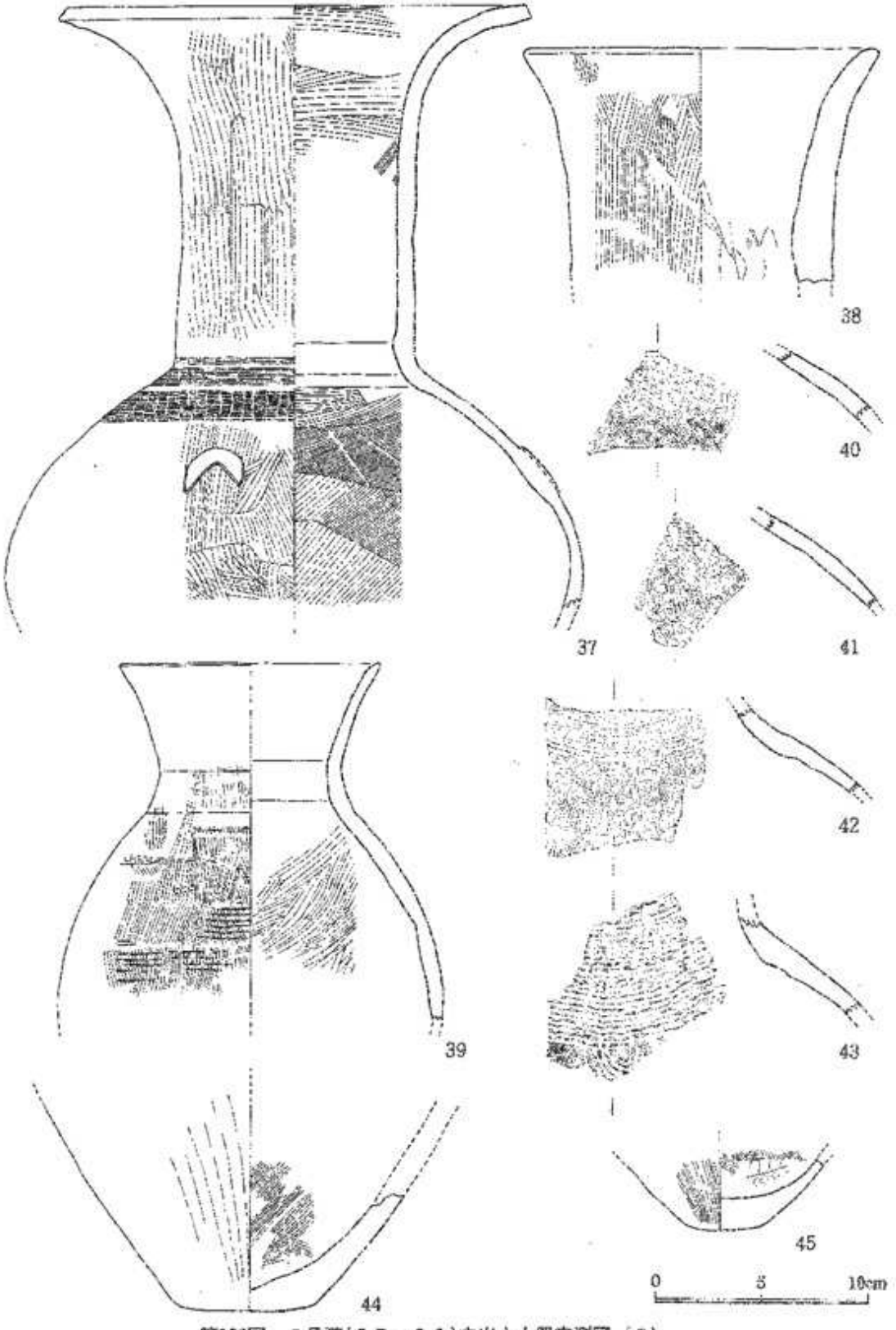
第120図　2号溝（ＳＤ－０２）内出土土器実測図（２）



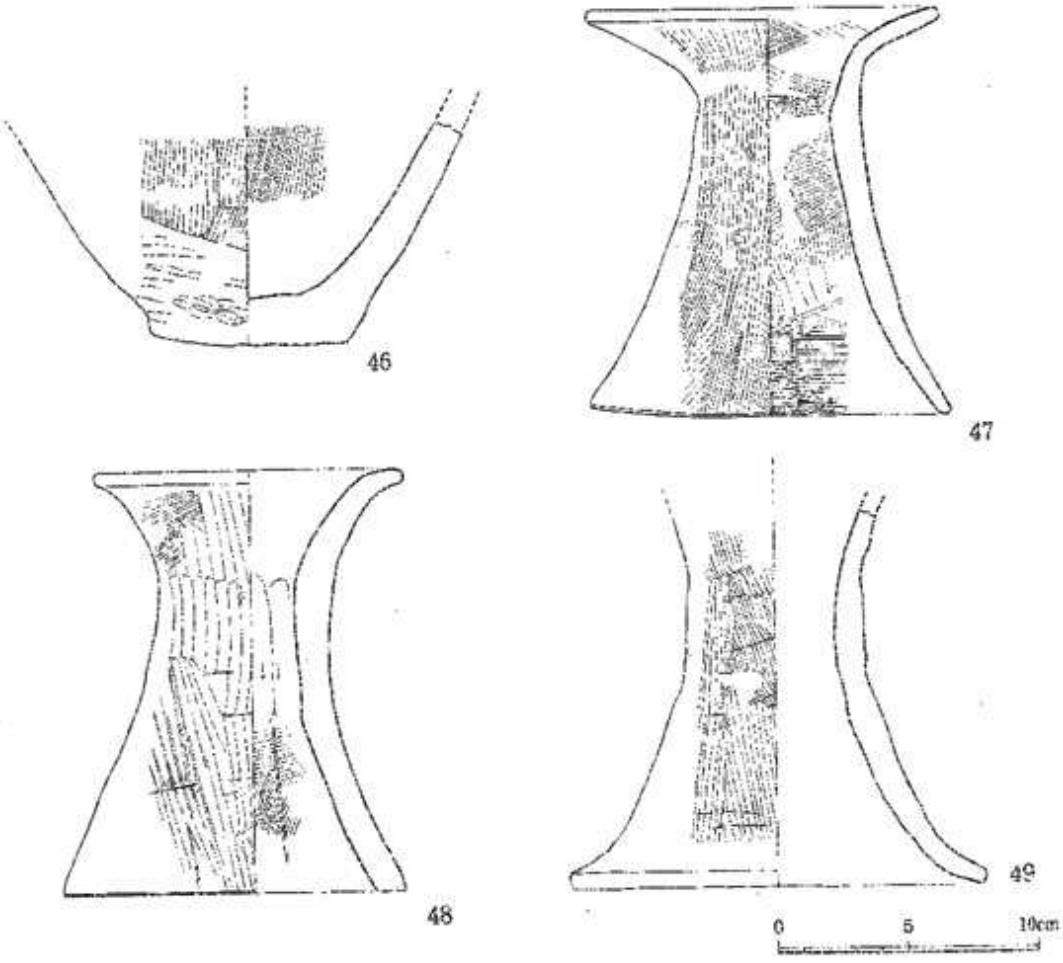
第121図　2号溝（SD－02）内出土土器実測図（3）



第122図　2号溝（ＳＤ－０２）内出土土器実測図（４）



第123図　2号溝(ＳＤ－０２)内出土土器実測図（５）



第124図　2号溝（SD－02）内出土土器実測図（6）

第47表　2号溝（SD－02）内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
119－1	甕	口径 9.3 現存高 8.7	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外反気味に短かく外方に開く、端部は尖がる。胴部は中位付近に最大径があり、口径より大きくなる。	砂粒及び白色小石、金雲母を多量に含む	暗茶褐色	良	口縁部ナデ 胴部ナデ	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生
119－2	甕	口径 15.8 現存高 6.2	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は直線的に短かく外方に開く、端部は丸味を帯びる。胴部径は口径とほぼ同じである。	砂粒を多く含み、黒雲母を少量含む	淡赤褐色	良	口縁部ナデ 胴部ハケ目の後ナデ	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生
119－3	壺	口径 17.2 現存高 16.0	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は直線的に短かく外方に開く、端部は丸味を帯びる。胴部は上方に最大径があり、口径とほぼ同じである。	砂粒及び角セン石、金雲母を多量に含む	淡黄褐色	良	口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生
119－4	壺	口径 14.1 現存高 20.5	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外反気味に短かく外方に開く、端部はやや丸味を帯びる。胴部は中位に最大径があり、口径より大きくなる。	砂粒及び金雲母を多量に含む	淡黄褐色	良	口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生 ○胴部欠失

第47表　2号溝（SD－02）内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
119	壺	口径 19.8 現存高 14.0	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部はやや外反気味に外方に開く、端部は面取りし平坦である。胴部は膨らみ口径より大きくなる。	砂粒を多く含み径2mm程の小石、長石、角セン石、金雲母を少量含む	淡黄褐色	良	口縁部ナデ 頸部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生
119	壺	口径 23.0 現存高 11.2	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部はほぼ直線的に外方に開く、端部は面取りし平坦である。胴部に膨らみ口径より大きくなる。	砂粒及び角セン石、金雲母を多く含み、径3mm程の小石、長石を少量含む	淡黄褐色	良	口縁部ナデ 頸部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生
120	壺	口径 20.3 現存高 20.6	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部はほぼ直線的に外方に開く、端部は面取りし平坦である。胴部は膨らみ口径より大きくなる。	砂粒及び白色小石を多く含み、径2mm程の小石、長石、角セン石を少量含む	淡黄褐色	良	口縁部ナデ 頸部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生
120	壺	口径 19.0 現存高 26.2	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部はほぼ直線的に外方に開く、端部に面取りし平坦であり、一条の沈線を巡らす。胴部の最大径は中位よりやや上にあり口径より大きい。	砂粒及び白色小石、金雲母を多く含み、角セン石を少量含む	淡黄褐色	良	口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生
120	壺	胴台径 8.0 胴台長 2.3 現存高 3.4	端部にかけて外反しながら大きく外方に開く、端部はナデで平坦である。	砂粒及び金雲母を多く含む	淡茶褐色	良	ナデ	ナデ	○弥生 ○壺胴部
120	壺	胴台径 9.4 胴台長 2.7 現存高 3.7	端部にかけてやや外反気味に大きく外方に開く、端部は丸味をもつ。胴底との接合面付近に多量の砂が付着する。	砂粒及び径2～3mm程の小石、長石、金雲母を多く含み、角セン石を少量含む	淡茶褐色	良	ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生 ○壺胴部
120	壺	胴台径 11.0 胴台高 3.7 現存高 4.9	端部にかけて外反気味に大きく外方に開く、端部はやや丸味をもつ。	砂粒及び角セン石、金雲母を多く含み、径2～3mm程の小石、角セン石を少量含む	淡黄褐色	良	ナデ	ナデ	○弥生 ○壺胴部
120	壺	胴台径 10.8 胴台高 3.2 現存高 5.1	端部にかけて外反気味に外方に大きく開く、端部はナデで平坦である。胴底との接合面付近に多量の砂が付着する。	砂粒及び金雲母を多く含み、白色小石を少量含む	淡黄褐色	良	ナデ	ナデ	○弥生 ○壺胴部
120	壺	胴台径 11.2 胴台高 3.8 現存高 7.8	端部にかけてやや外反気味に外方に大きく開く、端部は丸くなる。胴部との接合面付近に多量の砂が付着する。	砂粒及び径2～3mm程の小石、金雲母を多量に含み、長石を少量含む	淡黄褐色	良	ナデ	ナデ	○弥生 ○壺胴部
120	壺	胴台径 14.3 胴台高 5.4 現存高 6.8	端部にかけて外反しながら大きく外方に開く、端部は平坦面を作り出しているがやや丸味を帯びる。	砂粒及び径2～3mm程の小石、角セン石を多く含み、白色小石、長石、金雲母を少量含む	淡黄褐色	良	ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生 ○壺胴部
120	壺	胴台径 12.0 胴台高 3.7 現存高 4.5	端部にかけてやや外反気味に大きく外方に開く、端部はナデで平坦である。	砂粒を多く含み、白色小石、角セン石、金雲母を少量含む	淡黄褐色	良	ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○壺底部
120	壺	胴台径 11.4 胴台高 4.4 現存高 7.7	端部にかけてほぼ直線的に大きく外方に開く、端部はナデで平坦である。	砂粒及び角セン石を多く含み、金雲母を少量含む	淡茶褐色	良	胴部ハケ目 脚部ハケ目	胴部ハケ目 脚部ナデ	○弥生 ○壺胴部
121	壺	口径 18.8 現存高 11.7	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外反気味に外方に開く、端部は平坦で一条の沈線を巡らす。	砂粒及び角セン石、金雲母を多く含む	淡黄褐色	良	口縁部ナデ 頸部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生
121	壺	胴台径 14.7 胴台高 5.4 現存高 10.5	端部にかけてやや外反気味に大きく外方に開く、端部はナデで平坦である。胴底との接合面付近に多量の砂が付着する。	砂粒及び金雲母、角セン石を多く含む	淡赤褐色	良	胴部ハケ目 脚部ハケ目の後ナデ	胴部ハケ目 脚部ハケ目の後ナデ	○弥生 ○壺胴部

第47表　2号溝（SD－02）内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
121－19	甕	脚台径 10.7 脚台高 3.5 現存高 11.8	端部にかけてやや外反気味に外方に開く、端部はナデで平坦である。	砂粒及び径2～3mm程の小石、金雲母、白色小石を多く含み、長石、角セン石を少量含む	淡赤褐色	良	胴部ハケ目 脚部ハケ目の後ナデ	胴部ハケ目 脚部ハケ目の後ナデ	○弥生 ○甕脚部
121－20	甕	脚台径 13.0 脚台高 4.9 現存高 5.6	端部にかけてほぼ直線的に外方に開く、端部はナデで平坦である。	砂粒及び金雲母、白色小石を多く含み、径2～3mm程の小石、角セン石を少量含む	淡黄褐色	良	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○甕脚部
121－21	甕	脚台径 10.3 脚台高 3.5 現存高 5.2	端部にかけてほぼ直線的に外方に開く、端部はナデで平坦である。	砂粒及び長石を多量に含む	淡黄褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生 ○甕脚部
121－22	甕	脚台径 11.2 脚台高 3.4 現存高 5.3	端部にかけてほぼ直線的に大きく外方に開く、端部は丸くなる。胴部との接合面付近に多量の砂が付着する。	砂粒及び金雲母、角セン石、長石を含む	淡黄褐色	良	ナデ	ナデ	○弥生 ○甕脚部
121－23	甕	脚台径 12.2 脚台高 3.8 現存高 5.2	端部にかけてやや外反気味に外方に開き、端部は丸くなる。胴部との接合面付近に多量の砂が付着する。	砂粒及び金雲母を多く含み、径2mm程の小石、白色小石、長石を少量含む	淡赤褐色	良	ナデ	ナデ	○弥生 ○甕脚部
121－24	甕	脚台径 12.2 脚台高 4.3 現存高 12.5	端部にかけてやや外反気味に外方に開き、端部は丸くなる。胴部との接合面付近に多量の砂が付着する。	砂粒及び金雲母、白色小石を多量に含み、径2～3mm程の小石、角セン石を少量含む	淡黄赤褐色	良	胴部ハケ目 脚部ハケ目の後ナデ	胴部ハケ目 脚部ナデ	○弥生 ○甕脚部
121－25	甕	脚台径 12.0 脚台高 3.4 現存高 5.5	端部にかけてほぼ直線的に外方に開き、端部はナデで平坦である。端部には一条の沈線を巡す。	砂粒及び長石、角セン石を含む	淡褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生 ○甕脚部
121－26	甕	脚台径 13.0 脚台高 3.0 現存高 8.3	端部にかけてやや外反気味に外方に開き、端部は丸くなる。	砂粒及び径2～3mm程の小石、白色小石、長石、金雲母を多く含む	淡黄赤褐色	良	ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生 ○甕脚部
121－27	壺	脚台径 15.0 脚台高 4.9 現存高 6.4	端部にかけてほぼ直線的に外方に開き、端部はナデで平坦である。	砂粒及び径2～3mm程の小石、長石、金雲母を多く含み、白色小石、角セン石を少量含む	淡茶褐色	良	ハケ目	ハケ目	○弥生 ○壺脚部
122－28	ジョッキ形土器	口径 12.5 器高 15.8 底径 13.9	底部より内傾しながら立ち上がり体部中位より外反し口縁部に至る。端部はやや尖がり気味である。器壁は4mmと薄い。幅5cm程の把手を付ける。	砂粒を含む	淡褐色	良	ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生
122－29	ジョッキ形土器	現存高 4.5 底径 14.3	底部より大傾しながら立ち上がる。	砂粒及び径1～2mm程の小石、長石、金雲母を多く含み、角セン石を少量含む	淡赤褐色	良	ハケ目	ハケ目	○弥生 ○底部のみ残存
122－30	ジョッキ形土器	現存高 10.0 底径 14.0	底部より内傾しながら立ち上がる。底部は若干上げ底になる。	砂粒及び白色小石、金雲母を多く含み、角セン石を少量含む	淡褐色	良	ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○底部のみ残存
122－31	ジョッキ形土器	現存高 7.2 底径 11.5	底部より内傾しながら立ち上がる。底部は若干上げ底気味である。	砂粒及び径2～3mm程の小石を多く含み、角セン石、金雲母を少量含む	淡黄褐色	良	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○底部のみ残存
122－32	ジョッキ形土器	現存高 2.4 底径 16.8	底部より内傾しながら立ち上がる。	砂粒及び白色小石、金雲母を多く含み、径1～2mm程の小石、角セン石を少量含む	淡黄褐色	良	ナデ	ナデ	○弥生 ○底部のみ残存

第47表　2号溝（ＳＤ－０２）内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
122－33	土師器形	口径 29.4 現存高 8.2	強張で薄造し、口縁部はほぼ外反気味に立ち上がり水平に開く。端部はナデで平坦である。胴部は内湾しながら降りる。	砂粒及び角セン石、雲母を多く含み、白色小石を少量含む	淡黄褐色	良	口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生
122－34	鉢	口径 28.8 現存高 8.5	底部より内湾気味に大きく外方に開きながら立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び径2～3㎜程の小石、角セン石、長石、金雲母、白色小石を多く含む	淡茶褐色	良	ハケ目	ハケ目	○弥生 ○底部欠失
122－35	小型鉢	口径 10.4 器高 7.6 底径 4.3	底部より外方に開き内湾しながら立ち上がり、端部はやや尖がる。底部はやや丸底気味である。	砂粒及び白色小石を多く含み、長石、金雲母を少量含む	淡黄褐色	良	ナデ	ナデ	○弥生
122－36	高杯	現存高 14.7	脚部が外反しながら外方に開き、脚部に直径1㎝程の円孔を有す。全体で三個か？	砂粒及び径2～3㎜程の小石、白色小石、長石、金雲母を多く含み、角セン石を少量含む	淡黄褐色	良	ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生
123－37	壺	口径 22.2 現存高 22.5	胴部より直口しながら立ち上がり口縁部はラッパ状に開く、端部はナデで平面である。胴部は大きく膨らみ球胴形をなす。底部には櫛状工具により平行沈線を施しその下に逆Ｖ字の粘土を貼り付ける。	砂粒を多く含み長石、金雲母を少量含む	淡黄褐色	良	ハケ目	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部ハケ目	○弥生
123－38	壺	口径 16.7 現存高 11.0	胴部より直口気味に立ち上がり、口縁部は外反しながら外方に延く、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石を多く含み、径2～3㎜程の小石、長石、角セン石を含む	淡黄褐色	良	ハケ目	ナデ	○弥生 ○口縁部のみ残存
123－39	壺	口径 12.3 現存高 16.8	強張で薄造った後口縁部が直線的に外方に開きながら立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び角セン石、金雲母を多量に含む	淡黄褐色	良	口縁部ナデ 胴部タタキの後ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生
123－40	壺	現存高 3.4	長頸壺の肩部片で櫛状工具により上に平行沈線、下に流水文を施す。	砂粒及び金雲母を多く含み、長石を少量含む	淡赤褐色	良	ハケ目	ハケ目	○弥生
123－41	壺	現存高 4.4	長頸壺の肩部片で櫛状工具により上に平行沈線、下に流水文を施す。	砂粒及び金雲母少多く含み、径2～3㎜程の小石、角セン石を少量含む	暗茶褐色	良	ハケ目	ハケ目	○弥生
123－42	壺	現存高 4.0	長頸壺の肩部片で櫛状工具により平行沈線を施す。	砂粒及び径2～3㎜程の小石を多く含み、白色小石、角セン石を少量含む	暗黄褐色	良	ハケ目	ハケ目	○弥生
123－43	壺	現存高 4.0	長頸壺の肩部片で櫛状工具により上に平行沈線、下に流水文を施す。	砂粒及び金雲母、白色小石を多く含み、径2㎜程の小石、角セン石を少量含む	暗黄褐色	良		ハケ目	○弥生 ○発出式土器
123－44	壺	現存高 3.8 底径 6.2	壺の底部片で若干丸底気味である。	砂粒及び角セン石を多く含み、径2～3㎜程の小石、金雲母を少量含む	淡黄褐色	良	ハケ目底部ナデ	ハケ目	○弥生
123－45	壺	現存高 3.0 底径 3.5	壺の底部片で若干丸底気味である。	砂粒及び白色小石、金雲母、角セン石を多く含む	淡茶褐色	良	ハケ目底部ナデ	ハケ目	○弥生
124－46	壺	現存高 8.5 底径 7.6	壺の底部片で若干丸底気味である。	砂粒及び角セン石、金雲母、径2㎜程の小石を多く含む	淡黄褐色	良	ハケ目底部ナデ	ハケ目	○弥生

第47表　2号溝（SD－02）内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	地度	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
124 - 47	器台	口径 13.5 器高 15.8 底径 13.8	上部にくびれがあり口縁部は直線的に外方に開く、胴部にかけては外反しながら外方に開き、端部は若干丸味を帯びる。	砂粒及び径2mm程の小石、角セン石、金雲母を多量に含む	淡茶褐色	良	ハケ目	ヘラ削りの後ハケ目	○弥生
124 - 48	器台	口径 11.8 器高 16.2 底径 13.1	上部にくびれがあり口縁部は外反し外方に開く、胴部にかけては外反しながら外方に広き端部はナデて平坦である。	砂粒及び角セン石、金雲母を多量に含む	淡赤褐色	良	ハケ目	ヘラ削りの後ハケ目	○弥生
124 - 49	器台	現存高 14.2 底径 16.0	上部にくびれがあり口縁部は欠失する。胴部にかけては外反しながら外方に開き、端部はナデて平坦である。	砂粒及び角セン石を多く含み、金雲母を少量含む	淡黄褐色	良	ハケ目	ナデ	○弥生

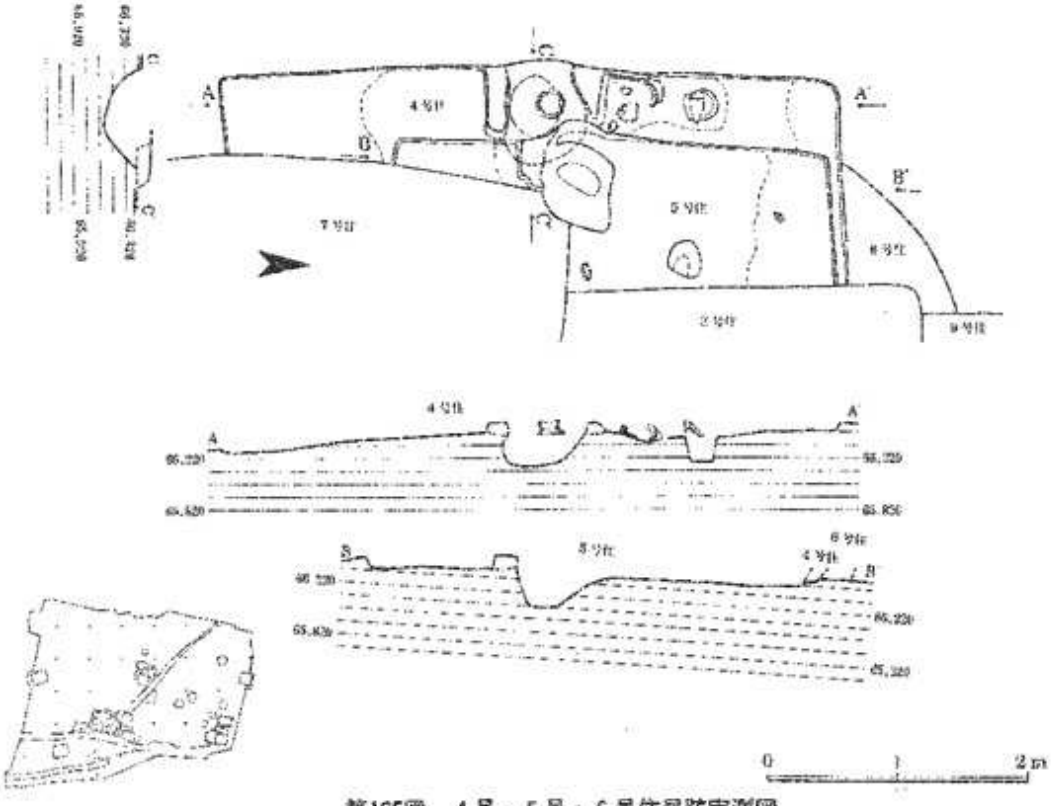
2．奈良・平安時代

(1) 竪穴住居跡と出土遺物

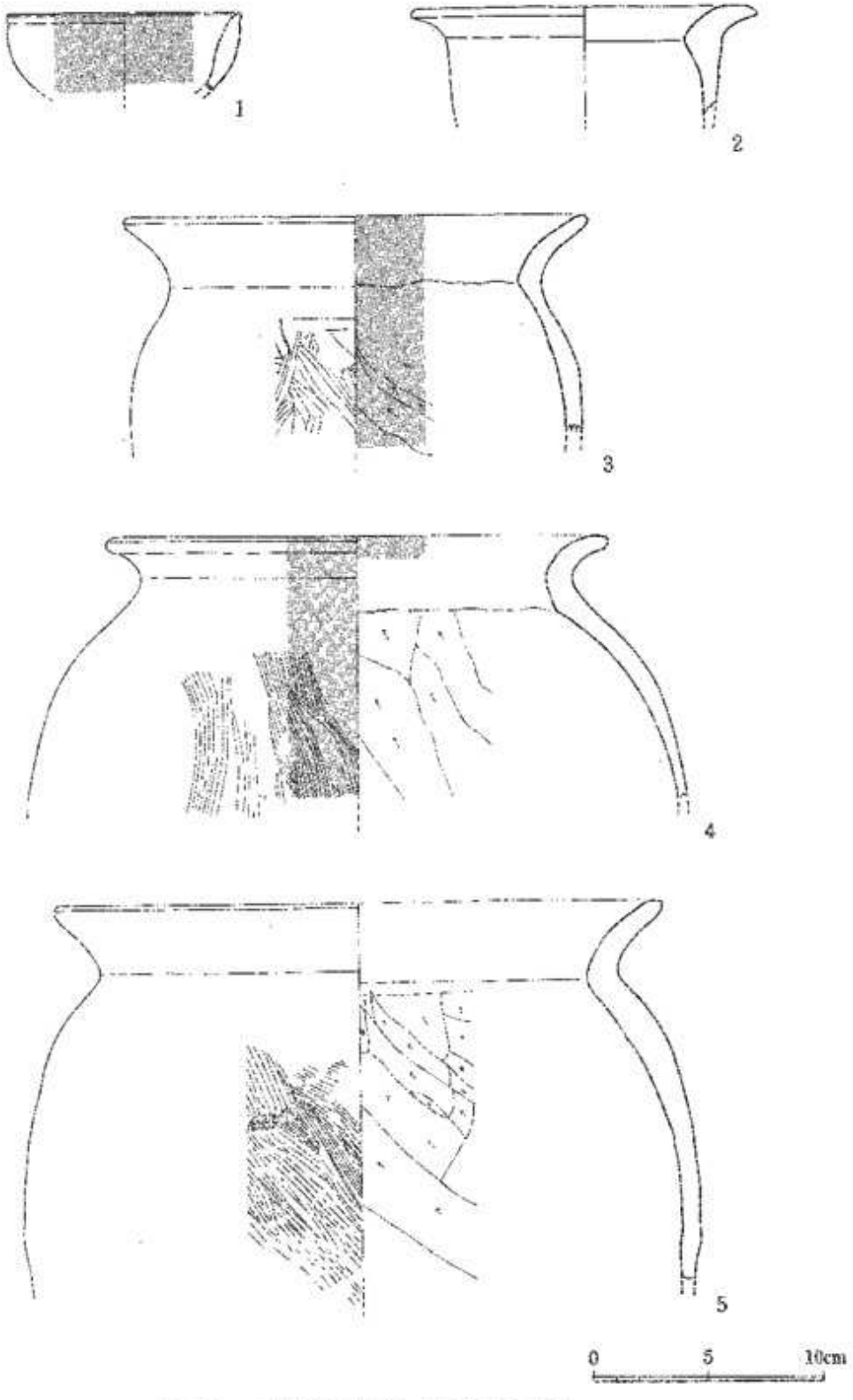
4号住居跡

遺構（第125図）　出土遺物（第126図～127図・第48表）

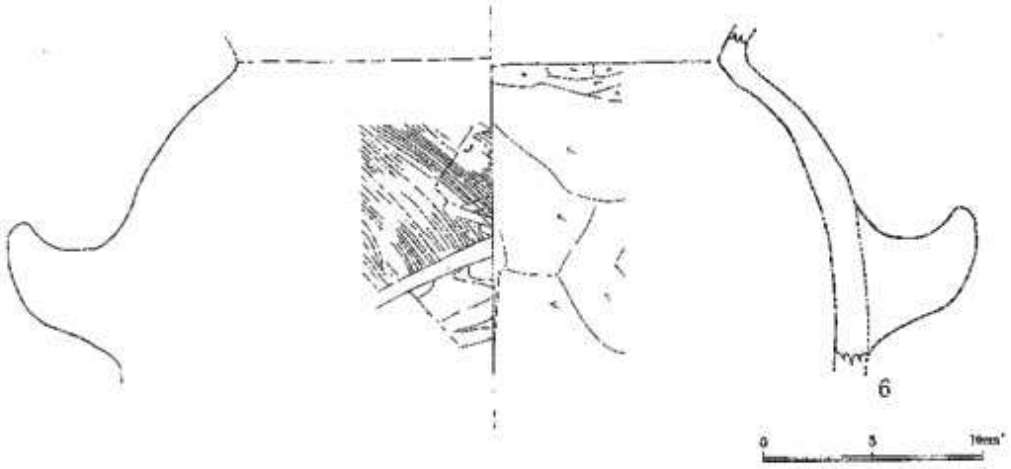
7－K－36・44・45グリッドに検出した住居跡で、切り合っている5号・7号・8号住居跡より古く、6号住居跡より新しい、住居跡は、大半が他の住居跡より切られていることから規



第125図　4号・5号・6号住居跡実測図



第126図　4号住居跡内出土土器実測図（1）



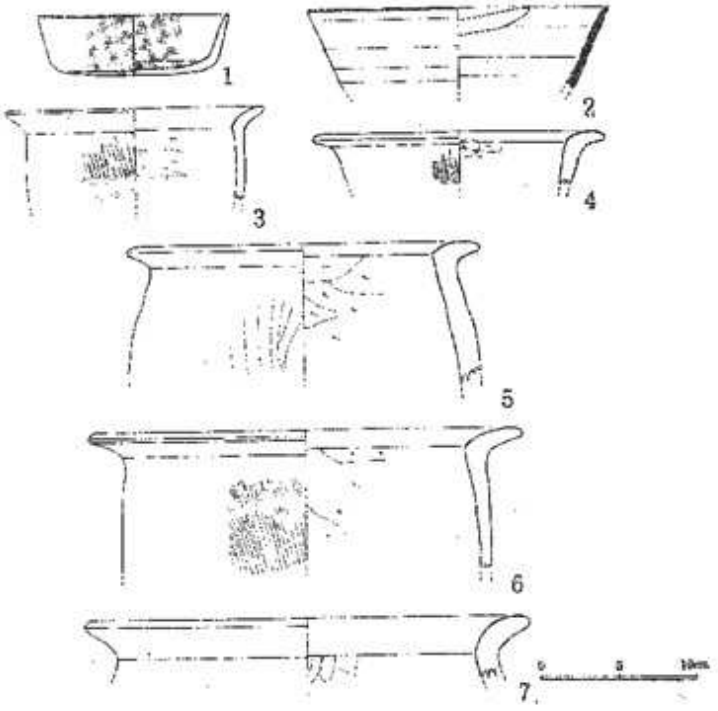
第127図　4号住居跡内出土土器実測図（2）

第48表　4号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
126 - 1	鉢	口径 10.1 現存高 3.4	体部は内湾気味に立ち上がり端部はやや尖がり気味である。体部の中央付近は膨張する。	砂粒及び角センゴ石、金雲母を多量に含む。長石を少量含む	赤褐色	良	ナデ	ナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
126 - 2	甕	口径 15.2 現存高 4.8	頸部から大きく外方に開かり端部は尖がる。	砂粒、白色小石、長石、角センゴ石、金雲母を多く含む。	淡赤褐色	良好	ヨコナデ	器面が荒れている為不明	○土師器
126 - 3	甕	口径 20.2 現存高 9.7	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部はやや外反気味に外方に開く、端部は丸くなる。胴部はやや膨らむ。	砂粒及び径1～2mm程の小石、長石、角センゴ石、金雲母、白色石粒を多く含む	外面黄褐色 内面赤褐色	良好	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 へラ削り（上方）	○土師器 ○内面に赤色顔料塗布
126 - 4	甕	口径 22.0 現存高 11.5	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は大きく外反し外方に開かり、端部は丸くなる。胴部は口縁部より大きく膨らむ。	砂粒及び径2～3mm程の小石、白色石粒、長石を多く含み、角センゴ石、金雲母を少量含む	赤褐色	良好	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 へラ削り（上方）	○土師器 ○外面と内面口縁部に赤色顔料塗布
126 - 5	甕	口径 26.4 現存高 16.6	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部はやや外反気味に外方に開き、端部は丸くなる。胴部は口縁部より大きく膨らむ。	砂粒及び径1～3mm程の小石、白色石粒、長石を多く含み、角センゴ石を少量含む	淡赤褐色	良好	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 へラ削り（上方）	○土師器
127 - 6	甕	頸部径 23.3 現存高 14.6	口縁部が欠失する為形態は不明だが頸部がくの字に屈曲した後外方に開くものと考えられる。胴部は膨曲し上方に立ち上がる。	砂粒及び長石を多く含み、径2～3mm程の小石、角センゴ石、金雲母を少量含む	淡赤褐色	良好	頸部 ナデ 胴部 ハケ目 指頭痕 ヘラナデ	へラ削り（上方）	○土師器 ○口縁部及び胴部下半は欠失

壁は不明だが、残っている西側壁が4.74mを測ることからほぼ同規模の隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－68°30′－Wをとる。西側壁のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドがあり、煙道部は若干壁の外側にでている。カマドの中からは、支脚に使ったと考えられる底部を欠いた土師器の甕が、口縁部を下に向けて置かれた状態で出土した。床面には、壁近くまで硬化面が広がっており、柱穴は検出できなかった。

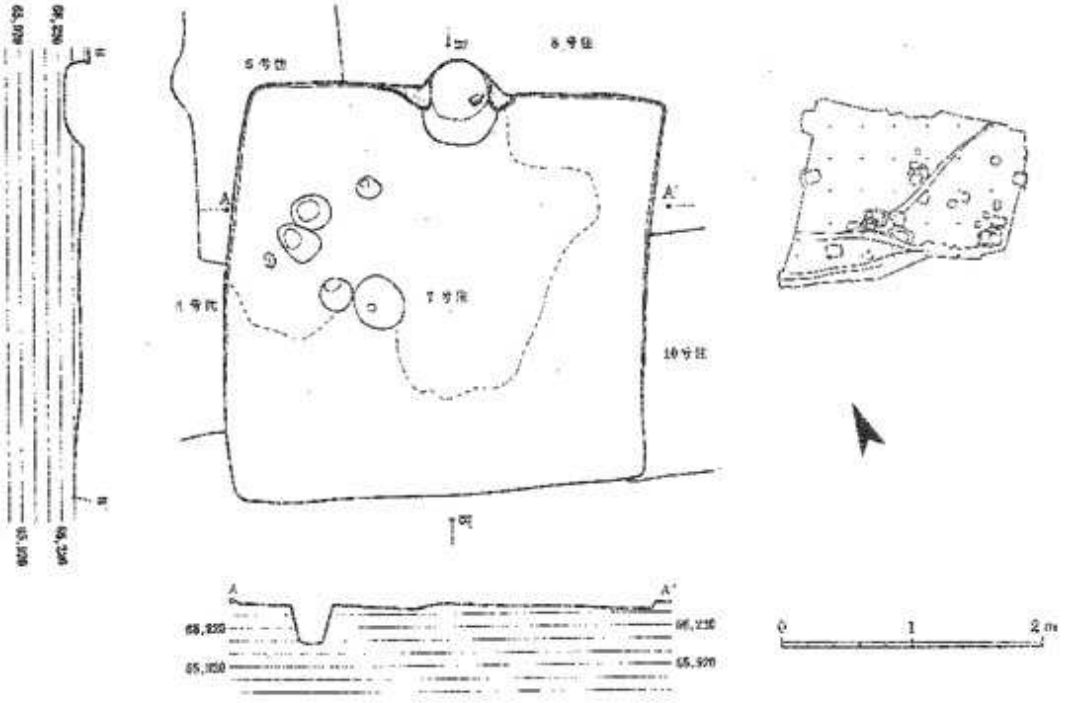
遺物は、ほとんどが細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の坏や鉢・甕・



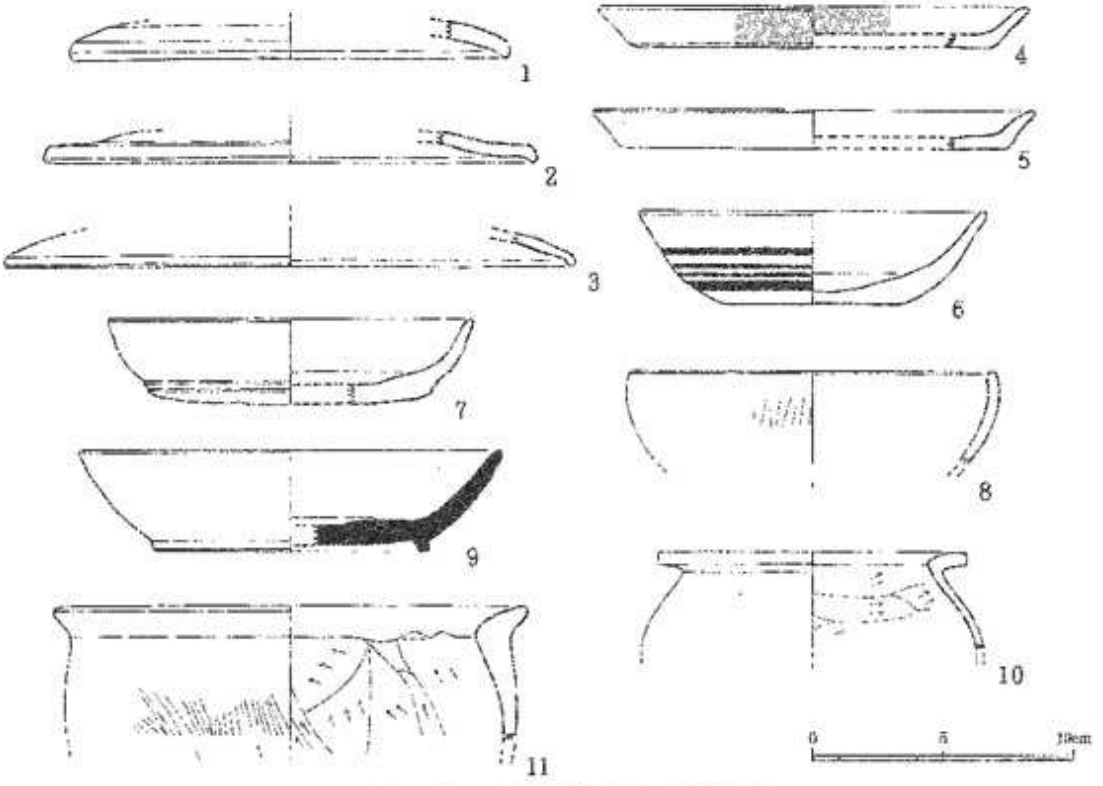
第128図　5号住居跡内出土土器実測図

第49表　　5号住居跡内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
128－1	坏	口径 12.4 器高 2.9 底径 9.4	体部は外にあまり開かず垂直に近い状態で直線的にせり上がり端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び金雲母を含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面赤色顔料塗布
128－2	鉢	口径 19.2 現存高 5.3	体部は外に開きながら直線的に立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び長石を少量含む 緻密	灰色	電顕良	ヨコナデ 木目が痕残る	ヨコナデ 木目が痕残る	○須恵器
128－3	甕	口径 16.5 現存高 6.5	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外反しながら外に短かく開く。端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び径1～2mm程の小石、角セン石、長石を多量に含み、金雲母を少量含む	外面 淡赤褐色 内面 黄褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布
128－4	甕	口径 18.7 現存高 3.1	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外反しながらほぼ水平に開く。端部はやや尖がり気味である。胴部は直線的に降りる。	砂粒、長石、角セン石、金雲母を多く含む	淡赤褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 器面が荒れている為不明	○土師器
128－5	甕	口径 22.5 現存高 9.3	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外反しながら大きく外に開く。端部はやや尖がり気味である。胴部はやや張らみながら降りていく。	砂粒及び径2mm程の小石を多く含み、長石、角セン石、金雲母を少量含む。	淡黄褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
128－6	甕	口径 27.6 現存高 9.0	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外反しながら大きく外に開く。端部は丸くなる。胴部は直線的に降りていく。	砂粒及び径2～3mm程の小石、角セン石を多く含み、長石、金雲母を少量含む	赤橙色	良好	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
128－7	甕	口径 28.5 現存高 4.1	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外反しながら大きく外に開く。端部は丸くなる。	砂粒を多く含み、長石、角セン石、金雲母、径1～2mm程の小石を少量含む	淡赤褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 不明	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器



第129図　7号住居跡実測図



第130図　7号住居跡内出土土器実測図

第50表　7号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
130 1-1	壺	口径 16.9 現存高 1.5	口縁部は鳥の嘴状に短かく内側に湾曲し、端部はやや尖がり気味である。天井部は低くドーム状になる。	砂粒及び金雲母を多く含み、長石を少量含む	淡赤橙色	良好	ヨコナデ 天井部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
130 1-2	壺	口径 19.0 現存高 1.2	口縁部は鳥の嘴状に短かく内側に湾曲し、端部は丸くなる。天井部は低い。	砂粒及び角セン石を多く含み、長石、金雲母を少量含む	淡赤橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器
130 1-3	壺	口径 22.0 現存高 1.3	口縁部は鳥の嘴状に短かく内側に湾曲し、端部は丸くなる。天井部は低くドーム状になる。	砂粒及び金雲母を含む	赤橙色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器
130 1-4	鉢	口径 16.6 器高 1.6 底径 13.8	体部は、直線的に大きく外に開きながら立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
130 1-5	皿	口径 17.0 器高 1.5 底径 14.8	体部は、外反し大きく外に開きながら立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び金雲母を含む	赤橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
130 1-6	杯	口径 13.3 器高 3.6 底径 6.8	体部は大きく外に開きながらやや内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を多く含み、径2mm程の小石を含む	赤褐色	良好	ナデ及び指ナデ 文を施す 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
130 1-7	杯	口径 14.0 器高 3.3 底径 11.0	体部は外に開きながら大きく内湾する。端部はやや尖がり気味である。	砂粒を多く含み、径1～2mm程の小石及び角セン石、金雲母を少量含む	淡赤橙色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
130 1-8	杯	口径 14.0 器高 3.5	体部は大きく内湾しながら立ち上がり口縁部が少し内傾する。端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を多く含み、長石、角セン石を少量含む	淡赤橙色	良	ハケ目の後ナデ	ヨコナデ	○土師器
130 1-9	杯	口径 16.3 器高 3.9 高台径 10.6 高台高 0.4	体部は直線的に大きく開きながら立ち上がり、端部は丸くなる。底部には、体部との接付面に台形状の高台を貼り付ける。	砂粒を多く含み、径2mm程の小石を少量含む	灰色	堅緻良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け
130 1-10	甕	口径 11.9 現存高 3.8	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は短かく外側に開く、端部はナデで平坦である。胴部に大きく膨らみ口径より胴部最大径が大きくなる。	砂粒及び径1mm程の小石、長石、角セン石、金雲母を多く含む	淡黄褐色	良	ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
130 1-11	甕	口径 18.2 現存高 5.3	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は短かく外側に開く、端部はやや尖がり気味である。胴部はやや膨らみながら底部に向って窄りていく。	砂粒及び径1mm程の小石、角セン石、金雲母を多く含む	淡赤橙色	良好	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

瓶などが出土している。

5号住居跡

遺構（第125図）　　出土遺物（第128図・第49表）

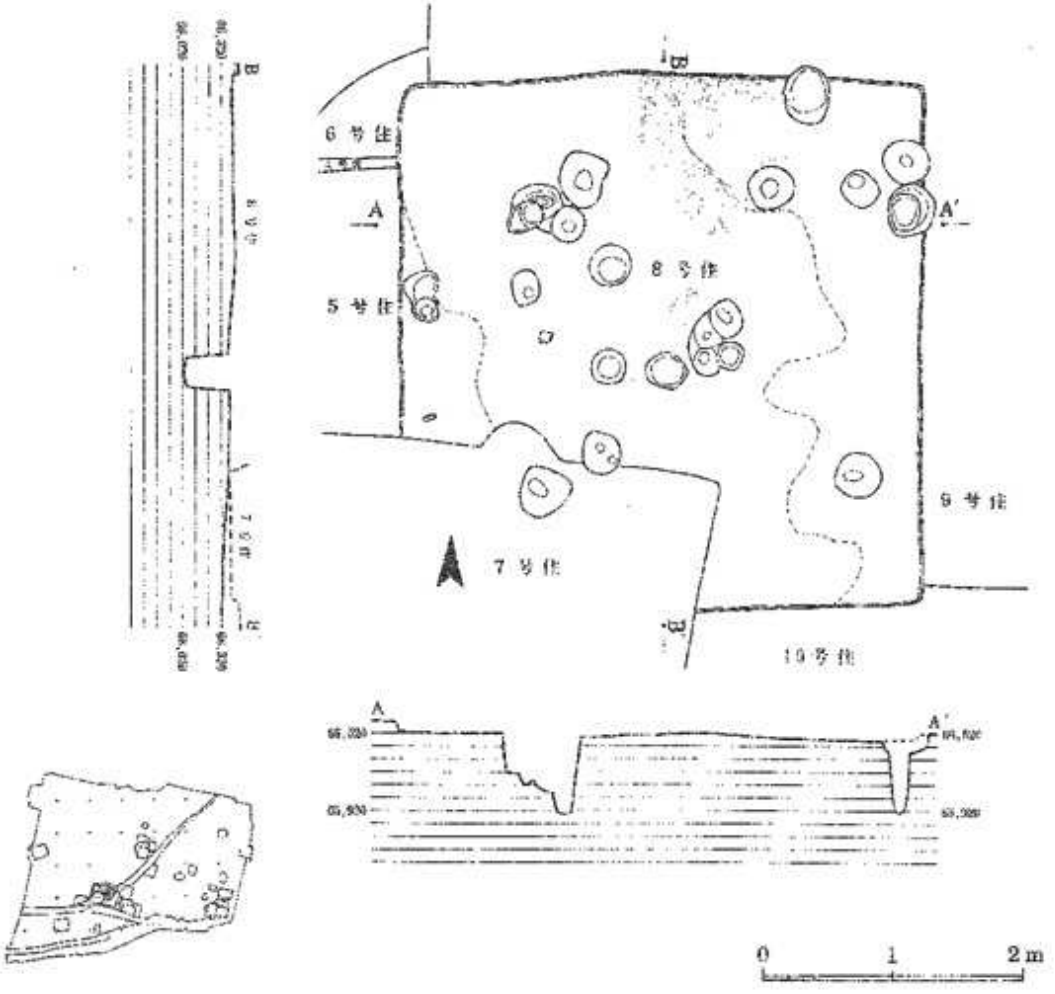
7-K－36グリッドに検出した住居跡で、切り合っている7号・8号住居跡より古く、4号

住居跡より新しい、住居跡は、大半が他の住居跡より切られていることから規模は不明だが、残っている西側壁が3.36mを測ることからほぼ同規模の隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は、N－72°30′－Wをとる。西側壁には、袖を黄白色粘土で作ったカマドがあり、煙道部は若干壁の外側にでている。床面には、壁近くまで硬化面が広がっており、柱穴は検出できなかった。

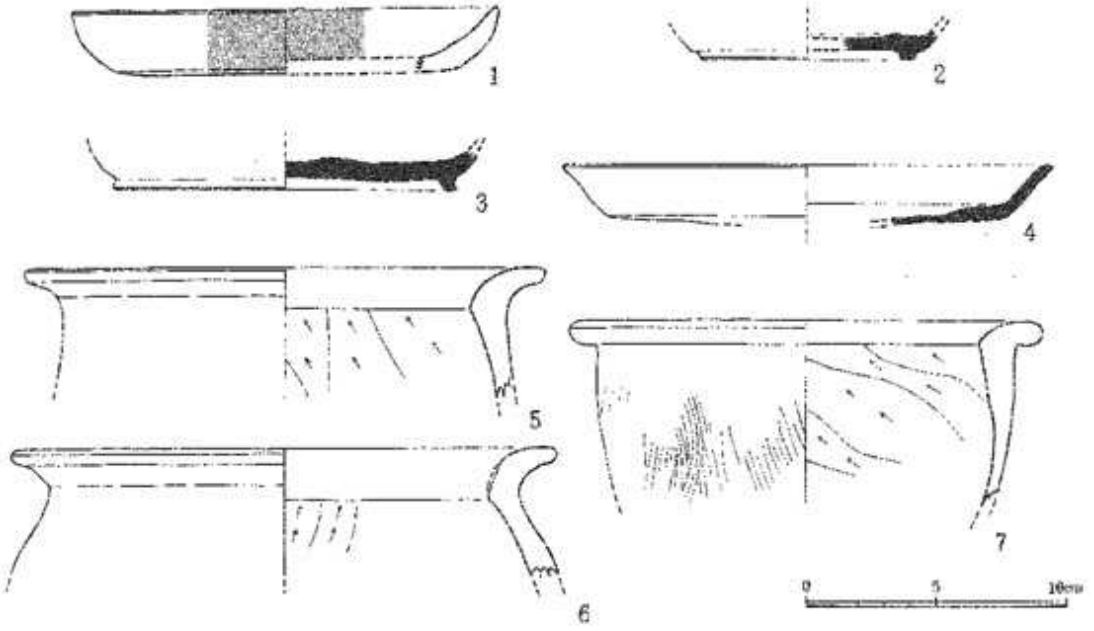
遺物は、ほとんどが細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の坏や椀・甕、それに須恵器の坏などが出土している。

7号住居跡

遺構（第129図）　　出土遺物（第130図・第50表）



第131図　8号住居跡実測図



第132図　8号住居跡内出土土器実測図

第51表　8号住居跡内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
132	甕	口径 16.4 器高 2.5 底径 12.2	口縁端部は丸く、体部は内湾気味に立ち上がる。	長石を多量に含み、少量や径2mm前の小石や角セン石を少量含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
132	坏	現存高 1.2 高台径 8.2 高台高 0.3	底部と体部との境に低い偏平な方形の高台を貼り付ける。	砂粒及び白色小石を少量含む	灰色	堅緻良	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け ○脚部及び口縁部欠失
132	坏	現存高 1.5 高台径 13.2 高台高 0.5	底部と体部の境に台形で下端をやや外方につまみ出した高台を貼り付ける。	緻密 砂粒及び白色小石を少量含む	灰色	堅緻良好	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け ○脚部及び口縁部欠失
132	高坏	口径 28.8 現存高 5.3	口縁部は緩慢にやや外方に開きながら立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。	緻密 砂粒及び白色小石を少量含む	灰白色	やや不良	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器 ○坏部のみで脚部欠失
132	壺	口径 50.0 現存高 5.1	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外反し短かく外方に開く。	径1～2mm程の小石及び長石を多く含み、角セン石及び金雲母を少量含む	淡赤褐色	良	口縁部ヨコナデ 頸部ハケ目の後ナデ	口縁部ヨコナデ 頸部ヘラ削り	○土師器
132	壺	口径 20.9 現存高 4.9	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外反し短かく外方に開き、端部は丸くなる。頸部は口縁部より大きくなる。	径1～2mm程の小石及び長石、角セン石を多く含む	淡褐色	良	口縁部ヨコナデ 頸部ハケ目の後ナデ	口縁部ヨコナデ 頸部ヘラ削り	○土師器
132	壺	口径 18.2 現存高 7.2	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外方に開き、端部は丸くなる。頸部は口縁部より大きくなる。	径1～1.5mm程の小石及び角セン石、金雲母を多く含む	淡褐色	良	口縁部ヨコナデ 頸部ハケ目の後ナデ	口縁部ヨコナデ 頸部ヘラ削り	○土師器

7－K－36・45グリッドに検出した住居跡で、切り合っている4号・5号・8号・9号・10号住居跡の中では一番新しい。住居跡の規模は、長辺3.20m、短辺2.98mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－25°30′－Eをとる。北側壁のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドがあり、煙道部は若干壁の外側にでている。床面には、壁近くまで硬化面が広がっており、柱穴は検出できなかった。

遺物は、ほとんど細片で図化できたものは少ないが、土師器の坏や蓋・皿・甕、それに須恵器の坏や蓋などが出土している。

8号住居跡

遺構（第131図）　　出土遺物（第132図・第161図1・第51表・第67表1）

7－K－36・45グリッドに検出した住居跡で、切り合っている7号住居跡より古く、4号・5号・6号・9号・10号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺4.06m、短辺4.00mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－19°00′－Eをとる。カマドは、検出できなかったが、床面には壁近くまで硬化面が広がっており、柱穴は3個検出され4本柱の住居跡と考えられる。

遺物は、ほとんど細片で図化できたものは少ないが、土師器の坏や皿・高坏・甕、それに須恵器の坏などが出土している。また、この住居跡からは、土師器坏の外面底部に墨書のあるものが1点出土している。文字の判読はできない。

9号住居跡

遺構（第133図）

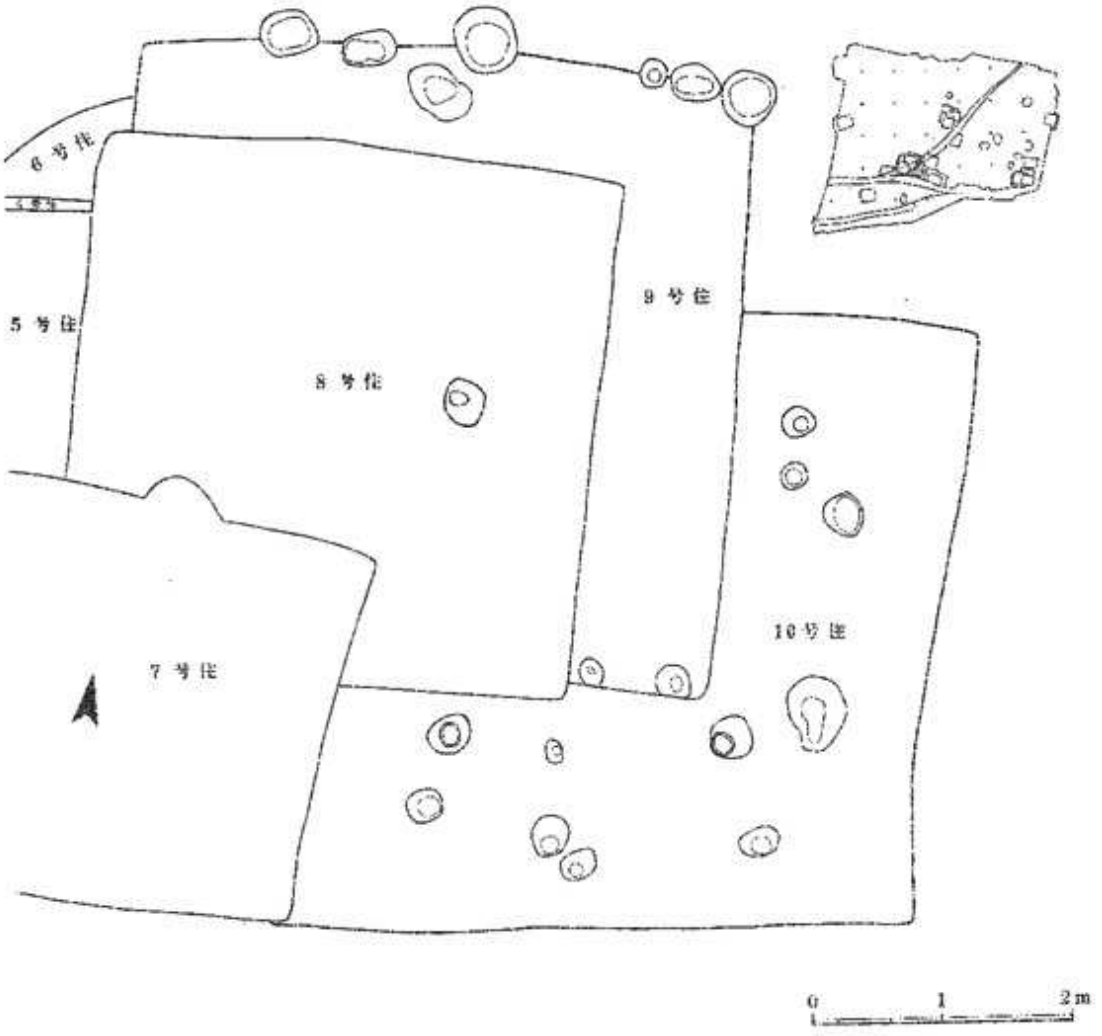
7－K－36・45グリッドに検出した住居跡で、切り合っている8号住居跡より古く、6号・10号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺4.74m、短辺4.72mを測り隅丸方形を呈している。方位はN－19°30′－Eをとる。住居跡は、全体的に削平されていることから範囲のみの確認で、カマドや硬化面、それに柱穴は検出できなかった。

遺物は、細片で図化できたものはないが、土師器の坏や甕、それに須恵器の坏が出土している。

10号住居跡

遺構（第133図）

7－K－36・45グリッドに検出した住居跡で、切り合っている7号・8号・9号住居跡の4軒の中では一番古い。住居跡は、削平が著しく範囲だけの確認で、他の住居跡からも切られ大半がないことから規模は不明であるが、一辺が4.70m程度で隅丸方形を呈しているものと考えられる。方位は、N－22°30′－Eをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面は検出できなかっ



第133図　9号・10号住居跡実測図

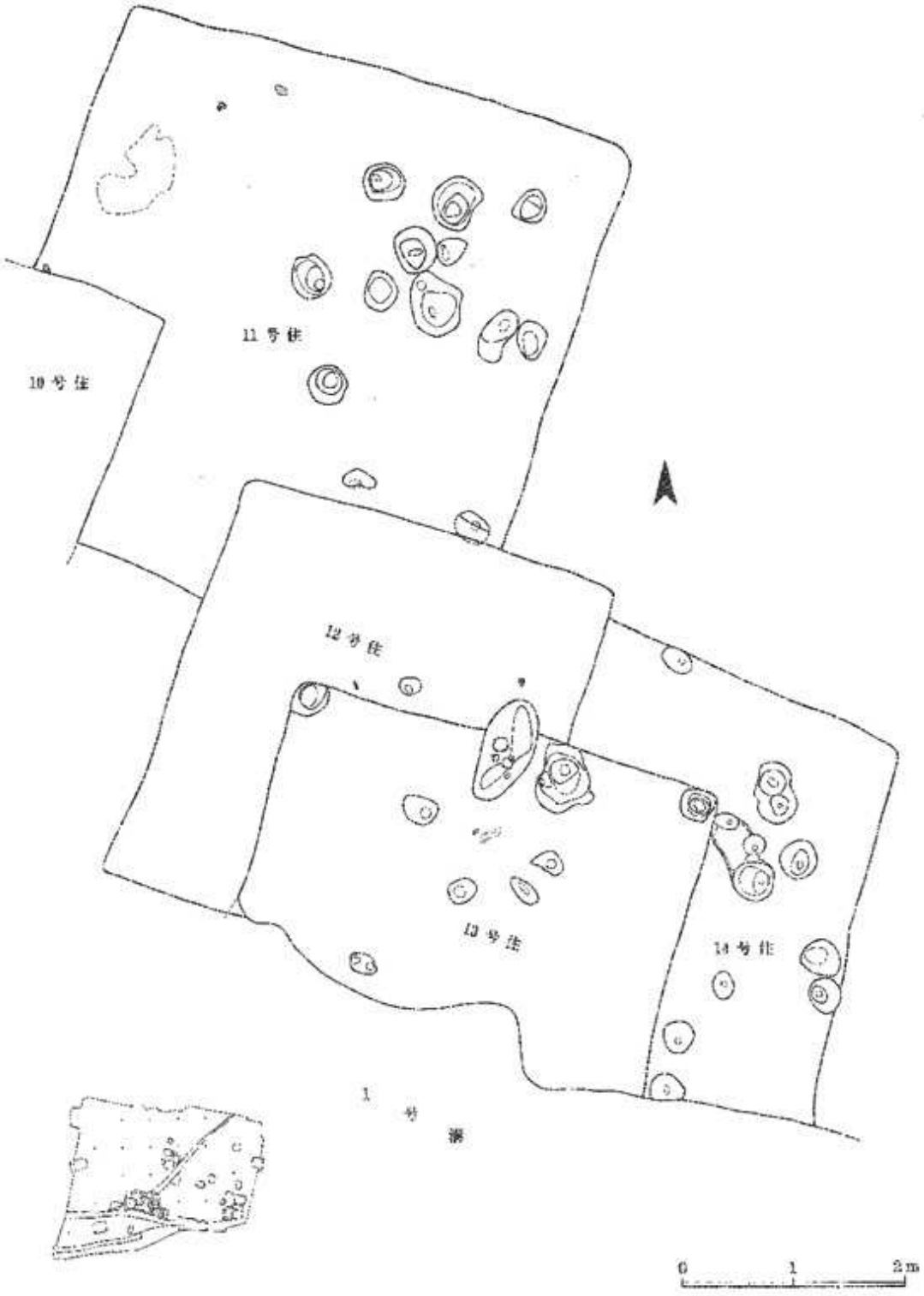
た。柱穴は、4個検出でき4本柱の住居跡である。

遺物は、細片で図化できたものはないが、土師器の坏や甕・甑などが出土している。

11号住居跡

遺構（第134図）

7－K－35・36・45・46グリッドに検出した住居跡で、切り合っている10号・12号住居跡の中では一番古い。住居跡の規模は、長辺4.98m、短辺4.70mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－22°30′－Eをとる。住居跡は、削平が著しくカマドや硬化面は検出できなかった。また、柱穴も特定できなかった。



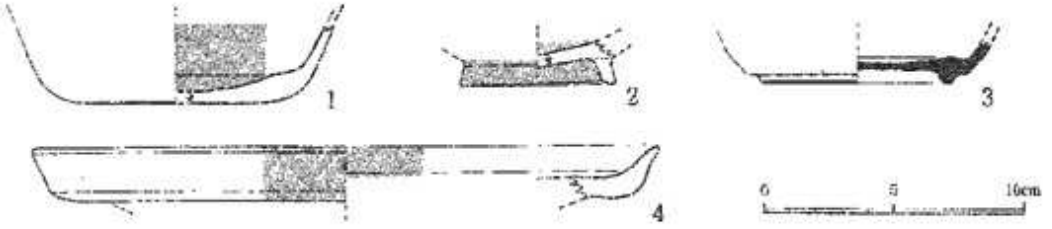
第134図　11号・12号・13号・14号住居跡実測図

遺物は、細片で図化できたものはないが、須恵器の坏などが出土している。

12号住居跡

遺構（第134図）　　出土遺物（第135図・第52表）

7－K－45・46グリッドに検出した住居跡で、切り合っている13号住居跡より古く、11号・14号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺3.80m、短辺3.46mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－23°00′－Eをとる。住居跡は、削平が著しくカマドや硬化面は検出できなかった。また、柱穴も特定できなかった。



第135図　12号住居跡内出土土器実測図

第52表　12号住居跡内出土土器観察表

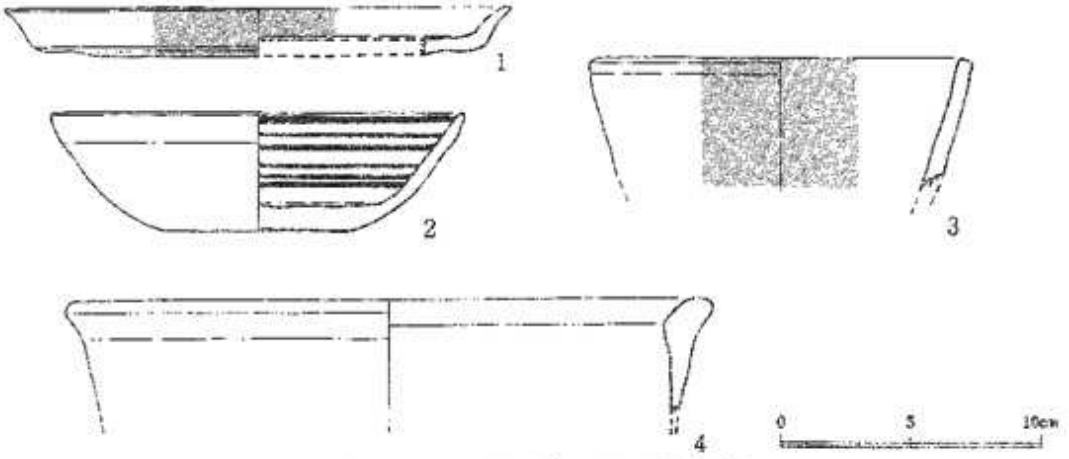
図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
135－1	坏	現存高 3.1 底径 8.2	体部は外に開きながら直線的に立ち上がる。	砂粒及び金雲母を多く含み、長石を少量含む	淡赤褐色	良	体部 ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内面に赤色顔料塗布
135－2	坏	現存高 1.7 高台径 5.9 高台高 1.0	底部と体部の境付近に低い高台をやや外方に開くように貼り付ける。	砂粒及び金雲母、長石を少量含む	淡赤褐色	良	体部 ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○高台貼り付け
135－3	坏	現存高 1.7 高台径 7.4 高台高 0.3	体部は外に開きながら内湾気味に立ち上がり、底部と体部の境よりやや内側に低い台形の高台を貼り付ける。	砂粒及び長石を含む	灰色	堅緻良好	体部 ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け
135－4	高坏	口径 24.0 現存高 2.4	坏部は内側に屈曲した後、口縁部は外に開きながら直線的に短かく立ち上がる。端部はやや尖ぎり気味である。	砂粒及び金雲母、角セン石を含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布

遺物は、細片で図化できたものは少ないが、土師器の坏や高坏・甕、須恵器の坏などが出土している。

13号住居跡

遺構（第134図）　　出土遺物（第136図・第162図２・第53表・第68表２）

7－K－46グリッドに検出した住居跡で、切り合っている11号・12号・14号住居跡の中では



第136図　13号住居跡内出土土器実測図

第53表　13号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
136－1	皿	口径 19.4 器高 1.8 底径 17.4	体部は大きく外に開き短かく外反しながら立ち上がり端部はやや尖がる。	砂粒及び長石、角セン石を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
136－2	坏	口径 15.8 器高 4.6 底径 7.0	体部は大きく外に開きながら内湾気味に立ち上がり端部は丸くなる。	砂粒を多く含み、角セン石を少量含む	赤褐色	良好	ヨコナデ底部回転ヘラ切り	ナデの後ヘラ磨きで暗文を施している（同心円）	○土師器
136－3	椀か鉢	口径 14.8 現存高 5.2	体部は外にやや開きながら直線的に立ち上がり端部はナデて平坦面を作る。	砂粒及び金雲母を多く含み、径1mm程の小石、長石を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
136－4	甕	口径 24.6 現存高 4.4	口縁部は短かく外に開き端部は丸くなる。	砂粒及び長石、径1mm程の小石を多く含み、角セン石を少量含む	淡褐色	良	口縁部ヨコナデ胴部ハケ目の後ナデ	口縁部ヨコナデ胴部ヘラ削り	○土師器

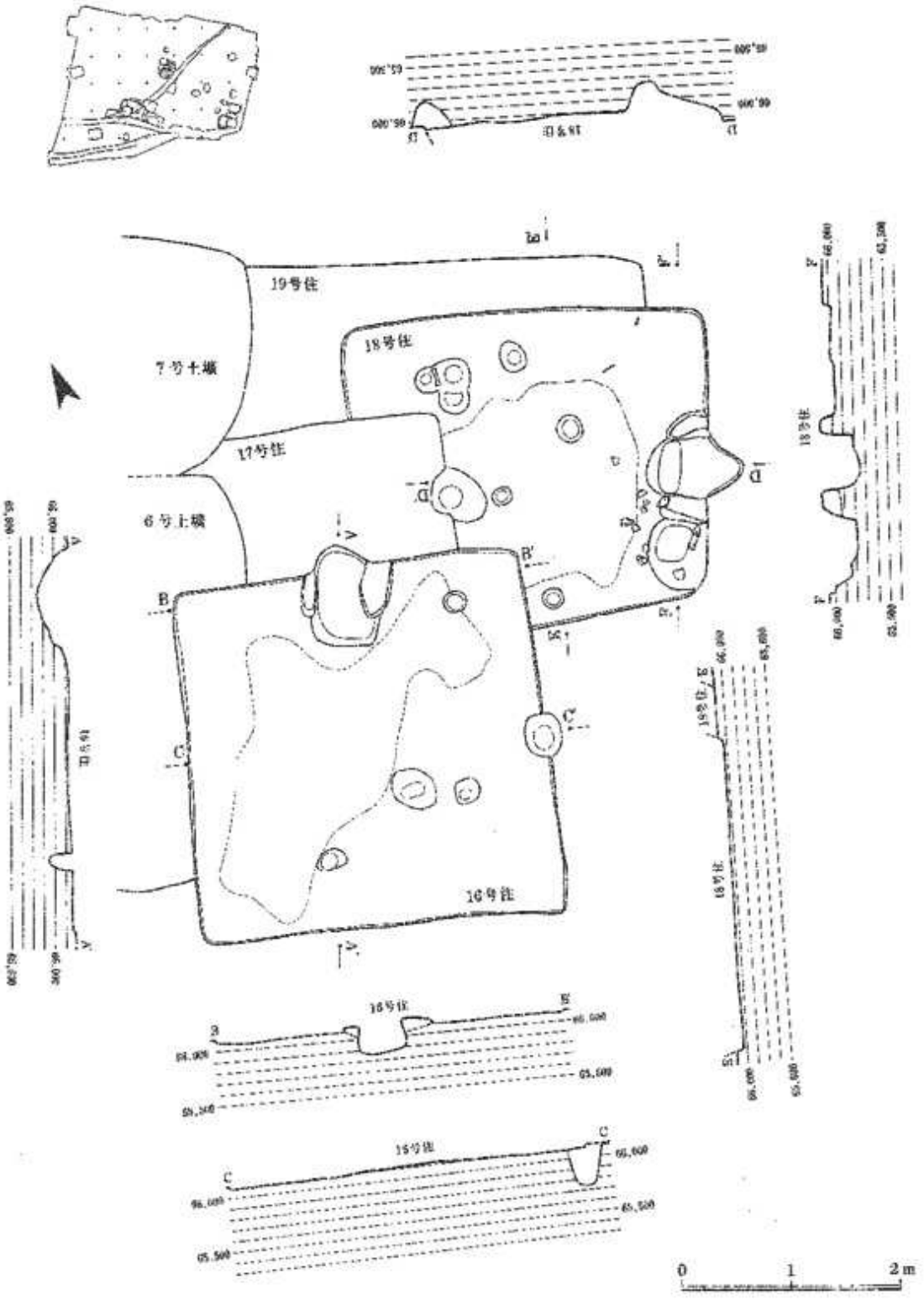
一番新しい。住居跡は、削平が著しく範囲だけの確認で、南側部分を1号溝により切られていることから規模は不明であるが、一辺が3.90m前後で隅丸方形を呈しているものと考えられる。方位は、N－17°00′－Eをとる。北側壁のほぼ中央には、カマドが検出されたが、削平が著しく袖は残っていない。煙道部は、壁より外にでている。硬化面は、検出できなかった。また、柱穴も特定できなかった。

遺物は、細片で図化できたものは少ないが、土師器の坏や皿・甕などと共に鉄鏃が1点出土している。

14号住居跡

遺構（第134図）

7－K－46グリッドに検出した住居跡で、切り合っている12号・13号住居跡よりも古い。住



第137図　16号・17号・18号・19号住居跡実測図

居跡は、削平が著しく範囲だけの確認で、南側部分を1号溝により切られていることから規模は不明であるが、隅丸方形を呈しているものと考えられる。方位は、N－19°30′－Eをとる。住居跡内は、削平が著しいことからカマドや硬化面の検出、それに柱穴の特定はできなかった。

遺物は、細片で図化できたものはないが、土師器の甕が出土している。

16号住居跡

遺構（第137図）　　出土遺物（第138図・第54表）

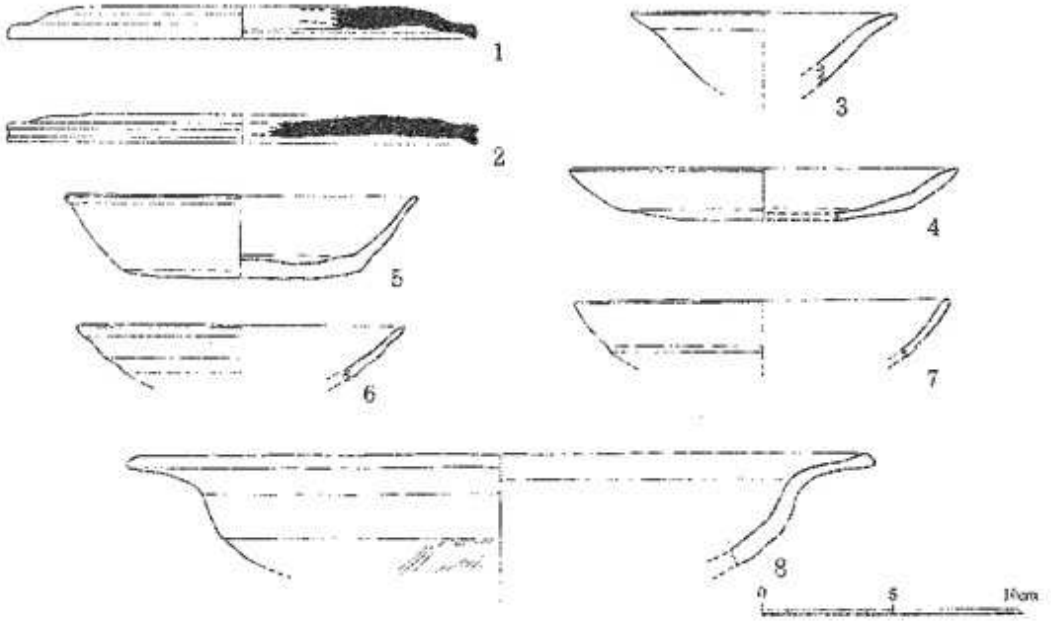
7－K－26グリッドに検出した住居跡で、切り合っている17号・18号・19号住居跡や6号土壙の中では一番新しい。住居跡の規模は、一辺が3.30mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－16°00′－Eをとる。北側壁のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドがあり、煙道部は若干壁の外側にでている。床面には、カマド近くまで硬化面が広がっており、柱穴は検出できなかった。

遺物は、ほとんど細片で図化できたものは少ないが、土師器の坏や皿・鉢・甕、須恵器の坏や蓋などが出土している。

17号住居跡

遺構（第137図）　　出土遺物（第139図・第55表）

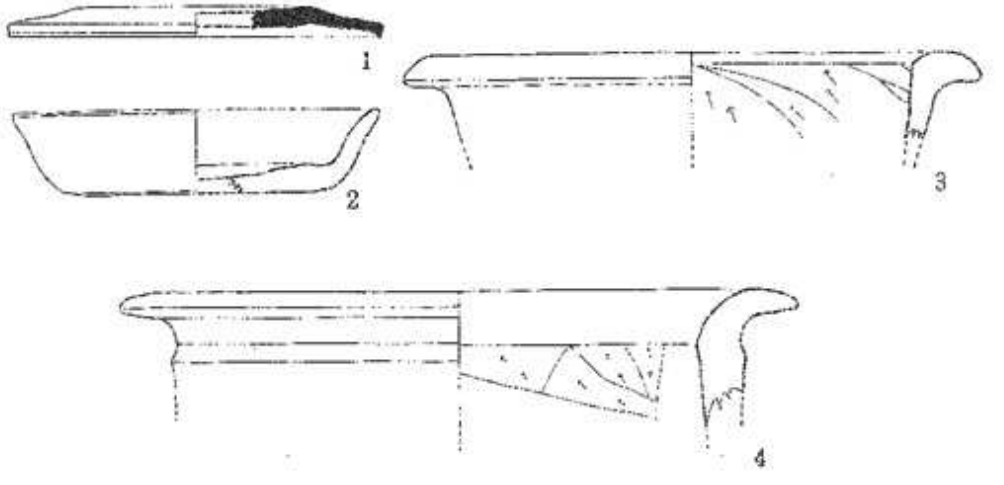
7－K－26グリッドに検出した住居跡で、切り合っている16号住居跡や6号・7号土壙より



第138図　16号住居跡内出土土器実測図

第54表　16号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
138 1 1	蓋	口径 18.0 器高 1.5	口縁部は下方に短かく屈曲し、明瞭な段を有し端部は丸くなる。天井部は低い。	緻密 砂粒を多く含む	灰色	堅緻 良	ヨコナデ 天井部 ヘラ削り	ヨコナデ	○須恵器
138 1 2	蓋	口径 18.1 器高 1.1	口縁部は下方に短かく屈曲し、明瞭な段を有し端部は丸くなる。段の外側に1条の沈線を巡らす。天井部は低い。	緻密 砂粒及び径1～1.5mm程の小石を多く含む	灰白色	堅緻 良	ヨコナデ 天井部 ヘラ削り	ヨコナデ	○須恵器
138 1 3	坏	口径 10.2 現存高 2.9	体部は大きく外方に開きながらやや外反気味に立ち上がり、端部はやや尖かり気味である。	砂粒及び金雲母を多量に含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○底部欠失
138 1 4	鉢	口径 14.8 器高 2.0 底径 6.4	体部は大きく外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がり、端部は尖かり気味である。	砂粒及び角セン石を多く含み、角セン石を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
138 1 5	坏	口径 6.8 器高 3.2 底径 9.0	体部は外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。器壁は肉厚である。	砂粒及び角セン石を多く含み、径1～2mm程の小石を少量含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
138 1 6	坏	口径 14.4 現存高 2.3	体部は大きく外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、端部はやや丸くなる。器壁は肉厚である。	砂粒及び金雲母を多く含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器
138 1 7	坏	口径 14.4 現存高 2.3	体部は大きく外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、端部は尖かる。器壁は薄い。	砂粒及び金雲母を多く含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器
138 1 8	浅鉢	口径 28.7 現存高 4.4	頸部で屈曲した後、口縁部は低ほぼ横に大きく開く。端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石を多量に含み、金雲母を少量含む	明茶褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	ヨコナデ	○土師器



第139図　17号住居跡内出土土器実測図

第55表　17号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
139 1 1	蓋	口径 14.2 器高 1.15	口縁部は下方に短かく屈曲し明瞭な段を有する。端部は尖がり気味である。天井部は低い。	微密 砂粒及び白色石粒を少量含む	灰色	良好 堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器 ○天井部一部欠失
139 1 2	坏	口径 14.0 器高 3.2 底径 10.0	器壁は厚く、体部はほぼ直線的に立ち上がり端部はやや尖がり気味である。	砂粒を多く含み、粒1～2mmの小石、金雲母を少量含む	褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内面に赤色顔料塗布
139 1 3	甕	口径 22.2 現存高 3.4	口縁部はほぼ垂直に開き短かく外反し、端部は丸くなる。胴部は内側に縦刷しながらおりていく。	砂粒を多く含み、角セン石、金雲母を少量含む	黄褐色	良	ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
139 1 4	甕	口径 26.4 現存高 5.3	口縁部はほぼ直線に開き大きく外反し、端部は丸くなる。	砂粒及び径1～2mm程の小石を多く含み、長石、角セン石を少量含む	淡橙色	良	ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

古く、18号・19号住居跡より新しい。住居跡は、その大半が住居跡や土壙に切られていることから規模は不明で、隅丸方形を呈しているものと考えられる。方位は、N－17°30′－Eをとる。住居跡内は、削平が著しいことからカマドや硬化面の検出、それに柱穴の特定はできなかった。

遺物は、ほとんど細片で図化できたものは少ないが、土師器の坏や甕、須恵器の坏や蓋などが出土している。

18号住居跡

遺構（第137図）　　出土遺物（第140図・第162図3～4・第56表・第68表3～4）

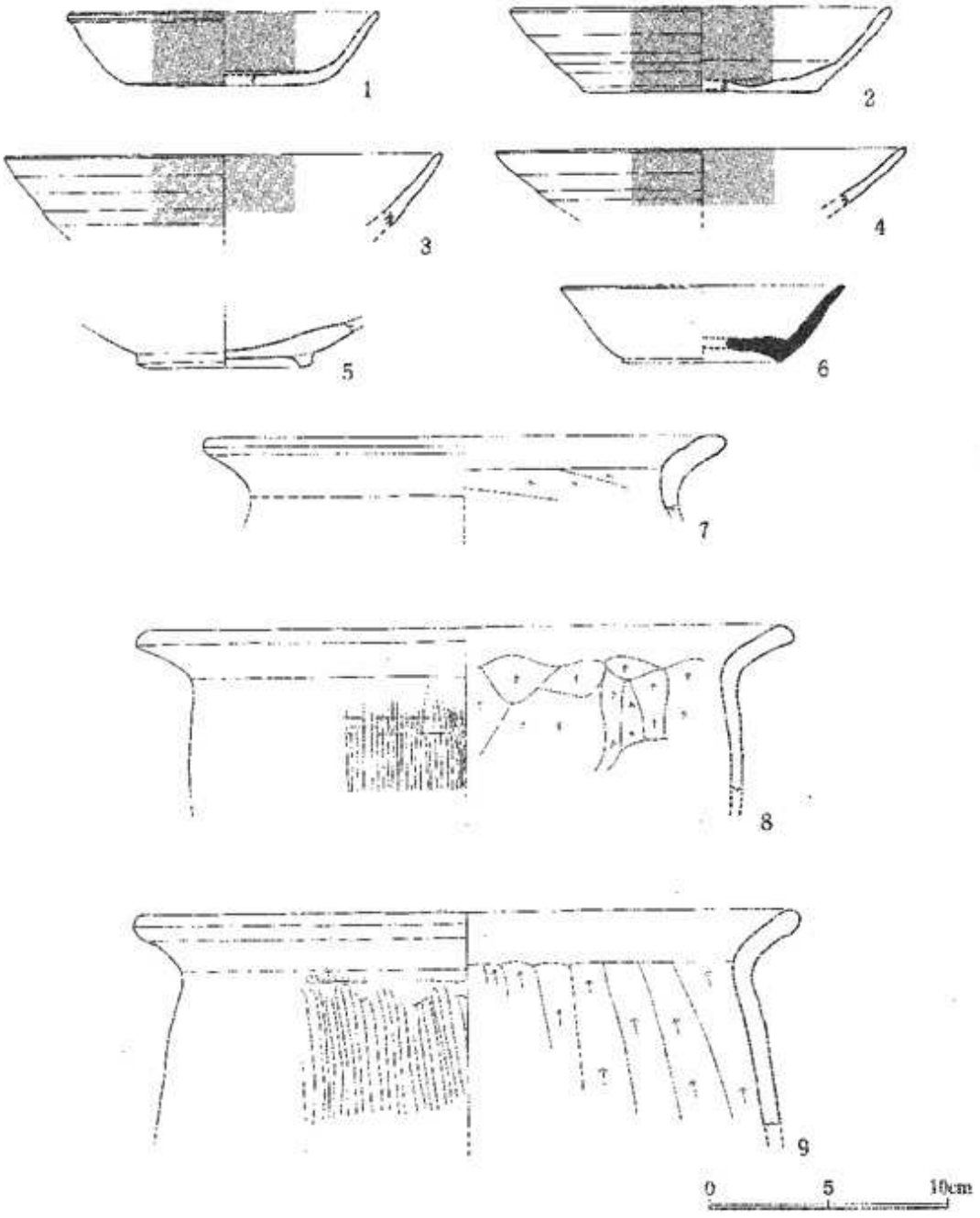
7－K－26・27グリッドに検出した住居跡で、切り合っている16号・17号住居跡より古く、19号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺3.32m、短辺2.90mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－69°00′－Wをとる。東側壁のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドがあり、煙道部は壁の外側にでている。床面には、カマド近くまで硬化面が広がっており、柱穴は検出できなかった。

遺物は、細片で図化できたものは少ないが、土師器の坏や甕、須恵器の坏などと共に鉄製刀子が2点出土している。

19号住居跡

遺構（第137図）

7－K－26・28グリッドに検出した住居跡で、切り合っている16号・17号・18号住居跡や7号土壙の中では一番古い。住居跡は、その大半が住居跡や土壙に切られていることから規模は不明で、隅丸方形を呈しているものと考えられる。方位は、N－70°00′－Wをとる。住居跡内



第140図　18号住居跡内出土土器実測図

第56表　18号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
140 1	坏	口径 13.1 器高 3.2 底径 8.5	体部は外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がり、端部はとがる。	砂粒及び金雲母を多数に含む	赤褐色	良好	ユビナデ 底部 回転ヘラ切り	ミガキ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布

第56表　18号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
140－2	杯	口径 16.0 器高 3.6 底径 9.9	体部は大きく外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部は丸くなる。口径に比べて器高が低い。	砂粒及び金雲母を多量に含み、長石を少量含む	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
140－3	坏	口径 18.5 現存高 3.1	体部は大きく外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒を多く含み、金雲母を少量含む	赤褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○底部欠失
140－4	坏	口径 17.3 現存高 2.4	体部は大きく外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を多量に含む	赤褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○底部欠失
140－5	坏	現存高 1.9 高台径 7.4 高台高 0.6	体部との境に不整方形の高台を貼り付ける。端部はやや外方に開く。	砂粒及び白色小石、金雲母を多量に含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○高台貼り付け
140－6	坏	口径 11.9 器高 3.3 現存高 6.8 高台高 0.1	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部はやや尖がる。体部との境には、方形の低い高台を貼り付ける。	緻密 砂粒を多く含む	灰色	堅緻 良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け
140－7	甕	口径 22.0 現存高 3.1	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は直線的に外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒、白色小石、径1～2mm前の小石、角セン石、金雲母を多く含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
140－8	甕	口径 27.6 現存高 6.9	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は直線的に外方に開く、端部は丸くなる。胴部はほぼ直線的に開いていく。	砂粒及び径1～2mm程の小石、角セン石、長石、金雲母を多く含む	黄褐色	良好	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
140－9	甕	口径 28.0 現存高 9.1	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は直線的に外方に開き、端部は丸くなる。胴部は若干張られる。	砂粒及び角セン石、金雲母、径1～2mm程の小石を多く含む	淡茶褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

は、削平が著しいことからカマドや硬化面の検出、それに柱穴の特定はできなかった。

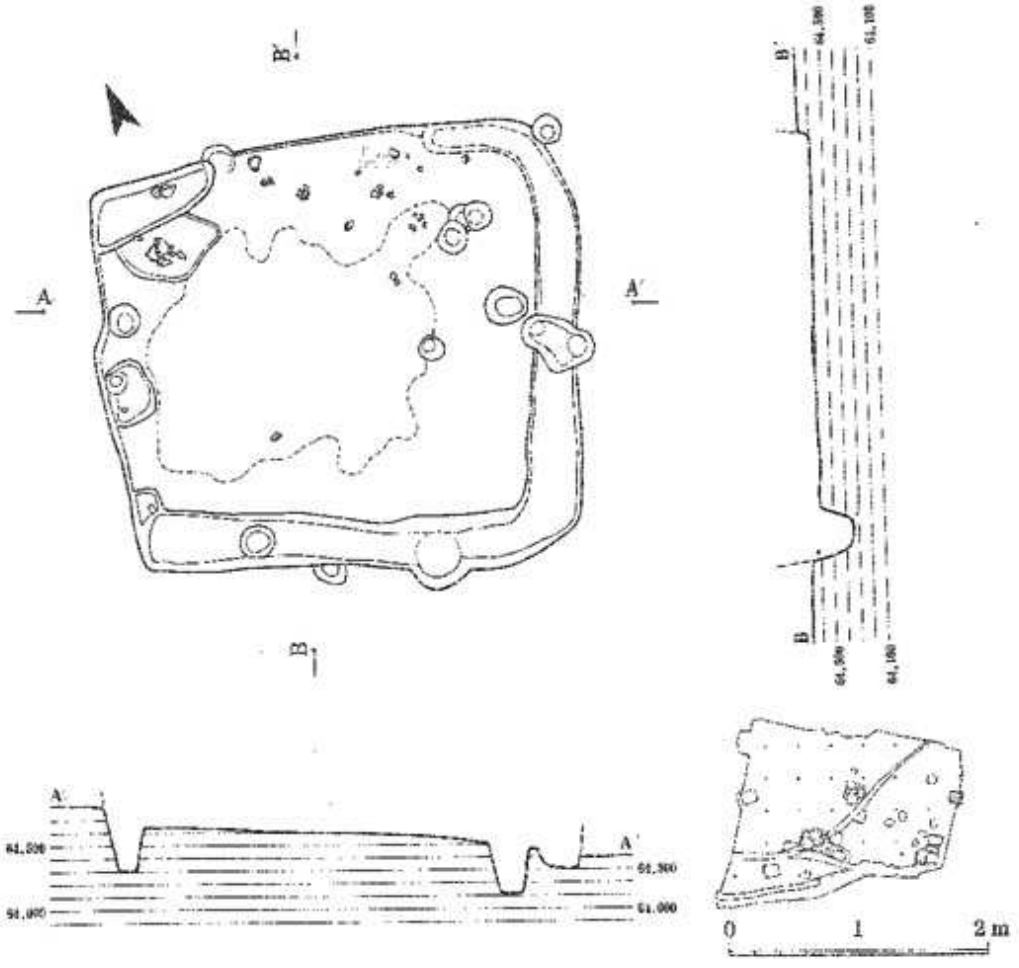
遺物は、細片で図化できたものはないが、土師器の甕が出土している。

21号住居跡

遺構（第141図）　　出土遺物（第142図・第161図3・第57表・第67表3）

7－K－29・30グリッドに検出した住居跡である。住居跡の規模は、長辺3.70m、短辺3.30mを測り、隅丸方形を呈している。方位は、N－70°30′－Wをとる。住居跡内には、中央付近に広がる硬化面を確認できたが、カマドは検出できなかった。柱穴は、2個検出でき2本柱の住居跡である。また、東側と南側壁際の床には幅30cm、深さ20cmの溝が検出された。溝は、住居跡の全周に巡っていたものと考えられる。

遺物は、細片が多く図化できたものは少ないが、土師器の坏や皿・高坏・甕、須恵器の坏が出土している。また、この住居跡からは、土師器坏の外面底部に墨書があるものが1点出土し



第141図　21号住居跡実測図

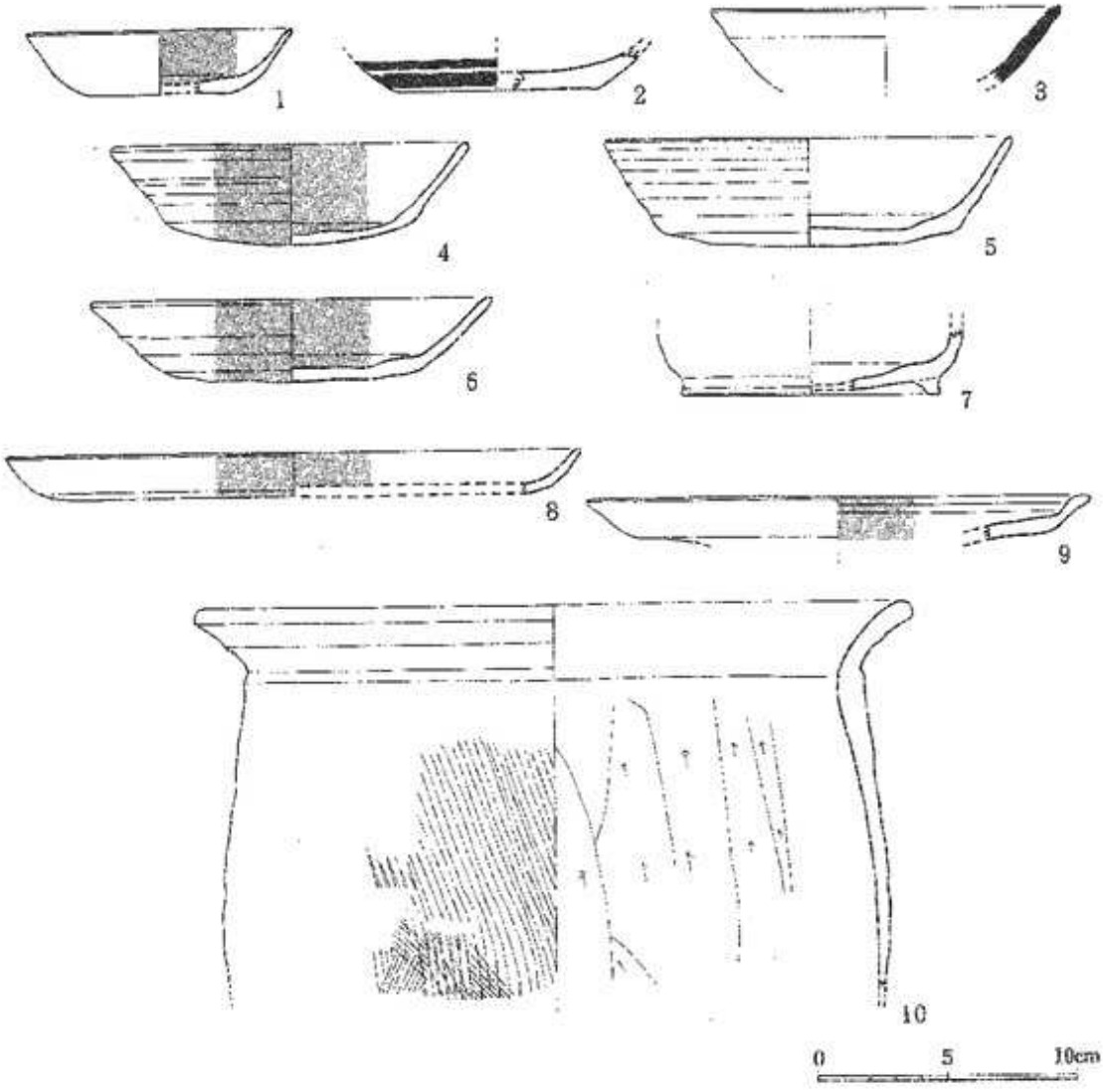
ている。文字の判読は、できない。

22号住居跡

遺構（第143図）　　出土遺物（第144図～146図・第161図2，4，5・第162図5～9・第58表・第67表2，4，5・第68表5～9）

7－K－32・49グリッドに検出した住居跡で、23号住居跡と切り合っており当住居跡が新しい。住居跡は、削平が著しく輪郭だけの確認であることから規模は不明であるが、一辺が4.30m前後で隅丸方形を呈しているものと考えられる。方位は、N－76°30′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面の検出はなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、他の住居跡に比べて出土量は多く、土師器の坏や皿・甕・椀・高坏・鉢・甕それに須恵器の坏や皿・椀などと共に鉄製刀子が3点と鉄釘が2点出土している。また、この住居跡からは土師器坏の外面底部に墨書のあるものが3点出土している。墨書は、1点が図？と読め他の2点は不明である。



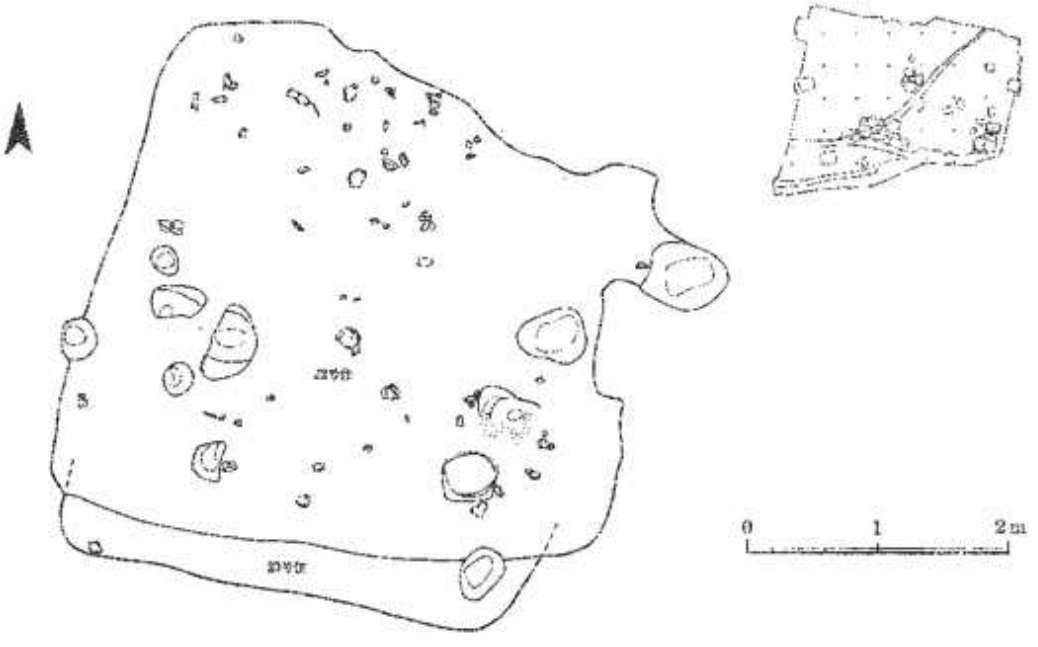
第142図　21号住居跡内出土土器実測図

第57表　21号住居跡内出土土器観察表

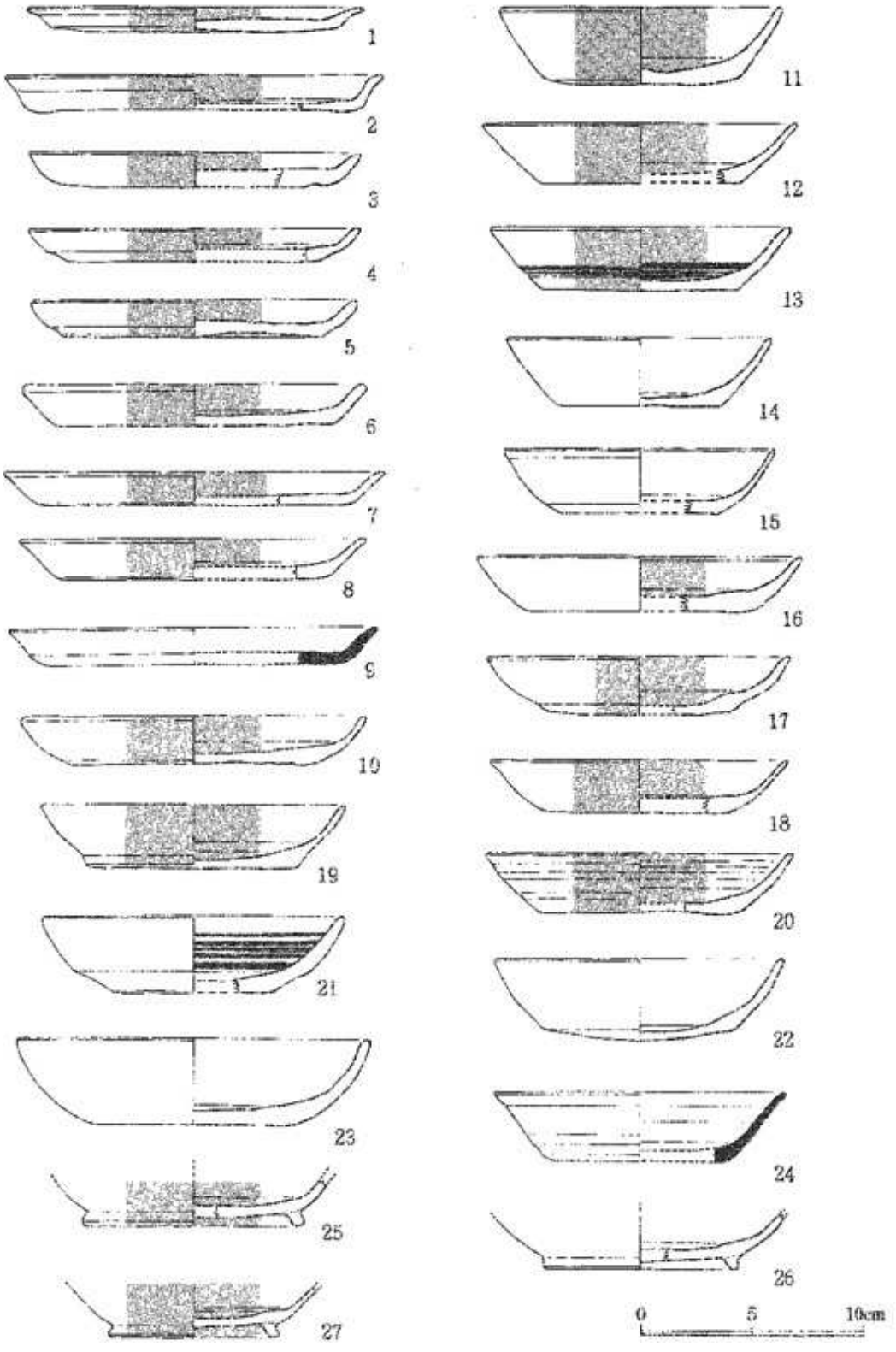
図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
142 1	坏	口径 10.3 器高 2.5 底径 5.4	体部はやや外反気味に外方に開きながら立ち上がり、端部は丸くなる。器壁は薄手である。	砂粒を多く含み、金雲母、角セン石、白色石粒を少量含む	赤褐色	不良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
142 2	坏	現存高 1.5 底径 7.8	体部は内弯気味に外方に開きながら立ち上がる。	砂粒を及び金雲母を多く含む	淡赤褐色	良	体部ナデの後ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○外面に墨文を施す
142 3	坏	口径 13.5 現存高 3.0	体部は直線的に大きく外方に開きながら立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒を多く含み、白色石粒を少量含む	明灰褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器 ○底部欠失

第57表　21号住居跡内出土土器観察表

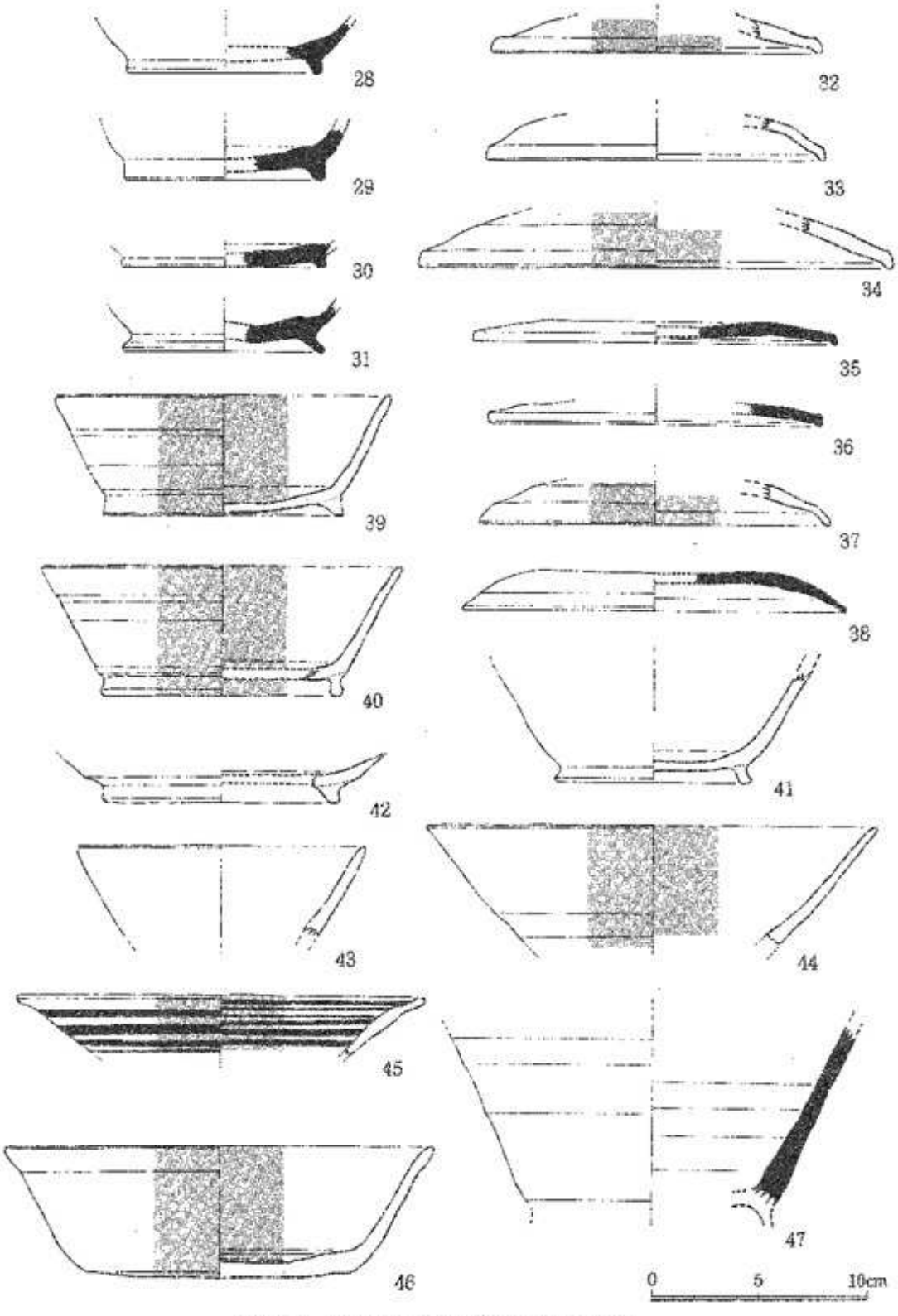
図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
142 1 4	坏	口径 13.4 器高 4.0 底径 9.6	体部に直線的に外方に開きながら立ち上がり、端部は丸くなる。底部は丸底気味。	砂粒を多く含み、白色粒及び角セン石を少量含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
142 1 5	坏	口径 15.8 器高 4.2 底径 11.0	体部はやや内湾気味に外方に開きながら立ち上がり、端部は丸くなる。底部は丸底気味。	砂粒を多く含み、角セン石、雲母を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
142 1 6	坏	口径 15.6 器高 3.2 底径 9.0	体部は直線的に大きく外方に開きながら立ち上がり、端部は丸くなる。底部は丸底気味。	砂粒を多く含み、角セン石及び白色小石を少量含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
142 1 7	坏	底径 2.5 高台径 10.0 高台高 0.7	体部はほぼ垂直に立ち上がり、底部の端には外方に開き気味に台形の高台を貼り付ける。	砂粒を多く含み、金雲母を少量含む	淡黄褐色	やや不良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○口縁部欠失 ○高台貼り付け
142 1 8	壺	口径 22.2 頸径 7.7 底径 18.4	体部はやや内湾気味に短かく外方に開いて立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を多量に含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
142 1 9	高坏	口径 19.6 裾径 11.7	口縁部が内側に屈曲した後、大きく外方に開きながら短かく立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を多量に含み、角セン石を少量含む	外面赤褐色 内面黄橙色	やや不良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○坏部のみで脚部欠失 ○内面に赤色顔料塗布
142 1 10	甕	口径 27.8 現存高 14.7	頸部で若干くの字に屈曲した後、外反気味に外方に開く。端部は丸くなる。	砂粒及び径2～3mm程の小石、白色小石を多く含み、長石、角セン石、金雲母を少量含む	淡黒褐色	良	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り（上方）	○土師器



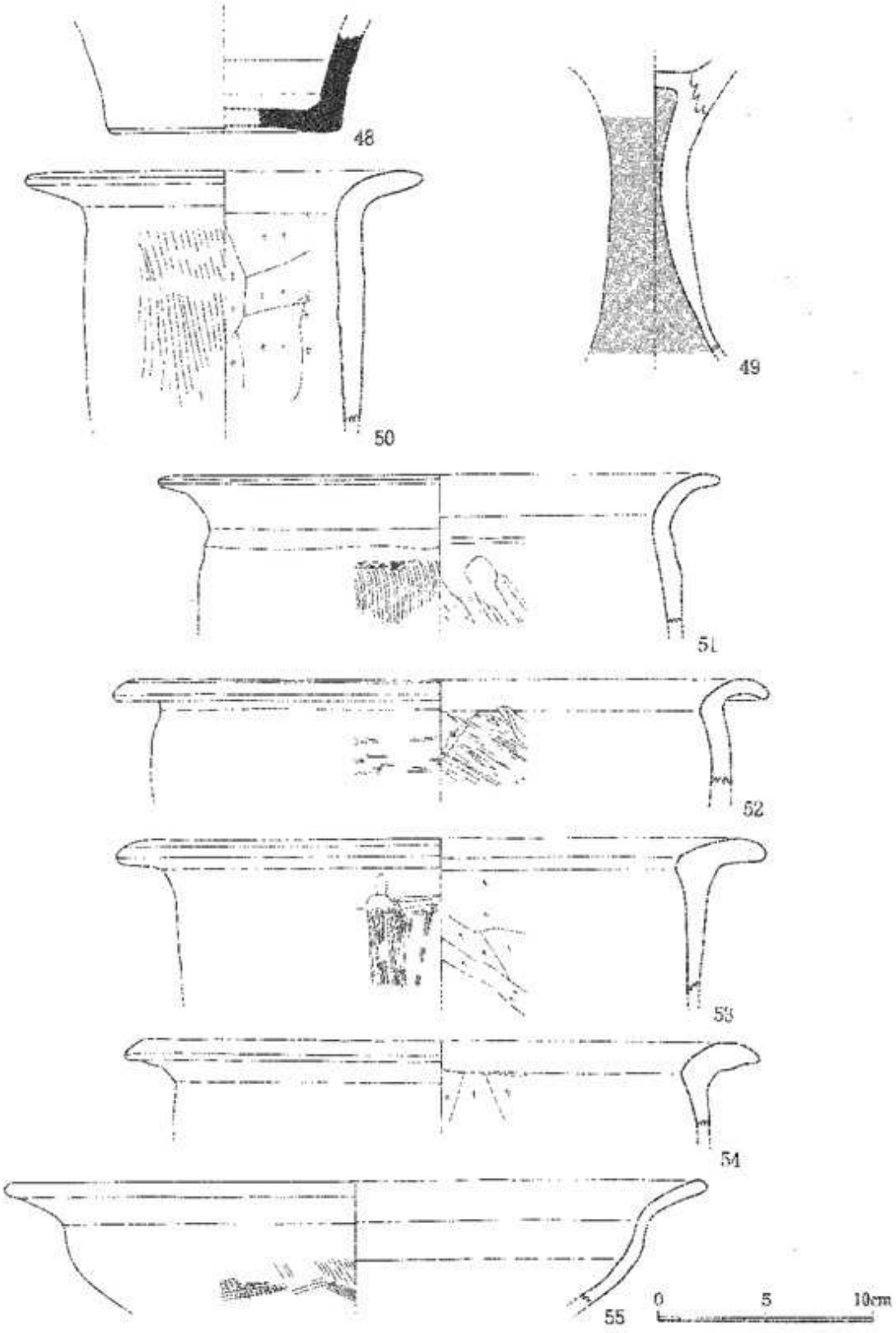
第143図　22号・23号住居跡実測図



第144図　22号住居跡内出土土器実測図（1）



第145図　22号住居跡内出土土器実測図（2）



第146図　22号住居跡内出土土器実測図（3）

第58表　22号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
144－1	甕	口径 15.2 器高 1.1 底径 13.0	体部は大きく外方に開きながら短かく直線的に立ち上がり、端部は尖がる。	砂粒及び径1～2mm程の小石を含み、長石、角セン石、白色小石を少量含む	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144－2	壺	口径 17.0 器高 1.7 底径 15.2	体部は外方に開きながら立ち上がり、外反する。端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144－3	甕	口径 15.0 器高 1.6 底径 11.7	体部は外方に開きながら短かく内湾気味に立ち上がり、端部は尖がる。	砂粒及び白色小石、角セン石、金雲母を含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144－4	甕	口径 15.0 器高 1.5 底径 10.0	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。器厚は薄い。	砂粒及び白色小石、金雲母を含み、角セン石を少量含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144－5	甕	口径 14.7 器高 1.7 底径 11.3	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を多く含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144－6	甕	口径 15.6 器高 1.9 底径 12.6	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を多く含み、角セン石を少量含む	淡茶褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144－7	甕	口径 17.2 器高 1.5 底径 14.0	体部は外方に開きながらほぼ直線的に立ち上がり、端部はやや尖がる。	砂粒及び白色小石、径1～2mm程の小石、金雲母を含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144－8	甕	口径 15.5 器高 1.8 底径 12.2	体部は外方に開きながらほぼ直線的に立ち上がり、端部は尖がり気味である。	砂粒及び白色小石、金雲母を含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144－9	甕	口径 16.7 器高 1.7 底径 12.1	体部は外方に開きながらほぼ直線的に立ち上がり、端部は尖がり気味である。	緻密 砂粒及び白色小石を多く含む	灰色	堅緻良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器
144－10	壺	口径 15.6 器高 2.3 底径 10.2	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。他に比べて器厚が薄い。	砂粒及び金雲母を多く含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144－11	壺	口径 13.8 器高 3.6 底径 8.8	体部は外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を多く含み、角セン石を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144－12	坏	口径 14.2 器高 2.7 底径 9.0	体部は外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒を含み、長石、金雲母を少量含む	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144－13	坏	口径 13.6 器高 2.9 底径 8.8	体部は外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を多量に含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部手持ちヘラケズリ ヘラ磨きにより暗文を施す（底面）	ヨコナデ ヘラ磨きにより暗文を施す（内面）	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布

第58表　22号住居跡内出土土器観察表

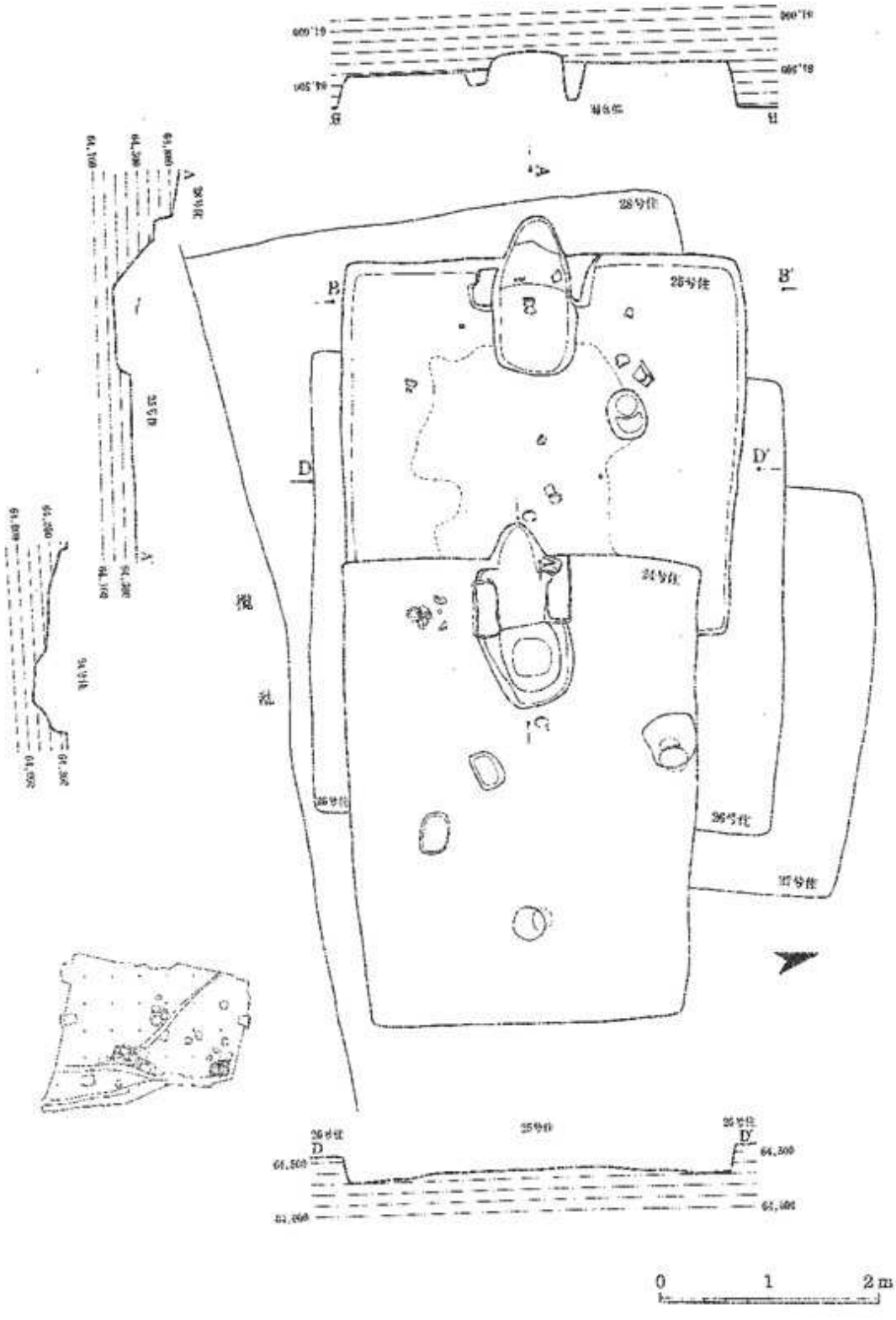
図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
144 1 14	坏	口径 12.0 器高 3.1 底径 7.2	体部は外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び径1mm大の小石を含み、金雲母を少量含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
144 1 15	坏	口径 12.3 器高 2.9 底径 7.0	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、端部はやや尖がり気味、器壁は薄い。	砂粒及び白色小石を含み、金雲母を多く含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
144 1 16	坏	口径 14.7 器高 2.5 底径 10.0	体部は外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、金雲母を含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144 1 17	坏	口径 13.7 器高 2.7 底径 8.2	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、端部はやや尖がり気味。	砂粒及び白色小石、金雲母を含み、角セン石を少量含む	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144 1 18	坏	口径 13.5 器高 2.4 底径 7.7	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。器壁は薄い。	砂粒及び金雲母を多く含み、白色小石、角セン石を少量含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144 1 19	坏	口径 13.8 器高 2.9 底径 9.5	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。器壁は薄い。	砂粒及び金雲母を含み、長石、角セン石を少量含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144 1 20	坏	口径 13.8 器高 2.7 底径 9.1	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を多量に含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144 1 21	坏	口径 13.6 器高 3.5 底径 7.2	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を多量に含む	淡黄褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ ヘラ磨きによる暗文を施す（外面のみ）	○土師器
144 1 22	坏	口径 13.0 器高 3.7 底径 8.4	体部は外方に開き、内湾しながら立ち上がる。端部は丸く底部は丸底気味である。	砂粒及び角セン石を含み、金雲母を少量含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
144 1 23	坏	口径 16.0 器高 3.9 底径 9.0	体部は外方に開き、内湾しながら立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石、金雲母を含み、白色小石を少量含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
144 1 24	坏	口径 13.1 器高 3.2 底径 7.5	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、口縁部が若干外反する。端部は丸くなる。	微密 砂粒及び金雲母を含む	灰白色	やや不良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器
144 1 25	坏	現存高 2.1 高台径 10.0 高台高 0.7	体部との境に長方形の高台を外方に開くように貼り付ける。底部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○高台貼り付け ○口縁部欠失
144 1 26	坏	現存高 2.5 高台径 8.8 高台高 0.6	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がる。底部には低い高台を端部が外方に開くように貼り付ける。端部は丸味をもつ。	砂粒及び径1～2mm大の小石、金雲母を含む	淡黄褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○高台貼り付け ○口縁部欠失
144 1 27	坏	現存高 2.1 高台径 7.7 高台高 0.7	体部との境に長方形のやや高い高台を端部が外方に開くように貼り付ける。端部は丸味をもつ。	砂粒及び金雲母を含み、径1～2mm大の小石を少量含む	淡黄褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○高台貼り付け ○口縁部欠失

第58表　22号住居跡内出土土器観察表

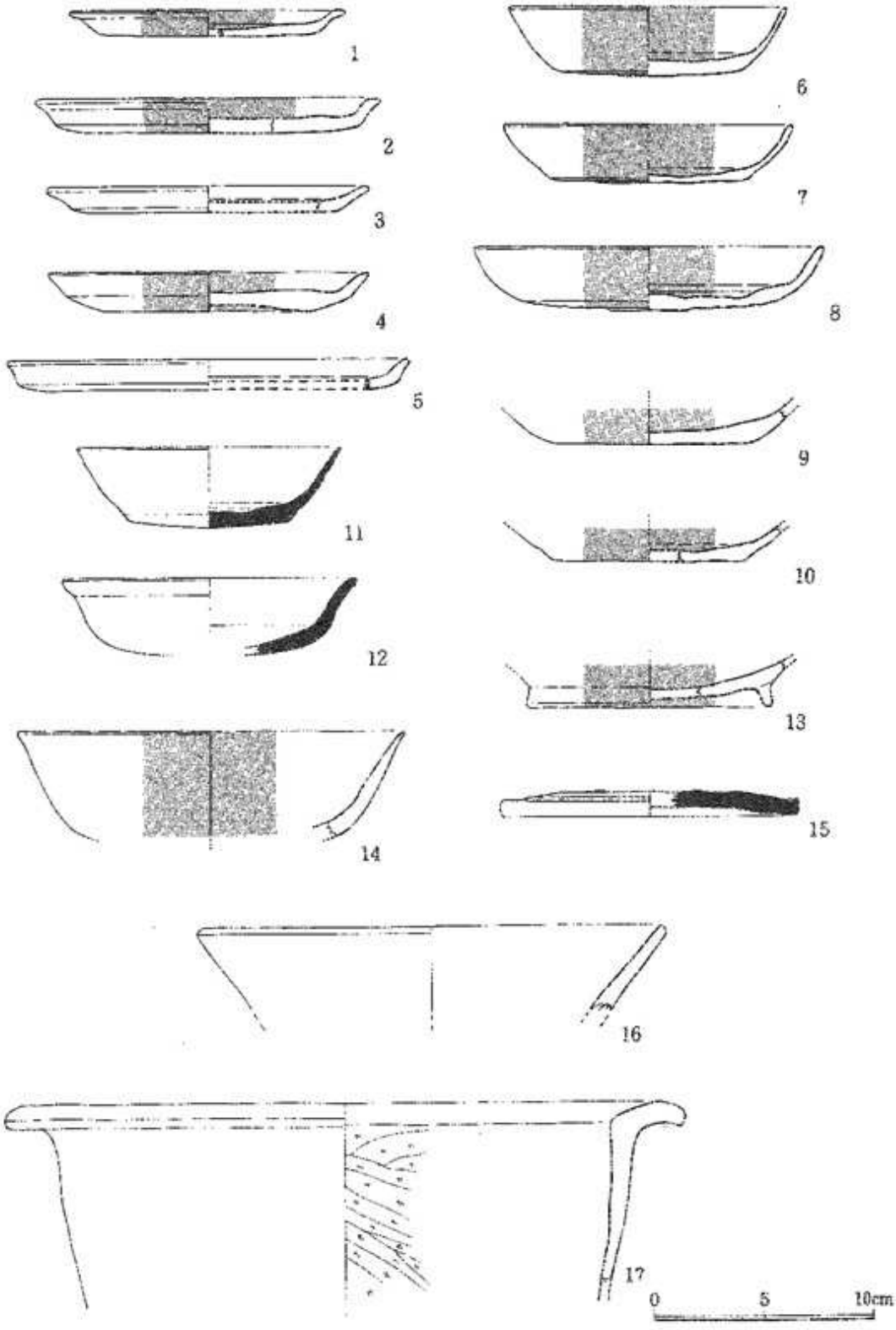
遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
144	坏	現存高 2.4 高台径 9.1 高台高 0.8	体部は外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がり、底部との境に端部が狭くなるやや長めの高台を外方に開くように貼り付ける。端部は丸味をもつ。	緻密 砂粒及び金雲母を含む	灰色	やや不良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け ○口縁部欠失
145	坏	現存高 2.4 高台径 9.4 高台高 1.0	体部との境に端部が細くなる高台を端部が外方に開くように貼り付ける。端部は丸味をもつ。	緻密 砂粒及び金雲母を多く含み、白色小石及び角セン石を少量含む	灰褐色	堅緻良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け ○口縁部欠失
145	坏	現存高 1.1 高台径 9.8 高台高 0.5	体部との境に低い高台を端部が外方に開くように貼り付ける。	緻密 砂粒及び白色小石、金雲母を含む	青灰色	堅緻良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け ○底部のみ残存
145	坏	現存高 2.1 高台径 9.4 高台高 0.8	体部との境に深さ4mmの細い高台を端部が外方に開くように貼り付け、端部は肥厚させ丸味をもつ。	緻密 砂粒を含む	灰色	堅緻良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け ○底部のみ残存
145	甕	口径 15.4 現存高 1.6	口縁部が屈曲し、明瞭な段を有し、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、金雲母を含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○天井部欠失
145	甕	口径 15.3 現存高 2.0	口縁部が屈曲し、明瞭な段を有し、端部は丸くなる。天井部は高くドーム状になる。	砂粒及び白色小石、金雲母を含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○天井部欠失
145	甕	口径 22.0 現存高 2.4	口縁部が屈曲し、明瞭な段を有する。端部は丸くなる。口径が他に比べて大きくなり、天井部が高い。	砂粒及び金雲母を多く含み、白色小石、角セン石を少量含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○天井部欠失
145	甕	口径 17.1 現存高 1.0	口縁部が屈曲し、明瞭な段を有する。端部は丸くなり、天井部は低い。	緻密 砂粒及び白色小石を含む	灰色	堅緻良好	ヨコナデ 天井部 ヘラ削り	ヨコナデ	○須恵器
145	甕	口径 15.5 現存高 1.0	口縁部が短かく下方に屈曲し、明瞭な段を有する。端部は丸くなり、天井部は低い。	緻密 砂粒及び白色小石を含む	灰色	堅緻良好	ヨコナデ 天井部 ヘラ削り	ヨコナデ	○須恵器
145	甕	口径 16.4 現存高 1.9	口縁部は外湾気味に長くのび、端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び金雲母を含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○天井部欠失
145	甕	口径 17.9 現存高 1.9	口縁部に屈曲は見られず、内湾気味に立ち上る。端部は肥厚させ丸くなる。	緻密 砂粒を多く含み、白色小石や金雲母を少量含む	灰白色	やや不良	ヨコナデ 天井部 ヘラ削り	ヨコナデ	○須恵器
145	鉢	口径 15.6 器高 5.6 高台径 11.2 高台高 0.9	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部は丸くなる。底部は丸底で、体部との境に端部が細く高さ1cmの高台を、外方に開くように貼り付ける。	砂粒及び金雲母多く含み、角セン石を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○高台貼り付け
145	鉢	口径 16.8 器高 6.1 高台径 11.2 高台高 1.1	体部に外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部は丸くなる。底部との境に高さ1cmの高台を端部に貼り付ける。端部のやや上方が肥厚する。	砂粒を多く含み、金雲母を少量含む	茶褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○高台貼り付け
145	鉢	現存高 5.3 高台径 9.2 高台高 1.1	体部は外方に開きながら緩やかに直線的に立ち上がり、底部との境に長方形の高台を端部が外方に開くように貼り付ける。端部はすべて丸味をもつ。	砂粒及び径1～2mmの小石、金雲母を含み、白色小石、角セン石を少量含む	淡茶褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○口縁部欠失 ○高台貼り付け

第58表　22号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
145	鉢	現存高 2.2 高台径 10.7 高台高 1.0	高台が胴部が外方に開くように貼り付ける。	砂粒及び径1mm程の小石、金雲母、長石を含み、角センカを少量含む	茶褐色	やや不良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○底部のみ現存 ○高台貼り付け
145	坏	口　径 13.5 現存高 4.2	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を含み、白色小石、角センカを少量含む	淡茶褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○口縁部のみ残存
145	坏	口　径 20.6 現存高 5.2	体部は大きく外方に開き直線的に立ち上がり、底部はやや尖がり気味である。	砂粒及び金雲母を多く含み、径1mm程の小石を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○底部欠失
145	鉢	口　径 19.0 現存高 2.7	体部は大きく外方に開き直線的に立ち上がる。口縁部はやや外方に屈曲する。端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、角センカを含み、金雲母を多く含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ ヘラ磨きにより縦文を施す（6本1単位）	ヨコナデ ヘラ磨きにより縦文を施す（同上）	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○底部欠失
145	鉢	口　径 20.6 器　高 6.2 底　径 12.3	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。	砂粒を含み、角センカ、金雲母を少量含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
145	壺	現存高 9.5	高台貼り付けの壺と考えられる。胴部に外方に開きながら直線的に立ち上がる。	砂粒 砂粒及び径2mm程の小石、白色小石を含む	灰色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器 ○口縁部及び底部欠失
146	鉢	現存高 4.7 底　径 10.8	底部に上げ底で体部はやや外反気味に立ち上がる。	砂粒を多く含み、長石、角センカ、白色小石を少量含む。 須恵	灰褐色	堅緻良	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器 ○底部のみ残存
146	高坏	現存高 13.2 脚底部径 2.6	坏部及び脚部欠失、脚部は太く裾広くで外反気味に外方に開いていく。	砂粒及び金雲母、白色小石を多く含む	赤褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
146	甕	口　径 18.5 現存高 13.8	頸部で屈曲した後、口縁部は外方に大きく外反気味に開き、端部は丸くなる。胴部は膨らまず直線的に落ちる。	砂粒及び径2～3mm程の小石、白色小石、角センカ、金雲母を含む	淡黄褐色	良	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り（上方）	○土師器
146	甕	口　径 26.7 現存高 6.8	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外方に開きながら外反気味に立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び径1～2mm程の小石、白色小石、雲母を含む	淡赤褐色	良好	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り（斜上方）	○土師器
146	甕	口　径 30.6 現存高 4.9	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外方に開きながら外反する。端部は丸くなる。	砂粒及び径2mm程の小石、白色小石、雲母を多く含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り（斜上方）	○土師器
146	甕	口　径 30.3 現存高 7.0	頸部で屈曲した後、口縁部は大きく外方に開き外反する。端部は丸くなる。胴部は微妙に垂直に落ちる。	砂粒及び角センカを含み、径2mm程の小石、金雲母を多く含む	淡赤褐色	良	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り（斜上方）	○土師器
146	甕	口　径 29.6 現存高 4.0	頸部で屈曲した後、口縁部は外方に開き外反気味に立ち上がる。端部はやや尖がり気味。	砂粒及び径2mm程の小石、白色小石、雲母を含む	黄褐色	良好	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り（上方）	○土師器
146	鉢	口　径 32.8 現存高 5.9	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が大きく外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、金雲母を多く含み、長石、角センカを少量含む	淡赤褐色	良	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ目	ヨコナデ	○土師器



第147図　24号・25号・26号・27号・28号住居跡実測図



第148図　24号住居跡内出土器実測図

第59表　24号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
148－1	皿	口径 12.6 器高 1.2 底径 10.0	小型の皿で口縁部がほぼ真横に開き、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、角セン石、金雲母を含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
148－2	皿	口径 15.8 器高 2.0 底径 13.9	口縁部がほぼ真横に開き、端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石、金雲母を多量に含む	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
148－3	皿	口径 14.8 器高 1.2 底径 12.0	体部は大きく外方に開きながら直線的に短かく立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
148－4	皿	口径 14.6 器高 1.8 底径 9.0	体部は大きく外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び金雲母を含み、角セン石を少量含む	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
148－5	皿	口径 18.4 器高 1.4 底径 15.2	体部はやや外反気味に立ち上がり端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を含み、径1～2mm程の小石を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
148－6	坏	口径 12.8 器高 3.2 底径 8.5	体部は器壁が薄く、やや内彎気味に外方に開きながら立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を含み、角セン石を少量含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
148－7	坏	口径 13.3 器高 2.7 底径 9.0	体部は器壁が薄く、外方に開きながらやや内彎気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒、角セン石、金雲母を少量含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
148－8	坏	口径 16.0 器高 2.9 底径 11.6	体部は外方に開きながらやや内彎気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、角セン石を多く含み、金雲母を少量含む	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
148－9	坏	現存高 1.7 底径 8.6	体部は外方に開きながらやや内彎気味に立ち上がる。	砂粒及び径2～3mm程の小石、金雲母を含む	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○口縁部欠失
148－10	坏	現存高 1.5 底径 9.3	体部は大きく外方に開きながら直線的に立ち上がる。	砂粒及び金雲母を含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○口縁部欠失
148－11	坏	口径 12.0 器高 3.7 底径 7.3	体部は器壁が薄く外方に開きながらやや内彎気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	緻密 砂粒及び金雲母を多く含み、白色小石、角セン石を少量含む	灰色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○完形品
148－12	坏	口径 13.5 現存高 3.5 底径 10.2	体部はやや外反気味に外方に開きながら立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。底部は丸底気味である。	緻密 砂粒及び角セン石を含み、金雲母を多く含む	灰茶褐色	堅緻良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○底部欠失
148－13	坏	現存高 2.1 高台径 11.2 高台高 1.2	体部との接付近に端部がたく高き1cm程の高台を外方に開くように貼り付ける。	砂粒及び金雲母を多く含み、角セン石を少量含む	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○口縁部欠失 ○高台貼り付け

第59表　24号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
148 ｜ 14	鉢	口径 17.6 現存高 4.8	体部は外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がり、端部はやや尖がる。	砂粒及び白色小石、金雲母を含み、角セン石を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布 ○底部欠失
148 ｜ 15	甕	口径 13.4 器高 1.2	口縁部を上方につまみ上げる。天井部は低い。	微密 砂粒及び白色小石、金雲母を少量含む	外面 灰色 内面 灰褐色	堅緻 良好	天井部 ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器
148 ｜ 16	椀か鉢	口径 21.5 現存高 3.9	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり端部はナデて平坦面を作る	砂粒及び白色小石、金雲母を含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○底部欠失
148 ｜ 17	甕	口径 31.0 現存高 8.2	口縁部は頸部で屈曲し胴部は球状に膨く。端部は丸くなる。胴部はほぼ垂直的に内傾しながら降りていく。	砂粒及び径3mm程の小石、長石を多く含み角セン石を少量含む	淡赤褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 不明	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

23号住居跡

遺構（第143図）

7－K－32・49グリッドに検出した住居跡で、22号住居跡と切り合っており当住居跡が古い。住居跡は、削平が著しく範囲だけの確認であることや大半を他の住居跡から切られていることから規模は不明であるが、一辺が3.50m前後で隅丸方形を呈しているものと考えられる。方位は、N－77°00′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面の検出はなかった。また、柱穴の特定もできなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の坏や甕が出土している。

24号住居跡

遺構（第147図）　　出土遺物（第148図・第59表）

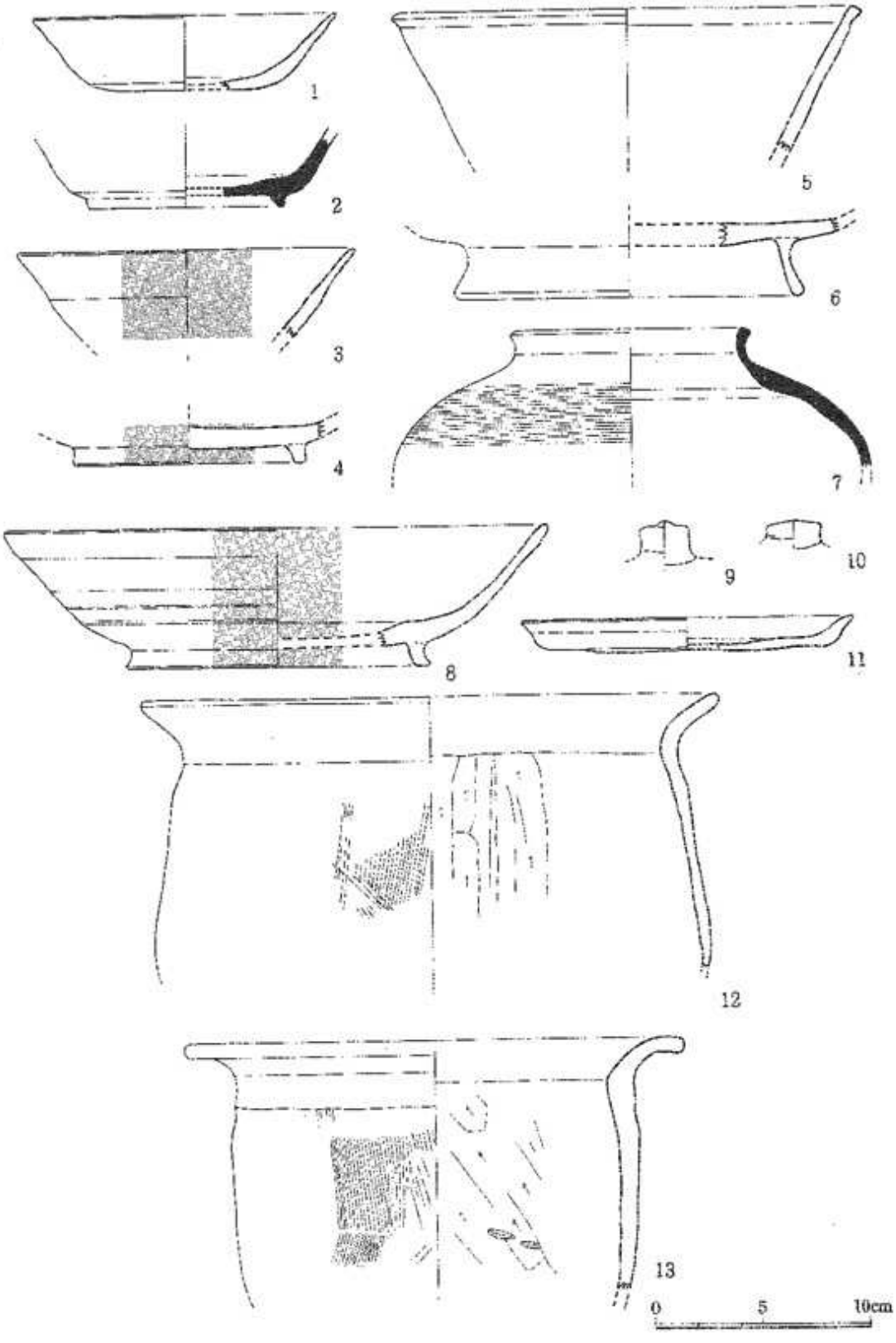
7－K－48・49グリッドに検出した住居跡で、切り合っている25号・26号・27号・28号住居跡の5軒の中では一番新しい。住居跡は、削平が著しく範囲だけの確認であるが、長辺4.28m、短辺3.18mを測り、隅丸長方形を呈している。方位は、N－75°30′－Wをとる。西側壁のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドが検出された。硬化面の検出や、柱穴の特定はできなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の坏や甕・椀・甕それに須恵器の坏や蓋が出土している。

25号住居跡

遺構（第147図）　出土遺物（第149図・第161図6・第162図10・第60表・第67表6・第68表10）

7－K－48・49グリッドに検出した住居跡で、切り合っている24号住居跡より古く、26号・



第149図　25号住居跡内出土土器実測図

第60表　25号住居跡内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
149	杯	口径 14.0 器高 3.5 底径 6.4	体部はほぼ直線的に外方に開きながら立ち上がり、底部は丸くなる。	砂粒、長石、角セン石を含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
149	杯	残存高 2.9 底径 9.0	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり境には端部をナデて丸くした低い高台を外方に開くように張り付ける。	緻密 砂粒を多く含む	灰白色	堅緻良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け
149	杯	口径 15.8 現存高 4.2	体部は大きく外方に開きながら直線的に立ち上がり端部は丸くなる。	砂粒及び長石、角セン石を含む	赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
149	杯	現存高 1.2 底径 10.8	体部との境に長方形の高台を張り付ける。	砂粒及び角セン石を含む	赤褐色	やや不良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○口縁部欠失
149	椀か鉢	口径 27.8 現存高 6.8	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、底部はナデて平底部を作り出している。	砂粒及び長石、角セン石を多く含む	明褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○底部欠失
149	甕	残存高 3.0 高台径 15.3 高台高 2.7	底に高さ3cmの高台を端部が外方に開くように張り付ける。	砂粒を多量に含む	明褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○底部のみ現存 ○高台貼り付け
149	短頸壺	口径 11.2 現存高 6.6	胴部は大きく張らみ口縁部は頸部より段差垂直に短かく外反気味に立ち上がる。端部はナデて平坦面を作り出している。	緻密 砂粒を含む	灰白色	堅緻良	ヨコナデ	ヨコナデ 赤引き痕残る	○須恵器 ○底部欠失
149	壺	口径 25.2 器高 6.5 高台径 14.3 高台高 0.9	体部は外方に開きながら内彎気味に立ち上がり、端部は丸くなる。底部には、境付近に外反気味の高台を端部が外方に開くように貼り付ける。	砂粒及び長石、角セン石、金雲母を含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○高台貼り付け
149	蓋	径 2.3 現存高 1.7	ボタン状つまみ部分で高さは低く頂部がやや突出する。接合面で剥離している。	砂粒及び角セン石を含む	褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器
149	蓋	径 2.5 現存高 1.1	ボタン状つまみ部分で高さは低く頂部がやや突出する。接合面で剥離している。	砂粒を多く含む	褐灰色	やや不良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器
149	皿	口径 15.4 器高 1.6 底径 13.0	体部は大きく外方に開きながら外反気味に立ち上がり、端部は尖がる。	砂粒及び角セン石、金雲母を含む	暗赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
149	甕	口径 36.9 現存高 12.7	頸部でくの字に屈曲した後、外方に直線的に開く、端部は丸くなる。胴部は中位付近で最大膨らむ。	砂粒及び径2～4mmの小石を多量に含み、角セン石を少量含む	明褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り（上方）	○土師器
149	甕	口径 23.2 現存高 11.7	頸部でくの字に屈曲した後、外反気味に外方に開く、端部は丸くなる。胴部はやや膨らむ。	砂粒及び角セン石を多く含む	明褐色	良	口縁部 ヨコナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

27号・28号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺3.68m、短辺3.46mを測り、隅丸方形を呈している。方位は、N－75°30′－Wをとる。西側壁のほぼ中央には、袖を黄白色粘土で作ったカマドが検出され、硬化面は中央付近に広がっている。柱穴は、検出できなかった。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものは少ないが、土師器の坏や皿・盤・椀・蓋・甕それに須恵器の坏や壺などと共に鉄製刀子が1点出土している。また、この住居跡からは、須恵器坏の外面底部に國國とヘラ書きされたものが出土している。

26号住居跡

遺構（第147図）

7－K－48・49グリッドに検出した住居跡で、切り合っている24号・25号住居跡より古く、27号・28号住居跡より新しい。住居跡は、削平が著しく範囲だけの確認であるが、長辺4.25m、短辺4.22mを測り、隅丸方形を呈している。方位は、N－75°30′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面それに柱穴は検出されなかった。

遺物は、全く出土していない。

27号住居跡

遺構（第147図）

7－K－48・49グリッドに検出した住居跡で、切り合っている24号・25号・26号住居跡の中では一番古い。住居跡は、削平が著しく範囲だけの確認であるが、長辺4.18m、4.15mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－73°00′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面それに柱穴は検出されなかった。

遺物は、全く出土していない。

28号住居跡

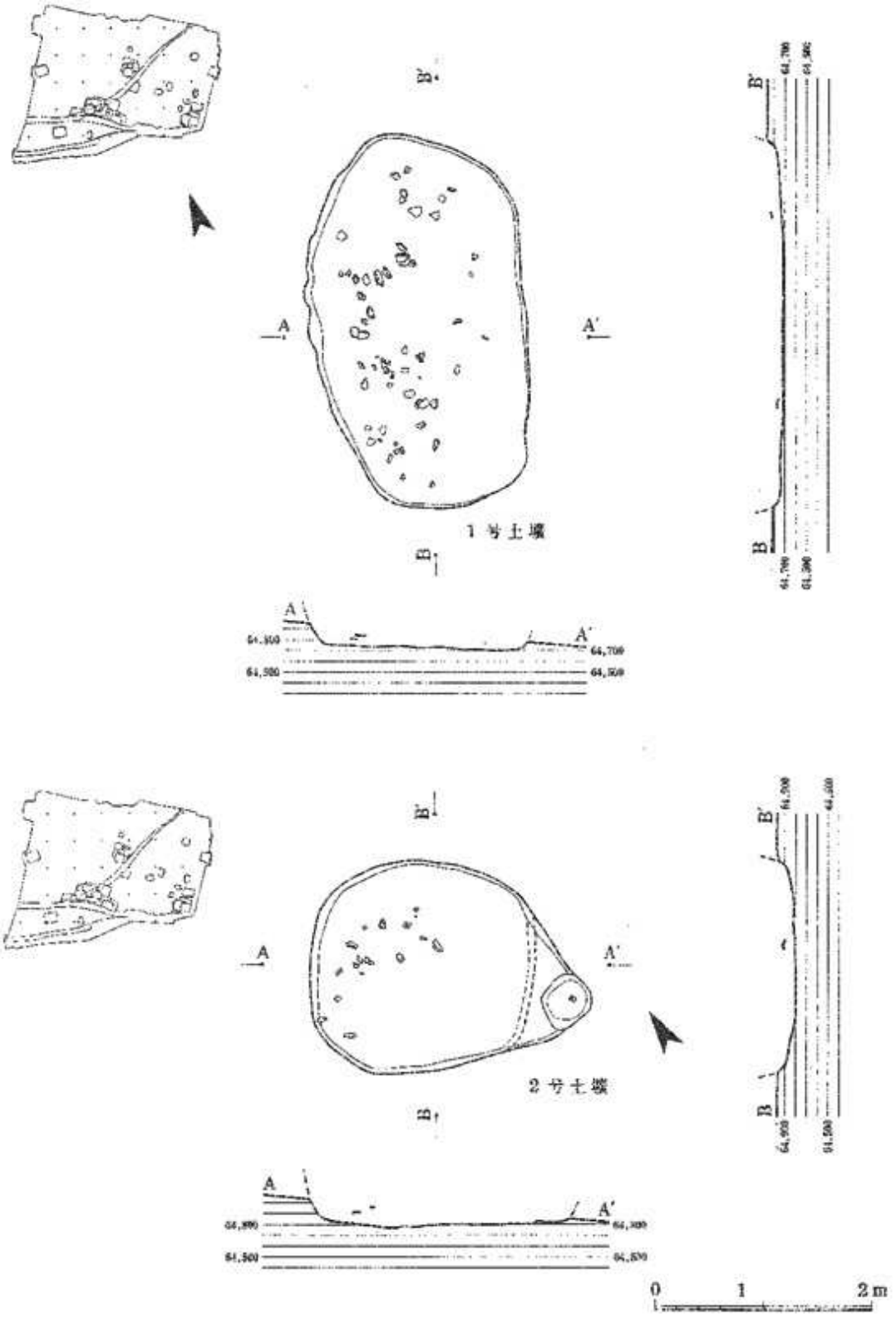
遺構（第147図）

7－K－48グリッドに検出した住居跡で、切り合っている24号・25号・26号住居跡の中では一番古い。住居跡は、削平が著しく範囲を確認しただけであり、またその大半が他の住居跡に切られていることから規模は不明で、隅丸方形を呈しているものと考えられる。方位は、N－84°00′－Wをとる。住居跡内からは、カマドや硬化面それに柱穴は検出されなかった。

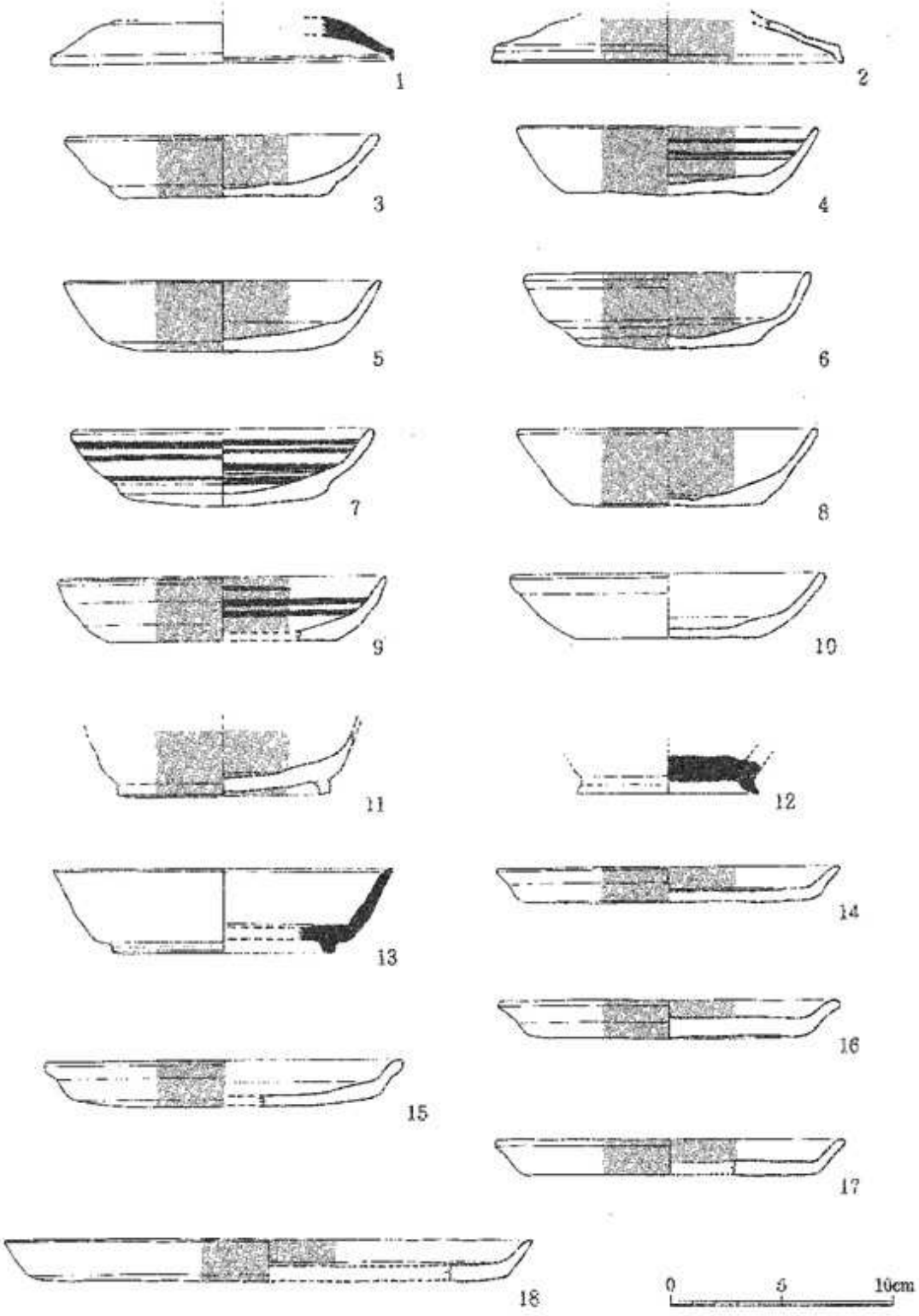
遺物は、全く出土していない。

(2) 土壙と出土遺物

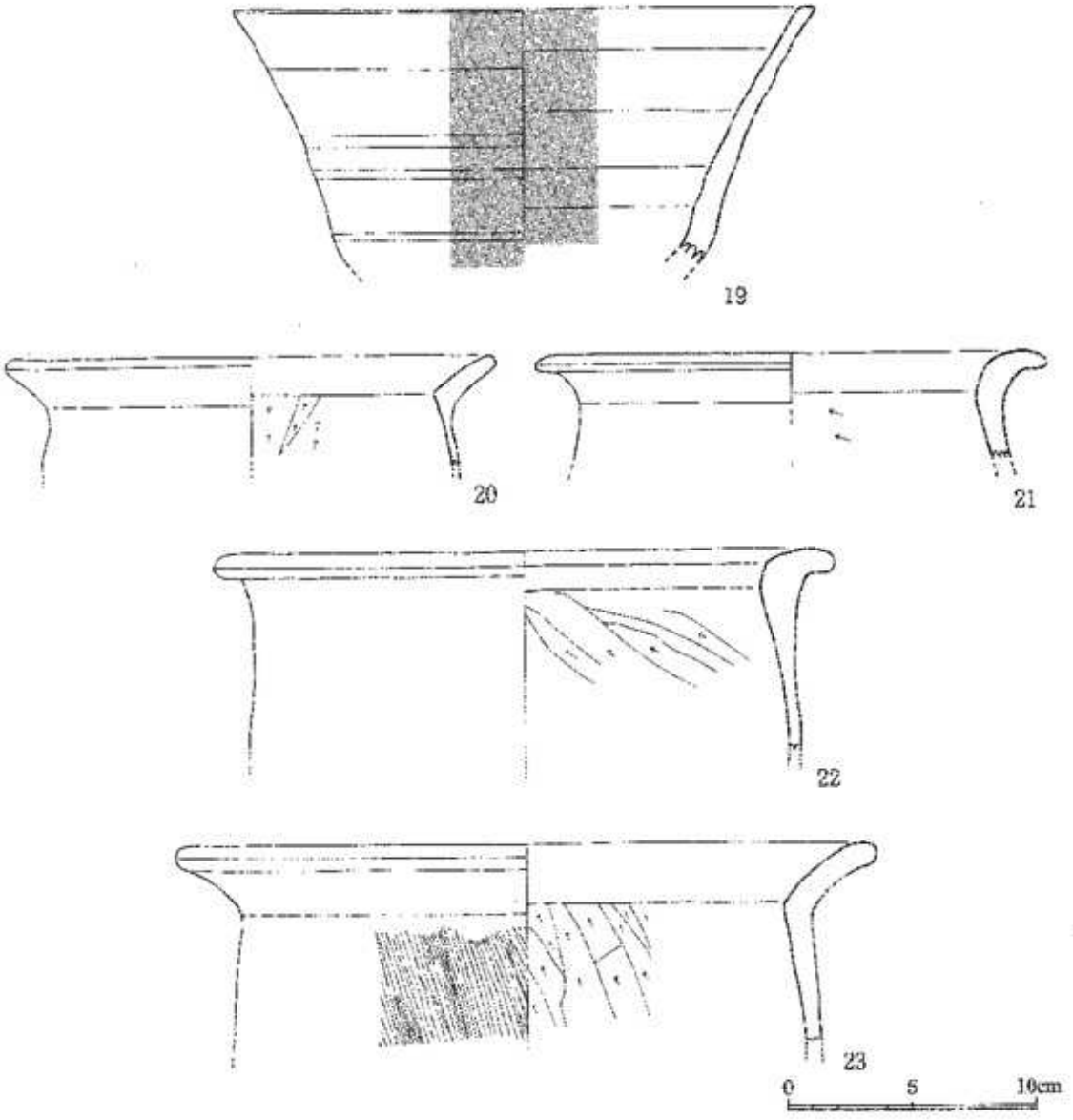
1号土壙（SK－01）



第150図　1号・2号土壙実測図



第151図　1号土壙(ＳＫ－０１)内出土土器実測図（1）



第152図　1号土壙(ＳＫ－０１)内出土土器実測図（2）

第61表　1号土壙内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
151	鉢	口径 15.4 器高 2.0	口縁部が垂直に下方に湾曲し、明瞭な段を有する。天井部は低い。	砂粒及び白色小石、金雲母を多く含む 緻密	灰色	堅緻 良	天井部ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器
151	鉢	口径 15.8 器高 2.0	口縁部が湾曲し、明瞭な段を有する。底部はやや外方に開き気味になる。	砂粒及び白色小石、金雲母を多く含み、径1～2mm程の小石を少量含む	赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○天井部欠失 ○内外面に赤色顔料塗布

第61表　1号土壙内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
151・3	坏	口径 14.2 器高 2.8 底径 9.2	体部は内湾気味に大きく外方に開きながら立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石、金雲母を多く含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
151－4	坏	口径 13.6 器高 3.1 底径 9.2	体部は外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を多く含み、角セン石を少量含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切りの後ヘラ磨きで暗文を施す（同心円）	ヨコナデ 体部にヘラ磨きにより暗文を施す（同心円）	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
151－5	坏	口径 14.3 器高 3.3 底径 8.2	体部は外方に開きながらやや内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒を多く含み、角セン石、金雲母を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切りの後ヘラ磨きで暗文を施す（うず巻き）	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
151－6	坏	口径 12.0 器高 3.4 底径 7.8	体部は外方に開きながら大きく内湾し立ち上がる。端部は丸くなる。底部はやや丸底である。	砂粒を多く含み、金雲母を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○完形品
151－7	坏	口径 13.7 器高 3.5 底径 9.3	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。底部はやや丸底である。	砂粒及び角セン石を含む	暗赤褐色	良	ナデの後ヘラ磨の暗文を施す 底部は底面へラ切りの後暗文を施す（同心円）	ナデの後全体にヘラ磨きの暗文を施す（同心円）	○土師器
151－8	坏	口径 13.5 器高 3.5 底径 8.4	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒を多く含み、角閃石及び金雲母を少量含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
151－9	坏	口径 14.8 器高 2.9 底径 10.3	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を多く含み、白色小石を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ナデの後体部にヘラ磨きの暗文を施す（同心円）	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
151－10	坏	口径 14.2 器高 2.9 底径 8.3	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒、金雲母を多く含み、角セン石及び径2㎜程の小石を少量含む	暗赤褐色	良	ヨコナデ ヘラ磨きの暗文 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ ヘラ磨きの暗文	○土師器
151－11	坏	現存高 2.9 高台径 9.9 高台高 0.7	体部との接付近に方形の高台を端部が外方にやや開くように貼り付ける。	砂粒、金雲母を多く含み、角セン石を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○口縁部欠失 ○高台貼り付け
151－12	坏	現存高 3.8 高台径 10.1 高台高 0.8	体部との境に高台を端部が外方に開くように貼り付ける。端部は尖がる。	緻密 砂粒を多く含む	淡黄灰色	堅緻 良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○口縁部欠失 ○高台貼り付け
151－13	坏	口径 15.2 器高 3.8 底径 10.1 高台径 高台高 0.5	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部にやや尖がる。底部には、端部が外方にやや開くように高台を貼り付ける。	砂粒及び白色小石を多く含み、長石を少量含む 緻密	灰色	堅緻 良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け
151－14	鉢	口径 15.5 器高 1.6 底径 12.0	体部は外方に大きく開きながら直線的に短かく立ち上がり、端部は丸くなる。	砂粒及び角セン石を多く含み、金雲母を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
151－15	鉢	口径 16.1 器高 2.1 底径 14.0	体部は外方に大きく開き、短かく外反気味に立ち上がる。端部は丸くなる。底部はやや丸底気味。	砂粒を多く含み径1～2㎜程の小石と金雲母を少量含む	淡茶褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布
151－16	鉢	口径 15.4 器高 1.7 底径 12.0	体部は外方に大きく開き、短かく外反気味に立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒を多く含み径1～2㎜程の小石及び角セン石、金雲母を少量含む	淡茶褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布

第61表　1号土壙内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
151	坩	口径 15.6 器高 1.7 底径 13.4	体部は外方に大きく開き、丸かく外反気味に立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒及び金雲母を多く含み、角セン石を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
151	鉢	口径 23.9 器高 1.9 底径 21.6	体部は外方に大きく開き、丸かくやや内彎気味に立ち上がる。端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び金雲母を多く含み、白色小石を少量含む	黄褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
152	椀	口径 23.6 器高 10.5	体部は外方に開きながら、やや外反気味に立ち上がり、端部はナデて平坦面を作り出す。	砂粒を多く含み、金雲母を少量含む	赤褐色	やや不良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○底部欠失
152	甕	口径 19.8 現存高 4.5	口縁部はくの字に屈曲した後、直線的に外方に開く。端部は丸くなる。	砂粒及び白色小石、径1mm程の小石を多く含み、長石、角セン石、金雲母を少量含む	淡黄褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ 胴部ヘラ削り	○土師器
152	甕	口径 20.6 現存高 4.3	口縁部は外反しながら外方に開き、端部は丸くなる。	砂粒及び径1mm程の小石、長石、金雲母を多く含む	淡茶褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ 胴部ヘラ削り	○土師器
152	甕	口径 25.1 現存高 8.9	口縁部はほぼ直線に短かく開き、端部は丸くなる。頸部の屈曲はなく、胴部は張らずほぼ垂直に降りていく。	砂粒及び径1～2mm程の小石、金雲母、角セン石を多く含み、長石を少量含む	淡茶褐色	良	ヨコナデ 調整不明	ヨコナデ 胴部ヘラ削り	○土師器
152	甕	口径 28.3 現存高 7.9	口縁部はくの字に屈曲した後、やや外反気味に外方に開く。端部は丸くなる。	砂粒及び径1～2mm程の小石、角セン石、金雲母を多く含む	淡茶褐色	良	ヨコナデ 胴部ハケ目	ヨコナデ 胴部ヘラ削り	○土師器

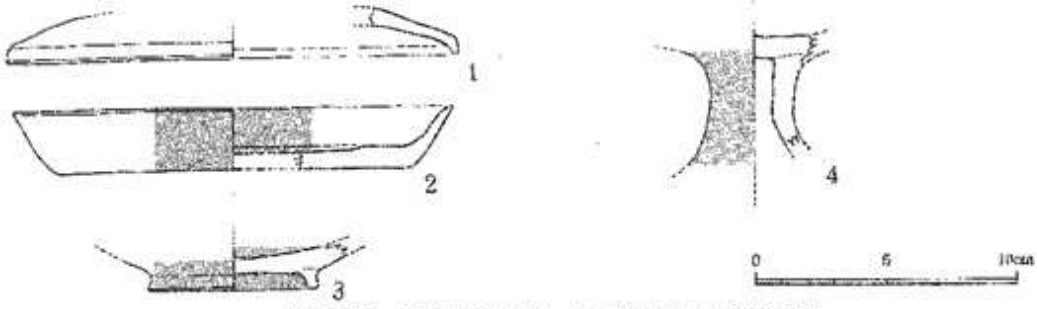
遺構（第150図）　出土遺物（第151図～第152図・第161図7，8・第162図11・第61表・第67表7，8・第68表11）

7－K－48グリッドに検出した土壙で、規模は長さ3.40m、幅2.29mを測り不整長方形を呈している。方位は、N－20°30′－Eをとる。土壙の断面は、浅い皿状を呈している。

遺物は、土師器の坏や皿・鉢・椀・甕、須恵器の坏や蓋などが出土している。また、この土壙からは土師器坏の外部底部に「[illegible]」の部首だけが残るものと不明の墨書土器が出土している。

2号土壙（SK－02）

遺構（第150図）　出土遺物（第153図・第161図11・第62表・第67表9，11）



第153図　2号土壙（SK－02）内出土土器実測図

第62表　2号土壙内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
153 1 1	蓋	口径 17.4 現存高 1.8	口縁部は弧曲し明瞭な段を有する。端部はやや外方に開き丸くなる。天井部はやや高くなる。	砂粒及び金雲母を多く含み、白色小石を少量含む	淡赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器
153 1 2	皿	口径 16.9 器高 2.4 底径 13.6	体部は直線的に外方に開きながら立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び金雲母を多く含み、径1～2mmの小石を少量含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
153 1 3	坏	現存高 1.6 高台径 6.6 高台高 0.8	体部との境に長方形の高台を貼り付け、端部はやや外方に開く。	砂粒及び金雲母、白色小石を多く含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○底部のみ残存 ○高台を貼り付ける。
153 1 4	高坏	現存高 5.0	裾部は大きく広がるようである。	砂粒及び金雲母を多量に含む	外面赤褐色内面橙色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布 ○坏部、裾部欠失

7－K－33グリッドに検出した土壙で、規模は長辺2.00m、短辺1.97mを測り隅丸方形を呈している。方位は、N－56°00′－Wをとる。土壙の断面は、浅い皿状を呈している。

遺物は、土師器の坏や皿・蓋・高坏・甕、須恵器の坏などが出土している。また、この土壙からは土師器坏の内面底部に囚、それに土師器坏の外面底部に[illegible]とヘラ書きされた土器が出土している。

3号土壙（SK－03）

遺構（第154図）

7－K－33・48グリッドに検出した土壙で、規模は長辺1.71m、短辺1.59mを測り不整方形を呈している。方位は、N－32°30′－Eをとる。土壙の断面は、U字型を呈している。

遺物は、少量で、また細片であることから図化できたものはないが、土師器の坏や椀・甕それに須恵器の坏などが出土している。

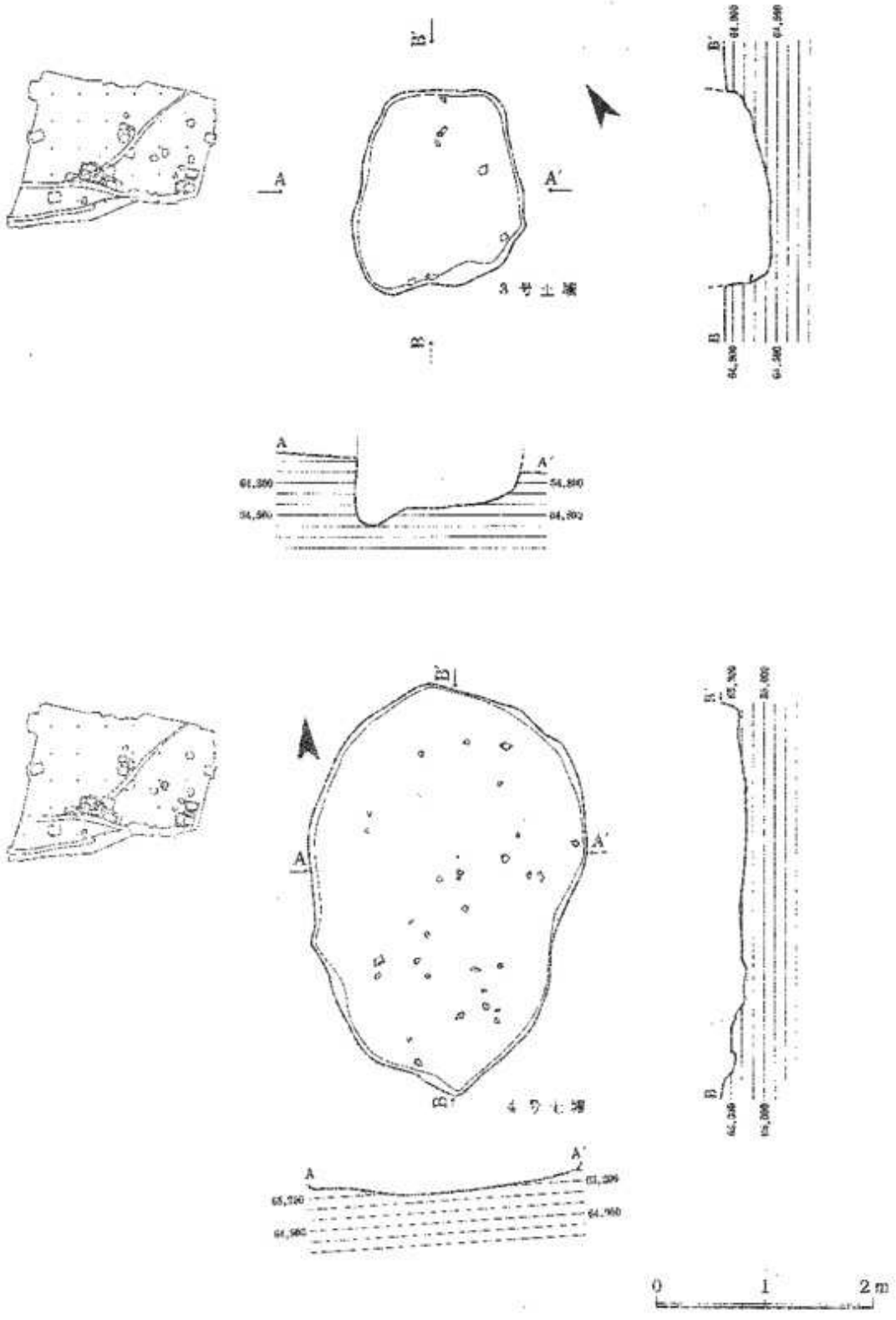
4号土壙（SK－04）

遺構（第154図）　　出土遺物（第155図・第161図10，12・第63表・第67表10，12）

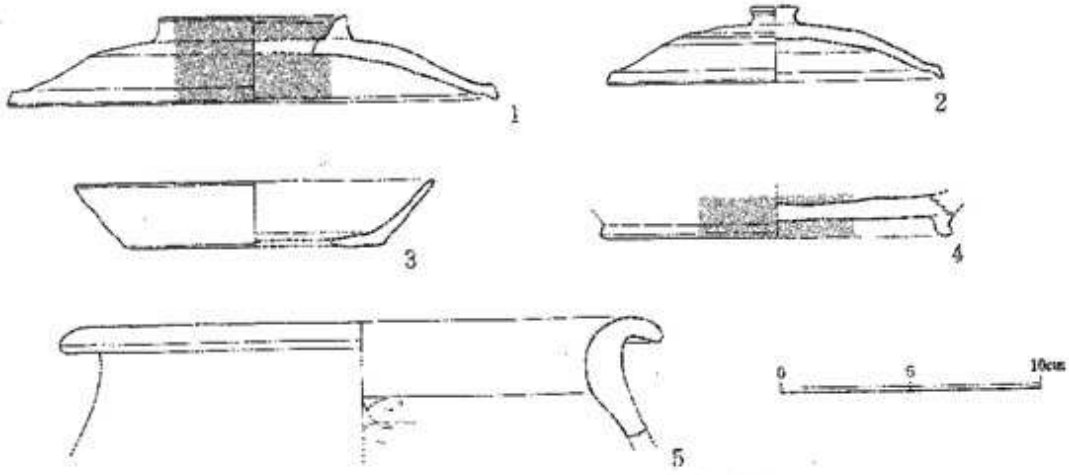
7－K－33グリッドに検出した土壙で、規模は長径3.80m、短径2.55mを測り不整楕円形を呈している。方位は、N－4°00′－Eをとる。土壙の断面は、浅い皿状を呈している。

遺物は、少量であるが、土師器の坏や蓋・甕それに須恵器の坏などが出土している。

また、この土壙からは、土師器蓋の内面に鄒と書かれたヘラ書き土器と、土師器坏の内面底部に固と書かれたヘラ書き土器が出土している。



第154図　3号・4号土壙実測図



第155図　4号土壙(ＳＫ－０４)内出土土器実測図

第63表　4号土壙内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
155 1 1	壺	口径 18.8 器高 3.4 つまみ径 7.3	口縁部は屈曲し、明瞭な段を有する。端部は若干外方に開きやや尖がり気味である。天井部は高く、輪状つまみを有する。	砂粒及び金雲母を多く含み、径1～2mm程の小石、角セン石を少量含む	赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○輪状つまみを有する。
155 1 2	蓋	口径 13.0 器高 2.9 つまみ径 1.9	口縁部は屈曲し、明瞭な段を有する。頂部は外方に開き丸くなる。天井部は高く、ボタン状つまみを有する。	砂粒及び角セン石、径1～2mm程の小石を多く含み、金雲母、白色小石を少量含む	橙色	良	天井部ヘラ削り他はナデ	ヨコナデ	○土師器 ○ボタン状つまみを有する。
155 1 3	坏	口径 13.8 器高 2.6 底径 10.1	体部は直線的に外方に大きく開きながら立ち上がり、端部はやや尖がり気味である。	砂粒及び白色小石、径2mm程の小石、金雲母を多く含み、長石を少量含む	黄橙色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
155 1 4	坏	現存高 1.6 高台径 13.6 高台高 0.8	全体に丸味をもつ、高台を貼り付ける。	砂粒及び金雲母を多く含み、長石、角セン石を少量含む	赤褐色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○底部のみ残存 ○高台貼り付け
155 1 5	甕	口径 23.1 現存高 4.6	口縁部が外方に強く外反する。	砂粒及び径2mm程の小石を多く含み、角セン石、長石を少量含む	赤褐色	良	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 頸部ヘラ削り	○土師器

5号土壙（SK－05）

遺構（第156図）　　出土遺物（第157図・第64表）

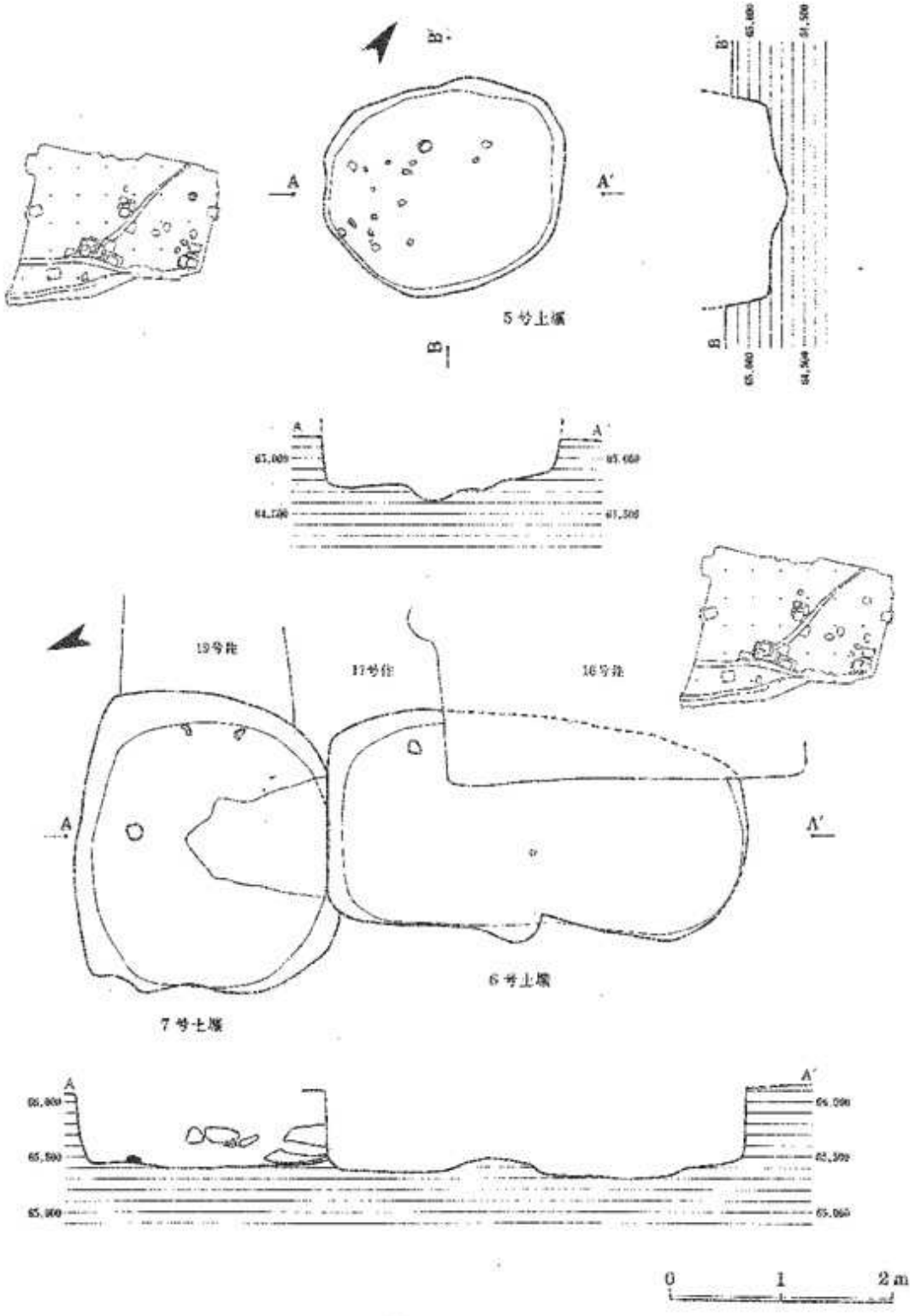
7－K－12・28・29グリッドに検出した土壙で、規模は長径2.11m、短径1.89mを測り不整円形を呈している。方位は、N－53°50′－Eをとる。土壙の断面は、U字型を呈している。

遺物は、少量であるが、土師器の坏や甕それに須恵器の坏が出土している。

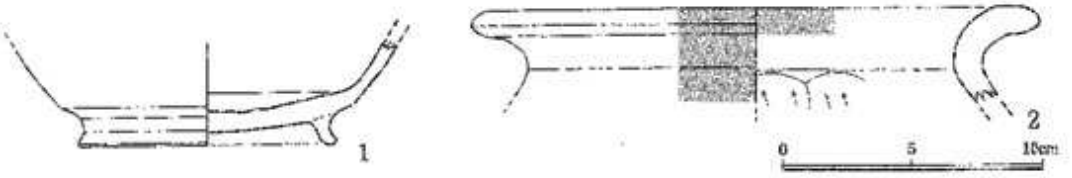
6号土壙（SK－06）

遺構（第156図）　　出土遺物（第158図・第65表）

7－K－26グリッドに検出した土壙で、規模は長辺3.76m、短辺1.94mを測り不整長方形を



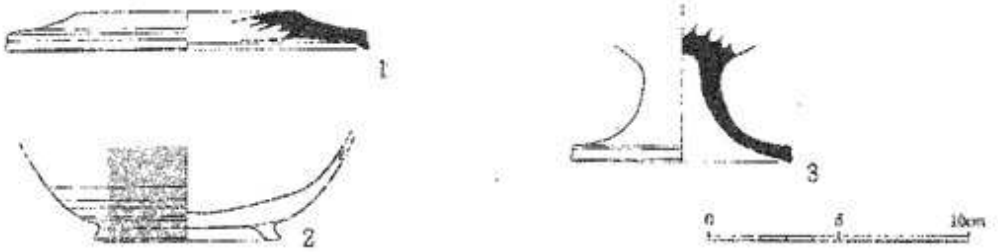
第156図　5号・6号・7号土壙実測図



第157図　5号土壙(ＳＫ－０５)内出土土器実測図

第64表　5号土壙内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量(cm)	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
157 - 1	坏	現存高 4.0 高台径 10.4 高台高 1.2	体部は直線的に外方に開きながら立ち上がり、底部には高い高台が外方に開くように貼り付けている。	砂粒及び白色小石、金雲母を多く含み、角セン石を少量含む	黄橙色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○高台貼り付け ○口縁部欠失
157 - 2	甕	口径 21.8 現存高 3.7	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外反し外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒及び径1～3mmの小石、長石、金雲母を多量に含み、角セン石を少量含む	赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ 胴部ヘラ削り	○土師器 ○外面及び内面口縁部に赤色顔料塗布



第158図　6号土壙(ＳＫ－０６)内出土土器実測図

第65表　6号土壙内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量(cm)	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
158 - 1	甕	口径 14.0 器高 1.5	口縁部は屈曲して、やや外方に開く、明瞭な段を有し端部は尖がり気味である。	緻密 砂粒及び白色小石を多量に含む	灰色	堅緻 良好	ヨコナデ 天井部ヘラ削り	ヨコナデ	○須恵器
158 - 2	坏	現存高 3.6 高台径 7.1 高台高 0.7	体部は内湾気味に外方に開きながら立ち上がり、底部には長方形のやや高い高台を外方に開くように貼り付ける。	砂粒及び白色小石、金雲母を多量に含む	黄橙色	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○口縁部欠失 ○高台貼り付け
158 - 3	高坏	現存高 4.8 底径 8.4	小型の高坏で、脚部が大きくはかり、端部がやや尖がり気味である。	緻密 砂粒及び白色小石を多量に含む	灰色	堅緻 良	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器 ○脚部のみで杯部欠失

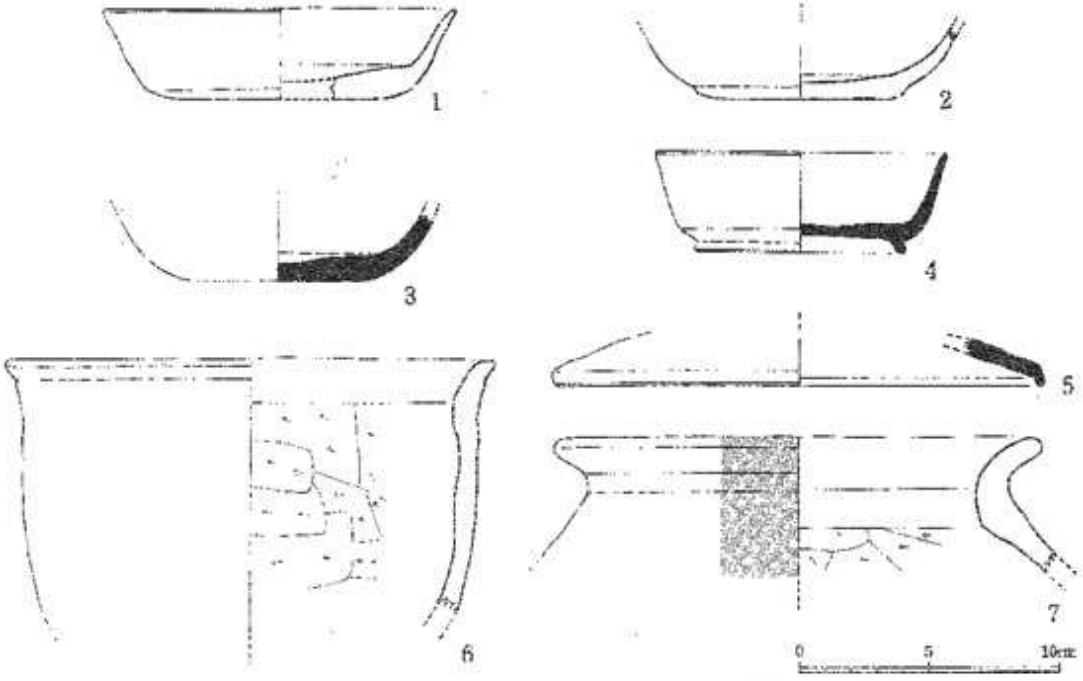
墨している。方位は、N－21°00′－Eをとる。土壙の断面は、U字型を呈している。土壙は、切り合っている16号住居跡より古く、7号土壙や17号・19号住居跡より新しい。

遺物は、少量であるが、土師器の坏や甕それに須恵器の坏や蓋・高坏が出土している。

7号土壙（SK－07）

遺構（第156図）　　出土遺物（第159図・第162図12・第66表・第68表12）

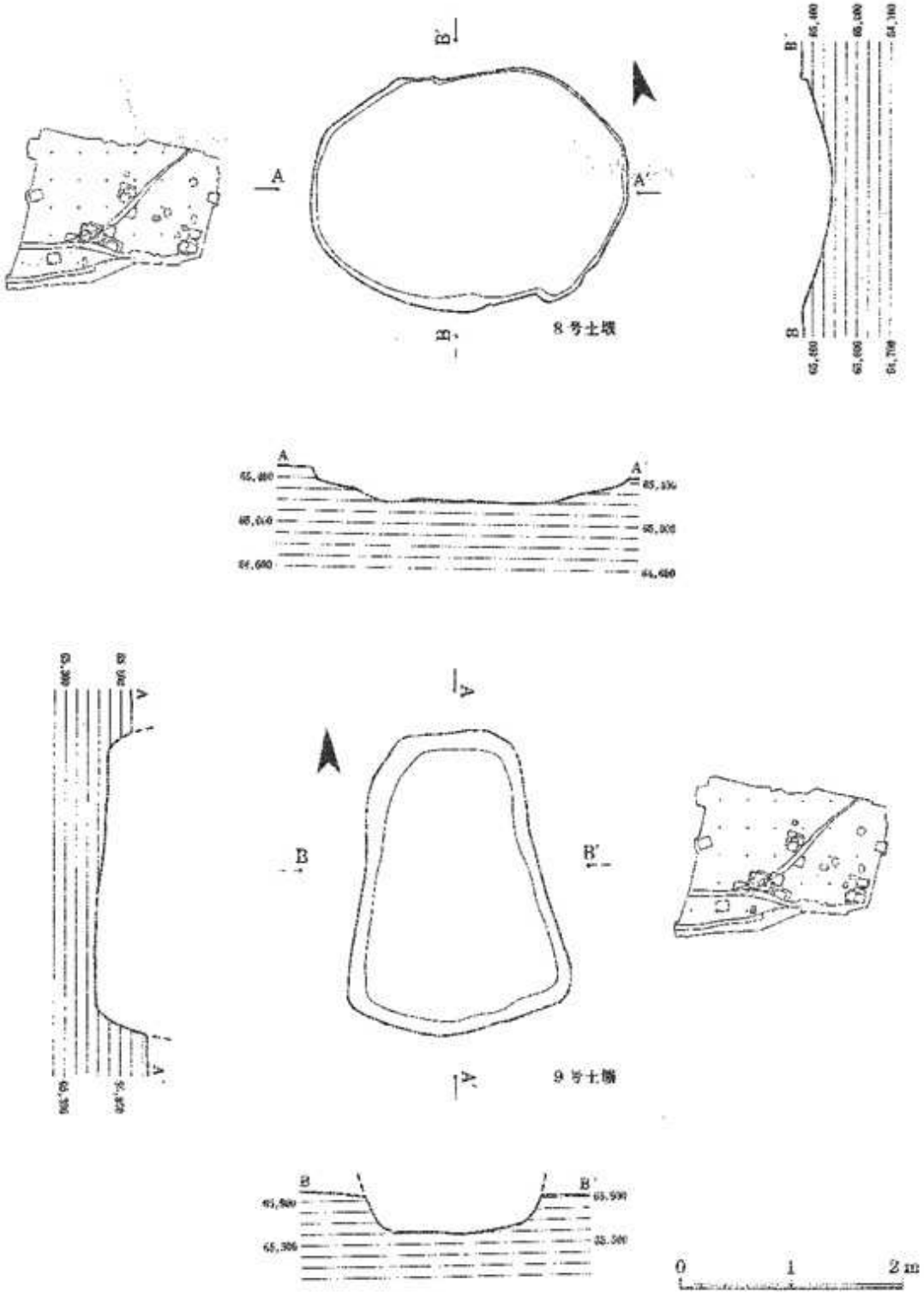
7－K－26グリッドに検出した土壙で、規模は長径2.64m、短径2.34mを測り不整円形を呈



第159図　7号土壙(ＳＫ－０７)内出土土器実測図

第66表　7号土壙内出土土器観察表

図版番号	器形	法量(cm)	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
159 1 1	坏	口径 13.5 器高 3.5 底径 8.2	体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部は尖がる。	砂粒及び白色小石を多く含み、径2mm程の小石、金雲母を少量含む	黄橙色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
159 1 2	坏	底径 2.8 底径 8.1	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がる。	砂粒及び金雲母を多く含み、径1～2mm程の小石を少量含む	暗茶褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○口縁部欠失
159 1 3	坏	現存高 2.6 底径 4.2	体部は外方に開きながら内湾気味に立ち上がる。	砂粒及び径1～2.5mm程の小石を多く含む 雲母	灰白色	硬質 良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○口縁部欠失
159 1 4	杯	口径 11.1 器高 3.9 高台径 8.2 高台高 0.6	体部は若干外方に開きながら底部内にすぼまり、端部はやや尖がる。体部との境に長方形の高台を端部が外方に開くように貼り付ける。	砂粒 砂粒を多く含み、径1色小石を少量含む	淡灰白色	良 良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け
159 1 5	甕	口径 19.6 現存高 1.8	口縁部は短かく、明瞭な段を有する。口縁部は内湾で端部は丸くなる。	砂粒を多量に含む	灰白色	不良	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器
159 1 6	甕	口径 18.8 現存高 9.8	頸部で若干屈曲した後、口縁部は短かく外方に開く、端部は丸くなる。	砂粒、径2mm程の小石、白色小石、角セン石、金雲母を多く含む	淡赤橙色	良	口縁部 ヨコナデ 頸部 不明	口縁部 ヨコナデ 頸部 ヘラ削り	○土師器
159 1 7	甕	口径 16.8 現存高 5.3	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が外反気味に外方に開く、端部は丸くなる。頸部は大きく張らむ。	砂粒及び白色小石、金雲母を多く含み、径1～2mm程の小石を少量含む	外面 赤褐色 内面 橙色	良好	ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ 頸部 ヘラ削り	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布



第160図　8号・9号土壙実測図

している。方位は、N－69°30′－Wをとる。土壙の断面は、U字型を呈している。土壙は、切り合っている6号土壙より古く、17号・19号住居跡より新しい。

遺物は、少量であるが、土師器の坏や甕それに須恵器の坏や蓋と共に鉄製刀子が1点出土している。

8号土壙（SK－08）

遺構（第160図）

7－K－34グリッドに検出した土壙で、規模は長径2.82m、短径2.12mを測り楕円形を呈している。方位は、N－76°00′－Wをとる。土壙の断面は、浅い皿状を呈している。

遺物は、少量であるが、土師器の坏や蓋・甕それに須恵器の坏や蓋が出土している。

9号土壙（SK－09）

遺構（第160図）

7－K－45・46グリッドに検出した土壙で、規模は長辺2.72m、短辺2.00～1.10mを測り分銅型を呈している。方位は、N－2°45′－Eをとる。土壙の断面は、U字型を呈している。

遺物は、全く出土していない。

3．奈良・平安時代以降

(1) 遺溝構と出土遺物

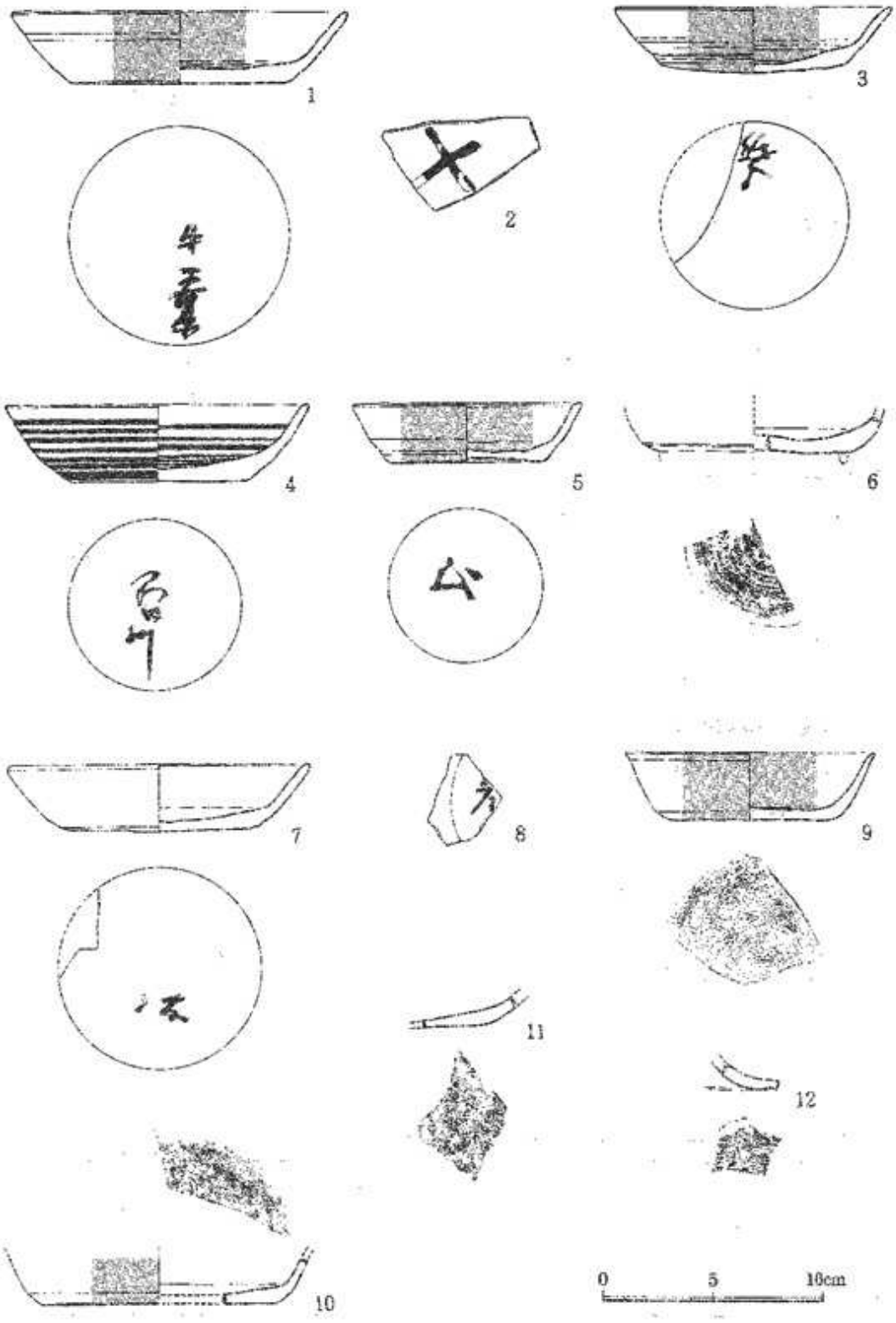
1号溝（SD－01）

遺構（第111図～第114図）

溝は、調査区の西側で7－K－43グリッドに始まり、ほぼまっすぐ東へ延びていき46と47グリッドの境付近でなくなっている。この溝は、2号溝を切って掘られており幅2.09m、深さ1.19mを測り断面はU字形を呈している。溝は、東へ向かうに従い浅くなる。溝内からは、遺物の出土が全くないことから、時期及び性格は不明である。

第67表　八反畑遺跡出土墨書・ヘラ書き土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
161 1	坏	口径 15.2 器高 3.3 底径 10.0	体部は直線的に立ち上がり、端部は尖がり気味 底部外面墨書[illegible]	砂粒及び角セン石を含む	明赤褐色	良	ミガキナデ 底部回転ヘラ切り	ミガキナデ	8号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色塗料塗布



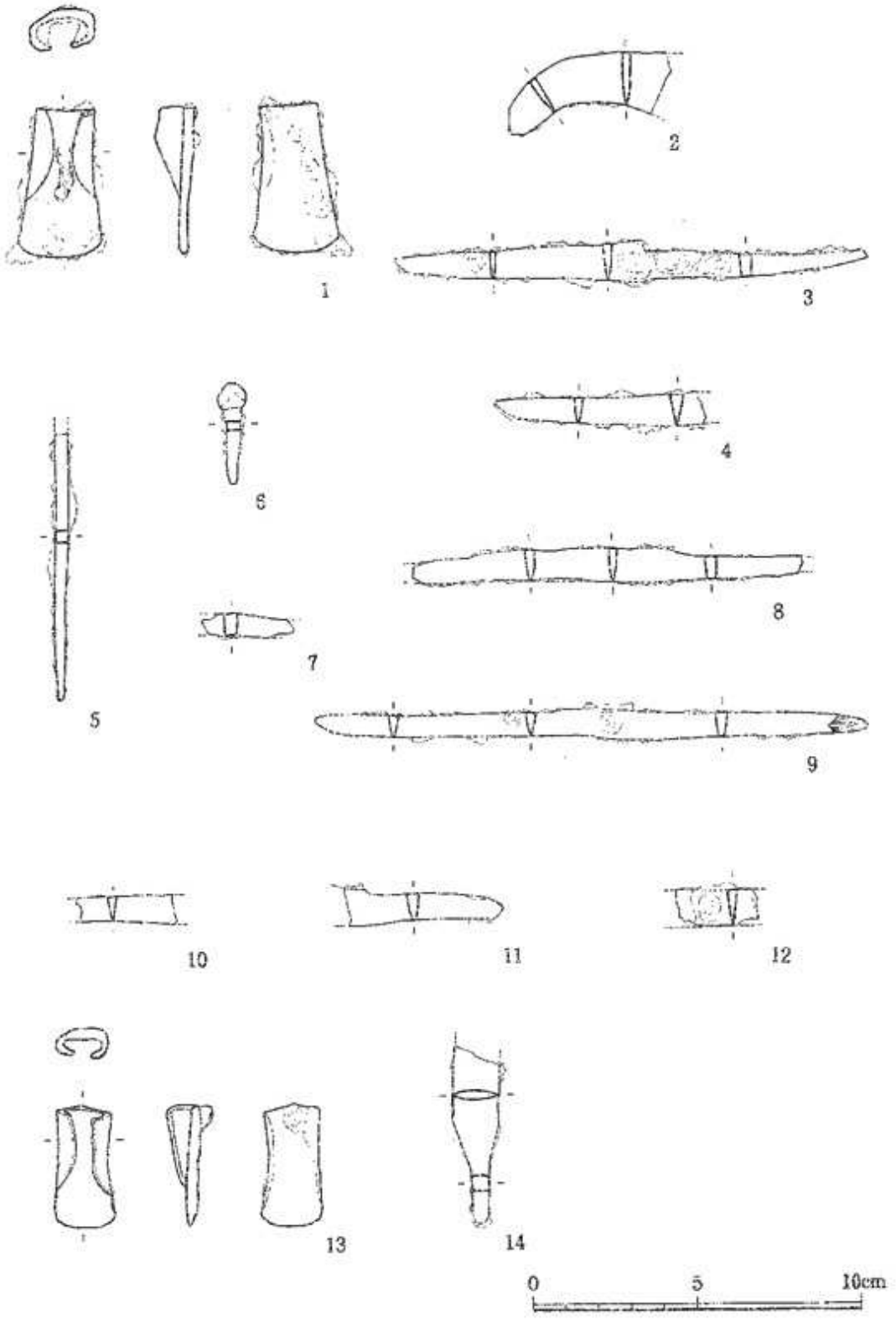
第161図　八反畑遺跡出土墨書・ヘラ書き土器実測図

第67表　八反畑遺跡出土墨書・ヘラ書き土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
161 1 2	坏？		坏か皿の底部片 底部外面に墨書、不明	砂粒を多く含む	橙色	ややよ良	回転ヘラ切り	ヨコナデ	22号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
161 1 3	坏	口径 12.6 器高 3.0 底径 8.4	体部は底線的に立ち上がり、端部は丸くなる。底部は丸底気味である。底部外面に墨書、不明	砂粒及び金雲母を多く含む	橙色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	21号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
161 1 4	坏	口径 13.8 器高 3.5 底径 7.8	体部は内湾しながら立ち上がり、端部は丸くなる。底部外面に墨書「[illegible]」3文字か。	金雲母を多く含む	淡黄橙色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り 暗文	ヨコナデ 暗文	22号住居跡 ○土師器
161 1 5	坏	口径 10.4 器高 2.7 底径 7.6	体部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸くなる。底部外面に墨書[illegible]	砂粒及び金雲母を含む	橙色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	22号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
161 1 6	坏	現存高 1.6 高台径 8.6	底部には高台を貼り付ける。底部外面にヘラ書き[illegible]	砂粒を多く含む	橙色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	25号住居跡 ○土師器
161 1 7	坏	口径 13.7 器高 3.1 底径 9.0	体部は内湾気味に立ち上がり端部は丸くなる。底部外面に墨書不明	砂粒を多く含む	橙色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	1号土壙（SK－01） ○土師器
161 1 8	坏？		坏か皿の底部片、底部外面に墨書不明	砂粒及び金雲母を多く含む	橙色	良	回転ヘラ切り	ヨコナデ	1号土壙（SK－01） ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
161 1 9	坏	口径 11.2 器高 3.1 底径 7.4	体部はやや内湾気味に立ち上がり、端部は尖がり気味、底部外面にヘラ書き、「[illegible]」3文字	砂粒及び金雲母を多く含む	橙色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	2号土壙（SK－02） ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
161 1 10	坏	現存高 2.1 底径 10.4	底部内面にヘラ書き[illegible]	砂粒及び金雲母を多く含む	橙色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	4号土壙（SK－04） ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
161 1 11	坏		底部外面にヘラ書き[illegible]	砂粒を多く含む	橙色	不良	底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	2号土壙（SK－02） ○土師器
161 1 12	蓋		口縁部が肥厚し断面な形を有する蓋部にヘラ書き [illegible]	砂粒及び金雲母を多く含む	橙色	良	ナデ	ナデ	4号土壙（SK－04） ○土師器

第68表　八反畑遺跡出土鉄器観察表

図版番号	出土遺構	種類	法量（cm）	特徴	備考
162 1 1	1号住居跡	刀	全長4.6 幅1.5 厚0.4	袋状部でソケット部分は別製から折り曲げて作り出している。刃は欠損	完形品
162 1 2	43号住居跡	鏃	現存長4.9 幅1.9 厚0.2		茎部欠失



第162図　八反畑遺跡出土鉄器実測図

第68表　八反畑遺跡出土鉄器観察表

図版番号	出土遺構	種類	法量（cm）	特徴	備考
162 - 3	18号住居跡	刀子	全長14.3 身長7.4　茎長6.9 身幅1.3　茎幅0.8～0.3 身厚0.2～0.3　茎厚0.4	片関	完形品
162 - 4	〃	刀子	現存長4.9 現存身幅1～0.8 身厚0.4～0.3		茎部分欠失
162 - 5	22号住居跡	釘か 茎か	現存長8.3 幅0.4 厚0.4	断面が方形を呈し，先端が尖がる。	上部欠失
162 - 6	〃	釘	全長3.1 幅0.8 厚0.3		完形品
162 - 7	〃	刀子	現存長2.8 幅0.8 厚0.4		茎部分
162 - 8	〃	〃	現存長11.9 幅1.1 厚0.3～0.4	片関	先端部欠失
162 - 9	〃	〃	全長16.8 身長8.7　茎長8.1 身幅0.8　茎幅0.8 身厚0.4～0.3　茎厚0.4～0.2	茎先端に木質が残る	完形品
162 - 10	25号住居跡	〃	現存長3 幅1～0.6 厚0.3		先端部及び茎部分欠失
162 - 11	1号土壙	〃	現存長4.9 現存身長0.8　茎長4.1 身幅1.4　茎幅0.9～0.6 身厚0.5　茎厚0.4	片関	身部分欠失
162 - 12	7号土壙	刀子	現存長2.5 幅1.3 厚0.3		茎及び身先端部欠失
162 - 13	2号溝 1区	斧	全長3.7 幅1.5 厚0.3	鉄板巻でソケット部分は両側から折り曲げて作り出している。刃は両刃。	完形品
162 - 14	2号溝 3区	鏃	現存長5.6 現存身長3.3　茎長2.3 身幅1.4　茎幅0.5 身厚0.3　茎厚0.5	身の部分は断面がレンズ状で茎部分は断面が方形を呈する。	先端部欠失

第V章　ま　と　め

八反田遺跡A地区検出の方形周溝墓について

八反田遺跡A地区より1基検出され、周溝の一部が調査区外へ延びることから全体規模は不明だが、検出できた直交軸側の周溝内側で一辺が9.86m、周溝外側で一辺が12.1mを測る方形周溝墓である。周溝の深さは、0.36～0.49mと浅いことから、開墾によりかなり削平されているものと考えられる。

東側にある陸橋部の南側周溝内から、さらに深く掘り込んだ土壙が検出された。土壙は、長さ3.33m，幅1.71m、深さ0.83mの隅丸長方形を呈し、土層断面の観察により周溝との時間的差異が認められなかったことから、築造当初またはそれに極近い時期に古墳に関連した施設として掘られたものと考えてよい。土壙からは、その性格を判断しうるような遺物の出土がないことから推測の域をでないが、周溝内に更に深い土壙が検出された例として、下総城郡城南町塚原に所在する上の原遺跡6号墳と12号墳がある。上の原6号墳と12号墳は、共に円墳で陸橋部近くに隅丸長方形の土壙が掘り込まれており、土壙内からは馬歯及び鉄製馬具が出土している。このことから、当遺跡の方形周溝墓周溝内より検出された土壙も、陸橋部近くに掘り込まれていることなどを考え合わせれば、同様に馬を埋葬した土壙の可能性を示唆しておきたい。

築造時期については、主体部や周溝内から遺物の出土がほとんど無く、唯一時期を知り得る遺物としては、周溝内の土壙から出土した土師器の壺だけである。壺は、土壙のほぼ中央で上層部より割れた状態で一ヵ所に集中して出土しており、その出土状態や出土レベルから墳丘裾部に置かれたものが落下して壊れたものと考えてよかろう。壺は、口唇部が欠失していることから口縁部全体の特徴は不明だが、頸部はすぼまりくの字に屈曲した後口縁部がほぼ直線的に外方に開き、胴部は球形で丸底の底部を呈している。器面調整は、内面の胴部下半が上方向のヘラ削りで上半が斜方向のヘラ削り、口縁部がハケ目である。外面は、全体が斜方向のハケ目であるが、頸部の中位付近にはさらに横方向のハケ目が施されている。壺は、須恵器出現以前の古式土師器で、この壺に類似する土器が出土した遺跡の例として、城南町に所在する沈目遺跡や塚原古墳群の7号・8号方形周溝墓が上げられる。これらの遺跡は、調査者により4世紀末から5世紀初頭に比定されていることから、当遺跡より検出された方形周溝墓もほぼ同時期で4世紀末から5世紀初頭に築造されたものと考えて良かろう。

八反畑遺跡検出の弥生時代の溝遺構について

遺構は、八反畑遺跡からだけで他の八反田遺跡A地区・B地区からは検出されていない。溝は、調査区の西端から東端にかけて調査区の中央を分断するような形で弧状に掘られている。

溝の規模は、最大幅2.39m、深さ1.58mでV字形を呈しており、現地形が削平を受けているのを考慮すれば、推定幅3.50～4.00m、推定深さ2.00～2.50mの溝であったであろうと考えられる。当調査区からは、長さ約72.6m分を検出しているが、両側共に調査区外へ延びており、西側については弘生神社境内において確認調査を実施した結果、さらに曲がって北側に向かって延びるのが確認された。今回の調査では、溝の一部のみの調査であったが、溝に囲まれた部分の大半が今年度調査区より北側にあり、この部分については平成3年度に発掘調査を実施する予定である。溝は、断面形状や幅、深さそれに出土遺物から、集落を囲むように作られ防御的機能を持った環濠の一部と判断した。溝の上面については、削平が著しいことから土盛りや柵列等の遺構は検出されず、また溝の内側部分についても土橋及び橋に関連した遺構の検出はなかったが、環濠の性格を考えればこれらの施設があったことは可能性として十分考えられる。

溝内からは、多くの遺物が中位層付近から出土し、その出土状態は西北側つまり溝の内側から投げ込まれた様な状態であった。遺物は、下位層及び基底面からはほとんどなく、また遺物の出土位置は溝全体に渡るのではなく、散在的で数ヵ所に分散して出土している。溝内から出土した土器は、甕・壺・高坏・鉢・ジョッキ形土器・器台などで、甕の口縁部が立ち胴部の最大径が中位付近まで下がること、壺の形態や肩部に流水文や重弧文などの櫛描き文が施文されること、それに器台のくびれが口縁部近くまで上がることなどの特徴が認められ、これらの特徴に類似する土器が出土した周辺の遺跡として、鹿央町の津袋大塚遺跡や山鹿市の方保田東原遺跡がある。これらの遺跡は、調査者により各々編年がなされており、当遺跡出土の土器は津袋大塚遺跡の溝内出土の土器群を中心とした津袋Ⅱ期や、方保田遺跡のⅡb期からⅢa期に相当し、弥生時代後期後半で後期末の特徴である甕や壺にタタキ目の器面調整が出現する前段階の時期と考えてよかろう。これらの土器の時期が、溝が廃絶された時期またはそれに近い時期と考えられる。溝が掘られた時期については、甕の口縁部が大きく外方に開き、また胴部の最大径が頸部近くまで上がり、さらに甕の脚台の内側に砂が付着する土器が認められるなど津袋Ⅰ期すなわち後期前半の特徴を示す遺物も混在することから、後期前半もしくはそれ以前に若干遡る時期と考えられる。

竪穴住居跡について

弥生時代

この時期の住居跡は、八反田遺跡A地区に3軒、八反田遺跡B地区に12軒、八反畑遺跡に5軒の計20軒検出されている。住居跡内からは、遺物の出土は少量で、全く無い住居跡も多いことから、住居跡の時期を押さえるのは難しいが、住居跡から出土した土器の大半が津袋大塚遺跡の竪穴住居跡内出土の土器を中心とした津袋Ⅰ期の土器に形態的な特徴が類似することからほぼ同時期で後期前半と見てよい。また、検出されたほとんどの住居跡は平面プランが隅丸長

方形を呈し、2本柱で短辺部分の壁際にベッド状遺構が作られている共通点が見いだせる。ただし、八反畑遺跡で検出された6号住居跡は住居の形態が円形を呈しているが、一部の検出であることや削平が著しいことから不明確で、他の住居跡と同じ形態の可能性も考えられる。しかし、もし円形の住居跡と言うことになれば、他の住居跡より古く中期まで遡る可能性がでてくる。

奈良・平安時代

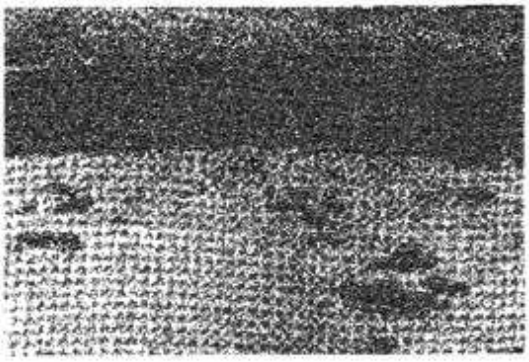
この時期の住居跡は、検出軒数が多く八反田遺跡A地区で4軒、八反田遺跡B地区で68軒、八反畑遺跡で23軒の計95軒検出されている。住居跡の平面プランは、検出されたすべてが隅丸方形を呈している。柱の数は、確認できたものは全て4本柱で、柱穴が確認出来なかった住居跡も多い。カマドは、北側または西側の壁に作られているのが一般的で、他の方向には無い。また、カマドの煙出しは壁より外に出ているが、出方があまり顕著ではない事から、時期的に古い様相を示しているものと考えられる。住居跡の時期は、遺物の出土量が少なく、また全く無い住居跡も多いことから押さえるのは難しいが、出土した須恵器や土師器の形態的な特徴を見てみると、大半が蓋は天井部が低く、坏は体部が内弯気味に大きく外方に開き口径が大きい割りに器高が低い特徴が認められる。坏は、七城町に所在する上鶴頭遺跡出土の土師器坏の特徴に類似する点から、この遺跡とほぼ同時期である9世紀代頃と見てよかろう。しかし、上記の遺物より特徴的に古い様相を示す7世紀の後半から8世紀頃と考えられる遺物も出土していることから、今回調査した集落は7世紀後半から9世紀後半にかけて長期間営まれたものであろう。このことは、検出した住居跡の軒数が多いことや重複の多さにも現われている。

参考文献

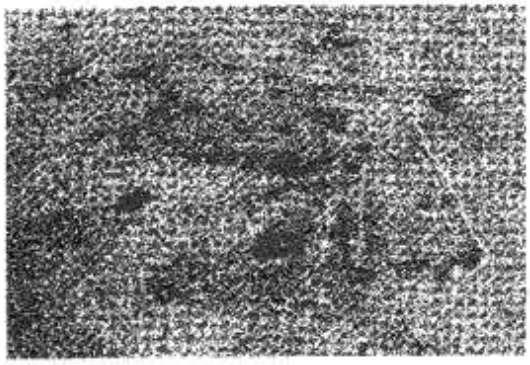
『塚原』	野田　拓治	熊本県文化財調査報告第16集	1975
『沈目遺跡』	江本　直	熊本県文化財調査報告第13集	1974
『陣内遺跡』	清田　純一	阿蘇町文化財調査報告第2集	1982
『宇土城跡（西岡台）』	平山　修一・高木　恭二	宇土市文化財調査報告第1集	1977
『上の原遺跡Ⅰ』	松本　健郎他	熊本県文化財調査報告第58集	1983
『上の原遺跡Ⅲ』	野田　拓治	熊本県文化財調査報告第73集	1985
『羽山塚古墳』	隈　昭志他	九州産業交通株式会社	1979
『上鶴頭遺跡』	橋本　康夫他	熊本県文化財調査報告第63集	1983
『方保田東原遺跡Ⅰ』	中村幸四郎	山鹿市立博物館調査報告書第2集	1982
『方保田東原遺跡Ⅲ』	中村幸四郎	山鹿市立博物館調査報告書第7集	1987
『生産遺跡調査報告Ⅱ』	松本　健郎	熊本県文化財調査報告第48集	1980
『熊本地方の弥生後期土器』	高木　正文	古文化談叢第6集　九州古文化研究会	1979
『下山西遺跡』	高谷　和生他	熊本県文化財調査報告第88集	1987

図　　版

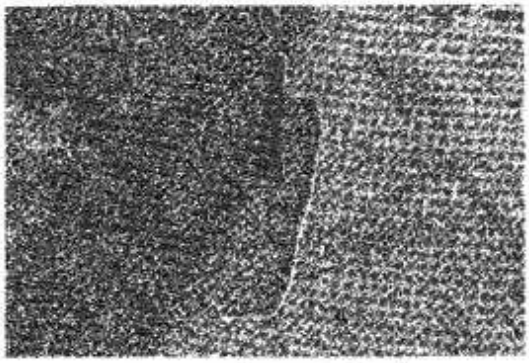
八反田遺跡A地区全体（東より）



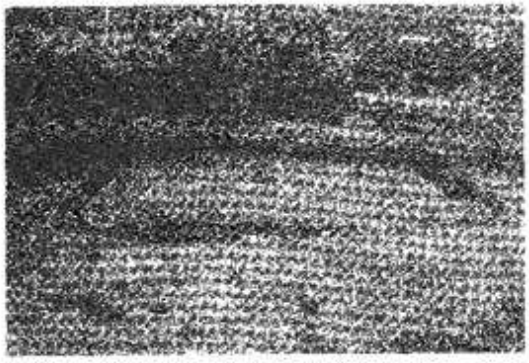
1号・2号住居跡（A地区）



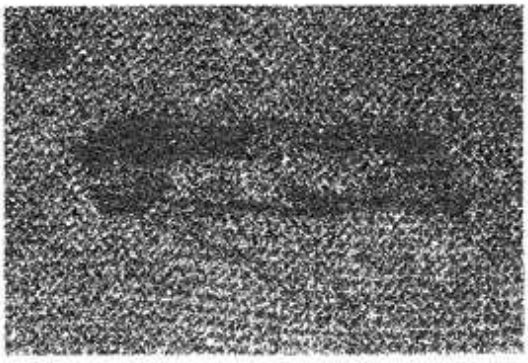
3号・4号住居跡（A地区）



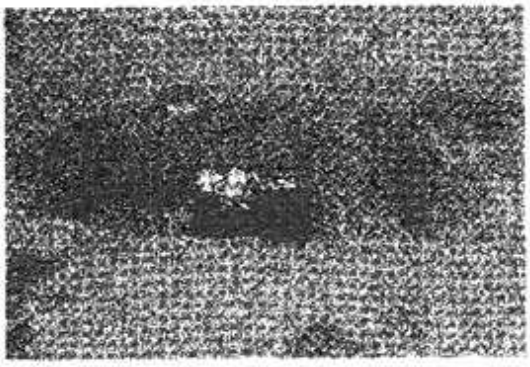
6号・7号住居跡（A地区）



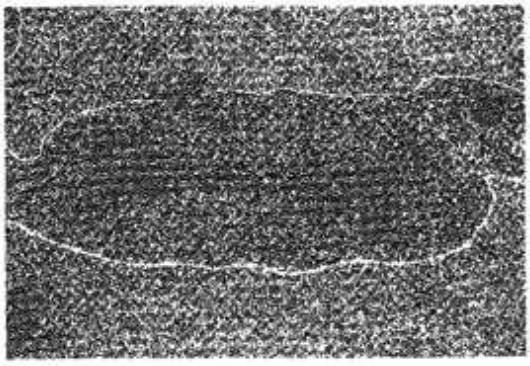
1号方形周溝墓全体（A地区）



1号方形周溝墓主体部（西より）

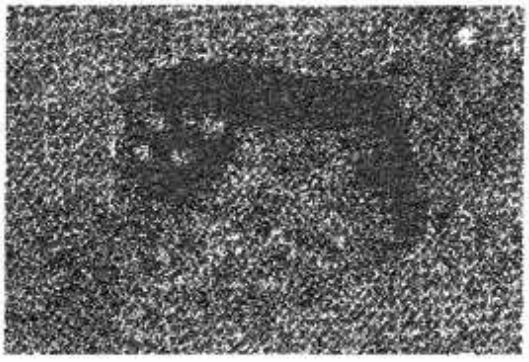


周溝内土器出土状況

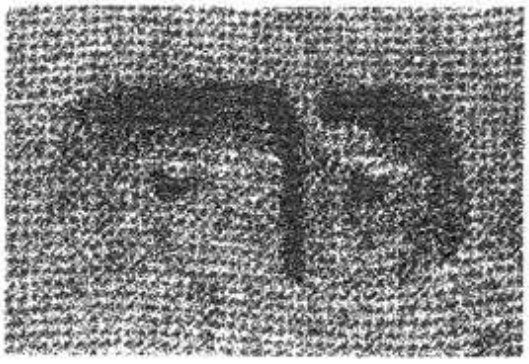


周溝内土壙

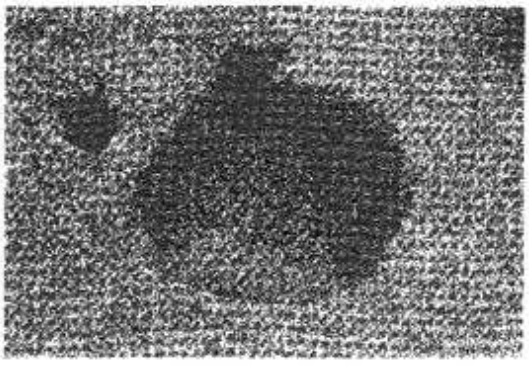
図 版 2



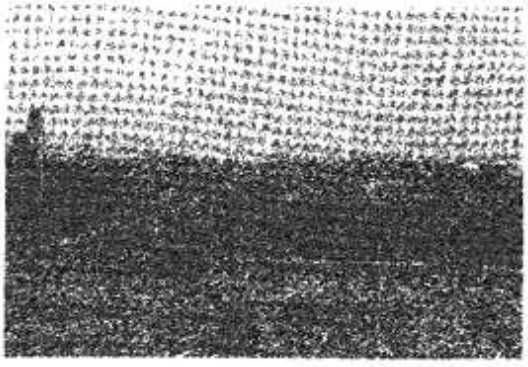
1号土壙内土器出土状況（A地区）



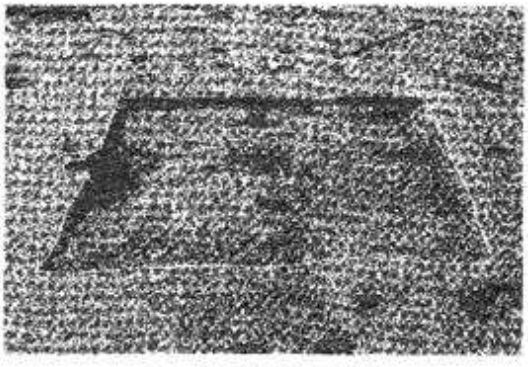
2号土壙内土器出土状況（A地区）



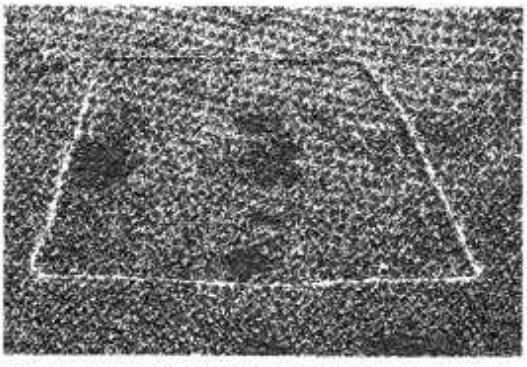
4号土壙（A地区）



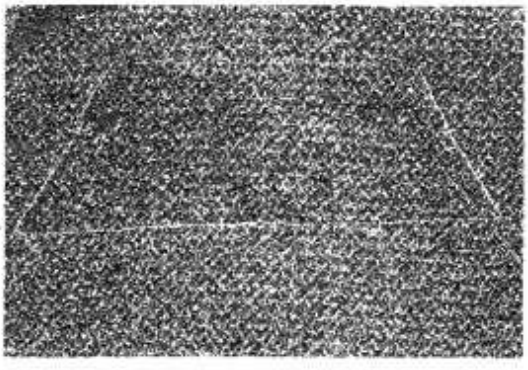
八反田遺跡B地区遠景（東より）



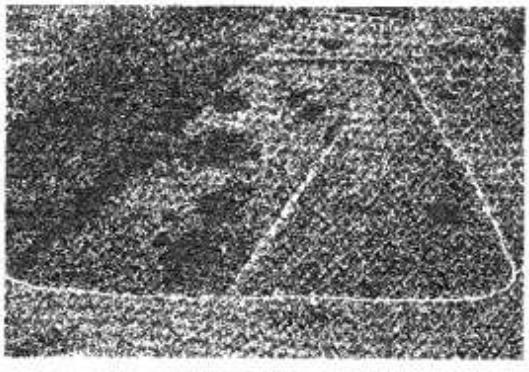
1号住居跡（B地区）



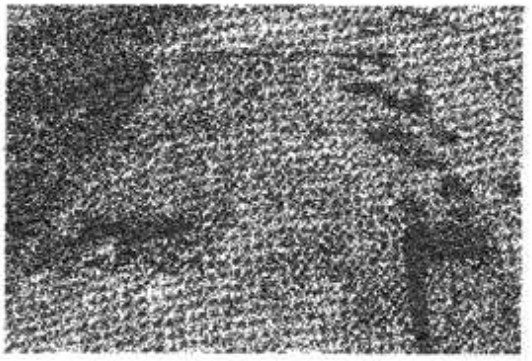
2号住居跡（B地区）



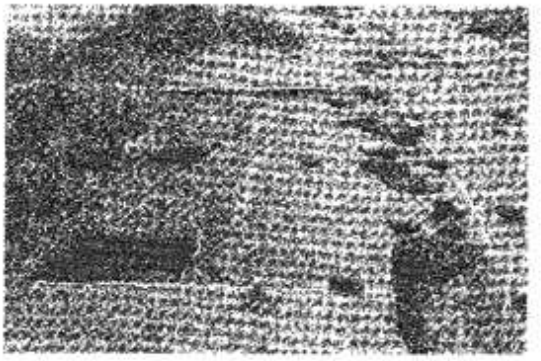
3号住居跡（B地区）



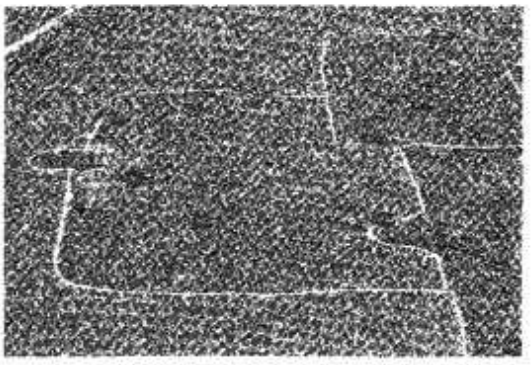
4号住居跡（B地区）



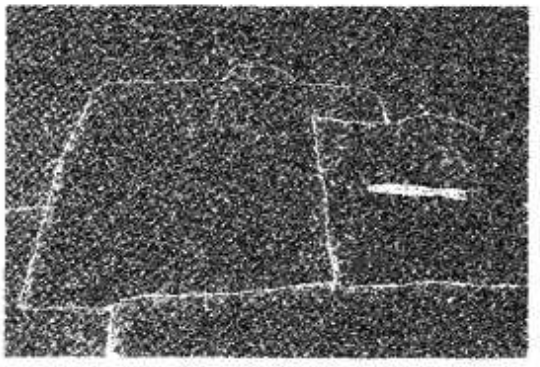
5号住居跡遺物出土状況（B地区）



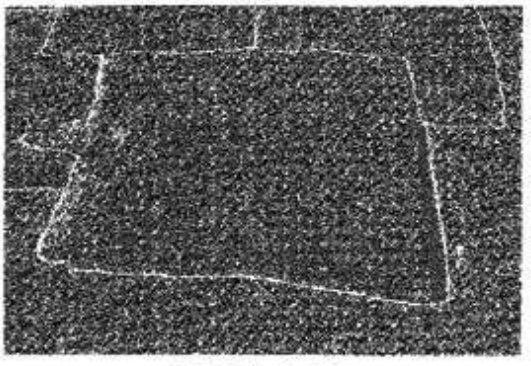
5号住居跡（B地区）



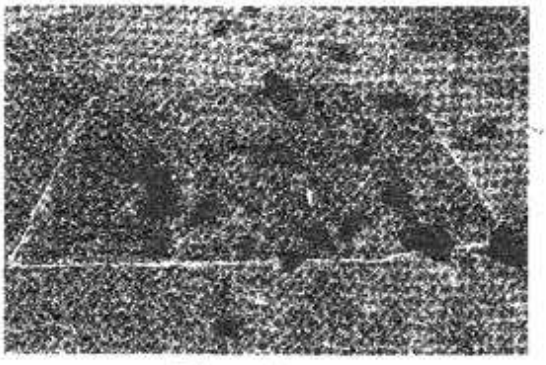
8号住居跡（B地区）



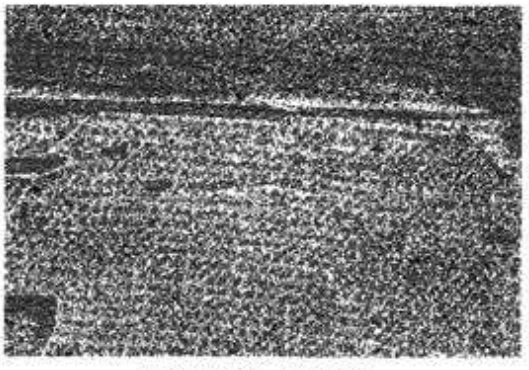
9号住居跡（B地区）



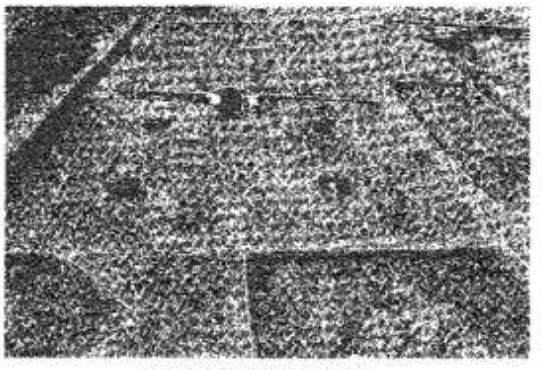
11号住居跡（B地区）



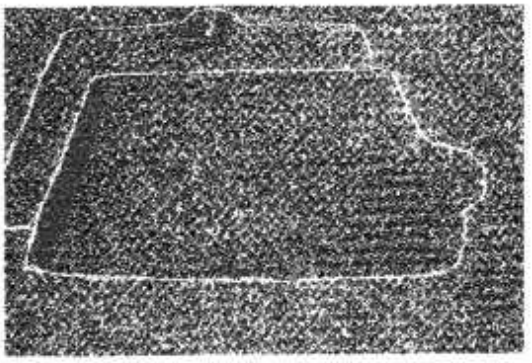
12号住居跡（B地区）



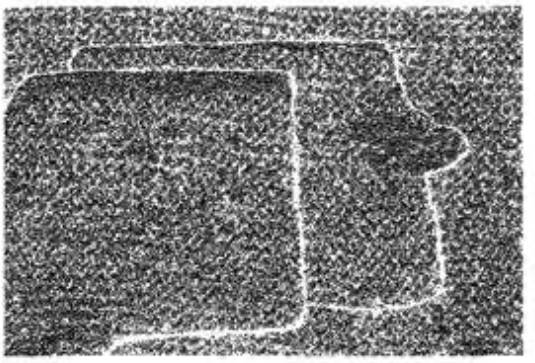
13号住居跡（B地区）



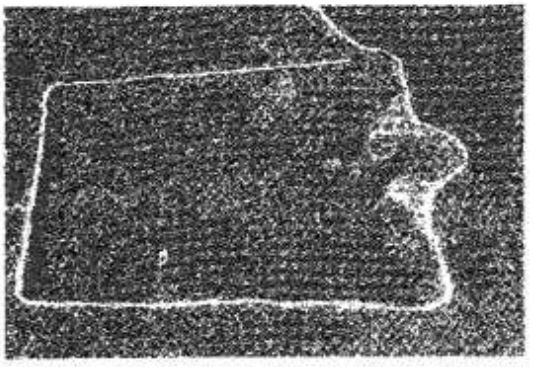
14号住居跡（B地区）



18号住居跡（B地区）

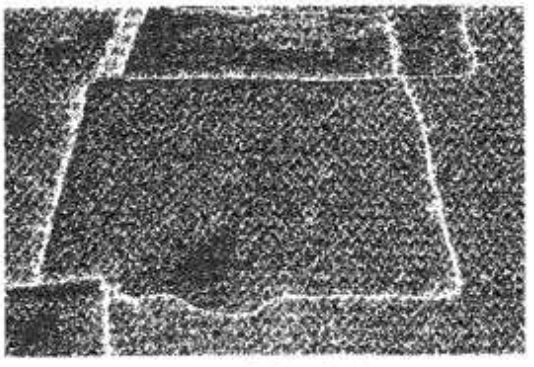


19号住居跡（B地区）

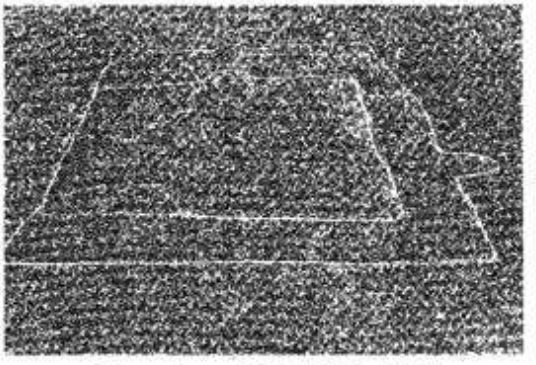


20号住居跡（B地区）

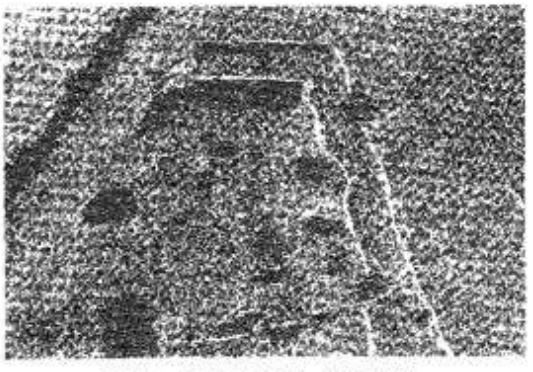
21号住居跡（B地区）



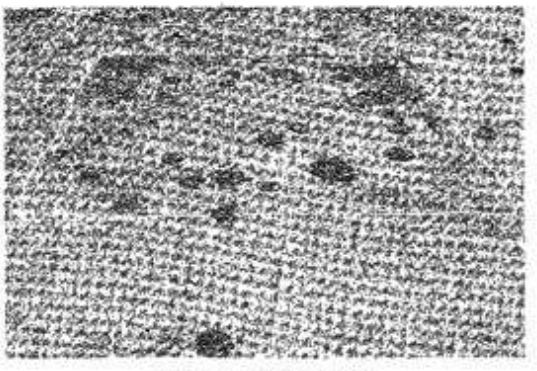
22号住居跡（B地区）



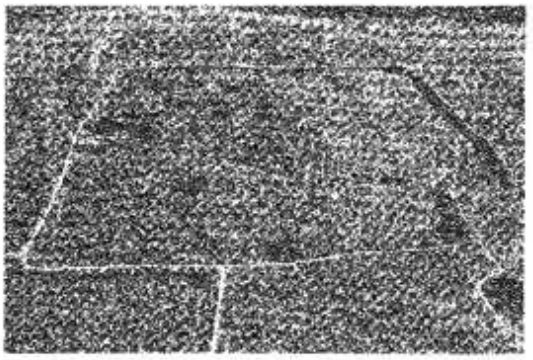
23号・24号・25号住居跡（B地区）



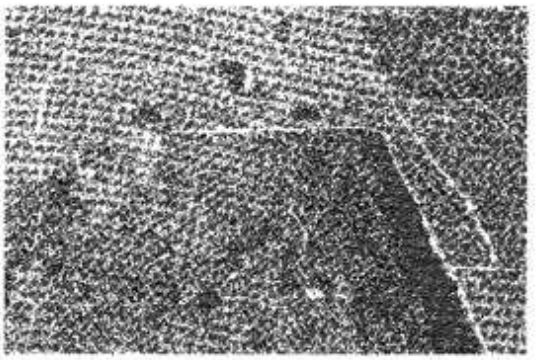
27号・28号住居跡（B地区）



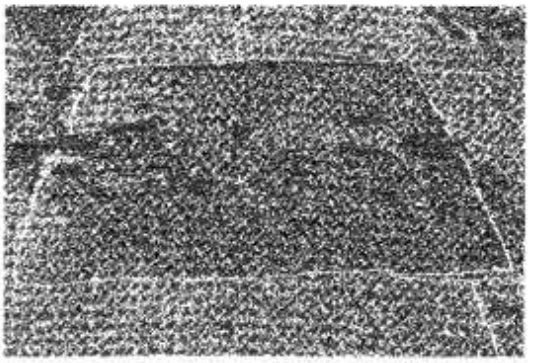
29号住居跡（B地区）



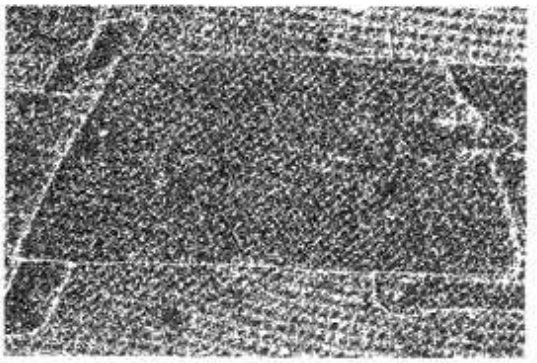
33号住居跡（B地区）



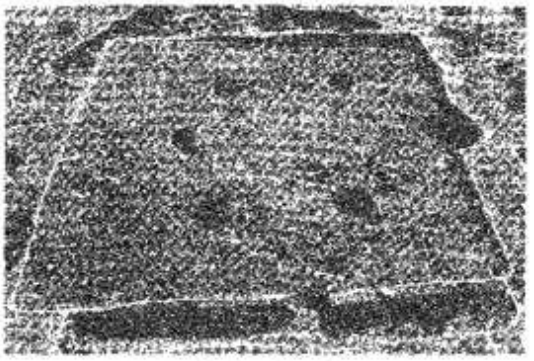
35号住居跡（B地区）



38号住居跡（B地区）

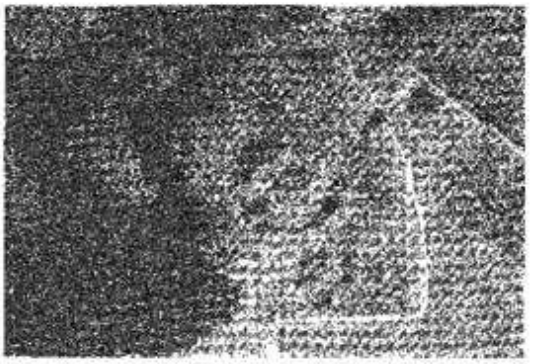


39号住居跡（B地区）

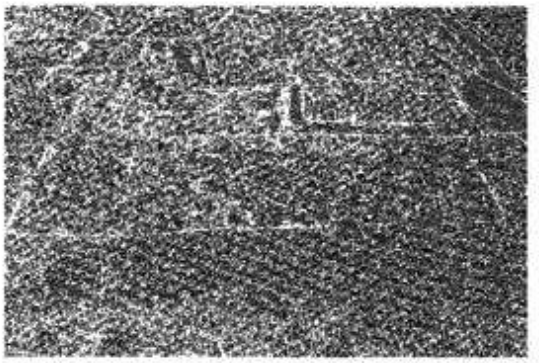


43号住居跡（B地区）

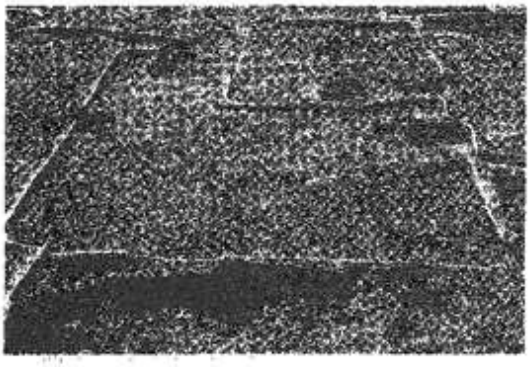
59号住居跡遺物出土状況（B地区）



59号住居跡（B地区）

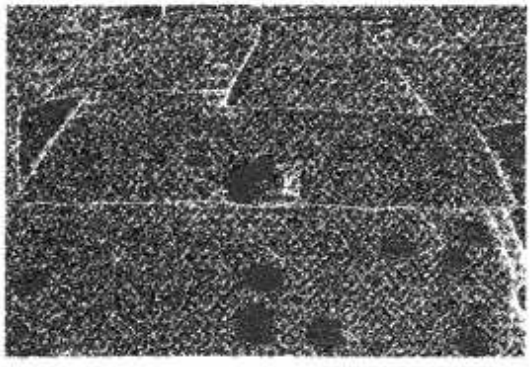


60号～64号・71号～78号住居跡（B地区）

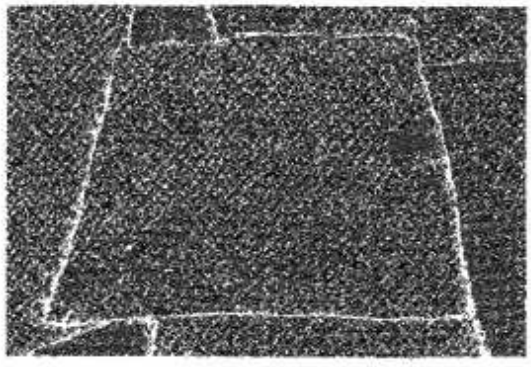


63号住居跡（B地区）

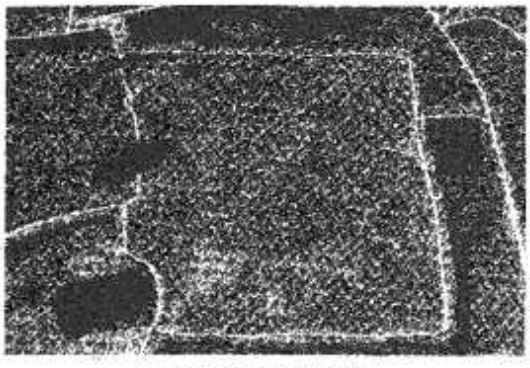
64号住居跡（B地区）



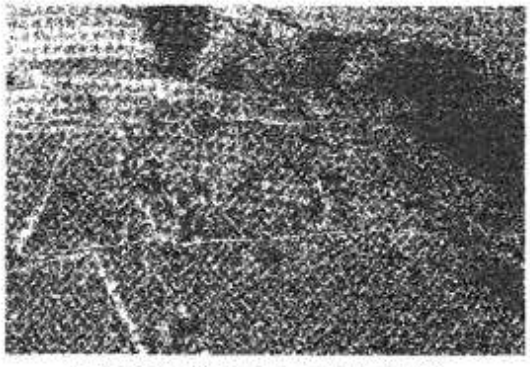
65号住居跡（B地区）



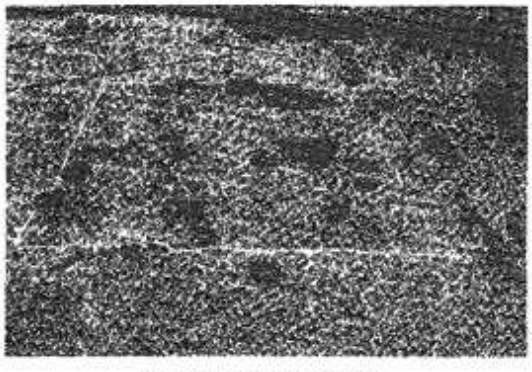
68号住居跡（B地区）



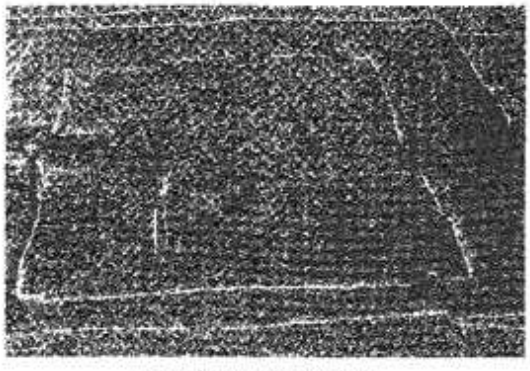
75号住居跡（B地区）



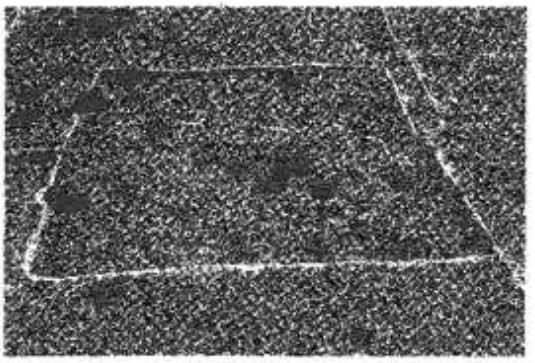
79号住居跡遺物出土状況（B地区）



79号住居跡（B地区）

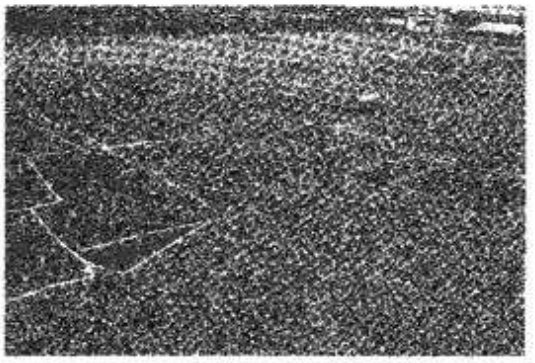


80号住居跡（B地区）

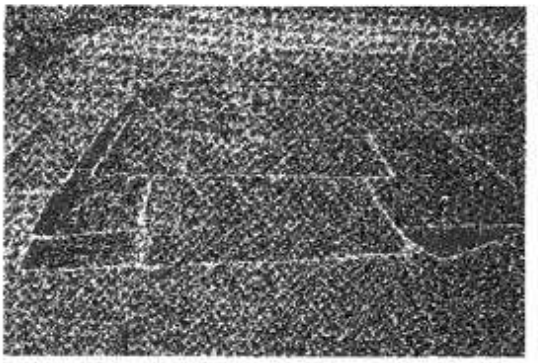


81号住居跡（B地区）

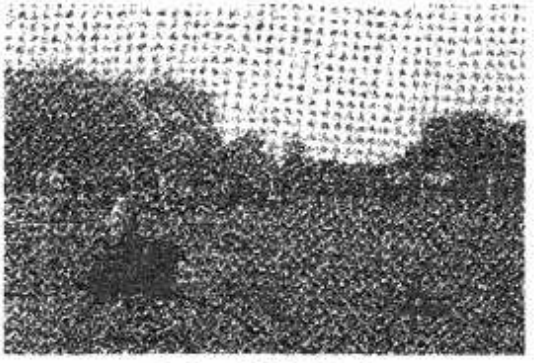
49号住居跡カマド内遺出土状況（B地区）



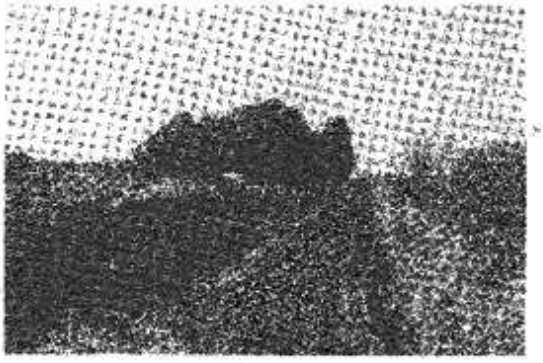
20号住居跡周辺検出状況（B地区）



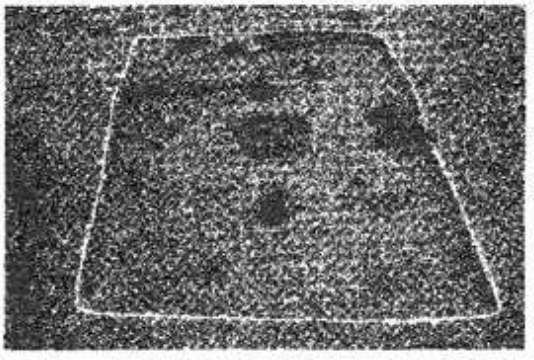
56号～78号住居跡（B地区）



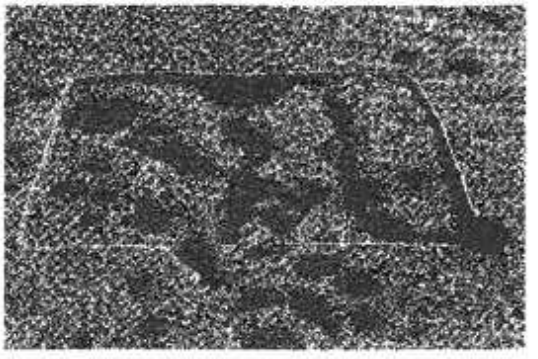
町内小学校遺跡見学



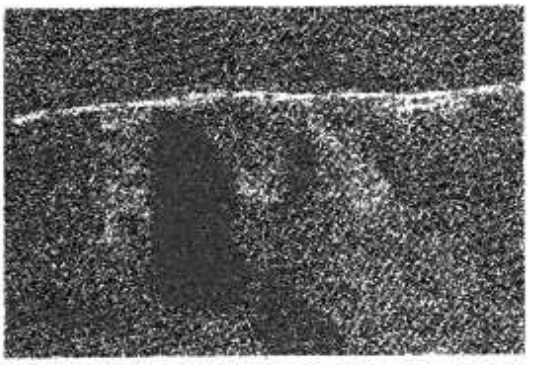
八反畑遺跡遠景（東より）



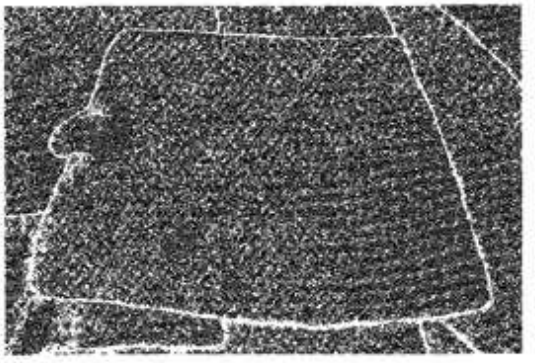
1号住居跡（八反畑）



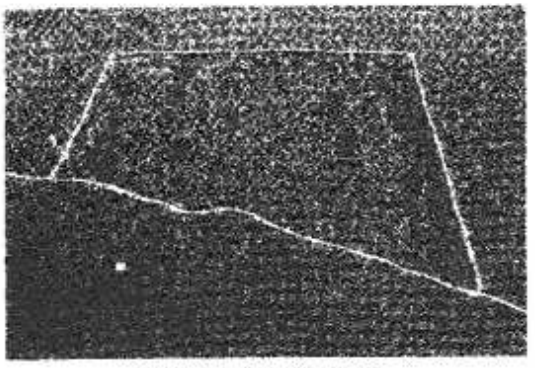
2号住居跡（八反畑）



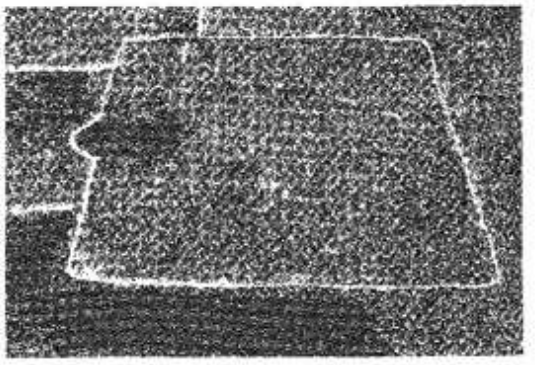
4号住居跡カマド内鞴出土状況（八反畑）



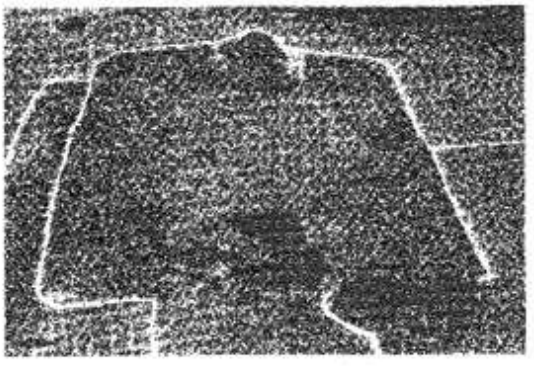
7号住居跡(八反畑)



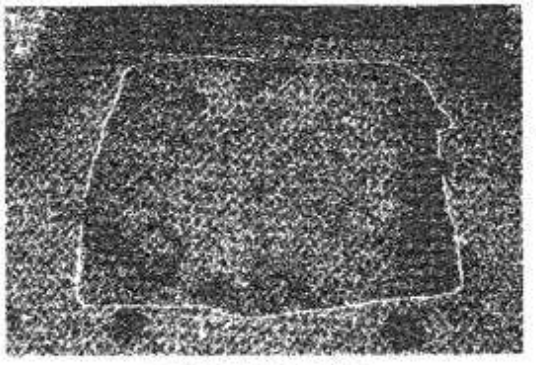
15号住居跡（八反畑）



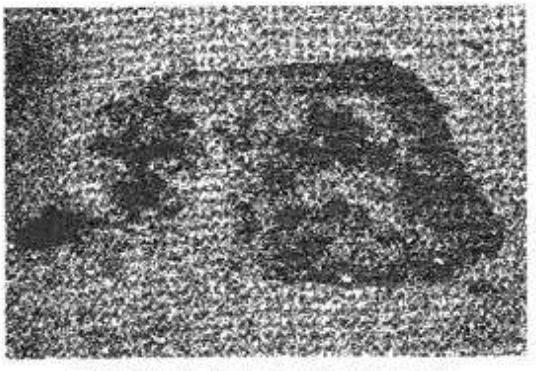
16号住居跡(八反畑)



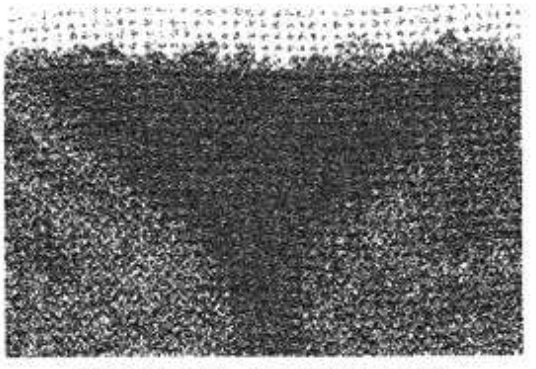
18号住居跡（八反畑）



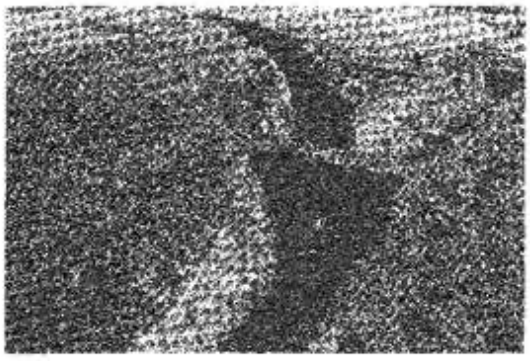
21号住居跡(八反畑)



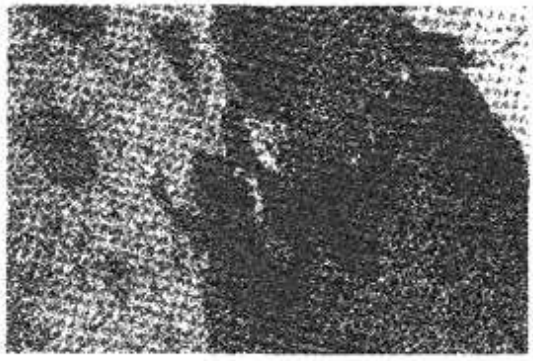
22号住居跡遺物出土状況(八反畑)



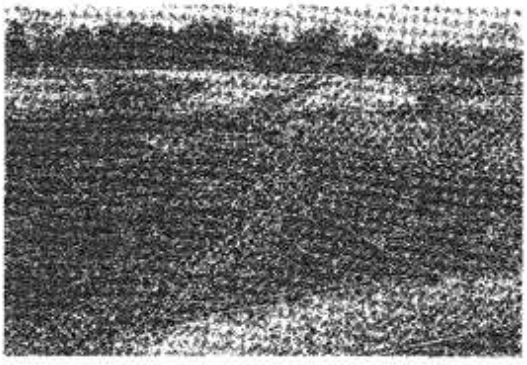
2号溝（ＳＤ）土層断面(八反畑)



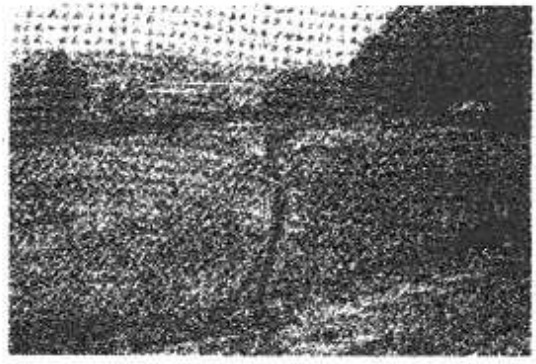
1号・2号溝遺物出土状況(八反畑)



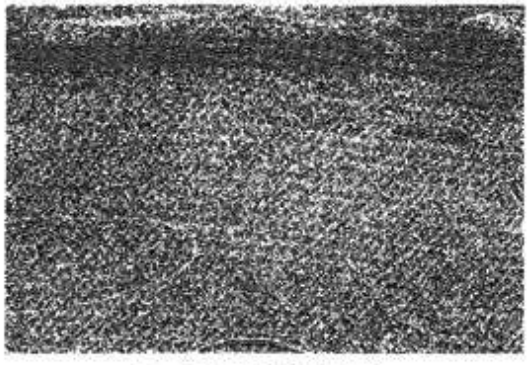
2号溝遺物出土状況（八反畑）



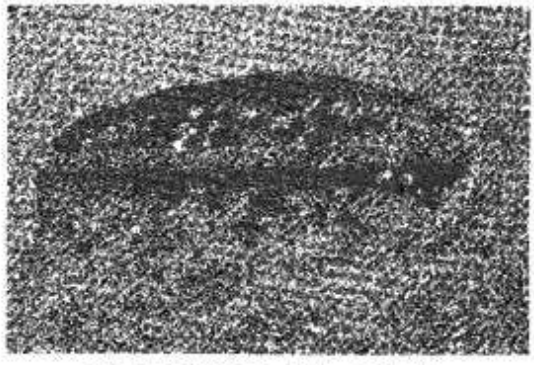
2号溝及び周辺竪穴住居跡(南より)



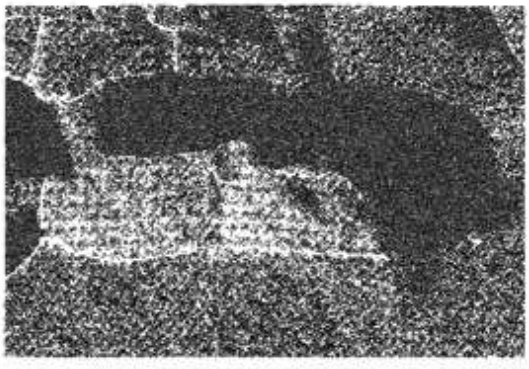
2号溝（北より）



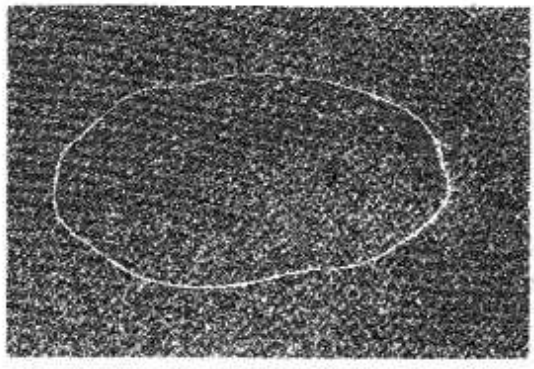
1～3号土壙(八反畑)



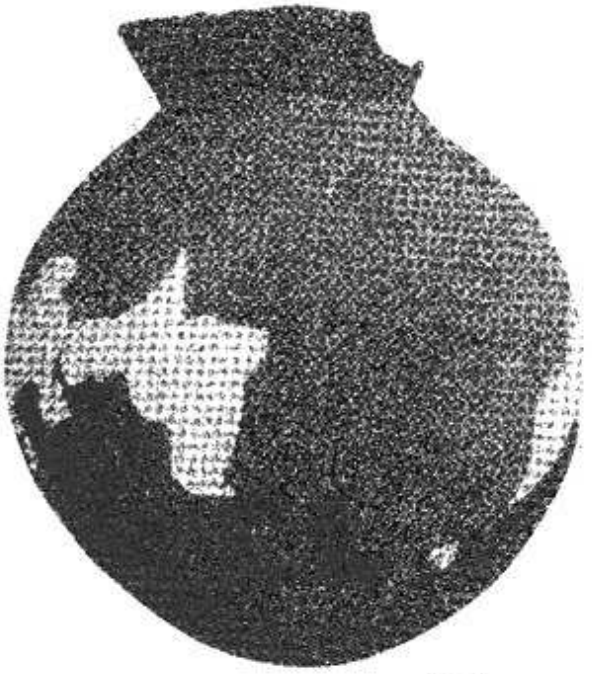
1号土壙遺物出土状況（八反畑）



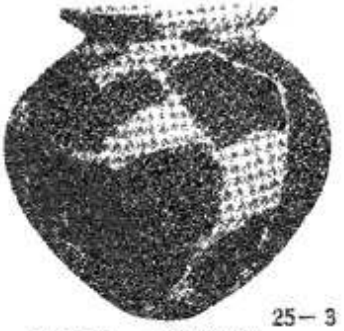
6号土壙(八反畑)



8号土壙（八反畑）

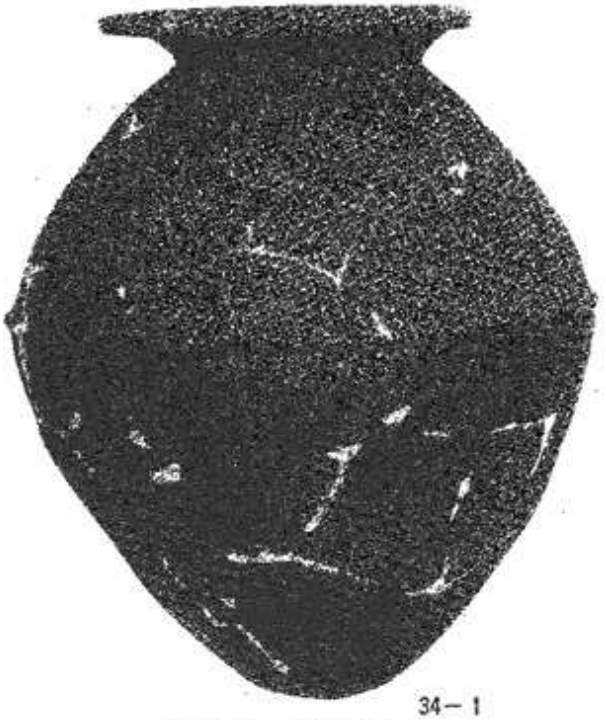


15－1
八反田A　1号方形周溝墓



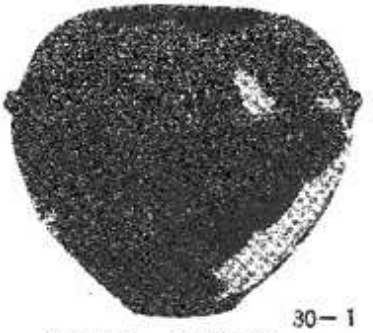
25－3
八反田B　1号住居跡

25－6
八反田B　1号住居跡



34－1
八反田B　5号住居跡

25－7
八反田B　1号住居跡



30－1
八反田B　3号住居跡

36－4
八反田B　6号住居跡

41－2
八反田B　59号住居跡

57－2
八反田B　18号住居跡

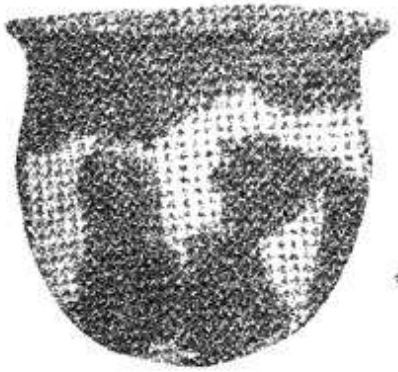
63－1
八反田B　22号住居跡

74－4
八反田B　38号住居跡

74－1
八反田B　38号住居跡

76－2
八反田B　39号住居跡

81－2
八反田B　46号住居跡



84－3
八反田B　49号住居跡

90－5
八反田B　64号住居跡

94－1
八反田B　68号住居跡

94－4
八反田B　68号住居跡

97－3
八反田B　71号住居跡

49－1
八反田B　11号住居跡

120－8
八反畑　2号溝

122－28
八反畑　2号溝

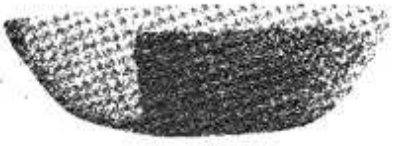
122－35
八反畑　2号溝

122－36
八反畑　2号溝

124－47
八反畑　2号溝

130－7
八反畑　7号住居跡

130－9
八反畑　7号住居跡



136－2
八反畑　13号住居跡

138－5
八反畑　16号住居跡

140－6
八反畑　18号住居跡

142－6
八反畑　21号住居跡

144－13
八反畑　22号住居跡

144－20
八反畑　22号住居跡

145－29
八反畑　22号住居跡

145－39
八反畑　22号住居跡

148－4
八反畑　24号住居跡

148－7
八反畑　24号住居跡

148－8
八反畑　24号住居跡

148－11
八反畑　24号住居跡

151－7
八反畑　1号土壙

151－15
八反畑　1号土壙

155－1
八反畑　4号土壙

八反畑　4号土壙　155－2

158－3
八反畑　6号土壙

158－2
八反畑　6号土壙

102－5
八反田A　一括

102－8
八反田B　63号住宅跡

102－9
八反田　66号住居跡

102－11
八反田B　一括

161－5
八反畑　22号住居跡

161－11
八反畑　25号住居跡

161－8
八反畑　1号土壙

161－9
八反畑　2号土壙

161－11
八反畑　2号土壙

161－10
八反畑　4号土壙

161－12
八反畑　4号土壙

西合志町文化財調査報告第３集

八反田Ａ・Ｂ遺跡
八反畑遺跡

平成５年３月31日

発　行　西合志町教育委員会
菊池郡西合志町大字御代志1661－16

印　刷　（合資）橋本印刷
菊池郡泗水町豊水3515－1

A
B
C
D
E
F
G
H
I
1
2
3
4
5
6
7
8
生坪塚山古墳
石立遺跡
八反田遺跡C地区
八反田遺跡B地区
八反田遺跡
X=-9.0K

平成元年度調査
平成2年度調査
平成2～3年度調査
平成3年度調査
合志川
J
L
M
N
O
八反原遺跡
八反畑遺跡
油原遺跡
合志グラウンド
9
10
Y=-20.0K
0
100
500m